

俺氏、江ノ島高校にて  
サッカーを始める。

Sonnet

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世の記憶を持つ不知火康寛は、転生によつて第二の人生を歩んでいる一般人である。しかし、身体能力の高さが異常だという悩みを抱えていた。高校生になつてようやく自分の体に慣れてきた康寛は、中学からの友人である逢沢駆の誘いでサッカー部に入部するのであった。

これは、単に付き合いからサッカーを始めた男の物語である。

# 目次

## 第一章【入学】

第01話	1
第02話	9
第03話	16
第04話	23
第04・5話	31
第05話	38
第06話	46
第07話	54
第08話	61
第09話	68
登場人物紹介	75

## 第二章【新生】

第10話	82
第11話	89
第12話	97
第13話	107
第14話	116
第15話	124
第16話	133
第17話	143
第18話	150
第19話	158
第20話	167
第21話	174

第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話 第22話

265 260 255 249 242 236 229 222 215 207 201 194 184

第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40・5話 第39話 第38話 第38・5話 第37話 第36話 第35話

374 366 358 350 341 331 322 313 304 296 287 279 271

第55話	第54・5話	第54話	第53話	第52話	第51話	第50話	第49話	第48話	第三章【招集】	第47・5話	第47話	第46話
476	467	457	449	441	432	423	414	408		401	392	384

第67話	第66話	第65話	第64話	第四章【凱旋】	第63話	第62話	第61話	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話
570	562	555	548		538	532	524	516	509	503	495	487

第 7 9 話  
第 7 8 話  
第 7 7 話  
第 7 6 話  
第 7 5 話  
第 7 4 話  
第 7 3 · 5 話  
第 7 3 話  
第 7 2 話  
第 7 1 話  
第 7 0 話  
第 6 9 話  
第 6 8 話

660 654 647 640 634 626 619 612 604 597 590 584 575

第 9 0 話  
第 8 9 話  
第 8 8 話  
第 8 7 話  
第 8 6 話  
第 8 5 話  
第 8 4 話  
第 8 3 話  
第 8 2 話  
第 8 1 話  
第 8 0 話

744 737 729 722 714 704 696 690 683 675 667

# 第一章【入学】

## 第01話

——俺がこの世界に生まれて早12年。

前世の記憶を持った俺は何一つ不自由なくこの世界でいち優秀な子供として成長していった。

確かに大人としての知識、性格、感覚を持つていたせいで子供たちとは一緒にいづらかった。そのせいで親や数少ない友人に心配されたりもしたが、最近はそれでも楽しめる事ができたし充実してきてるんじゃないかと思ってる。

思い返せば、俺は不慮の事故で亡くなった。

前世の俺の記憶が正しければ、傍目にはそういう風に捕らえられるような最期だっただろう。

しかし、問題はその後で、よく俺が読んでいた二次創作の冒頭みたいな展開になり、あれやこれや、俺がその時の現状を理解できていないままに気がつけば不運の事故として

片付けられるだけだった俺の最期に思いもよらぬ特典がついてしまったのだ。

……いや、特典自体は非常にありがたい。

ありがたいのだが、逆に今までの経験があるせいでその力を持って余しているというのが現状だった。

そもそも一般人の域を出ないような生き方しかしてこなかったと言うのに、そもそも努力や才能の最果てにたどり着いてしまったかのようなものを貰ってしまったも、それを扱いきれるという自信がそこまでないのだから。

まあ、今のところは普通に過ごしてられてるし、そこまで深く考えなくても大丈夫だろう。

月日は流れ、俺は高校生になった。

特にここに行きたいという願望もなかった進学先は、家から一番近いという理由だけで江ノ島高校というところに入学した。

どうせなら通ってた中学の近いところにも通えたらよかったんだが、それは大人の都合。父親が異動するってことで、中学からは結構離れた高校に通うことになってしまった。

中学生の終り頃になってようやく体の使い方に慣れてきた俺は、それまでの三年間は



帰宅部で過ごしていた。

当然、運動はすべて体育の授業のみとなってしまうていたのだが、友人の中には俺の運動神経に気づいてるっぽい奴もいてよく運動部に誘われていたが、今の今まで断り続けていた。

高校生ともなると、それに気づいてた奴はほぼいないのだが。

なんの数奇か、一人だけそれに気づいてて同じ高校に入学してきた奴がいたのだ。

「おーい、康寛やすひろ」

「お、奈々ななじゃねーか」

それが、この美島みしま奈々ななって奴だ。

小さい頃からずっとサッカーを続けていて、幼馴染あいざわの逢沢あざわ駆かと一緒にこの高校に来たリア充リアアキラどもだ。

……と言う表現からもわかる通り、この二人は彼氏彼女みたいな関係だ。

それを当人たちは認めてないのが初々しくて見てて面白いんだが、どうしようもなく口から砂糖砂糖が出てしまう。そりやもう滝たきのように。

閑話休題。

奈々とは中学からの付き合いで、同じクラスメートとして中学校時代を過ごした仲になるが、これといって何かしら友達らしい事をした覚えはない。

本当に体育の授業だけの絡みしかない。

その時、何度もサッカー部に誘われたのは結構な記憶として心に残ってる。

「ね、康寛は何か部活に入らないの？」

「うゝむ……高校生になったからなあ。少しは記憶に残るような高校生活にしたいしな」

「じゃあさ、サッカー部は?!」

「またか……別にサッカーも悪くないがなあ、前にも言った通り、俺は経験者でも何でもないんだぞ? それが高校生になってからだと遅くないか?」

「そんなことないよ! 康寛だったらすぐにレギュラーになれるって!」

キラキラした眼で見えてきやがる……っ!

好きか嫌いかって言ったら、サッカーは好きな方だ。

しかし、それを実際にピッチの上でプレイしたことはない。あってもゲームの中だけだ。

まあ、ここは奈々の言葉に従ってサッカー部に入っても良いんだが……

「ここって、サッカー部二つあったよな」

「え?」

「あいや、江ノ島高校のサッカー部って結構前から二つあるって話だけど」

「そ、そうなの？」

「まあ、俺も人聞きだから大したことは分からないけど……二つもあるってことは結構デカイ部活なんだろうな」

普通に考えて同じ部活が二つもあるなんて考えられないからなあ。

かなり多くのサッカー部員がこの高校にはいるってことなんだろう。

しかし……それだと俺みたいな未経験者が入っても良いものなのだろうか？

「ま、少し様子を見るよ。それまでどこの部活にも入らないから、駆にサッカー部の感想でも聞いてからにするよ」

「ふくん……そっか。じゃ、私から駆に言っておくね！」

「おう、よろしく頼んだぜ」

さつてと……

久しぶりの高校生活でも楽しんでみることにしてみますかね！

——二度目の高校生活を過ごしてる俺に、勉強の面では死角は無い！

それなりに勉強もしてたし、記憶力もよくなってるせいかな、前回の高校生活よりも楽に上位の方に食い込めそうだ。

それにしても、まさか担任がサッカー部の顧問だったとはなあ。

しかも結構若い先生で、これまたかなり運動できる人と見た。

実際にサッカーしてるところを見てみないと分からないが、見た目でもかなり鍛えているのがわかってしまう。

……これも、二度目の人生の特典ってやつだな。

なんだ？ 俺はどっかのスカウトマンにでもなればいいのか？

「ね、ヤス！」

「うん？ どした、駆」

放課後、まだ高校生になりたてで交友範囲の広くない俺に気安く声をかけてきたのは、中学からの同級生、逢沢駆だった。

こいつは中学の時に兄と事故に遭って、こいつは大怪我を、そして兄を亡くしたなかなかハードな経験を持つ男だ。

見た目からすればなよなよしてる感じで、いかにも小動物っぽい奴なんだが、いざサッカーの事になると信じられないぐらいの熱量を發揮する奴で、傍から見ている限り面白い。

「どこか、部活に入る予定とかあるの？」

「そういうお前さんはサッカー部か？」

「うん！」

「おーおー、満面の笑みを浮かべてらあ。」

「こりや、結構良いメンバーなんだろう。」

「俺はまだ決めてないな」

「なら、ヤスも一緒にサッカーしようよ!」

「いやあ……未経験者だしなあ。俺だとあんまりついていけないかもしれないぞ?」

「大丈夫だつて! あの時みたいな感じでやれば良いだけだから!」

「いや、体育の授業の事言ってるんだろ? そんな簡単なもんじゃないだろうに……まあ、

それでいいんだつたら、やってやらんこともないけど」

「ホント!? なら、今からでも一緒に行こうよ!」

「お、おい!? いきなり引つ張るんじゃない! 自分の足で歩けるつての」

「いや、まあ……自分で部活を決めるつもりだったんだが。」

無理矢理臭いがこうして勧誘してくれるのはありがたい。

それに、数少ない知り合いだし、練習相手になつてくれるつてんなら問題ないだろう。

「それにしても、そのサッカー部はどんな感じなんだ?」

「えつと……最高だよ!」

「……そつか」

「えへへ」

「何嬉しそうにしてんだか」

コツツと拳骨を駆の頭に落とす。

さして痛くもないだろうに両手で頭を押しえて走り出した駆の姿を見て、こういう高校生活も悪くないなと思う俺であった。

## 第02話

駆に連れてこられました江ノ島高校 フットボールクラブ F C。

部室の前まで来たが、この古臭さは前回の高校生活で俺が入ってた陸上部の部室みたいな感じが漂ってる。

プールの横に建てられてた俺の記憶の中に留められし部室は、まさに掘っ立て小屋みたいなぼろさだったからなあ。あまり良い記憶ではないんだがな。

その古さには敵わないんだが、目の前の部室も結構な古さが漂ってる。

「で、例の先生はどこにいるんだ？」

「ちよつと待っててね」

F Cの顧問は担任の岩城鉄平いわきてつぺい先生だ。

あれだけの運動能力を秘めた先生がどんな練習をさせているのか気になるし、なんでこんな掘っ立て小屋の部活の顧問を任されてるのかも気になってしまう。

ふむむ……ここの様子を見るに、そこまでの人数はいないだろう。

それに、これだとなんでこの高校に二つのサッカー部があるのかもわからない。

……何故だろう？

「やあやあやあやあ！ 君は僕のクラスの不知火君しらぬいじゃないですか！」

「岩城先生、お疲れ様です」

「そんな堅苦しくしなくても良いですよ！ 君もこのFCに入部してくれるのかい？」

「はい、まあ……未経験者なので、逢沢に教えてもらいながらになると思うんですけど」

「いやいや、未経験者も歓迎だよ！」

この人、すげえ嬉しそうだな。

まさか岩城先生から握手を求められるとは。

「なあにやってんの、岩城ちゃん」

「兵藤君」

「つとお、君、入部希望？」

「はい、未経験者ですが、よろしくお願いします」

「おう！ 俺はこのキャプテンの兵藤誠ってんだ、よろしくな！」

その後は、キャプテンに続いてやってきた部員の人たちの自己紹介をしてくれた。

最後尾には俺を連れてきた本人である駆と、その隣を歩く奈々の姿。

おいおい……俺に「リア充！」なんて叫ばせたいのか？

「そうだ、今から練習に向かうんですが、不知火君も一緒に行きませんか？」

「そうなんですか？ それなら、自分も一緒に」



「ヤス！ これからよろしくね！」

「おう」

一体これからどこに行くのかも分からないが、そこまで雰囲気の良い部活じゃなさそうではなかった。あんまり先輩との絡みは昔から上手くなかったからなあ。

……とりあえず、最初は奈々について行ってマネージャーの手伝いでもしておこうかな。

「奈々、手伝ってやるよ」

「え、いや、良いよ良いよ。康寛は先に行って練習に交じってて」

「いやいや……そんな簡単に言ってくれるなよ。俺は未経験者なんだから、いきなりそんなことできるわけないだろ？」

「……前から不思議に思ってたんだけど、本当にサッカー未経験なの？」

「はあ？ 何言ってるんだよ。今の今まで帰宅部だった男だぞ。そもそも運動自体してねえし」

「ふうん」

とりあえず、奈々が持ってた大量のドリンクが入った籠を奪い取る。

女子が両手で持ってたのを横でだんまり見ているのは俺の心が痛くなるからな。少し

くらいは男らしいところでも見せようとは思う。ただでさえ奈々は可愛いからな。……まあ、駆が周辺公認の彼氏だから一片の希望も無いのは知ってるんだが。

「ねえ、50m走の記録って覚えてる？」

「なんだよ急に。あー……あんまり真面目に走ってないから覚えてない」

「そっか……じゃあ、3kmの記録も」

「当然覚えてない」

「だよね」

一体何だというのか。

最後に記録を測ったのは中学の頃。

まだ体の使い方慣れてなかった頃で、力加減の練習をした頃だった。

だからクラスで一番早い結果になってしまっただろうがなかったんや。俺のクラスに居るのがほとんど部活に入ってるやつで、比較対象にするのを間違ってたとか何とかも気にしないんだ(白目)

「ま、とりあえず、それなりに運動は自信あるから大丈夫だろうが」

「が？」

「ボールに慣れる事から始めないといけないのか……」

「はは！ 康寛だったら大丈夫だよ！」

「そうかあ」

何を根拠にこいつは俺を評価してるんだ。

とりあえず、今は奈々について行って練習風景でも見させてもらおうとするかな。

「おうおう、浜辺で練習たあ結構面白い事やってんなあ」

まさかの浜辺。

みんな示し合わせたかのように水着を着てサッカーを楽しんでる。

あれはあれで足腰を鍛えられる良い運動になるだろう。

それに、グラウンドみたいに固い地面じゃないから、あまり怪我を気にすることなく

大胆なスライディング、オーバーヘッド等々を繰り返している。

——あれだったらすぐに出来るだろうな。

「それじゃあ、不知火君も参加してみましようか」

「え？ でも俺、水着なんて持ってきてきてないですよ」

「そう思つて一着、君が履けそうな水着を持ってきてるんです」

「わあお……用意周到ですね」

岩城先生は俺に水着を渡してきた。

サイズはちょうど良さげ。一体この人はどこまで考えてるんだろうか。

「じゃあ、とりあえず着替えてきますね」

「行つてらっしゃい」

さて……俺はまだサッカーのルールを覚えてないんだが、大丈夫か？

いや、ダイジョブはない（絶望）

「——あの子は、一体どんなものを持つてるんでしょうか」

「岩城先生」

氷水にドリンクを浸してるところに、先生はやってきた。

もしかしたら、私が日本女子サッカー代表だつてことにも気づいてるかもしれない。

そんな人が私に話かけてきたつてことは、康寛の事なんだろう。

「奈々君……僕は、不知火君の潜在能力が凄く気になります」

「それは、未経験者であることも含めてですか？」

「そうですね」

それは私も思っていた事だった。

今までずっと帰宅部だと言っていた康寛は、確かにその経歴だけど、あのポテンシャルは完全にその域じゃないことも知っている。

康寛が覚えてないって言っていた50m走の記録は6秒2……とても中学1年生が出せるような記録ではないのは確かだった。

それを駆から聞いたとき凄く驚いたのを覚えてる。

それ以外の測定についても規格外の記録を叩き出しているのを覚えてる。

「サッカー未経験者でも、天性の才能を持った子であれば、すぐに体が順応するでしょう」

「そうですね」

「別に私は彼の才能だけを見るわけじゃないんですが、もし彼が……」

最後は小さい声でぼそぼそ喋って聞こえなかつたけど、それは、今までの接しやす  
い岩城先生ではなく、確固たる決意を秘めた男の顔だった。

## 第03話

「よつと」

着慣れない水着が尻に食い込むのが辛い。

着替えをしてそれなりにストレッチをしていたらいつの間にか後半が始まる時間になつていたようだ。

「ヤス、よろしくね!」

「お? 俺は駆と同じチームなのか?」

「そうだよ!」

それは心強い。

何もできない状態で味方の中に心の味方もいなかったら泣ける。

「そうか……で、俺は何をすればいいんだ?」

「まあ、とりあえずボールが来たら誰かにパスしておけば大丈夫だよ」

「おお……あまり難しくなさそうでよかった」

「みんなヤスが未経験者だつて聞いているから、そこまで酷いことにはならないと思うよ」

それから俺は軽く駆からルールとゴール位置を確認。

俺のポジションはミッドフィールダーとかいう所になるらしい。

デیفエンスした事は無いし、上手いことシュートできるかも分からない。恐らくそんなところだろう。が、基本的にこの練習はポジションを固定していないらしいから、自由に動き回っていいそうだ。

だからと言って何をして良いのかわからないんだが。

まあ、前半で少し見取りをしてたからある程度は動けると思うけど、最初はこの浜辺に慣れるのに専念しようかな。

「行ったぞ、ヤスー！」

「おっと」

火野先輩の声に反応すると同時に、容赦なく俺の足元に収まるボール。

「おらあああああつー！」

「うおわっ!?!」

そこにおかつぱ頭の堀川先輩が勢いよく突っ込んできた。

いきなりの洗札に俺は混乱してしまったし、足元にあったボールも奪われてしまった。

くそう……少しは手加減してくれても良いんじゃないか？

とりあえず、堀川先輩が誰かに仕掛けるのを見て、避け方を学ぶとしよう。

とりあえず、本当にこの砂浜に慣れさせてくれよう。

それからしばらく砂に慣れながらボールの行方を目で追っていたが、初心者の俺にもマークにつかず、一人ボツチになってしまった。

「へいへーい、今だつたら俺空いてるよお」

「ヤスー！」

「ほいほいっと」

唯一の三年生、三上先輩からボールが転がってくる。

今はこつちが攻めだから……別にこつちから蹴つても良いんだよな？（圧倒的フラグ感）

「つしやああー！」

「な!？」

勢いよく右足を振り下ろす。

距離は開いてるが、まあ、大丈夫だろうという感覚で足元のボールを蹴る！

「おお？」

足を振り下ろした所で左足が砂に取られ、体勢を崩してしまった。

そのせいでボールは思い描いた軌道とは全く違う、場外ホームランになってしまった。



うーむ……ゴールに向かって蹴ったつもりだったんだが。

「……おいおい、なんて威力だよ」

「あんなん、流石に受け止めきれんかもな」

「そろそろ砂に慣れてきたんで、どんどんボール回してください」

「お、自信满满々な新人くん！」

砂に足を取られた直後の言葉がこれである。（白目）

とりあえず、先輩方の動き見ることはできたからそれなりの動きはできそうだ。

またこっちのチームが攻勢になってすぐ、先輩が俺にボールを回してくれた。

ボールが砂に取られ、不規則な動きをする。それを感じながらボールを蹴りだす。

全体を見渡すと、またしても堀川先輩が俺に対してスライディングを仕掛けようとしてた。

本来ディフェンスの人なんだが、今やってるサッカーのルールは特に決められたポジションはないらしい。だから他の人に守りを任せて——キーパーくればやしの紅林先輩だけは固定のポジション——突撃してこれるんだろう。

それは、一種の信頼を形にしているようなものだと思う。練習だからっていうのもあるかもしれないが。

俺は、ボールを浮かせることで堀川先輩のスライディングをかわしつつ、前へとボー

ルを蹴りだした。

「なにい!？」

「火野先輩!」

「よし! ナイスだ!」

前線へと走り出していた火野先輩にパスを出す。

せつかくできたスペースを利用しない手はない。

火野先輩はそのままドリブルでどんどん上がっていく。まるで無人の野を駆るよう  
に走っているが、これで砂浜を走っているんだから凄まじい。

そんな先輩に二人のデیفエンスが間隔を空けつつにじり寄る。

さすがの火野先輩と言えど、砂浜で二人を抜くのは非常に難しいだろう。

俺はパスをもらえる位置につくようにして先輩の後ろに近寄っていく。

「先輩!」

「しゃーないか!」

当然、相手にパスカットされないように動いている。

普通に近寄ってもパスを出すのは読めるからな。

「へ、初心者が俺ら二人の相手をすんのか?」

「そんな事しませんよつと!」

「ば、パスウ!?」

パスを足元に納めず、そのまま弧を描くようなパスを出す。

半円を描く軌道は先輩方の頭上を越え、デイフェンスとキーパーのほぼ真ん中あたりに落ちようとしている。

「へっ! 狙いは良いが、誰もいないと意味はねえぞ!」

「何言ってるんすか……いるじゃないですか、最高の奴が」

「な!」

「いつけえええええっ!!」

空白の空間に走りこんでいた駆が宙に浮いたボールをダイレクトボレーを叩き込んだ。

唸りを上げながら宙を駆るボールは、そのままゴールの柱の間を通り抜け、砂場に強烈なダイブをかました。

いやあ……転生特典を持って余してたが、運動の事になるとかなり優秀な部類になるなあ。

何気に今のラストパスも俯瞰視点で見れてたからこそそのパスだったし。

例えば今俺が一人称で見ている光景が普通の視点だとしてテレビで放映されてるとすると、俺の頭の中にもう一つのテレビがあるとす。そのテレビがサッカーの試合を

放送してるテレビ画面、つまるところゲームみたいに天からコートを見ている感じを映してるみたいなの？

言ってしまうえばチート（転生特典って時点で何かがおかしいのだが）。

「やった！」

「よくやったぞ逢沢あ!!」

「そ、そんな事ないです！」

はっはっは。

これで一点。ゲーム的に表現すれば俺はアシストってことになるのかな？

他のルールは曖昧なんだが、今度適当にルールブックでも読んでおこうかな。

「いやいや！ お前の最後のあのパスなんなんだ!?! ホントに未経験者なのかよ！」

「え？ まあ、そうですね……今まで帰宅部でしたから」

「マジかよ……いや、なんにせよお前がうちに来てくれて凄え嬉しいぜ」

「ありがとうございます」

いやあ、少しずるをしてる感があるからなあ。

それでも喜んでくれてるんだったら良いか。

その後、堀川先輩のスライディングを見た俺が守備でも貢献し始め、一気に3点を奪うことに成功したのだった。

## 第04話

「凄いじゃない、康寛！」

「おー久しぶりに慣れない事したから疲れたぜー」

練習が終わり休んでいる俺のところにな々がスポーツドリンクを持ってきてくれた。

あらかし

予め氷水に入れておいたから良い感じに冷えてる。これが火照った体を良い感じに冷やしてくれる。

「……ねえ、本当にサッカー経験無いの？」

「あん？ だから何回も言ってるじゃねえか」

その追及には無いと返すことしかできない。

ズル使つてない？ なんて事を聞かれたらなんて答えようか困るがな。

確かに今回の練習を思い返してみれば、1アシストにスライディングで先輩からボールを奪ったり。

とてもじゃないが初心者の動きでは無いような気もする。

が、まあ……適当にゲームで見たからとかテレビで見たからとか言っておけば大丈夫だろ。

「不知火君、少し良いですか?」

「はい?」

ここにきて岩城先生が話かけてきた。

「確認したい事があるんです。君の動き……パスにしてもスライディングにしても、明らかに未経験者のものじゃなかった。でも、最初に堀川君にスライディングをされた時の反応は完全に初心者のもだった。それが、二回目にスライディングされたときは完璧にかわしてドリブルをしていた……この差は、とても一回の練習で埋まるものではないはず」

「つまるところ先生は、俺が未経験者じゃないと言いたいわけですか?」

俺もそう思います（小並感）

「え……いえ、そこまで責めるつもりはないんです。君が本当に未経験者でもそうじゃなくても、こうしてこのクラブに入ってくれたことは喜ぶべき事ですから」

「まあ、良いんですけどね。あと、サッカー始めたばかりなんで特に希望するポジションは無いんで、つてか、ポジションの名前も分からないんで後で教えて貰えませんか?」

「え? あ、はい」

「駆が確か、FW? フォワードとか言うポジションだったと思うんで、そのポジション以外でお

願いします」

「わ、わかりました」

できれば真ん中あたりが良いかな。

練習中に駆に出したパス……あの軽い感じのパスを出すんだったら真ん中が一番感触が良い気がする。

守備的な位置で後ろのポジションとなると、そこまで守備に慣れてるわけじゃないし動き方も知ってるわけじゃない。それを言ったらどこも慣れないポジションになるんだが。

が、真ん中だったらどこからでもボールを受けれるし、どこへでもボールを出せる。

まだまだ技術が足りないような気がするが、その自信が俺にはある。

「ふふ……良い目をしてますね。君ならどのポジションでもやっていけそうですね」

「はあ」

どんな目をしてるんですかねえ（白目）

とりあえず期待をされてるみたいだから頑張ろうかな。

それから別の日。

学校の授業がすべて終わった後の放課後、俺は江ノ島市民競技場までサッカー部員たちと一緒に連れてこられていた。

どうやらこの競技場で今度の土曜、試合をするそうだ。

試合内容は少し前に聞かされたのだが、江ノ島高校にある二つのサッカークラブのうち、一つの代表を決める試合らしい。

特にそこらへんは思い入れがあるわけでもなかったから深い事情は聴いてないんだが。

「それじゃあアップを始めましょう!」

その言葉に俺は適当にストレッチを始めた。

他の先輩や駆はボールを使ってパス練習などをし始めた。……これが経験者と元帰宅部の違いか。

そこで岩城先生……いや、もう俺もサッカー部なんだから岩城監督か。も、アップをし始めたのだが、予想以上にボールの扱いがうまかった。

その足業を見させてもらえて良かった(小学生並感想)

「みなさん、アップしながら聞いてください」

「今日は6対6のハーフコートでのミニゲームをしたいと思います」

「お、12人いるからちようど出来ますけど……不知火も出すすか?」

「いえ、最初不知火君には練習を見てもらいます」

そう言いつつ俺に不適な笑みを見せる岩城監督。



……もしかして俺が見取り稽古擬きをしてるの分かってんのかな？

「じゃあキーパーはまた監督がするんっすか？」

「いえいえ、今日は中学でキーパーの経験がある三上君にやってもらいます」

「えー？ それじゃあ今日は5対5になってんじゃん」

「荒木だつていないんだしさあー」

その荒木つてのは誰のことだろうか。

言い方的に先輩なんだろうが、どれぐらい上手い人なのかもわからないが……もしや、相当上手い人なのか？

と、気づいたら監督がゲストなる人物を呼んでいた。

その特別ゲストとは、謎のサッカープレイヤー『宇宙人マスク』の事だったのだ！

……なんだろう、その胡散臭いマスク。一応ここに来るまでに軽くボール捌きを見せてくれていたが、素人目に見てもうまいことがわかった。あれは俺でも少し練習しないとイケないかな？

俺がポケーっとしてる間に話は進み、そのまま6対6のミニゲームが始まった。

ちなみに件の宇宙人マスクは赤チームになり、駆も同じチームだった。

……今、何気なくマスクが駆に耳打ちしてたような。マネージャーの奈々がここに来てないってのは、もしかするとそういうことなのか？

——いぎ、キックオフ。

例のマスクがボールを持ったままゲームが始まり、挑発されていた兵藤先輩が仕掛けるが、マスクは華麗なボール捌きでそれを避け、どんどんドリブルで進んでいく。

そしてマスクが右手を上げ、サインらしきものを出すと駆と火野先輩が動き出した。

少し飛び出た形の駆には堀川先輩がディフェンスに付いているが……あれじゃあオフサイドにかかるだろうからパスは出せないだろう。

ちなみにある程度重要なサッカーのルールは覚えましたよ。

オフサイドはパスを出すポジションの選手にとっては重要なルールだからな。

おっと、駆が動き出した！

しかもあれは、自分からオフサイドになりに行くような形だ。

なんでそんな動きをするんだ？

マスクはボールを大きく蹴りだした。

まるで駆にパスを出すかのようなボールに堀川先輩が「オフサイドだ！ 明らかにっ

！」と声を荒げた。

そうなんだよなあ……このままだと間違いなくオフサイドになるんだが。

——結果的にボールはゴールネットを揺らした。

しかもオフサイドにはならない。しっかりとした一点。

しかし、それはマスクの得点になったのだが。

マスクが蹴りだしたボールは、動き出した駆の足元にうまい具合に吸い寄せられ軌道を変えた。駆が蹴って軌道を変えたわけではなく、シユートに回転がかけられていたせいで地面に落ちた瞬間その軌道を変えたのだ。

当然、オフサイドになると思い込んでいたキーパーはそのシユートを止めることはできず、得点になってしまったというわけだ。

……しかし、よく考えられた作戦だなあ。一度見てしまったらさすがに二度目は通用しないだろうけど、高校生の意表を突くには十分な作戦かもしれない。

「くそ……そういうことだったんだな！ くそっ!!」

「おいおい……なんだよ今の連携は」

「いきなりコンビネーションとれてんじゃない。誰だよあのグレイ君は」

確かに。

いきなり出てきた割にはコンビネーションが取れすぎてる。あのサインとか前もつて言わなきゃわからないはず。となると、やはりあのグレイは駆の幼馴染の美島奈々なのでは!?

……なんて少し探偵気分で適当な事を言ってみるが、今も何か話をしてる駆とグレイ

の様子を見るに察する事はできる。別にそれでどうこう言ったりするわけじゃないが、そしてミニゲームは前半戦を終了し、後半へと突入しようとしているところだが、隅っこで体育座りをしていた俺に声がかかった。どうやら俺の出番らしい。二年生の遠藤先輩と交代し、ピッチに立った。チームは堀川先輩と同じ……つまり、駆とグレイの敵となる。

——一瞬、監督が俺を見て微笑んでいたような気がする。

単に腹黒い監督にしか見えなくなってきたのは気のせいかな。とりあえず、俺に対する挑戦状だと思ってるんじゃないかな。さっさとやりましょう。

「行くぞ駆……ボールへの嗅覚は十分か？」

（白目）  
某赤い正義の味方っぽく決めてみたけど、本当の試合でも何でもないんだなこれが

とりあえず、ミニゲームは普通に楽しみました。

## 第04. 5話

意味が分からない。

康寛自身、初心者って言うてたし、加えて今まで運動部に入ってたこともないのは同じ中学だったから知ってる。小学生の時も特に何かクラブに入ってたって話も聞いてない。

それに比べて私は幼いころからずっとサッカーを続けてきて、アメリカでも強豪クラブでサッカーをしたりもしていた。

今、私は康寛と一対一で対峙している。

皆に手を抜いてほしくなかったのと、岩城監督からの頼みでグレイマスクを被ってミニゲームに参加したけど、今のサッカー部の皆の技術ぐらいいだったらまだ何とかかなる。それも見通して監督は私にマスクで参加させたんだろうけど……今はこのマスクが凄く邪魔に感じてる。

康寛の威圧感が、時間が経つごとに大きくなっていく……！

やっぱり初心者ってのは嘘だったんじゃない？ そう思ってしまうぐらいに康寛の技術が仕上がっていく。それとも、手を抜いてサッカーをしていた？ いえ、私だってわ

かっていたとしても手を抜く必要なんて彼にはないだろうに、今になって手の内を明かしてくる意味もない。

——康寛は男子の中でも特に体格が出来上がってる。それなのに当たりを仕掛けてこない。初心者でありがちな、仕掛けがわからないとかじゃない。少しでも隙を見せたらボールを奪おうとする感じ……私の小柄な体格を生かして通り抜けようとしてもすぐ回り込んでくる。

「どうした……先輩たちを抜いたみたいに俺の事も翻弄してみろよ？」

それができればどれだけ楽になることか……

右に左に、フェイントを仕掛ける？ どうすれば康寛を抜ける？

一対一の仕掛けでここまで考えさせられるのはすごく久しぶりな感じがする。そして、心の奥底から湧いてくる、目の前の強敵を抜き去りたいっていう感覚。

——ごめんね、康寛……私、少し本気出すわ。

ボールを蹴りだす。

右に左に、どっちにでも抜かれるよう足元に細心の意識を巡らせる。

「ぬっ」

シザース——右に抜くように見せかけて逆の左に動き出す。

「まだまだ！」

一度右に釣られたと思つた康寛はどんな反射神経をしてるのか、左に動こうとした事に付いてきた。

そこでエラシコ——蹴りだしたボールを右足の外側に当て押し出し、康寛の股を抜く。これでボールの行方を見失つて私への注意も少しは逸れるはず！戸惑つてるであらう康寛の隣を通り抜け、ドリブルを仕掛ける。

これだけ集中したのは久しぶり。あの、駆が例の状態に陥つた時以外にここまで集中することも無い。

「待てやあつー！」

「なっ!?!」

後ろから強引なスライディング。

康寛の左足はしっかりとボールを捉え、しかも私が持つていたボールは奪われてしまった。

初心者だと思わないで対処したつもりだった……でも、抜いてから油断してしまった！まさか、その隙を付いて後ろから仕掛けてくるなんて……

「今度は俺の番だ……初心者ドリブルだから簡単に取られちゃうかもしれないが、心してかかれよ？」

——……?」

一体何を仕掛けるつもりなんだろうか。

私は康寛の体全身に意識を集中する。さすがにここで抜かれるわけにはいかない。駆にも見られてるつてもあるし、適当な事はできない！ でも、もし康寛が本物だとしたら……私は手を抜くわけにはいかない。駆のためにも、私は持てる力の全部を發揮する！

「行くぞー！」

来る……！

——一瞬、康寛の体に私の姿が重なって見えたような気がして、止まってしまう。

「……………え」

私は、あっけなく抜かれてしまった。

原因は分かっている。単純に私が意識を逸らしてしまったから。

でも、原因は別にもある。康寛が私を抜いたときのボール捌きは、完全に私の動きだった。最初の動き出しから抜き去るまでの動き……シザース、エラシコ。私が康寛を抜こうとしたときの動きそのまま。まるでリプレイでも見ているかのような感覚に陥っていた。

「セブン！」

「駆かあー！」



駆が康寛に詰め寄っている。

今の駆だとすぐに抜かれてしまうだろう。でも、その少しの時間を生かして康寛のボールを奪いにかかると。今後ろから相手をすればボールを奪えるはず！

「俺だけ見ても良いのかい!!」

「えっ!？」

パス。

そのままドリブルで仕掛けると思っていただけに、このパスは完全に思慮外の行為だった。駆と私の二人が康寛に詰めていたせいで、完全に右サイドが空いていた。

「ナイস্যアス！」

そこには兵藤先輩が走りこんでいて、康寛のパスは綺麗に足元に収まっていた。

フリーで走りこんでいた兵藤先輩はそのままシュート。それを三上先輩は止めきれずにゴールとなってしまう。

兵藤先輩の走り込みも良かったけど、それ以上に康寛の活躍が華々しい感じだった。

「セブン……」

「駆、気を付けて……康寛を初心者だなんて思わないで、本気で仕掛けるよ」

「セブン……分かった」

——それから私と駆の二人で康寛に当たった。

さすがの康寛も二人がかりには苦戦しているようで、ドリブルではなくパスを主体とした動きにシフトしていた。康寛ぐらいの動きだったらドリブルですぐに抜けそうな感じはするけど……

「どうでしたか、不知火君は」

「監督」

「不思議な感覚がしませんでしたか？ 実際に私が相手にしたわけではありませんが、グレイ君にしてみれば、まるで自分が目の前にいるような感覚だったのではないかと」

「そう、ですね……一瞬、自分の姿が鏡に映ったみたいに見えました」

「それが本当であれば彼は、練習の最中、それも目の前で見ただけの技術を吸収しているようですね。まるでスポンジ……いえ、砂漠に水を吸われるよう」

「ありえない」

ポツリと、言葉が漏れた。

今までに感じたことのない恐れのような、嫉妬のような。色んな感情が一つに凝縮されて零れ落ちたみたいだった。全ての技術が吸い尽くされる。今までに感じた事のない現実。ゾツとする感覚が背筋を滑り落ちた。

それこそ、女子と男子、性別の違いがあつて良かったと思つてしまうほどに。普通であればその才能を褒め称えるべきなのだろうか？

「ま、まあ、これは単に私の想像であつて、現実味がある内容ではありません。彼が未経験者だとして、それほどの才能ある生徒が我がFCに入ってくれた事を純粹に喜びましょう。そして、彼という存在が逢沢君の成長を促すことを祈りましょう」

「……そう、ですね」

初めて感じた恐怖。

それはあるけど、それと同じくらいに感じる……康寛の限界がどこにあるのか。駆とはまた違った期待を。未だにピッチで笑いあっている駆と康寛を見ながらそう思うのであった。

## 第05話

ついにやってきた試合当日。

俺たちFCが戦う相手は同じ高校のサッカークラブ、それも公認の部活として活動しているだけあって部員の数も52名と、れっきとした部活動を行っているようだ。まあ、俺にしてみればSCの監督である近藤監督みたいな頑固親父を彷彿させる人はそこまで好きじゃないんだが。

対するFCは部員数、俺を含め12人。何とかサッカーをする事ができる程度の人数だ。

まあ、初心者の俺がいきなり試合に出るとは思えないから、先輩方に何か事故でもない限りはこのままベンチで体を休めておくだけの簡単なお仕事になるのは目に見えて  
いるわけですけれども。

「——なんて思っていた時代もありました」

「ん？ どうしたんだ？」

「いえ、なんでも無いっす」

FC側のビブスを身に着け、俺はピッチに立っている。

位置は兵藤先輩の左側。監督は俺に「適当に左側を走っていけばいいですよ」なんて本場に適当な事を言っていたけども、とりあえずフォワードの火野先輩よりも前に出なきゃ問題ないのか？

相手のチームを見るが、誰も分からない。

どれだけ運動できるかぐらいしか分からないが、相手フォワードののっぽ野郎はそこそこ運動できそう。それから真ん中あたりの人と、その後ろ側にいる人も結構な人を見た。ホント、なんで俺がここにいるのか分からないんですが？

「ヤス、お前さんは自分の得意なポジションで動いてくれて構わんからな」

「はあ……分かりました」

マコ先輩——兵藤先輩が「いつまでも堅っ苦しいわ!」と言ったが事の始まり——も何をもって俺の事を信用しているのだろうか。最初に未経験者だと言っているはずなんだがなあ（白目）

解説役の江ノ島高校生徒の諸君の話を適当に聞き流しつつ、ピッチ上で屈伸運動。さすがにアキレス腱を痛めたくはないからな。それにしてものっぽ君よ。サッカー未経験者と紹介された俺を見ながら笑うのはあまりよろしくないのではないのかな？ 貴様なんぞトツポみたいに簡単に折ってやれるんだぞ？

——ホイッスルが鳴った。

試合の開始はFCからのキックオフで始まった。

火野先輩がボールを蹴りだし、ボランチとして中央にポジションを構えているマコ先輩がボールを持ち、ゆっくりと敵陣へと歩き出した。

さて……俺はどうしようかな？

適当に動いても良いって事だったから、パスを受けれる場所にいれば大丈夫だろう。後は上からの視点を考慮しつつ立ち位置を移動しよう。ボールの動きとか、それに合わせて動く相手とか諸々。今の俺ができることをしようかなと。

「ヤスー！」

「おつとお」

いきなりパスが来た。よく見ればマコ先輩に一人ディフェンダーが付いていた。駆が動き出し、それに引きずられるように二人のディフェンダーが駆に近寄っていく。恐らく、それでパスを出せないようにしているんだろうが、逆にそれ以外のスペースが空いている。

「へっ！ 簡単に奪ってやるぜ！」

俺が未経験者だという紹介を聞いてか、八雲とかいう同級生が突貫してきた。

おそらく俺が周囲を見渡してパスの出どころを探していたのを、助けを求めているんじゃないかと勘違いしているようだ。しかし……

「威勢は良いが、そこまで上手じゃないだろうに」

「なっ!？」

シザースで悠々と躲し、駆の動き出しで空いたスペースに走りこんでいた火野先輩にボールを蹴りだす。パスが火野先輩の足元に収まったのを確認して意識を俯瞰視点に切り替える。いやあ、こうやってピッチに立ってプレイしてみたいなあなんて思ったこともあったが、まさかこうして実際に俺がサッカーをすることになるなんてなあ。

——進退窮まった火野先輩はクロスを上げるフリからのシヨートパスでマコ先輩へとボールを繋げた。マコ先輩の足元に収まりドリブルを仕掛けるが、SCのディフェンス陣が急いで守りに戻り、マコ先輩の行く先を二人のディフェンスが防いだのだった。

「いけえっ!」

一気にゴール前へとクロスを蹴り上げた。

一見、誰も走りこんでいないような感じのするクロスだが、何とそこには我らが攻撃陣の要、駆が走りこんでいたのだ! そのままシユート……っ!

……と、いければ格好良かったのだが、駆よりも体格のデカイディフェンスが仕事を果たし、ヘッドで一気にボールを弾き出してしまった。

「よっっ!」

「なに!？」

そこに走りこんでいたのが俺ってわけで、上から見てれば大体のボールの来る位置は判断できるから、それを生かしてボールを確保。距離はおおよそ30メートル。届かない位置じゃないが、後ろから迫ってきてる相手さんの事を考えてグラウンダー性のショートパスをサクツと。

右側から上がってきた場君に合わせて絶妙なパス。

ふふふ……俺に死角はないのだよ!

「これで!」

「くうっ!」

降りぬかれた右足。

ダイレクトシユートはポストの少し右側を掠り、コートの外へ点々と転がっていつてしまった。

「おしいよおしいよー」

「いっつ……」

『おおっとー! これはどうしたことだあつ! いきなり試合が動いているぞ! それも入部したての一年生が試合を動かしている! しかも12番の不知火に至ってはサッカー未経験者となっているが、これは何かの間違いなのではないでしょうかあつ



!？」

良いダイレクトだったけどなー。

何気に自分でシュートを蹴るのは勇気がある。だからフリーの的場君にパスを出してみたわけだが。次は俺が蹴ってみようかな？

ゆっくりピッチを歩いていると、相手のキーパーが一気にボールを前線に蹴り上げた。

それを競っているのはマコ先輩だが……相手があののっぽ野郎じゃ分が悪い。ヘツドで落とされたボールはそのまま相手の選手が保持してしまった。

おっおっ、波状攻撃仕掛けられてる。

このままじゃ点数が決められるのも時間のうちと思っていたら、駆がこぼれたボールを外に押し出し、当面の窮地を救ったが。コーナーキックになつて尚ピンチが続いている。

味方ディフェンス陣よりも頭一つ分背が高い相手攻撃陣。これは守りにくいだろう。

一応俺も下がって守りに付いているが、あのキッカー——織田先輩だったか、あの人がどこに蹴るか全く予想がつかない。

一人、駆が付いていた相手が動き出した。

ゴールから離れるように動き出したせい、駆の意識がゴールに向いているせいで気

づけてない。仕方ない……ここは俺が近寄ってボールを奪うとしようか。

『あーつとお、ゴールと逆に曲がっていくぞ、これはっ!?!』

「えっ!?!」

『長身の3人にマーカールが引き付けられてる隙に沢村がマークを振り切ってフリーに  
!』

「と、そうは問屋が卸すと思うなよ?」

「なっ!?!」

沢村先輩の後ろから滑り込むように邪魔に入る。

そして曲がって来たボールを胸で受け止め、足でトラップする。後ろから沢村先輩が体当たりのな感じでボールを奪いに来ようとしているが、残念だが簡単にはやらんぞ?

左に動くと思えかけ右に動く。ボールは上手いこと上に蹴り上げ、沢村先輩の後ろに落とす。ボールの行方を見失っていた先輩は俺の動きに付いてくる事ができてない。

「はっはー!」

「くっそ……」

攻撃陣が一気に駆け上がる。

駆、的場、火野先輩、マコ先輩が敵陣へと走り込み、相手ディフェンダー陣を戸惑わ  
せている。

「こんだあー！」

ピッチ中央付近からの縦パス。

相手ディフェンダーもボールを取ろうと、触ろうと足を伸ばすが届かない。そういう所を狙って蹴ったんだから仕方がない。

「僕が決める！」

裏をかくように走りこんだ駆を俯瞰視点で感じ、ディフェンダーの意識がボールと火野先輩に逸れた瞬間に走り出した所を狙ってパスを出した結果、しっかりと駆も追いついていた。

走り出そうとする方向に足でボールを落とし、ボールを足元で受け止める一瞬の時間を短縮。そのままゴールに向かって右足を振りぬいた。一度トラップしたとは言え、動いているボールを蹴ったとは思えないほどの精度で一本の線を虚空に描き、それはゴールネットの右隙を揺らしたのだった。

## 第06話

『江ノ島FC！ 前半30分でついに均衡を破ったあつ！ 誰がこの結果を予想できたでしょうか。まさかの一年生コンビが得点を決めるなんて！』

「やった……やったあ！」

「まあ、良かったんじゃないか？」

駆が周りの先輩に囲まれ祝福されている。

かく言う俺も駆の頭をペシペシ叩いて喜んでるのだが。

「ヤス……よくやった！」

「マコ先輩」

「お前、すげえよ！ この後もどんどんボール回していくから、もつと動いて活躍してくれよ！」

「了解つす」

あまり期待されても俺の胃がマツハで潰れてしまうかもしれないぞ（白目）

なんか試合の最中、ボールを蹴るときとかテンション上がってハイになっちゃうのが気にはなるが、今はまだ上手いこと回ってるから良しとしよう。

さて、一点を決めてリードしている俺たちであるが、今先輩が言ったように守りに入るつもりはないようだ。と言うのも、SCの部員たちもそれぞれ確固とした実力を持っているわけで、単純に守りを固めてしまったら織田先輩や沢村先輩、その他背の高い攻撃陣の動きが気になってしまう。

そうなるぐらいだったら始終一貫して攻勢にかけていた方が今のFCには合っている戦術と言える。

——ちなみに俺だが、まだ隠しているスキルみたいなものもあって、相手の運動能力を値、グラフみたいな形で読み取ることができる。そこまではつきりと数値化できるわけじゃないが、だいたいこれぐらいの運動ができるだろうという指標になる程度の解析だ。

それを鑑みてもうちのチームは攻撃に傾倒していた方が良いという結果になっている。

守りに突出した部員がこつちには少ないという現実。上げるとしても、スライディングや積極的な守備技術のある堀川先輩。また、岩城監督が誘ったというキーパーの紅林先輩ぐらいだろう。

あと一人……もう一人ぐらい連携に参加できる人がいれば良いんだが。

「駆っ！」

「うん！」

ショートパスでボールを回す。

さっきの一点目もあり、未経験者として参加している俺にもデイフェンスが付き始め、おかげで味方からのボールを受けるには少し動かないといけなくなってしまう。その間も相手は動いているわけで、少し前までのように簡単にボールを受けられなくなっていたのだが。

同じサイドから駆け上げようとしていた八雲君のボールを奪取。

悔しそうに顔を歪めている姿を一瞥しつつボールを前線に上げる。

それが駆だったのだが、今駆の前には沢村先輩が付いていた。

それを上手いことフェイントで躲したのだったが……俺から見ればどこか拙さが出てるフェイントだった。どうしても違和感を拭い切れない。

それを察したのか、今度は織田先輩が一对一で駆と対峙。

「来い」

「ダメっ！　織田先輩は駆の欠点に気づいてる！　駆、パスよ！　無理しないでのめ場君に！」

それが聞こえてないのか、駆はそのままフェイントで織田先輩を抜き去ろうとし――

「え!？」

織田先輩は左足で簡単に駆からボールを奪ってしまった。

やはりどこかに駆の弱点があるのだろう。今の駆だと格上の相手に通用しないだろう。

『10番織田、逢沢からボールを奪いすぐさまロングフィード! これはチャンスになるぞ!!』

大きく蹴り上げられたボールはそのまま自陣の中央まで飛んでいき、相手の坂本先輩がヘッドでボールを落とした。さすがにピッチの中央付近にいた俺は対応することができずそれをそのまま眺める事しかできていない。

ボールは左サイドの中村先輩へと繋がり、そのままサイドを突破される。そしてクロスを上げられ、ゴール前にいた長身の高瀬がヘッドでボールをシュート。これ以上ないサイドからの連携で繋がられたボールはそのままゴールネットを揺らすのだった。

『SC、前半ロスタイムと入ったところで鮮やかな同点弾! これで1対1に追いついたあつ!』

紅林先輩がボールを中央に向けて投げてくるが、キックオフすることなくホイッスル。

ここで前半は終わってしまった。

『高瀬と競った三上が激突から立ち上がれない。腕を押さえているが大丈夫でしょうか？』

「立てますか、三上さん」

「く……なんとか……でも腕が……」

マコ先輩の肩を借りつつ戻ってきた三上先輩だったが、何とさっきの激突で肩を脱臼してしまった。何とか関節を入れたものの、監督判断でこれ以上のプレイはできないと言われてしまう。

もともと12人しかいないこのチームで手痛い事態が発生してしまったが、交代要員の遠藤先輩はそもそもデイフェンスじゃない。

岩城監督は公式でも退場等で10人で戦うこともあると言っているが、流石に点数を決められて雰囲気落ち込んでいる最中の出来事に皆が付いていけない。どうしたものかと考えるも、俺には何もできない……

「駆、『答えはゴールで出す』んだろ？ 一点決められたぐらいで何落ち込んでんだよ！」  
「公太!？」

なんとそこにはSCに所属しているはずの中塚公太の姿が。

実はと言うと、こいつもまた俺と同じ中学に通っていた奴で、駆と同じサッカー部に所属してたのだ。俺からしてみればそこまでの関わりは無いのだが、遠い高校に同じ中



学から仲の良い奴が来た駆は嬉しいだろう。

……しかしました、なんで公太がここに？

「いいの!?! SCの先輩が見てるよ」

「辞めた……」

「え？」

「SCはつまんねーから辞めた!」

何という突拍子のない行動だろうか。

前世を鑑みれば、俺だって先輩とかに歯向かった事はあるけども。こんなにも真つ直ぐな物言いでも知り合いの所に来るなんて事はできなかった。しかも、何気に良い雰囲気になってて妬ましくもある。

監督は監督で、ちようどデイフェンダーが不足してしまつたところなんですーなんて言いながらユニフォームを渡してるし。

……まあ、どうでも良いかあ(白目)

駆も嬉しそうにしてるし、人が足りてなかったのは事実だから、いきなりであつても戦力の増強はFCには良い方向にプラスになってくれるに違いない。

「不知火君、良い動きでしたよ」

「監督」

さつきまで駆に話しかけていた監督がこっちに來ていた。

「君にとつては初めての試合になるんですが、どうでしたか？ 君の動きを見るに、特に

問題無かったように見えました」

「そう、ですね……ただ、こっちの守りは向こうの攻撃に比べて少し厳しいところがあるので……せめてあと一人ぐらい連携に絡んでくれるような人がいれば良いんですけど」

「連携、ですか？」

ふと、FCのメンバーを見渡し、次いでSCのメンバーを見やった。

「悪く言うつもりはないんですけど、こっちのチームで屋台骨になつてるのがマコ先輩で、守備の要になつてるのが堀川先輩。それだけなんです。攻めは火野先輩と駆がいるんで良いんですけど……どうしても中盤から攻めに対しての繋ぎが単調になつてしまつてるんじゃないかなと」

「……………ふむ」

「それに対して、向こうは長身ののつぽ君、中盤じゃ沢村先輩と織田先輩。ディフェンダーにはガタイの良い海王寺先輩が。のつぽ君を生かそうとすると単調になりがちな感じもするけど、それを巧くカバーしてる先輩方がいる……だから、どうせだったらこっちは中盤で連携の取れる人が欲しいんです」

「な、なるほど……」

しばらく監督は顎に手を当て、何かを考えている風だったが――

「わかりました。ですが、こちらのチームが人数不足になっていることもまた確かなわけです」

「そうですね」

「なので後半からは、マコ君と不知火君のポジションを入れ替えましょう」

アイエエエエ!? ナンデ!? カントクナンデ!?

キャプテンのマコ先輩とポジションを入れ替えられるなんて事になるとは思いもしなかつた……

これが、いきなり適当な事を言い出した未経験者に対する洗礼って奴ですか？

「わかりました」

「では、よろしくお願いします」

監督からの期待が重い。

しかしまあ、いきなりこっちに鞍替えしてきた中塚って奴も結構足早そうだし、意外となんとかなるかもしれん。攻撃力不足になつてるのは否めないが、そこは駆に全振りして何とかしてもらおうかな（適当）

——嗚呼……誰か、俺の代わりにサッカーやってくれる人いないかなあ……

## 第07話

『さあ、伝統の代表チーム決定戦、一対一のまま後半戦キックオフです！』

さて、何故か中盤でも本当にど真ん中に配置されてしまった俺氏であるわけだが……俺が思っていた以上にピッチが広く感じてしまう。前半を中央寄りではあるが、サイドで動いてただけあって見え方が全く違う。

後半戦はSCからのキックオフで始まる。

取りあえず俺は何もすることがないので、このままピッチの真ん中で全体を見渡しては皆の位置取りを確認しながらノロノロと歩いている。キックオフと同時にサイドにボールが流れたせいで、俺の出番は無くなってしまったのだ。まあ、俺にしてみればそのまま出番がないまま勝ってくれるのが一番良い結果になるんだが。

しかし、そのサイドには入部したての中塚がいるわけだが――

とても今までSCに所属していた奴とは思えないほどのタックル。ファウルを取られてしまうほど強烈なタックルを相手正面から喰らわせたのだった。

「うっへえ……こいつあ凄え奴が来たもんだ」

「中塚、ナイスファイト！」

マコ先輩が笑って声をかけているが、今まで同じクラブだった奴がいきなり敵になって結構過激なスライディングを仕掛けてきたら、どう思う？

うん、腹が立つよね。

今も相手のディフェンダーに襟元辺りを掴まれてしまっている。本来ならイエローカードを貰ってしまうかもしれないラフな行為だが、それもしょうがない気もする。

その相手はすぐに交代になってしまった。

『SC八雲に代わって、2年生、ゼッケン15の勅使河原てしがわらを入れてきました』

その勅使河原君とやらを見て、別に今のラフプレーが目立ったわけではなさそうだし、さっきの八雲よりも守備的な感じがするが、まだ同点の状態でそんな選手を入れて良いんだろうか？

「おいヤス」

「はい？ どうしました？」

「岩城ちゃんからの伝言だ。あの高瀬たかせって奴を礼生れいせい（紅林先輩）が抑える。そのあと中塚にサイドを抜いてもらう。良いな？」

「りよーかいです」

なるほど。

守備的な勅使河原君が入ったサイドを火野先輩と中塚で抜くのか。しかし、それは攻

めの一手。まずはそこまでの守備を何とかしなければ。

『さあーて、距離はありますが絶妙なコントロールを誇る10番、織田涼真がキッカーです。ゴール前にはツインタワー坂本と高瀬がいるが……狙ってくるのか？』

そう。

確かに高瀬も長身だが、少しそれに劣るもののFCのメンバーと比べると背の高い坂本もいる。その坂本にはFCでも背の高い火野先輩がマーク。

そして随一の長身の高瀬には堀川先輩と錦織先輩にしじおがマークについているがかなり不利な状態。

『いったあー！ ロングキックをゴール前にあげてきたあつー！』

ぐんぐんと距離を延ばしていくボールはそのままゴール前に。

狙い定められたように飛んでいくボールをヘッドで落とそうと意気揚々と飛び上った高瀬だったが、マークに付いていた二人は全く動かない。

それを不審に思った瞬間、後ろからグローブを付けた手がボールをガツチリと掴んだ。

そのボールはすぐにマコ先輩へと渡った。

なるほどなー……などと思いつつ、出番が無いままピッチをジョギングし続ける。真ん中にボールが来ることなく、火野先輩からパスを受けた中塚がピッチの外側をどんど

んとボールが上がっていく。

裏切ったばかりの奴が活躍し始め躍りになって詰め始めた相手ディフェンスを見て、すぐにクロスを上げた中塚だったが、フォワードの火野先輩の所に落ちる事は無く、適当な場所に流れてしまう。

「よっよっよっ」

そこに走り込む俺氏。

スペースは十分に空いている。

距離は大体25メートルくらいだろうか。

俺とゴールネットの間にはキーパーとディフェンダーの二人だけ。

おうふ……これは俺からいかないといけない感じか？

「おおっらあっ!!」

右足を振り抜いてのシュート。

一応、狙いをつけて蹴ったボールは相手ディフェンダーの足先に当たり、右側のゴールポストに当たって跳ね返ってしまった。

——うがあああああっ!!?

表情は冷静なまま、心中で盛大な叫び声を上げてしまった。

キーパーの手が届かないようにと思いき蹴ったボールは、逆に狙いを付けすぎていたよ

うだった。

気合を籠めて大声を出したというのに、これではただ恥ずかしいだけじゃないか！

結構な勢いで蹴ったせいかな、ボールは大きく跳ね返り、逆サイドの空いたスペースにポンポンと独りずに転がっていく。

それをクリアしようと相手ディフェンダーが詰め寄っていくが――

『逢沢が走り込んでいるー!!』

――今まで存在を消していたと言っても過言じゃない駆が、相手ディフェンダーよりも早くにボールに詰めていた。

目で見て追っついてはこの速さはあり得ない。まるで、最初からボールの行方が分かっていたかのように。

この試合が始まってから何回かあったが、こいつには未来予知の能力でもあるんじゃないかと疑問に思ってしまうほどの動きを見せていた。

俺みたいに転生したわけでも、特典を頂いたわけでもないのに。

……いや、実の兄を事故で亡くしているんだ。

そんな特典云々とか言うのは駆に申し訳ないし、罪悪感を感じてしまう。

ボールをトラップすることもなく、ダイレクトで右足を振り抜いた。一直線に虚空を駆けるボールは、キーパーが必死に伸ばした手が届くこともなくゴールネットを揺らし



たのだった。

『ゴオオオール!!』

「……マジか……」

確かに俺は特典を使い、それなりにチートな身体能力、運動神経をしていると自負している。それは今でもこのピッチ上で、少しセーブしてるが、それなりに使っているつもりだった。

それでも一つ。俯瞰視点を使い、明確なパスルートを探し出すことは出来るんだが……シユートコースを明確に描くことができないのだ。

大体のコースは分かる。

どこにキーパーがいて、ディフェンダーがいて。それを考えて。しかし、シユートコースだけがどうしても明確にならない。

それが、駆にはあるような気がする。

俺には持っていない、何か、特別なものを――

「おもしれえ……おもしれえぜ！ 駆！」

転生。特典。

それが俺の人生を占めていたような気がしていたが、駆の動きはそれに匹敵するような才能の気がする。純粋な、一人のプレイヤーとしての能力。

それが、とてつもなく輝いて見えたのだった。

## 第08話

『2対1いつ！ FC逢沢のゴールでSCを1点差に突き放したあつ！』

駆のゴールによってFCは一点のリードを得ることが出来た。

しかし……あのボールへの嗅覚、とても言えば良いんだろうか？

どこへ飛ぶかなんて分かるはずのないボールの行方に、一番近くの相手ディフェンダーではなく、それよりも先に反応していたのが駆だった。とても普通の反応速度ではない。まるで未来予知のレベル。

後半が始まって約10分。

相手のキックオフからゲームが開始された。

『ああつと、SCここからゲームが交代だ。4番不動に代わって12番吉岡丈二3年生！』

が、始まってすぐにSCは二人目の交代枠を使ってきた。

さつき駆のマークに付いていた先輩だ。恐らく、一瞬駆のマークを外してしまったがために失点してしまった、という一つのミスを許せなかったのだろう。いやあ、厳しい監督ですなあ。

さて、始まってすぐ沢村先輩のマークに付いたマコ先輩だったが、ボールはそのまま

パスされてしまう。そこでボールを奪ったのが的場だった。ドリブルしようとしていた所の隙を突いた形だ。

ボールだけを狙った綺麗なスライディングだ。

そのままドリブル。スピードに乗った走りをしていて、ボールを奪った相手を置き去りにしてしまった。そして詰め寄ってきた相手をシザーズで抜き去った。

……ちなみに、見取り稽古は今も平常運行している。うまい奴からフェイントを覚えて、それ以外の奴の同じよう<sup>で</sup>違うフェイントを記憶する。

癖も覚えられそうだから、その人によつて違う人の癖を使ったり……そうやって相手の事を攪乱するのって、楽しいじゃない？

的場からマコ先輩、中塚へと渡ったボールはそのままクロスとなつて上げられた。適当に上げられたそれは、ファーサイドの駆の元へと丁度よく落ちていき、ダイレクトで右足！

しかし、これはキーパーが右腕で弾き、点々と転がる<sup>ところ</sup>を火野先輩が詰めたのだが、そこで織田先輩が先にボールを奪ってしまう。

「これは、さすがに戻らないといけないか」

まだ誰も動いてない中、俺は一気に自陣へと走り出す。

「戻れ！ ボールが上がってくるぞー！」

「お、おうー！」

俺の掛け声に戻り始めるディフェンダー陣。

そして、動き出した瞬間に蹴りあげられたボールは、そのままのつぼ君へと。そのまま相手フォワードにヘッドでパス。長身が良い具合に生きており、ディフェンダーがいるのも構わずパスを出せているのを見ると、非常に羨ましくなるが……高すぎるつてのも難だな（嫉妬心）

一応、俺も身長高いし？ 180はあるし？（対抗心）

相手フォワードは中塚が上がりすぎていて空いていたスペース、サイドをどんどん上がっていく。ファール覚悟で中塚がスライディングを仕掛けるが、その前にボールを上げられてしまった。

その先で待っていたのは、いつの間にかゴール前まで来ていたのつぼ君。紅林先輩が後ろから体を抑えに行くが……なんとその長身を生かしたヘッドをせず、足でバックパス。

そこに走り込んでいた織田先輩がそのままダイレクトシュート。

一瞬遅れて駆が防ごうとスライディングを仕掛けていたが、残念ながらシュートを許してしまい、一点のリードは振り出しに戻されてしまった。

『ゴオオオル！ 後半20分で、SC織田が決めたあー！』

「くっそ……もう少し早かったら!」

「ナイスファイトだったぞ、逢沢!」

いつの間にか戻っていた駆だが、本当にどこにボールが来るのかわかっているように動いている……さすがに感覚までは習得することはできないようで、各個人個人の動きを見てはどこに行くかを予想する事しかできない俺よりも格段に速い動き出した。

これは、相手にいなくてよかったと思ってしまう。ホント……SCとFCの二つが一つのチームになったら更に良いチームになるんだろうけどなあ。

「6番、桜井に代わって10番荒木竜!」

「……え?」

荒木って……確か、太ってた人だったって記憶がある、んだが。

目の前にいるのは、痩せて、イケメンですって面あしてやがる男。

たぶん、前に俺が見たのは別の人で、同姓同名の人に違いはないか思えないような人だった。それぐらい全く輪郭から何まで違う存在になっている。一体何があつたら、いや……どんな運動をしたらここまで痩せることができるのだろうか? 確か、前回見かけたときからまだ一か月も経ってなかったと思うんだけど。

「お前が未経験者の不知火か?」

「はあ……初めまして?」

「いや、マジで初心者かって思った動きだったぜ！　これからよろしく頼むぜ？」

「はい、こちらこそ」

「なんかそっけねえなあ……」

初めて見かけたとき、結構ふくよかな人だなと思ったが、それでも結構動けそうな人だとは思っていた。いや、動きというより、ボール捌きと言ったほうが正しいか。さすがに脂肪で動けない感じがするし。

しかし、思ってもなかった味方の登場に高揚を隠せていない様子の駆を見かけ、苦笑してしまう。確かに俺も連携に絡めるような人を求めてはいたが、そこまであからさまに喜んでいる様子を見ると、尻尾を振っている子犬のような幻覚を重ねてしまう。

キックオフ。

駆がボールを蹴り出し、マコ先輩がすぐに荒木先輩にパスをした。

そこにすぐマークをしてきたのは沢村先輩だった。何か、二人の間で会話を交わしたようだったが、すぐにフェイントを使いつつシュートパスを交えて難なく躲していった。

その後も一人躲し、二人のマークがついたところでヒールでバックパス。マコ先輩にボールを戻したのだった。

いやあ……久しぶりに良いもんを見た感じ。（少し前に奈々のフェイントを見ておい

てこの発言である。）

どれぐらいの間サッカーをしていたのか分からないし、練習をしていないのかもわからないが、明らかに奈々よりも周囲を見渡せているし、足業……ボールタッチが違う。

なんでこんなにサッカーが上手いのに一時期でも辞めてしまったのだろうかと思っ  
てしまおうが、それは個人の都合もあるだろう。しかし、太っていたときと性格を考  
えるに、SCみたいに厳格なチームでは個の力を発揮できないだろうってことはよくわ  
かる。この人の性格上無理だったんだろう。

それはともかく、男子でここまで上手いって人は初めてだし、ここぞとばかりにスキ  
ルを見取り稽古していく。荒木先輩も先輩で、相手の裏をかこうとしていることもあつ  
て、見せていない技をどんどん見せては相手を躲していくから面白い。面白いほどに俺  
のスキルも上がっていく。……俺、サッカーでプロを目指すんだ（白目）

荒木先輩が手を挙げた。

親指と小指で形作られたそれは、確かに前にグラウンドで練習したときに見た連携の  
それだった。それを見た駆は、少し動揺しつつも火野先輩と話していたようだった。

これは、俺の出番は無いだろうな……

マコ先輩が持ってたボールはいつの間にか荒木先輩にわたっており、丁度審判が荒木  
先輩の後ろあたりに来る形になった。最前線にいた駆が、荒木先輩がボールを蹴るとい



うタイミングで走り出し、マークに付いている織田先輩の意識を持って行った。

相手チームの中でも観察力、察する能力に秀でていることもあり、あの人の意識を引けたのは大きい。その隙に、荒木先輩がボールを蹴った。スピンの掛けられたそれは、駆が何するでもなく地面に落ちた瞬間に軌道が変わり、ゴールネットへと突き刺さった。

相手キーパーは、ちょうど駆が対角線上にあつてボールが見えなかったのだろう。軌道が変わったことも相まって、完全にオフサイドでノーゴールだと思つて安心しきっている。

『ご、ゴール！ ゴールです！ 一体何が起きたのかあ！ これはオフサイドではなかったのかあ!?!』

相手監督の怒鳴り声、観客のざわめき。色などよめきが起きているが、そんな事よりも、目の前で起こった一連の動作……これが荒木竜一。

この人がいれば……このチームは、FCはSCに勝てる。そんな期待を抱いたのだった。

## 第09話

しかし……荒木先輩が入って一気にチームの雰囲気が変わったなあ。

「雪蔵！ マコのフォローだ！」

「薫、右スペースにこだわらなくても良い、もっとスペース埋める動きをするんだ！」  
「公太、お前はパス出してからの戻りが遅すぎる！」

今まで個人個人で動いていた各人に指示を出し始め、俯瞰視点から見えてわかるほどあったスペースが小さくなり、相手にとってはボールの出どころが無くなったように思えるだろう。

それにして、的場とか中塚に的確なアドバイスをしているのに、どうして俺には何も言ってくれないんですかねえ……もしかして、最初にピッチに入ってきたときに声をかけてきたのが最初で最後なんですかね？ もしそうだとしたら悲しいんだが。割とマジで。

中央付近で動いている俺とは対照的に、どんどんボールを持っている相手に集中していく味方。それに焦ってパスを出していくが、次第に荒くなっていった所を狙い、マコ先輩がパスカット。

いきなりのチャンスに、味方も相手も走り出した。

マコ先輩からの場へ、そして的場から中塚へとボールは渡り、そのまま左サイドを上がっていくのだが、何故か駆がいつものポジションから離れた場所にいてパスの要求をしていた。いつもの駆なら、もつと前で、それこそダイレクトでもゴールを狙えるような位置でボールを受けようとするはずだが……？

相手ディフェンダーに詰め寄せられた中塚は、しようがないとばかりに駆へとパス。それを足元に納めることなく前へとトラップし、そのまま走り出す。確か、ラン・ウイズ・ザ・ボールっていうドリブル技だったはず。

そのままドリブルでもするんだろうか？　と思ったが、チラツと確認した荒木先輩の表情を見て、おそらく何か意図があつての事だろうと判断する。

さて……何をするか教えてくれ。

後ろから味方が近寄り、キーパー合わせ3人の相手は駆に詰め寄っていく。

いやいやいや……そろそろヤバイんじゃないか？　と思い始めたところで短い気合が一声。ゴールまでは距離はあるが、振りぬかれた右足から放たれたミドルシュートは真つ直ぐに宙を飛んでいき、あわやゴールかと思つたが相手キーパーが寸前で弾き出してしまった。

「すっげ……俺もシュート練習してみようかな」

今更ながらに、俺がシュートをしても入らない理由はそもそも練習をしてないからだろ。駆はトラウマがあつてサッカーを辞めていた時期があつたらしいが、中学の頃にシュート練習に没頭して今のあれを身に着けたらしいし……

今日もシュートを蹴ってみたが、経験が足りてないのかボールを蹴るインパクトの瞬間に少し力を抜いてしまっているからなあ。それが癖にならないうちになんとか形にしなきゃ（使命感）

その後のコーナーキックからのこぼれ球も駆はミドルシュートを蹴り出していた。少し甘い精度だったが、その威力は右足でのシュート以上で、ちょうどデیفエンスしていた沢村先輩の腹に当たって大きく弾け飛び、当の沢村先輩は体勢を崩して尻もちをついてしまっていた。

それから少しして、俺からのパスを受け取った荒木先輩はそのままシュート。今まで駆が蹴っていたミドルよりもさらに距離のあるロングシュートを、ゴールから少し離れて守備をしていたキーパーの位置を確認してから蹴りこんでいた。惜しくもバーの少し上を掠めていってしまったようだったが……もしや、こうやって相手デیفエンダーを前におびき出してるのか？

実際、今までよりも少し前のポジションで守備に付き始めた相手を見て、今までの早急な攻めの意味が何となく理解できたような気がした。

と、ここまでの説明だと俺が中央でボーツとしているだけのように見えるが、一応中央付近で動こうとする相手の妨害をして荒木先輩の動きを支援しようとはしているよ？　なんてって、どれだけ力を籠められようが一对一だとビクともしない肉体ですから。

『ボールは沢村を介して右サイドの勅使河原へ！』

相手がボール回しをしているところに中塚が猛然とダツシュ。

ちようどパスの間に入り込むような形になりパスをカットした中塚は、中央にいた俺へとすぐにボールを渡してきた。

「ヤスー！」

「よし、行け駆ー！」

パスを受けた駆はそのままシュートの体勢を取ろうとし、それを未然に防ごうと相手が詰め寄るが、ここで駆が後ろにいた荒木先輩へとバックパス。その荒木先輩もまた口ングシュートを匂わせる様な動きを見せるが、それに釣られて詰め寄った相手二人をフェイントで躲した。

その瞬間、俯瞰での視点で駆が動き出したのを確認し、また、相手ディフェンスとキーパーの間に大きなスペースが空いているのもまた理解することができた。つまり、駆はそこに走りこもうとしているのだ。

そして、オフサイドギリギリと言ったところで、相手ディフェンスの間を縫うように蹴り出された一筋のパス。

『抜けた抜けたあつ！ 会心のキラーパスがピッチを切り裂く！』

抜けだした駆のすぐ傍には織田先輩もいたが、得意のラン・ウイズ・ザ・ボールで一気に置き去りにしてキーパーとの一対一という状況を創り出してしまった。さつきから何度も繰り返していたシュートは、この時のためだったんだろう。

「ああああー！」

勢いよく振りぬかれた右足によってボールは宙を舞い、真っ直ぐにゴールネットへと突き刺さったのだった。

『ゴオオオオオオル!! FC、後半も残り10分というところでなんとこれで4対2！』

そして、このゴールを決めた1年生の逢沢駆はなんとハットトリックを達成しました!! そして、この絵にかいたような美しいゴールを演出したのはこの人、10番、荒木竜一だあ!!』

何ということでしょう。

いきなり試合で3点も決めましたよこの子ったら。

皆に囲まれて祝福されている駆と荒木先輩のもとへ駆け寄り、俺も輪の中に紛れ込む。どさくさ紛れでゴスゴスと脇腹を突きつつも祝福する。まさか、出場人数もギリギリ

りのチームにここまで追い込まれることになるとは夢にも思っただろう相手チームの監督も、流石に呆然とした表情をしていた。

しかし、そんな監督とは対照的に織田先輩や沢村先輩などは闘志に燃えた目でこちらを見ていた。いや、もしかしたら駆か、もしくは荒木先輩の事を見ているのかもしれない。このままで終わってやるか！　なんて感じさせるくらいのやる気をその目に灯していた。

——それから俺たちFCとSCは、最後の最後まで気力、体力ともに底を尽きるまで戦い抜いた。残り10分でのゴールを決めてからのSCの動きがこれまでと変わり、全員が守備に、そして攻撃へと参加するサツカーを繰り返り広げ始めた。

一度、コーナーキックから沢村先輩へのパスを止めたものの、意地と言わんばかりの根気でボールを奪取した織田先輩からのパスを受けた沢村先輩がロスタイムにて1点を決めたものの、FCのキックオフとなったところでホイッスルが鳴り、試合は終わった。

的場のシユート、駆のオーバーヘッド、織田先輩のヒールパスにのっぼ君の守備……俺も俺で皆の動きを見ながら様々な動きを学びながら守備やらパスで貢献していた。

「やった、勝った！　勝ったぞ！」

「ああ、俺たち……ついにSCの奴らに一泡吹かせてやったんだ!!」

先輩達が互いに喜びを分かち合っている中、一人倒れている選手を見つけてしまった。

この試合の立役者である荒木先輩だ。それを見て慌てて駆け寄っていく織田先輩であったが、一目見た瞬間にそれは怪我などによるものでないと理解した俺は、少し笑ってしまった。

「荒木！ ど、どうした！ 大丈夫か!？」

「腹……」

「何？ 腹がどうしたって!？」

「腹、減った……」

「……………いつ」

一度は肩を持った織田先輩だったが、流石に今の一言に呆れ、ゴミを落とすように荒木先輩を地面に落としたのだった。なんだか締まらない最後になってしまったが、俺の初めての試合は、4対3でシュートの乱打戦になったものの、最終的には勝利をもぎ取ることができたのだった。



## 登場人物紹介

○不知火康寛しらぬいやすひろ

・身長 187cm

・体重 78kg

・握力 右 82kg

左 79kg

・視力 両目ともに2.0

・血液型 O Rh-

・体脂肪率 7%

本作の主人公。江ノ島高校1年生。

黒目黒髪。容貌は鎌倉学館の鷹匠瑛に似ている。

転生者であることを自覚しており、その際『健全な肉体』、『それなりの生活』を望んだ。結果、転生を自覚し始めるのと自身の身体能力の高さに難儀し始めるのはほぼほぼ同時期であった。下手に運動部に所属しようものなら相手に大怪我を負わせるかもしれないという考えの元、中学生生活を終えるまで帰宅部であった。自身の身体能力に慣れ

たのが高校に入学する直前ぐらいである。

ちなみに、体脂肪率は一桁台をキープしているが、本人は特にこれと言った運動らしい運動はしていない。

高校に入ってからサッカーを始める。中学で同じクラスだった逢沢駆がなぜか同じ高校に。そこでサッカー部に誘われ入部する事に決める。特にこれといった思い入れがあるわけではないが、二度目の高校生活ぐらいは部活動をしてみたいという思いから運動部を選択した。

ちなみに、駆の兄である傑とは何度か会い、会話を交わした程度の関係。

精神年齢が高いせいか、転生後、彼女はいない。

頼れるお兄さんといった性格をしていたこともあり、女性から好印象ではあったものの、主人公が引け目を感じていたこともあり、彼氏彼女の関係に至ることがなかった。

☆ 江ノ高メンバー ☆

○逢沢駆あいざわかける

・身長 169 cm

・誕生日 11月10日

・血液型 O型

原作における主人公。

幼いころから兄の傑とともにサッカーを続けていたが、日比野に大怪我を負わせて以来、トラウマからサッカーを避けていた。が、中学時代に遭った事故が原因で兄を亡くし、同時に駆も心臓に大怪我を負うものの、兄の心臓を移植することで一命を取り止めた。

それを知った駆は、兄の日記から兄の想いを知り、サッカーを再開するのだった。

——と、悲しい経験を経た駆だが、本作主人公の不知火に出会ったのは中学でのことだった。身長が高く目付きも鋭いため、最初こそは怖いなあと思っていたものの、気の良いお兄さんのな存在としてクラスに馴染んでいた康寛を見て、すぐに仲良くなったのだった。

ポジションはFW。

相手DF陣の穴を感覚的に見つけ、点数に絡む動きをするため、相手DFからは予測もつかない動きをすることもある。夜な夜な幼馴染の美島奈々とドリブルやフェイントの訓練をしているが、そこに康寛も加わっているため、原作よりも鋭いドリブル、フェイントができるようになっていく。

目標は、日本代表として選出され、奈々とともに『サムライブルー』のユニフォームを着て世界のピッチに立つことである。

○美島奈々みしまなな

・身長 165cm

・誕生日 8月21日

・血液型 A型

原作駆のヒロイン（簡潔）

康寛とは中学から一緒であり、その身体能力には目を見張っていた。

が、中学では帰宅だった康寛と接点は特になく、単に同じクラスメートだったというだけだが……どう見ても体を持って余していそうな康寛をサッカーに誘い続けた結果、予想以上のチートに呆れている。

普段、中塚や駆のような男子とは違い、冷静沈着ではあるものの周囲に気を配っている風を見せる康寛には好意を抱いている。が、あくまで友人としての感情である。

幼いころから男子に混じってサッカーをしていただけあって、体の動かし方が巧く、体格の大きい選手を相手にしても軽く躡ることが出来る。ポジションはトップ下。

15歳で女子日本代表に選出されるなど、その才能は本物である。

○荒木竜一あらかきりゅういち

康寛の一つ上。高校2年生。

ノリが良く奔放な性格。

中学時代は、無名ながらも実力ある選手として一目置かれていた。

特に、逢沢傑とのコンビで頭角を現したが、ある事を機にサッカーから離れてしまう。不摂生な生活を続けた結果メタバに。恐らく、体質的に太りやすいのだろうか？

駆の無垢なまでのサッカーに対する熱意と、康寛の成長を見て心を動かされ、ダイエツトの未復活する。唯一の弱点はスタミナの低さである。

しかし、MFとして活躍する荒木は『(2列目の)魔術師』との異名を持つており、多くのフェイント、トリックプレー、ドリブルで相手を翻弄する。人を食ったようなダイレクトプレーこそ彼の真骨頂である。

康寛が自身のテクニックをどんどん吸収していく様を見てさすがに焦りを感じている荒木は、原作よりもスタミナが豊富になっている。

○兵藤誠ひょうとう まこと

康寛の一つ上。高校2年生。

江ノ島高校サッカー部の副キャプテンを同学年の織田涼真と共に務める。

「マコ」の愛称でチームメイトに好かれている人物で、持ち前の明るさとノリの良さで

チームをまとめるムードメーカー。荒木とは漫才コンビ「イエローカード」を組んでおり、周囲を楽しませている。

初心者であつた康寛にも優しく接し、サッカーの基礎を教えていたものの、その吸収力と身体能力を自分の目で見て「すげえ……」とリアルで呟いてしまった人。

ポジションはMF。攻撃の要である荒木と、守備の要である織田。両MFの中間で攻守に貢献する。足元のテクニクと、積極的に攻撃に絡んでいくスタイルで相手ゴールを脅かす。

●その他江ノ高メンバー（順不同）

F W 火野淳平、高瀬道朗

くどうけんや 工藤健哉、的場薫

M F 織田涼真、中塚公太

おだりようま さわむちゆうじ 沢村優司、桜井学

さかもとしゆうじ 坂本修司、八雲高次

D F 堀川明人、海王寺豪

はまゆきぞう 浜雪蔵

G K 李秋俊、紅林礼生

りあきとし くればやしれお

藤堂慎太郎とうどうしんたろう

以上のメンバについては順次人物紹介の中で情報の追加、更新等していく可能性もあります。また、他校のチームに出てきた選手の中でも特に情報の必要そうな人物についてもこれから更新していこうかなど。

現段階における人物紹介については以上となります。

## 第二章【新生】

## 第10話

SCとの代表戦の次の日、高校公認のクラブとして公式の試合に出ることになるのかあと考えていたところに、岩城監督から重大な知らせを聞かされた。

「今日をもって、FCは解散します」

「な……」

「な、なんでだよイワちゃん！」

マコ先輩と火野先輩が岩城監督に詰め寄っている。

それ以外の先輩方も納得がいかない様子で、あの二人が突撃していなかったら別の誰かが同じことをしていただろうぐらい。

かく言う俺も俺で納得はしていない。

付け焼刃の技術で何とか試合を終わらせた俺ではあるが、せっかく試合に勝ったっていうのに、まさかそのクラブが解散するとは夢にも思っただけだったし。まさか、FCの人数が少なすぎるからってのが原因でSCが優先されているのだろうか？ それは無いと思いたい……



「み、皆さん、落ち着いて聞いてください。確かに、FCが解散するというのは大きなことですが、話はまだあるんです」

「で、その話つてのはなんなんスか？」

マコ先輩が皆を代表して問いかける。

「実は、我々FCとSC、二つのクラブが一つに纏まることになったんです！」

「え……ええっ!? マジっすか!？」

驚いた。

まさかと言った表情で皆が顔を見合っている。

確かに、少しは思ったことだ。同じ高校にいるのに何故二つもサッカークラブがあるのだろうか。これは生徒の問題ではなく、完全にこのクラブを立ち上げた監督たちに問題があったのだろう。それが次第に部員たちの間での対立にまで発展してしまっていたのだろう。

しかし、これでFCの欠点だった人数不足は一気に解消されることになるとともに、戦力の大幅強化にも繋がったわけだ。

「それでは、これから新生『江ノ島高校サッカー部』の顔合わせに行きますよ」

「おうー」

SCの方はすでにグラウンドに集まっているらしく、向こうはそこで近藤監督から話

を聞いているらしい。負けたチームが最初に解散するという話を聞かされるというのは精神的に非常に悔しい思いを抱くことになるのだろうが、そこは敗者として一時の屈辱を味わっておくんだとドS心満載の笑みで断罪してやろう。

「本日より私、岩城鉄平が江ノ島高校サッカー部監督を務めさせていただきますことになりました」

さて、元SCと元FCメンバーの顔合わせもほどほどに、新生江ノ高サッカー部の新監督に就任した岩城監督からのお言葉。マコ先輩たちは嬉しそうな表情をしているが、織田先輩や沢村先輩と言った人たちは不安そうな思いを隠せずにはいた。まあ、今まで世話をしてくれた監督がいきなりなくなるのは心情的に悲しいものがあるだろうが。

「なお、近藤先生には今後もサッカー部顧問として私ともども皆さんの指導に当たっていただけるようお願いしました」

ホッとしたような表情と、数人分の嘆息。

試合に負けたとは言えいきなりチームが解散したことで監督が変わることは、高校生諸君にとってはそれなりに負担があったらしい。それは岩城監督も理解していたらしく、その不満を解消するために二人監督での体制でやっていくのだろう。

まあ……よくよく考えてみればこれで部員の数は60人を超えたわけだから、一人で

全員をまとめて見るよりも数人で指導していくほうがより良いチーム作りをすることができるだろうし。

「キャプテンは3年生の沢村優司君。副キャプテンは2年生の織田涼真君と兵藤誠君に務めていただきます」

「うす」

元々両チームのキャプテンだった先輩方がその立場に就任。

これはそれぞれのチームに所属していた選手の心情をより把握しているからと言うのも大きな要因だろう。俺としても良くしてもらってるマコ先輩が副キャプテンに選ばれて少なからずホッとしてるし。

そして、今までほぼスタメンとして試合に出ていたFCのメンバーは、人数が増えたことよってスタメンとして選ばれるかどうか微妙なことになってしまった。それも当然の事だからしょうがないのだが、元SCにはM Fとして活躍していた織田先輩と沢村先輩、D Fでは体格の良い海王寺先輩がいるし、随一の長身であるF Wの高瀬君もいる。

戦力増強と言えば聞こえは良いが、スタメンを奪い合うことになることを考えれば少々厳しいものになってくるだろう。

「……えー、では最後にもう一言だけ」

スタメンを一から見直していくと言ったところで沸き立っていた元SCのメンバーは、岩城監督の言葉で静かになる。誰かの喉が鳴る音が聞こえてきたが、岩城監督がそんな堅苦しいことをずっと言い続けられるわけがない。

「サッカーを、楽しみましょう！」

力強く言われた言葉。

監督の輝いた目に、元FCのメンバーはいつも通りの笑顔を、元SCのメンバーは戸惑っているのか、少しぎわめきが起きている。まあ、話を聞いた通りだと近藤先生の指導はかなり厳しいらしいから、今までとのギャップに驚いているに違いない。

「不知火君、少し良いですか？」

「え？ あ、はい……なんですか？」

新生江ノ高サッカー部の誕生式も終わり、メンバー同士の自己紹介も終わって本日は解散かと思いきや、岩城監督が話かけてきた。

何だろう？

まさか、今になって人数が増えたから初心者への俺は必要だとも言いに来たのか。それともっとサッカーの知識を増やせとルールブックでも持ってきたのか。不安だ。

「実は、不知火君には少しの間、このDVDを見ていただきたいんです」

「DVDですか？」

そう言う監督の手には一本のDVDが握られていた。

パッケージに商品名等は記載されておらず、どんな内容のDVDなのかは見た目で判断することはできないのだが、監督が俺に渡してくるということは、恐らくサッカー関係のDVDであろうことは予測できる。

「とても初心者のもとは思えないという話は前にしたことを覚えていますか？」

「はい、砂浜でサッカーをしたときでしたっけ？」

「そうです。今となっては正式なサッカー部の一員なので未経験者云々の話はしませんが、君の動きを見ていて、とても技術の吸収が早いと実感しまして、是非これを君に見てもらいたいと思ったわけです」

「はあ………てことは、やっぱりサッカー関連ですよね？」

「そうです！ 内容は見ていただければわかると思いますが、世界で活躍している選手の中でも同年代の選手……レオナルド・シルバ選手が活躍した試合が納められています。いきなりプロの選手を見ると言われても戸惑うだろうと思ひまして、親近感がわく同年代の選手を選んでみました」

「なるほど」

ふむん？

同年代の選手で、世界で活躍している……ホンマもんの才能を持った凄い奴のDVDでっことか。そういう選手はいつからサッカーをしているんだろって思うんだが、同年代……3歳とか？ 小さいころからボールに触れて成長してきましたって感じがブンブンしやがるぜえ！

「わかりました……じゃあ、今日家に帰ってから早速見てみたいと思います」

「はい！ そのDVDはしばらくの間お貸ししますので、見終わったら私の方に持ってきてください」

「了解です」

目の前で監督が凄い嬉しそうな表情をしていることもあるし、これは期待を裏切るわけにはいかないだろう。このDVDからどんな技術を学ぶことができるかわからないが……いや、一度見ただけじゃ実際に俺のものにすることはできないだろうけど、これはちよいと頑張ってみますかな！

## 第11話

岩城監督からDVDを渡されてから二日が経った。

ゴールデンウィーク

G Wに入り、練習が厳しいものになっていくと思われたものの、代表をかけたの試合をしたということで、昨日は一日部活動は休みとなったのだ。

その休みを利用してDVDでも見ようかななんて軽い気持ちで再生していたのだが――

「ねっむ……」

ついつい夜更かしをしてしまった。

理由は単純。単に俺が夜中までDVDを見ていたからに過ぎないのだが、その内容が思っていた以上のもので驚いたのと、レオナルド・シルバに対して面白いという感情を抱いてしまったのだ。

とても同年代の選手とは思えないほどに完成されたテクニック、パワーそしてスピード。そのどれもが今の江ノ島高校サッカー部に所属している誰よりも優れていると言っても過言じゃない。加えて、トップ下での司令塔としての働きも十全にこなしている姿を見ると、つい興奮してしまって寝れなくなってしまったんだ……。

こう、憧れの野球選手に会った小学生が昂ぶり過ぎて夜眠れなくなってしまったような感じ。もっとわかりやすく言えば、遠足前の小学生みたいな。良く漫画とかでも使われるフレーズだね。

「ヤス、なんか眠そうだね」

「うむ……昨日、夜更かししちゃってな」

「ええ……これから練習だつてのに、大丈夫？」

「まあ、多分大丈夫だろ」

本当であれば大丈夫じゃないだろう。

こんな状態で激しい運動なんてしたら、怪我や故障の原因に繋がるかもしれない。

でもまあ、睡眠不足を除いて俺が体調不良に陥るつてのはまずないだろうが。子供のころから風邪すらかかったことがない。それはそれで今後年を取ってから水疱瘡とかに掛かるかもしれないというフラグだったりするの？

「ふ……はあ……」

ダツシユ後に、思わず欠伸がでそうになったところでなんか嘔み碎いて近藤先生の方を一瞥する。他の部員に指導している様子を確認して一息吐いた。教師の中でも厳しいと噂されてるだけあって、少しでもおかしな事をするとすぐに注意をされてしまう。



……さすがに欠伸で怒られたくないからな。

「余裕そうだね」

「んあ？ のつぽ君じゃねえの」

「のつ……そ、そういう君だつて結構背は高いじゃないか」

そうやって高瀬のつぽはこつちを見てくるが、正直2〜3cmでも高瀬の方が身長が高いくとに変わらない。

「俺は良いんだよ」

「なんだそれ……康寛君」

「ん？」

「僕は絶対にレギュラーになる。君は僕とはポジションが被つてないから大丈夫だと思うけど……絶対に、僕は」

高瀬はそのまま駆のところに行つてしまった。

一体なんだつたんだろうか？ 思春期にありがちの自分の力を過信してるみたいな感じなのかな？ だとしたら結構可哀想な高校一年生つて烙印を押さざるを得ない。残念だが。

まあ、と言うのは冗談で、妙に決意染みた言葉とともに宣戦布告をしてきた高瀬であるが、恐らく同じことを駆にも言いに行つたのだろう。駆と高瀬は同じFWだから、レ

ギユラー発表されるときどうしてもポジションの奪い合いになる。

そうなるとFWだけじゃなく、どういうフォーメーションで行くかによってポジションも変わってくるわけだが……そうなると俺もレギュラーになれるか微妙な感じになってくるわけである。果たして俺はレギュラーになれるだろうか？

「不知火君」

「監督……」

「あのDVDは見てくれましたか？」

「はい。お陰様で寝不足になってしまいましたが」

「はは……そうですか」

他愛ない話をする。

こういう事でも監督とコミュニケーションを取るのには重要な事だろう。と言うが、監督が話かけてきてくれたのは完全に用があったからなんだが。

「どうでしたか？ 君と年代のあの選手は」

「そうですね……とても同年代とは思えないほど完成された選手でした。テクニク、パワー、スピード。どれも凄まじいの一言ですね」

「それで、どうですか？」

と言うのは、俺があのDVDから何か覚えられることはあったかと聞いているんだろ

う。

「学ぶことは多かったですね……あの選手のポジションやスペースを埋める動きとか、足元のテクニクとか。とても一回観ただけじゃ自分のものにはまだできてないと思いますけど、まあ、足業に関してはこれから練習していくしかないと思ってます」

「ふむ……なるほど。では、君はこれから技術向上も含め、何の練習をするのが一番良いと思いますか？」

「えつと……とりあえずシュート練習ですかね？」

「え？」

え？　じゃないよ。

前の試合、初めての試合で何本かシュート蹴ってみたけど一本も決まらず。枠内に行くことはあっても、どうしても威力を抑え気味にしてしまうせいかキーパーに止められてしまう。とは言っても、キーパーは少し後ずさりしてたのを見て、威力を抑えないといけないっていうのは自覚したけど。

ボールの蹴り方も調べてみようかな。

「二応、未経験者だったもので、どういう風にボールを蹴れば良いのかとか、習いたいことは多いんですけど……」

「あ、はは、そうでしたね！　ではそういう事にしましょうか！」

そこからは他の部員たちとは別のメニューをすることになった。

高校のサッカー部で基礎の基礎からメニューをこなしているのは俺以外にはいず、全員普通にサッカーを少なからず知っているようだった。いや、俺みたいに基礎から教えてくれているのは少ないのかもしれないが。

「では、まずボールに慣れるところから始めてみましょう」

「ういつす」

岩城監督のもと、基礎練習が始まった。

まずは姿勢を正した状態でボールを蹴ること。

そしてボールに体重を乗せることが無いようにして、全身を動かしつつリズムカルにステップを踏みつつボールタッチをする。

するとあら不思議。いつの間にかボールがまるで自分の体の一部のように懐いているではないですか！

なんて言いながら軽くドリブルをして見せる岩城監督を見つつ、同じように動く。

DVDや動画のように、画面越しで見ると距離感や感覚、ボールの動き、細かい息遣いや体全体の筋肉の動きだとか、色々なものを感じる事ができないから自分のものにする事ができないのだ。

……考えれば、見取り稽古と言ってもちよつとした制限があるんだろうか？ もつと  
凄いい人だったら動画でも何でもコピーして自分の物にできるんだろうか。

まあいいか（適当）

見取り稽古でできるだけ良い才能だと思ふし。

それしても、なんか皆ボールを足で撫でるように転がしてると思ったらドリブルの一種にあつたのか……しかも基礎の応用でできるようになるなんて。

「そうです、良い感じですよ！ 次にボールの蹴り方ですが、インサイドキックというのがあります」

足の内側（インサイド）の部分で蹴るキックで、ボールに当たる足の面積が大きい分コントロールがしやすいキックのようだ。ショートパスもこの蹴り方で蹴れば、思った方向にボールを蹴り出すことができるそうだが、今まで何も考えずに蹴ってた俺はどうなるんだろうか？

「これが基本の形です」

説明しながら岩城監督は俺にパスを出してくる。

そつくりそのまま同じ動きでボールを返し、返されてくるボール。少しづつパスの速度が上がってる気がする。

まあ、細かい話は無しにしようじゃないか（震え声）。

「最後に、シュートの蹴り方ですが」

そして、最も知りたかったカーブをかける方法。

それは、インフロントキックという蹴り方で変化に富むボールを蹴ることができるようになるらしい。蹴り足の親指側をボールの下に差し込むように当てて、体をひねって体全体でボールを蹴る。

実際に岩城監督が蹴ってくれたシュート、約20メートルの位置から放たれた軌跡は緩やかな弧を描いてゴールネットの右上隅に決まったのだった。

今はまだ練習だから綺麗に決まったと岩城監督は笑っていたが、それでもこんなに簡単に見えて、しかも綺麗にゴール隅に決められるだろうか？

そして、俺は今の監督のキックをしっかりと見ていたから、同じようなシュートは蹴れるだろう。そうなったらフリーキックとかで偶に見る、直接ゴールにボールを叩き込む事だって可能になる！ それこそチートみたいなもんじゃないかとワクワクしてる自分がいる。

俺はしばらくの間、皆の練習を気にしつつも自分の練習に励むのだった。

## 第12話

それからしばらく基礎練習を続け、岩城監督から皆との練習に交じっても問題ないだろうというお墨付きをいただき、晴れて一人寂しい思いをしながら練習をすることが無くなったというわけだ。

しかしまあ岩城監督との練習は、それはそれのためになる事が多かったから、もう少しぐらい一緒に練習を見てほしかったんだが、仕方がない。

いつもの砂浜。

人数が増えて休憩の時間も多くなってしまったなあなんて適当な事を考えながら皆がコートづくりのためにロープやらフラッグやらを持って動いているのを見ていた時だった。

「おお諸君！ やってるなあっわっははははは！」

……なんか、聞き覚えのある声が聞こえてきたと思つたら、荒木先輩じゃないか。

しかも、試合の時にはスリムな体型をしていたというのに、今見てみると見るも無残なボンレスハムがお腹で熟成されているじゃありませんか！

まあ、その体型で運動してスタミナをつけるといふか心肺機能の向上を図るといふな

らわかるんだが、どう見てもリバウンドしてしまった男性にしか見えない。

「おい」

「ん？」

「なんだその腹はあ！」

「うわあん！ 言わないでくれえ！」

マコ先輩が荒木先輩に後ろから襲い掛かり首をホルドし、たぶたぶとお腹を揺らしている。織田先輩も追随してお腹を引っ張ったりしてのを見てると、なんだか緩い部活にしか思えなくなってくる。

ふと近藤先生の様子を見ると、思った通り溜息を吐いていた。

隣の岩城監督なんて苦笑いしながら奈々と話をしているようだったが、奈々はお冠のようだ。

今も何気なく飲んでいた荒木先輩のスポーツドリンクの容器の蓋を開けて中身を確認して捨てている。少し見えた液体が黒かったのと、奈々の額に漫画でしか見ないような青筋が浮かんでるを鑑みれば、恐らくコーラか何かのジュースを仕込んでいたのだろう。しかも4本くらい準備してあって、相当甘いもの好きなんだな。

しかし、練習が始まってみると良い動きをするもので、荒木先輩にボールが渡ると華麗なドリブルで何人も抜いていく。シザース、ヒールリフトにシャポー。フェイントを



交えたドリブルでDFを翻弄し、駆もまた荒木先輩のドリブルには惑わされているようだった。

俺も惑わされるだろうけど、駆以上の身体能力をもつてすれば最低でも抜かれることはないだろう。あとはファールを取られないようなボールの取り方をできるようにしたいが。

「行きますよ」

「不知火か……良いぜ、来てみる」

まずは手始めに普通にドリブルを試してみる。

右に左に、砂場で動きにくいのが最悪ではない。自分の足を上手く使ってボールを浮かしながらドリブルを続ける。自慢じゃないが、これだけでも結構良いドリブルだと思ってるんだが、荒木先輩は普通についてきてる。

しかし、このまま荒木先輩の体力が尽きるのを待っても良いんだが、それじゃ面白くないし個人技を自分の目で見る事ができない。強引に抜こうとする相手をどういう風に止めるのか。ボールを奪うのか。それを見るのもDF力を高めるためには必要不可欠な要素だ。

「ふっー！」

「甘いぜっー！」

抜いた！　と思った瞬間、荒木先輩が横から体を滑り込ませるように割り込んでくる。

確かに体は太くなって重い動きになってはいるが、それを無視できるだけの巧さがある。これは、サッカー部に所属してる誰よりも大きなものだろう。しかし、それが先輩にとつて過剰なほどの自信に繋がっているに違いない。

——じゃあ、それを最初に俺が折ってしまったら先輩はどういう反応をするんだろう？

この人がこれからのサッカー部の中心になって動いていくことは間違いないし、プロでも通じてしまうんじゃないかと言う技術を持っている。だからこそ、高校生のうちの上の存在を叩き込む事も必要なんじゃないだろうか？

なんて……サッカー初心者が言う事じゃないんだが、壁と言うものを知っても良いだろう。俺も昔は壁ばっかりの人生だったからあ……

「——なっ!？」

先輩に見せてもらった技を惜しみなく発揮する。

シザース、ヒールリフトにシャポー。先輩がやった技をそのまま流用しただけだが、流石にこれを先輩の体型での動きで再現する気はないので、それなりに本気を出してドリブルを仕掛けてみた。

いとも簡単に、とは行かなかつたものの、先輩を抜いてゴールを決めることができた。まさか、ヒールリフトをするとこのまで反応するとは思わなくてシャポーまでやってしまったが。ゴールを決めた後に先輩の顔を窺うと、少し呆然としていたようだったが俺の視線に気づいてすぐに挑発的な笑顔を向けてきた。

俺も負けじと挑発するように口元を少しだけ釣り上げて先輩を見る。いや、見下ろすような感じで先輩を見下してみた。

「なっ、て、てめえ……」

「さすが先輩、上手ですねえ」

「ぐが!? てめえ、良い度胸じゃねえかあ!」

「はっはっは! 抜かれる先輩が悪いに決まってるじゃないですか!」

「ぬがあああああつ!!」

高笑いをすれば先輩は頭を抱えたまま砂場を転がっている。

おとと……そんな事をする俺の心の奥に潜んでいるDOS心が火を噴き始めてしまいうそうになるんだが、もつといじめてしまっても良いんだろうか。実際に奈々が先輩の飲み物(コーラ)を全部捨てるという強行をしているから大丈夫だろう。この先輩なら、それで納得してしまいうそうだ。

しかし、DVDで見ただけの技術は取り込めないが、練習すれば自分のものにするの

も簡単だった。ドリブルにしてもパスにしても、シュートにしても。後はこの技術を試合の中で上手く活用しなければなるまい。

そうなつてくると今度はサッカーに対する考え方とか、戦略的な面で物事を考えられるようになるのが一番手っ取り早いだろうが、そう簡単に局面を変える様な戦術を覚えられるわけもないし周囲の部員の反対も大きいかもしれない。それに、俺自身試合中にそこまで冷静になつて物事を大局的に考えて伝えられそうにないし。

それからの練習でも荒木先輩が勇敢に俺に仕掛けてくるが、俺はボールを奪つて抜き去つてを繰り返した。さすがに太つて動きの遅くなつてしまつている荒木先輩に抜かれるほど柔な体の作りはしてないからな。

そして練習後に出来上がったのは3人の無様なオブジェクトだった。

一人は荒木先輩。いくら何でも俺に何度も良いようにあしらわれたのが響いたんだろう、両手を砂場に付けてうなだれている。

あと二人は高瀬と駆の二人だった。

高瀬は的場に足元への意識の足りなさから股抜きされてしまつていることに落ち込んでいるようで、駆に至つては俺が何度も抜いてるのに自分は抜けないのか……と自信を失いかけてるところだった。

實際駆の動きからだ俺でもボールを奪えるだろう。何故かといつたら、駆はフェイ

ントをかける寸前にボールを見る癖があるのだ。だから俺は前回、織田先輩が駆のボールを奪ったように抜かれるのを阻止している。……多分、俺すら抜けなかったことも大きな怪我に繋がっているに違いない。

——しかし、二人の男が向かい合っとうなだれている姿つてのは辛気臭さを通り越して陰湿な何かを醸し出していた。

夜。夕飯を食べて少し歩きたくなくなって散歩をし始めた俺氏。

適当に夜空を見上げながらふらふらと歩き続ける。少し前に寝不足だと思っていたが、俺のチートはそれすらすぐに慣れてしまうようで、練習が終わった後はすぐに寝るだろうなあと思っていたのに普通に夕飯を食べては勉強して、みたいな習慣をこなしていた。

その時にはすでに疲れも残っていないという最高の体を手に入れたという事ですな。今は食後の軽い運動だと思ってるが、正直俺の胃袋にそんなの関係ないような気しかなかった。

……

そろそろ公園に差し掛かる所でボールが弾む音が聞こえてきた。

誰か公園で練習でもしてるのか？　なんて軽い気持ちで眺めてみようと、公園の横の

歩道から様子を窺ってみた。月明りと街頭だけで練習してる努力家は誰だろうかねえと、一目見て誰だか理解して、悪戯心から音を立てないように一気に駆と奈々のもとへと駆け出した。

「殺したあああああつ!!」

「えっ!?!」

「な、ヤス!?!」

「ふはははは!?!」

いきなり堀川先輩の物まねをしながら駆の足元に収まってるボールへと勢いよくスライディングを繰り返した。地面は砂利だから普通やったら擦り傷ものだろうがそこはチート。上手いこと痛くないスライディングを繰り返すことができた。所謂、空中殺法ってやつですわ。

「なんでここに!?!」

「お? なんだ、奈々と二人きりの練習を邪魔されて不満満々ですって反応しやがって。俺がいると邪魔か?」

「いやいやいや!?! そそそんな事言っていないからね!?!」

「なんでヤスはここに?」

あからさまに動揺してる駆を知らんぷりして俺に問いかけて来る奈々を見る。そし

て駆の様子を一瞥するが、あいつはあいつで不気味に悶えているだけでこっちの様子に気づいてる感じはなかった。駆のリアクションが漫画か何かの反応みたいで少し気持ち悪いと思う俺は悪くないと思う。

「いや何、家がこの近くなんだが、適当に散歩してたらボールの音が聞こえてきてな。見てみたら二人が練習してたから乱入してみた」

「そうなんだ」

「じゃ、じゃあ康寛も一緒に練習しようよー」

「お、おう」

いきなり稼働し始めた駆の言葉が野獣先輩染みてて怖いです（白目）

「てか、お前らいつもここで練習してんの？」

「まあ、そうだね」

「そっか……俺ん家からも近いし、偶にここで練習してみようかな」

こうして3人での練習が始まったわけだが、やっぱり奈々の運動能力は高いものだったようで、あの時のグレイマンは奈々だったんだなっていう確信もできたが、ここは何も言わずに一緒に練習をしていた。特に駆が奈々と一緒になってドリブルの練習をしていたつてのが印象的で、改めて駆が努力家なんだなあと再認識したのだった。

と言うのも、中学時代からレギュラーでもないのにシユート練習を続けていたらし

く。それも苦手な左足でのシュートをだ。後輩に馬鹿にされるようなこともあったらしいが、それでもサツカーを続けられるのは、それほどサツカーが好きなのか、それともそれだけの何かを駆が抱いているかのどっちかだと思うんだが。

……辛気臭くなる話はこれで止めにしよう。

練習中、奈々の指摘を聞きながら練習する駆はどこまでもボールにひた向きで、少しづつ技術が向上していくのが傍目にもわかった。それは確かに少しづつではあるものの、駆にとって足りない部分を埋めていく姿は、俺にはどうしても眩しく見えて仕方がなかった――



## 第13話

さて、ゴールデンウィークGWも終盤に差し掛かり、サッカー部の練習も良い感じに纏まりを見せ始めていた。岩城監督になってから一部の先輩が不安そう……と言うか、不満気にしていただけに一時はどうなるものかと思っただが。

それもこれも、実力はあるのに不摂生をしてしまう荒木先輩のせいなんだが。

「さて、今日は練習を早めに切り上げて、来週から始まる公式戦に向けた、ベンチ入りメンバーを含めた20人のメンバーを発表します」

「……」

岩城監督から言われたそれは、スタメンの発表をするという事。

誰のものか分からないが、喉が鳴る音が聞こえる。眼だけ動かして周囲を見渡すと、皆が皆、同じように緊張感を醸していた。それはいつもお気楽そうに自信満々なプレイをしている荒木先輩も同じようで、今日ばかりは少しばかり緊張しているみたいだ。……いや、緊張というより、楽しみにしているのか？

「荒木先輩はどうなんですか？」

「は？ スタメンのことか？」

「そうですけど」

はっ！ 馬鹿言つてんじゃねえよと目を瞑つて溜息を一つ。

「俺が10番以外に選ばれるわけねえだろが」

「いや、まあ……俺もそう思つてますけど。先輩、言っちゃなんですけど、デブじゃないですか」

近くで聞いていた数人が噴出した。マコ先輩の耳にも入ったのか腹を抱えて大爆笑している。

いきなりのデブ呼ばわりに荒木先輩もプルプルと震えている。いや、事実だし。

「でっ……お、お前……言つてくれるじゃねえかよお」

「俺は別に10番になりたいとは思つてないんで良いですけどね」

「ふうん？ じゃあ、お前はどこが良いんだよ」

「そうですねえ……DFなんて面白そうですけど」

「DFねえ」

お前だったらFWなんて面白そうだけどな、と一言残して続きを話そうとしていた先輩だったが、岩城監督から江ノ島の戦術について話していくということで、一旦そつちの方に耳を傾けることにした。

「以前、僕たち江ノ島高校は二つのチームがあり、二つのフォーメーションの練習をそれ

それがしてきました。SCは3―5―2を基本にし、退却型DFリトリートからのカウンター攻撃に徹するシステム……3バックというよりも変則5バックでした」

一息おいてマグネットを張り替えていく。

今のがSCの説明だったから、今度はFCのものだろう。

……そういえば、今までどんなフォーメーションでやっていたかなんて気にもしてなかったなあ。

「これに対してFCは、荒木君が抜けていた間はボランチを二人置く3―5―2でしたが、先日の試合で荒木君を投入した後はボランチ1枚下げ、トップ下に荒木君を置いた4―4―2の典型的な中盤ダイヤモンドの形でした」

そこから駆や中塚がよく動きまわって激しいポジションをしてSCを攪乱していたわけだ。SCは左右の動きと言うか、織田先輩の攻撃の起点を生かした縦の動きを重視していた感じ。

なるほど……思った以上にSCとFCで違う動きをしていたわけだ。

「そしてこれからお話をするのは、FCとSCの良い点を生かしたフォーメーションです。基本的には2―5―3。SCの退却DFを生かし、わざと守備に『穴』を空けたように見せ、ボールを奪って攻めに転じる——所謂、ブービートラップフォーメーションです」

「な、ホントかよ岩城ちゃん！」

「ほ、本気ですか、岩城監督」

「本気も本気です。これは、君たちがそれぞれのチームで培ってきた練習を思い出せば、君たちならできると信じています」

俺はFCで少ししか練習してないからよくわからん。

ただ、このフォーメーションだと隙ができやすいし、上手いこと機能するかどうかでこのチームの行方も決まるかもしれない。

「それでは、このシステムに合わせた総インターハイ体予選に向けてのメンバーを発表します。

まず、ゴールキーパー GKから。

3年、りあきとし李秋俊君。2年、とうどうしんたろう紅林礼生君。藤堂慎太郎君」

「おーし、1番!!」

「すぐに取り返してやるからな！」

「続いてDF……」

はまゆきぞう浜雪蔵君。ごう海王寺豪君。あきと堀川明人君、そして不知火康寛君」

「はい」

俺の名前が呼ばれた。

しかも今まで練習したことのないDFで。いや、DFでも大丈夫だろうとは思って

たが、いざこうしてDFに指名されるとドギマギしてしまう。周りの先輩からの視線も気になるってか痛いし。

監督の元まで近寄り、ユニフォームを貰う。

2番と書かれたそれは、確かにスタメンだという事を示していた。

そして、俺と一緒にバックで守備をするのはどうやら堀川先輩らしい。右サイドに入つてのスタメンらしいが、今の今までそれらしい練習はしてないんだが……適当に堀川先輩と監督と話をして連携を取れるようにしないと。

それからMF、FWと呼ばれて行き、今まで違うポジションでやっていた的中塚も呼ばれ、そして駆もベンチ入りとしてだが最後の20番として呼ばれていた。その時の安堵した表情はかなりのものだった。

「駆、おめでどう」

「康寛も、最初からスタメンなんて凄いいじゃん！」

「ぬう……駆が眩しい」

「ど、どうどういこと？」

いや、単に俺がスタメンなのにベンチの駆に声をかけたらまずいかな、なんて心の小さい男の話はもう良いんじゃないよ。

それからすぐに紅白に分かれての練習が始まった。

スタメンの攻撃陣とベンチの守備陣、スタメンの守備陣とベンチの攻撃陣で紅白戦。と言うわけで、俺と堀川先輩でスタメンの攻撃を守備する事になったわけだが。

「的場！」

「うん！」

「はいやあー！」

スタメンの的場がボールを持ってサイドを駆け上がってくる。

ドリブルのスピードはかなりのもので、体格が小さいことを生かした機動力を見せている。テクニクもあるから、そのまま一気に俺の横を抜けようとしていたが。

「残念」

「くっそー！」

巧いことボールだけに足を当ててボールを奪取。

そのまま一気に前線にいる高瀬のところへ蹴り上げた。

身長の高い高瀬はそのボールをそのまま強引にドリブルしていき、守備に当たった海王寺先輩に強く当たっていった。ギリギリファールじゃない、大きな体を生かした良い攻撃になってる。

しかし、それは二人、三人とDFが下がってきた時にも強引に突破しようとしたせい

で周りのDFにボールを奪取されてしまったが。

こうしてみると、何かを思いつめたような表情になつてる高瀬って結構怖いな。

「ドンマイドンマイ！ その調子で行け！」

「……うん」

DFの俺が声をかけてもこの調子。

どうせだったら何も考えないで実直に行きや良いのに。

まあ、その問題が彼にとって重要なかどうか、完全にプライバシーの問題になってしまうから俺から行くことはないけども。どうせだったら駆に全部任せてしまおっかな。

——練習終了。

しかし、少しばかり一年生……俺の同級生の機嫌が悪いんだが。

「どうしたんだよ、的場」

「不知火……いや、なんでもないよ」

「どうせ高瀬の事なんだろう？ 練習中のファール」

「えつと……まあ、ね」

俺は直接見てなかったが、的場が後ろに下がってボールを奪ってドリブルとかをしてた時、後ろからユニフォームを掴んで倒したらしい。岩城監督が止めに行った時に言っ

ていた通りなら、イエローカードものらしく、危ない行為だったらしい。

と、憤った感じにも見える的場の様子を見て、このまま放っておいたら何時か喧嘩に発展しそうだ。どうしたもんかなあ……と顎に手を当て周囲を見渡し、駆の姿を見つけた瞬間、押し付けてやろうと思ったわけだ。

「駆」

「あれ、どうしたの康寛」

「ちよつと、的場の相談に乗ってやれよ」

「え？ え？ 何、なんなの？」

体格の小さい駆の肩を組んで的場の所に引き寄せる。

てか、確かに俺より小さいけど流星に軽いなあ……嗚呼、これもチートのせいなんだろうか？

「的場、悩み事があるんだったら誰かに相談すりゃあ良いんだ。何も一人で考え過ぎる必要はない。全部喋って愚痴って、鬱憤はため込んで潰れんじやねえぞ？」

「うん……そうだね。不知火、いや……康寛って呼んでも良いかな」

「おう、薰って呼ぶか」

「康寛、ありがとう」

「おう」



うむ。青春だ。

これ以上ないくらいに青春をしてるぞ。

そして巻き込まれた感じになった駆は終始オロオロしてたようで、後から俺が状況を説明したのだった。

## 第14話

いつの間にか薫と高瀬のっほが仲良くなっていたことには驚いたけど、部活動の雰囲気が悪くなることなく良かつた良かつた。

——インターハイ総体地区予選も目前。

当然我が江ノ島高校サッカー部もそれに参加するわけだが、それを目の前に控えた状態でベンチ入りを含めたメンバーの20人は、一泊二日の合宿のために静岡まで来ていた。

「しつかりした旅館じゃないですか……」

「実は、FCの頃からお世話になっているところで、神奈川では信じられないぐらいに安く借りられる芝生のサッカー場も近くにあるんです」

「へえ……そりやまた、サッカー合宿に来るだけの理由があるってことなんですね」  
緑があつて旅館が大きい。

こりや、普通に泊まりに来るだけでも良い値段を取られそうな感じは出てるんだが、サッカー部としての部費で20人分賄えるのか？

なんて疑問を抱いたりするものの、実際にこうして一泊二日できているわけだから文

句なし。自分一人じゃまず泊まりに来ることのないような所だしな。

各個人に割り当てられた部屋に荷物を置いて少ししてすぐに練習開始。

一泊二日という事もあり、少しでも時間を有効活用しようという事だろう。

バスで少し揺られていた事もあって少し疲れはあるが、大したものでもなくすぐにアップを開始。今日は練習試合という事もあって、全員がやる気に溢れているように見える。

「さて不知火君」

「なんすか？」

「今日は富士宮高校と練習試合をするわけですが、どうですか？」

「そうですね……どうしましょう？」

監督が言うには静岡には強豪校が多くあるらしく、日本のブラジルと言われているらしい。

という事はシルバの様な奴がいるのか？ と一瞬勘ぐってしまったものの、そこまで突出した選手はいないらしい。いやまあ……あんな生粋のチート野郎がそんなにたくさんいてもらっても困るんだが。

しかし、静岡の選手の実力の平均とすると全国一のものらしいが。

「いやあ、県内で練習試合をして君の実力を見られるのも困りますからね」

「ま、自分は高校からサッカーを始めたんで知らない人ばかりでしょうけど」

「それでもですよ。君の才能は確かなものだ。一度地区予選に出てしまえばすぐに君の話は広まってしまうでしょうが、それまでは戦術的にも隠していたいんです」

「そうっすか……」

監督の中の俺の評価が鰻登りどころじゃない龍登り。

少々嫌いな表情をしてしまったのを見られたんだろう。監督は苦笑していた。初心者にかける期待値とは違うような気がする。

それに、がたい的には俺よりも海王寺先輩のほうがデカいし技術もあると思うんだが。

「こういうのはいけないと思うんですが、それも少しすれば君が追い抜いてしまうでしょう。僕は、君がこれからの江ノ高サッカー部を引っ張ってほしいですから」

「あー……つと、まあ……頑張ります」

「期待しますよ」

ニツコリ笑いかけてくる監督の何と純粋なことよ。

吐血してしまいそうな引き攣った笑みを返して、練習試合のためのアップを開始するのであった。

「これより、江ノ島高校と富士宮高校の練習試合を開始します。礼！」

『よろしくお願いします！』

「よし、ガンガン点入れてくぜ！」

「そうだな！」

と、最初から意気揚々と話している相手選手陣を見ながらかるーく全体を見渡す。

すると見えてくるは相手の能力が。確かに、うちのサッカー部のレギュラーの選ばれなかつたメンバーの能力と比較すると高い能力値だが……今の江ノ高レギュラー陣の平均値は相手のそれを軽く上回っていた。

こりやあ……俺の出番はあまりないかな。

なんて思っていると早速荒木先輩が動き出した。

「えっ」

周囲を見渡しながらドリブルしていた荒木先輩の事を侮り一人でボールを奪いに行つた相手がかわされる。二人を抜いたところで薫にパス。それを飛び出していた火野先輩にダイレクトで蹴り出し、シュート。惜しくもキーパーの手によって阻まれてしまったものの、それは確実に相手選手に動揺を与えていた。

どうして薫はあの場所にボールを出したのか。

——相手キーパーが左利きだつてことを練習中に確認したんだろう。それを確認す

るのはFWとして必要なかは分からないが、こうしてシュートを決める際には重要な判断材料になる事は確かだろう。

薫はうちのFWとしてしっかりと活躍してるなあ……少し前までMFでやってたから戸惑いもあるもんだと思ってたが、順応するもんだ。それに、小柄つてのも一つの武器になってるしな。

試合開始から10分。

荒木先輩からパスを受けた火野先輩が放ったシュートが左隅に決まり、1点を先取。

これまで一度も危険なミスを犯すことなく進めている試合は良い感じの内容だった。

しかし、1点取ったことで油断したのか、ちよつとしたパスミスを狙われボールを奪われてしまった。そのまま二人の相手FWが上がる。

能力値を確認、どちらもFWに適した能力だが、うちのスライディングコート堀川先輩の必殺つ仕事人は抜けそうにない。

それでも二人。一人で突撃をかましてくるわけじゃないから抜けると判断したんだろう。

俺は……動かない。堀川先輩の動きを確認しながら、突撃してくれる相手FWを見据える。

「余裕……きやがって！」

「実際、余裕だからな」

「てめ！ 何だとお！」

軽いフェイントで抜こうとする相手に足を伸ばし、迷わずボールだけを奪取。

「なっ!?!」

「よ、つと」

大きくボールを蹴り出し、それを受けたのは火野先輩。

胸でトラップしたボールをそのまま荒木先輩にバックパスしていた。

前半も40分と言ったところで、2点目。追加点を得ることに成功した江ノ高はそのまま勢いに乗って波状攻撃とも呼べるシュートを続けたものの、さすがに3点目は奪うことはできずに前半を終えた。

随所に惜しい所はあったし、荒木先輩がすっかり痩せていたら3点以上点数を取れたかもしれないがな。

後半からは駆や高瀬がFWとして参戦。俺は海王寺先輩と交代してベンチで待機していた。

「康寛！ 前半お疲れさま！」

「おう、奈々。ありがとさん」

手渡されたスポーツドリンクで喉を潤す。

F WとM Fの活躍のおかげでそこまで大した運動量じゃなかったのはとても嬉しい。多分、後は試合の後に全員でプリーフィングをして終了だろう。簡単なお仕事ですな。

「康寛は、試合に出るのは二回目でしょ？ どうだった？」

「どうも何も、前半しか出てないから何とも……それに、あまり動いてないしなあ」

「でも、決定的な所で全部カットしてたよね」

「ま、相手もこつちを侮ってくれてたからな、簡単に奪えたよ」

実際、江ノ高は無名つてこともあるし、しかも荒木先輩のあの体型を見て舐めてかかってた相手だからな。

「康寛もF Wでやってみたかったんじゃないの？」

「いやあ……シユート練習中だし、ここぞで点を決められないF Wはさすがにまずいだろ？」

「まあ、そうだけど……」

「やってみたくもあるが、練習でもう少しシユートが決まらないと皆の足を引っ張っちゃう。それは勘弁だ」

「そっか」

そのままゆつくりと後半を眺め、駆が1点を取ったことで嬉しそうにしている奈々の様子を見ていた。リア充爆発せよと、呪文でも唱えてしまいたいそうだ。



俺のポジションであるところで奮戦している海王寺先輩も、その体格を生かした守備で相手を抑えている。その動きを一番に見つつ、全体の動きを見る。荒木先輩の足技はもちろんの事、全体を見渡したパス回しを見せる織田先輩。中心で巧いパス回しをするマコ先輩を見て技を吸収していく。

こうやってベンチで観戦するのも悪くないなと言ったところで後半も終了。

ミドルからのシュートを織田先輩が決めたことで4対0。完勝も完勝と言うほどで、監督が満足そうに頷いていた。

その後は予想通りのブリーフィングを受け、夕食をたくさん食べる。

その際、奈々から減量を命ぜられている荒木先輩の厳しい食事制限を目の前で見せられたり、男子多数による女子風呂の覗きが発生したりと結構なイベントがあったらしいが、そのころ俺は普通に寝てましたとき。

何故か織田先輩が覗きの犯人になっていたみたいだが、合宿はつつがなく過ぎていくのだった。

## 第15話

いよいよ今日からインターハイ高校総体神奈川県予選。

初戦当日を迎えた俺たち、江ノ高のメンバーは試合の会場になる慶早大付属湘南高校のグラウンドに向かっていた。

全員が全員、表情に違う感情を思い浮かべている。

自信满满々そんなもの、緊張しているのか固い表情をしているもの、自分の中で気持ちを整理しているのか、目を閉じて瞑想しているもの。様々な感情が渦巻くこの場所で、俺は欠伸を一つ浮かべていた。

「どうしたの、ヤス」

「いやあ……ちよつとばかりバスの中で寝すぎたかな」

「はは、ずっと寝てたもんね。緊張しないの？」

「ううむ……今のところはな」

「そっか……僕なんてベンチからなのに緊張しちやつて」

「何、初戦の相手はそこまで大した相手じゃないんだろ？ 適当にアップだと思えば良

いじゃねえか」

「そ、それはさすがに……」

「そうかあ？」

監督が言つてた情報だと、初戦の相手には軽く3点以上取れるだろうと。そして守備に関しては完全にシャットアウトしてほしいとも言つてたな。

だから俺は心配してないんだよな。まあ、実践では初めて使うシステムなだけにうまく立ち回らないといけないんだが、何とかなるだろう。

会場に入る前に中学の頃と同級生、佐伯祐介さえきゆうすけが応援に来てたらしく、駆と公太、奈々に話かけていたが、さすがにそこまで友好の無い俺は傍で見ただけだった。と言つても、すぐに集合があつたりと話かける暇もなかったのだが。

その場を離れる際に視線を感じた気もするが、無名のままのはずだから……もしかしたらそれで逆に気になったのかもしれないな。

——実際に会場に入り、試合直前。

コートに出て挨拶をしようとしているところであるが、相手の擬似イケメンが非常に喧しい。喚いているわけじゃないが、観客の女子に手を振ったり笑いかけたりと大分余裕をかましている中島と島谷と言う二人。こいつ等の存在が爆発してくれないかなつて、心の黒い部分がダダ漏れしてしまうよ。

「ヤス、一応あいつらはジュニアでやってたからそれなりにやるぜ？」

「マコ先輩……でも、荒木先輩ほどじゃなさそうですし、問題ないですね」

「ははっ！ 結構言うじゃねえか！」

「まあ、事実ですし」

「確かに……ま、お前なら大丈夫だろ、頑張れよ」

「はい」

「えー、それでは高校総体サッカー神奈川県一次予選二回戦、江ノ島高校対慶早大付属湘南高校の試合を行います」

一列に並んで開幕の挨拶。

その中でも観客の女の子に一々反応を返している相手の様子を横目で見て、苛立ちが湧き上がってくる。

……子供っぽい感じはするかもしれないが、流石にこつちを舐めすぎじゃないだろうか。そう思いつつ俺は監督の顔を見る。

視線で訴える。ヤっていいですかと。

監督は苦笑しながらも頷いてくれた。まだシュートの精度に納得しているわけじゃないが、SC対FCの頃のシュートよりも断然精度は上がっている。

D Fの俺がシュートをすることは早々ないんだが……ロングシュートであればどこからでもシュートを決めることができる。俺の脚力で放たれるボールはかなりの速度だと思うし、キーパー殺しの一撃になるだろう。

それ以外にもフリーキック、ピーケーなどシュートを蹴る場面があるが、荒木先輩が蹴るだろうし。

キックオフと同時にF Wの中島が走り込んでくるものの、そこには堀川先輩が走り込み、後ろから織田先輩が詰めている。相手はボールを戻して攻撃の時を見はからっているようだが、江ノ高のブービートラップフォーメーションは隙だと思ったところは全く隙じゃない。

今もまたF Wの中島へパスを上げたが、それを織田先輩がカット。一気に攻撃へと移っていく。

流れるような江ノ高メンバーの攻撃に翻弄され続ける湘南メンバー。

そして、最後は薫からのスルーパスをしっかりと股抜きで決めた火野先輩の1点が先制点となったのだった。

そしてしばらく、荒木先輩のミドルシュートが決まって前半10分にて2点差が付いたのだった。

最初から油断していた相手は流れをつかめないまま時間だけが過ぎていき、ついに無

失点のままうちは前半を終えたのだった。

「しっかし……ここまでは問題なし、か」

「どうしたんだ、ヤス」

「マコ先輩……いえ、前半は相手が油断してくれてましたけど、後半はさすがにあの二人が頑張りだすと思つてつすね」

そう言いつつ、未だにピッチの真ん中でこちらを睨み付けている中島と島谷がいた。

もともと能力値が低いわけじゃないから、油断さえしなければ普通に点数を奪つてきそうな感じなんだが。

「それに、荒木先輩もそろそろ息切れが凄いですし……このメンバーだと後半は攻撃力が落ちるでしょうね」

「なるほどな。でもまあ、それが岩ちゃんの狙いなのかもしれないな」

「……荒木先輩のスタミナですか？」

「お、分かつてるな」

確かに、今はふとやかな体型の荒木先輩だが、スリムの時ですら体力に難ありと言わ  
れていただけあって心肺機能があまりよろしくないんだろう。それを克服するための  
荒治療にはなるが、今の体型で付いている脂肪を生かしてスタミナをつけさせようつて  
魂胆だ。

荒木先輩の動きは鈍くなってしまふものの、それを初戦のうちに克服させ、他のメンバーにはしつかりとカバーできるようにしたい。それが監督の狙いだらう。

「ま、何とかなるんじゃないですか？」

「自信ありますか？」

「いざとなつたら僕がロングシュート決めますよ」

「言うなあ……」

——そして後半開始。

有利に進めていた前半とは違い、後半は激しい攻防が繰り広げられる。

特に荒木先輩と、サイドで進退を繰り返していた八雲が足に來ているようだった。

「行け、中島！」

「行かせねえよ」

「くっそ！　またためえかよ！」

島谷から中島へと縦のラインが機能し始めているが、しつかりと対応を続ける。

ジュニアで培ってきたんだらうフェイントを駆使して抜こうとしてくる中島に、浮かせるパスで巧いこと中島にシュートを撃たせようとしている島谷だったが、向こうで突出した選手はこの二人だけ。

堀川先輩もしつかり守ってくれてることもあり、俺は普通にボールカットを続けては





う動きは厳しいだろうが――

「6番八雲選手、9番火野選手、11番工藤選手に変わって16番中塚選手、19番高瀬選手、20番逢沢選手！」

と、ここで選手の入替え。

守備的な選手ではなく攻撃的な選手を投入してくるあたり、まだまだ監督は荒木先輩を扱き使っていく気だろう。

それはそれで面白い状態だ。

守りを固めるよりもより点数を取った方が安心もするし、相手の動揺も誘える。

ま、チャンスが巡ってくるまではDFとしてしっかり働こう。

ボールカットボールカットとしていると、極限状態で集中力の高まった荒木先輩から駆へのキープパス。駆の裏どりに反応しきれなかった相手DFに、駆の正面に来てしまった相手GKは駆のトラップに対応しきれず、1点を許してしまう。

これで、3点差。後半も20分を過ぎたところだった。

こうなつてはもう江ノ高の嵐のような攻撃が続くのだった。

交代したばかりの3人が動き回り、中央では動きは鈍くなったものの足技で相手を翻弄する荒木先輩。少し後ろでカバーするマコ先輩と織田先輩。もう完璧な布陣じゃないか。

後半35分を過ぎ、江ノ高メンバーの意気は更に高まっていく。

中島島谷ペアの攻撃以上の人数をかけて重圧な攻撃を仕掛けていく。

そして5分後。薫から上がったクロスに高瀬が反応。長身の高瀬の最高点から繰り出されるヘッドが力強くネットを揺らし4点目。

「うおおおお！ やった……やったあっ!!」

「ナイスヘッド高瀬!」

「そ、そんな……」

残り少ない時間。決定的なシュートすら撃てない相手の士気はどん底も良い所のように、絶望的な表情を浮かべていた。無情にもそのまま時間は過ぎていき、試合は終了。4対0と言う完勝も良いところ。

結局俺の活躍の場所はなかったのだった。

が、今はこの勝利を純粹に喜ぶことにしよう。

——で、観客席からめっちゃ見てくる佐伯君の隣に立ってるあの人は誰なんだ？

## 第16話

慶早大との試合を行った後に軽いブリーフィングを行い、後半からのMF辺りの崩れを指摘されつつもその日はすぐに体を休めるために解散となった。と言うのも、次の日は予選3回戦があるためである。

慶早大での試合で先発を務めたFWはベンチに下がり、代わりに駆や高瀬が先発で入ることになったのだが、いざ試合になってみると先陣を切って攻撃を仕掛けている駆の調子がありよりよくないようだった。

3回戦の相手は、同じく前日の緒戦を勝ち抜いた武湘南高校。

確かに2回戦までの戦いを勝ち抜いてきただけあって、基本と言うか、基礎と言う部分ではしつかりとしたものを感じさせるが、能力的に見ると先日湘南高校の中島、島谷ペアの方が攻めとしての連携は良かった感じがする。

前半はどちらのチームも無得点。

駆のドリブルミスからの相手の反撃っていう流れが前半だけで3回も起きてしまっているが……正直、今の所であれば全然問題なく対処できている。

「ドンマイドンマイ。もっと攻撃仕掛けてけ」

「……うん、頑張る」

「駆、お前は元気が取り柄なんだ。無理に頭なんて動かさなないで突っ走ってけ」

「ちよ！ それって、僕がバカってこと!？」

「ははっ、そんな風には言っつてないけどなあ」

中には不満気に駆を見てる奴もいるようだが、俺に言わせてみればこれぐらいの連中相手にそこまで攻めあぐねてる時点で同罪だ。

確かにサッカーは何十分という時間はあるが、その時間内に何点もの得点を取つていくゲームではないし、互いの実力が伯仲していれば尚更だ。と、いう考えを述べてしまうと武湘と江ノ高の実力が同じぐらいだという事になつてしまふが。

ともかく、俺は駆が攻めに貢献できてないことに対してとやかく言うつもりは全くない。

「ヤス！ カバー！」

「つたく……早めに何とかしてくれよ……」

後半が始まつて4分。

駆がドリブルを仕掛けたものの、相手のDFにボールを奪われて一気に反撃されてしまった。

それを見ていた俺はすぐに自陣に戻り、相手DFがボールを蹴つた瞬間に走り出して

ボールの落下点へと向かう。

できるだけ相手FWの死角に入り込むように走り込み、音を立てないように近づく。

「よっ」

「なっ……いつの間に!？」

ボールを受け取ろうとしたところで奪取。

すぐに中盤の荒木先輩へと上げる。今のはすぐに奪っておかないと相手の攻撃へと選択数が多くなってしまったがために少し前に出てしまったが……1点と言う、明確な点数にする前にシャットダウンすることができたので監督も納得してくれるだろう。

しかし、駆の奴はいつにもまして攻撃の精度が落ちてるな。

何かをしようってのは分かる。以前から荒木先輩に言われていたドリブルを改善しようとしているのだろう。それは、奈々と続けている夜の訓練でもよく知っている。欠点があるのならそれを直そうとする前向きさは褒めるべきものだし、まだ相手がそこまで強くない今のうちに直しておくってのも納得できる。

が、それは俺以外にはあまり納得できない事だろう。

実際、DFラインでゆっくりしているときに聞こえてくる中塚やその他ベンチで燻ぶつている奴らの不満。そのほとんどが最前線で動いている駆に対しての物だった。

不慣れなドリブルをするんじゃないやなく、裏に抜ける動きを中心に動け、と。

確かに俺もその意見には反対する気はないのだが。

———またしても駆がボールを奪われてしまった。

すぐにミスを埋めようと相手へプレスして圧をかけていく駆を俯瞰で見つつ、堀川先輩と織田先輩の合図をしつかりと確認する。

今、相手MFからすれば俺と堀川先輩の間はかなり空いている。

しかも二人だけのDMとくれば、その間を狙おうとしてくるだろう。

と、思った通りの所辺りにボールを蹴ってきたので詰めていく。油断していたために焦ってしまったところを織田先輩が奪取る。巧いこと守備が動いている証拠である。

そこから流れるように薫、高瀬へと繋がり、最後は高瀬のヘッドでのシュートを放つものの、相手GKに阻まれてしまった。

『20番逢沢に替わって17番海王寺！』

……うん？ まだ一点も取っていない状態で守りを固める？

確かに駆の今日の動きはチームとして見るに堪えない物ではあったものの、それでもDFを投入する理由にはならないはず。周りの先輩も怪訝そうな表情をしているのを見るに、監督から話を聞いていた人はいないみたいだ。

真つ直ぐこつちに向かってくる海王寺先輩を見つつ、岩城監督の方をおもむろに見やる。そこには意味ありげな笑みを浮かべる監督の姿が。何気に隣に座ってる奈々も笑

顔になってやがる。今お前の幼馴染兼恋人の駆はベンチに下げられたんだぞ？

「不知火、監督から伝言だ」

「はい？ なんすか？」

「お前が逢沢の代わりにFWをしろ、と」

「は？ あいや……はあ？」

「俺に聞かれても分からんが、すぐにリスタートするんだ。早くポジションに付け」

「は、はあ……わかりました」

皆に怪訝な視線を向けられたまま、俺はゆっくりと駆のいたポジションまで上がっていく。

『おーつとお！ これはどうしたことだあ!? 江ノ島高校、FWの逢沢を下げたDFの不知火を上げてきたぞ?!』

味方からも驚愕の視線を送られていることに相手は疑問に思っているに違いない。

そも、高校からサッカーを始めた奴がDFとして登録されてるのに、この拮抗した状態でFWとして出てくるなんて……とまあ、こういう考えを持っていても可笑しくない。

実際、相手FWは憎々し気な表情で俺に視線を送ってきやがる。俺はノンケ、熱心に見つめられてもその気持ちには応えることはできません（白目）

「おい、不知火」

「荒木先輩……」

「ひじょーに認めたくはないが、お前だったら俺の本気のパスを受けられるだろう。だから、やれ」

「ええー……まだポツチャリしてる先輩に本気って言われても納得できんですけど」

「ぐう!? まあーたお前はそうやって俺のアイデンティティを責めてきやがるのか」

「ですが、まあ、何とかやってみますよ。あいつも見てることですし」

ふとベンチにいてるであろう駆の方を見る。

そこには、代えられてしまった事を悔しそうにしている駆の姿が。そしてそれを心配そうに見つめる奈々の姿。

……あれ？

俺、あいつが成長してくれる事を願って頑張ろうと思っただが、なんだろう。この無気力感。顔から表情と言う表情が削ぎ落ちてしまっそうだ。

相手GKのゴールキック。

大きく蹴り出されたボールは自陣まで届いたものの、織田先輩な絶妙なポジションにより一気に奪取することに成功。サイドにいるマコ先輩に渡し、中盤にいる荒木先



輩から一気に俺の所までパスが回ってきた。

「てめえ……DFの癖に」

「そりゃ、俺からボールを奪ってから言うこつたな」

「舐めんな！」

挑発し、意気揚々と仕掛けてきた相手FWをシザーズで躲していく。

それからMFが二人来たものの、視線で相手の重心をずらして一気に抜き去る。もう一人は切り返しからの股抜き。ボールに進行方向に来るようなスピンを掛け、股抜きで一気に走り出す。

3人抜きしたところで相手DFが集まりつつある。

「不知火！」

後ろから荒木先輩の声がかかる。

ドリブルのスピードを落とし、ボールを止める。同時に相手DFが寄ってきたところで誰もいない左にボールを蹴り出す。

「はあっ!?!」

荒木先輩の怒声が聞こえるが、予想外の蹴り出しに相手DFも溜まらず足を止めてしまっている。

が、これは強烈なスピンのかかったボール。

声が聞こえたと同時に走り出していた俺の足元に綺麗に収まったボールを蹴り出し、DF陣も抜いていく。

相手GKを見る。

焦ったような表情の相手GK。ゴールとGKとの位置を確認し――

「いけやあつー！」

「な……」

左足を一気に振りぬいた。

監督に教わった蹴り方。ボールを足のインサイドで蹴ることで回転をかけることができる。相手GKの右側を通り過ぎたボールは完全にゴールポストの枠を外れていた。驚いた表情を浮かべていた相手GKもこれには少し安堵したのか、口元が少し緩んでいる。

しかし、強烈な回転によって弧を描き始めたボールを見て驚愕に顔を歪めた。

まったく動くことなくボールを眺めるだけの相手GK。ぱさっと軽い音を立て、ボールはネットを揺らしたのだった。

『ゴ、ゴoooooooooooo！ 何というシュートでしょうか！ ペナルティーエリア外から放たれたボールは大きな弧を描いてゴールネットを揺らしたあ!!』

「なん……だど……」

「決まったあ」

内心、ホツとする。

綺麗に回転がかかった事と、均衡状態だった場を動かすことができたこと。

何気に監督に期待されていたような気もするんで合わせて結果を残せて良かった。現状、後半20分程度。あと1、2点は取れる気がする。もしかすればそれ以上に。

「おい、すげえじゃねえか！」

シユートが決まったことで祝福してくれるチームメイト。

中にはDFの俺の活躍を驚いている先輩も多くいたが、意外にも荒木先輩はキラキラした表情を浮かべていた。

「荒木先輩」

「俺もお前みたいの良いところ見せねえと。ま、今度は俺のパスでアシストでもしてやるよ」

「了解です」

何故か得意げな感じで腕を組んでいる先輩を無視し、チラツと駆の様子を窺う。

真剣な表情でこつちを見ているその視線は、交代させられたことを悔しがっているようにも見えるし、何かを掴もうとしているようにも見える。

「先輩……俺、あと2点は取りますよ」

「は？ ……ハハツ、良いぜ、やってみな」

「パス、任せましたよ」

その何かを掴めれば、駆はもっと巧くなるに違いない。

その手助けをするために、俺もたくさんの技術を吸収していこう。

その日、残り25分の試合にて2点を決め、他にも荒木先輩がミドルシュートを決め4対0で試合を終えることができたのだった。

## 第17話

「試合終了！ 4対0、江ノ島高校！」

「不知火い！ お前、ホント凄いやつだよ！ まっさか本当にハットトリック決めちゃうなんてよ！」

正直、俺も驚いています。

監督の指示つちや指示だから頑張つて点数を取りに行つたけど、まさかこんなにうまくいふ事点数を稼ぐことができるなんて。

D Fなのに、つて思つてた人もいたみたいだけど、そんな人ほど俺の動きに驚いてくれるみたいだ。特に相手監督なんて終始苦虫を噛んでるような表情で俺のこと睨んできてたし。

「さて、今回の活躍を見ての通り、不知火君はFWとしての能力もかなりのものです。彼のおかげでまだ無失点のまま二回戦まで勝ててきましたが……FWのみなさん、これからは彼にはFWとして動いてもらうことが増えるでしょう。各々、自分の力を高めていってください！」

「はー！」

ひよっこDFが生意気に！

とか言われると思つてたんだが、そんなことも無く部としての意気の高さを見せつけられた気分。いやまあ、俺もその部活の一員だけだよ。

勝利の余韻に浸ることも無く、次の対戦相手が試合をするということでも早速観戦席に。なんとその高校は大会を通して1点しか失点していないという鉄壁の守りといっても過言じゃない布陣だそうだ。

江ノ高も今の所無失点でここまで切り抜けてきてはいるけれど、そこには触れないでおこう。自分で自分を褒めるのはさすがに恥ずかしいな。

おそらく決勝トーナメントの緒戦の試合相手は監督が優勝候補の湘南大付属高校になるだろうという事で、駆に聞いた話だと幼馴染がいるとかなんとか。結構陰のある感じの顔をするから何か因縁でもあるんだろう。深く聞いておかないでおこつと。

——さて、その湘南大付属高校の試合を見たわけだが。

何というか……「4本の矢」フォーアロウズの防御力の高さもさることながら、DFの日比野選手の力強さが際立っていた。まさか、フリーキックでDFが蹴るとは思つてなかつたつてのと、そのシュートの力強さ……まさに弾丸のようなキックだった。

圧巻のフリーキックだったわけだが、俺の身体能力を生かせばより強いシュートを蹴

ることができるとも思えない。余すことなくその蹴りを見させてもらったことだし。

「得点源がいなかった湘南大付属高校において、彼の存在が一番になりました。彼は、この大会において35mのフリーキックも決めていきます」

「35m……」

大砲とも言われる所以だな。

鉄壁の防御に一撃必殺の大砲。確かにこの組み合わせは並の高校の部活動程度ではどうにもならないだろう。てか、ここまでの布陣を考えて育て上げた相手の監督も凄いなと思う。

そして試合は1対0のまま終了。

4人のDFがいるにしてもかなり厄介そうな守備をしていたって感じだ。

試合相手の選手たちの表情を見ても分かる通り、キツネにつままれたような感覚。とてもただのディフェンスをしているとは思えなかった。

「ま、でもうちにも鉄壁のDFはいるもんな！ 不知火！」

「は……まあ、頑張ります？」

「なんでそこで疑問形なんだよお！」

「いやあ……荒木先輩のお腹を見てるとなんだか不安になっちゃいました」

「て、てめえ……まだ俺のこれをいじつてくんのかよ！」

そのままマコ先輩に絡まれ、織田先輩からはため息を吐かれ始めた荒木先輩の様子を見つつ、湘南大付属高校のサッカーを思い出す。

4本の矢が基本となったディフェンシブな戦略。今のままでは湘南から点を取ることは難しいだろう。そのあたりの戦略をどうしようというのか、うちの監督の考えは非常に気になるところではあるが、一番の問題となっているのは江ノ高の攻撃陣の薄さだ。

数として……戦略性の面から見ると全然問題ない。

裏を取る動きをする駆、小柄な体格を生かした攻撃の薫、長身を生かしたヘツドの高瀬君にフィジカルを生かした攻撃的な辺りでドリブルをする火野先輩等々。

しかし、今回の湘南を相手にするにあたって全員のレベルが高くなければ相手DF陣を抜くことはできないだろう。

と、やっぱり中でも問題は駆、と。

「駆……別に調子が悪いってわけじゃないんだろ？」

「あ、ヤス……うん。僕もヤスみたいにしつかりドリブルできれば良いんだけどね」

自虐的で暗い表情しやがって。

「何言ってるんだ。お前にやお前にしかできない事だつてあるんだ。一度や二度程度の失



敗でくじけてんじゃねえぞ。何、お前が実力伸ばせなかつたところで俺が出る事になるだけだからな」

「えっ!?! でもヤスはDFだし……」

「お前、今日の試合一緒に出てただろ? 監督が何考えてんのか知らないが、DFの俺をFWとして使ったんだ。もし今日みたいに攻めあぐねるようなことがあつたら、今回みたいに俺の事を使うだろうね」

「そ、うなのかなあ……」

「別に監督はお前の事を信頼してないわけじゃないんだ。お前の実力が伸びてくれることをしっかりと考えちゃあいるが……それで負けちゃ話にならんだろ?」

「うん……」

「ま、俺に言えることは頑張つて”物にしろ”つてな」

「物にしろ、か」

説教染みてしまった。

今回の人生での親友としての忠告つて考えるとどうしてもそうなつてしまうのが自分でも恨めしい。

無駄に年を取っただけあつて考えが年寄り染みるのかなあ……どつかで、精神は肉体に引つ張られるつて聞いたこともあるが、どうなんだろうか。

「で、だ……駆、お前あの日比野って奴と幼馴染だったのか？」

「え、と……うん」

「お前がそんなに言いにくそうにしてるってことは何かあったのか……喧嘩か何かか。それ以上の事でもあったのか」

「えっ!？」

驚愕を表情に浮かべる駆。

しかし、今のは適当に言っただけの鎌かけ。もしかすれば奈々とかに聞けたかもしれないが、実直な駆のことだ。この程度の鎌かけにもかかってくれるだろうという考えだ。実際に面白いほどわかりやすい反応をしてくれたが。

「別に駆の事を責めようとか、昔の話をほじくり出そうとしてるわけじゃない。何か、あいつの情報でもあればその時の役に立つだろうからな」

「そう、だね……でも、昔の事だからあんまりそこまで大したことは分らないんだ」

「そう、か……ま、それもしょうがないな。幼いころの話なんだし、高校生になって人柄が変わるってのも全くないってことあないしな」

「うん……ヤス、ありがとう」

「うん? おう」

さつきよりは明るくなった表情を見て一安心。

逆に追い詰めてないかなと不安になったりもするもんだが、そのあたりは奈々がなんとかしてくれるに違いない（確信）

その後日、俺たち江ノ島高校の対戦相手が決まったと監督から話があった。

監督が話していた予想を裏切り、次の試合相手となったのは全日大ではなく、辻堂学園だった。俺たち江ノ高サッカー部は、その驚愕の試合内容をそのミーティングで耳にすることになったのだった。

## 第18話

辻堂学園が勝ち上がったと聞いたその日の夜。

湘南の日比野の大砲のようなフリーキックを見たこともあり、それをうまい事実現でないかと模索をしているわけだが、良く分かったことが一つある。

俺は実際にその目で見た技術をすぐに自分のものにできると自負しているし、そういうチートだと思ってるし。頑強な肉体はどこまで昇華してしまうのだろうか（自画自賛）

しかし、そんなチートでもできないものと言うのはあつてだな。体の柔軟さを生かしたぬるぬるな動きとかな。肉体の強度を利用した強引な動きとか、日比野の弾丸シュートはね……そもそも俺の肉体の方が気持ち悪い事になってるから。

そんな俺はいつもの日課になってしまった駆との夜の練習を公園でやっていた。

いつも通りパス練習やらドリブル練習をしているわけだが、前回の試合の事と、辻堂学園との試合の事を考えているのだから駆の集中力はここぞとばかりの低さだった。いくら俺のサッカー歴が短いからと言ってこの酷さは苛立ってしまうものがある。

「おい、駆」

「え？ ど、どうしたの？」

「集中できないんだつたらすぐに止めるぞ」

「うえっ!!」

あたふたし始めた駆を見て、少し待っていたものの何も言っていない様子を見て本当に踵を返した。こいつはこいつで練習を続けるかもしれないが、怪我をするかもしれない行為を続けられるってのも何気に腹立たしい。

どうせなら駆にも失意のまま今日の練習を終えて欲しいのだがと思いつつ、公園の入り口まで来たところで誰かの影を発見。すわ不審者か？ なんて疑問が浮かんだものの、俺らもサッカーボールが無ければ非行少年の一端になる事に思い至り、しかしそれをおくびにも出さずに顔を窺った。

「……お前は、湘南大付属の、日比野？」

「あん？ お前は……確か、江ノ高の不知火だったか？」

わあお。顔を覚えられていらっしやる。

「えっ!!? ひ、日比野……?」

「久しぶりだな、駆」

「確か、幼馴染なんだっけか？」

「う、うん……小学生以来だけだね」

「そうか。まあ、積もる話もあるだろうから、適当に飲み物でも買ってくるわ。駆、何飲む？」

「え？ いや良いよ！」

後ろから聞こえてくる駆のあたふたした声を耳にしながら俺は真つ直ぐ自販機の前まで歩いて行つた。

さて……何を飲むか。

腕を組んで上下左右に視線を動かし、陳列しているジュースを眺める。

後ろの方からはボールを蹴る音と、何かしらの話声が聞こえてくるが、何を言っているのかまでは聞こえてこない。久しぶりに会った幼馴染と一緒に練習……聞こえは良いが、さっきの駆と日比野の様子を思い出すとそこまで良好な関係ではないのかもしれない。

小銭入れの中から一番大きな硬貨を取り出し、投入口に捻じ込んだ。

運動後なので適当にスポーツドリンクを二本チョイス。初対面の日比野にはやらん。

「治つてなんざいいえよ!!」

と、スポドリを取り出している時に一際大きな怒鳴り声が聞こえてきたので急いで駆けつける。どうやら日比野はどこかを怪我していたらしいが、ブランコに座っている駆と揺れているブランコを見て、二人仲良くブランコに座っていたのだろう姿を思い浮か

べると、なかなかどうして、笑えて来るものがある。苦々しい表情を浮かべている日比野の様子がさらにそれを際立たせている。

「俺の鞆帯は今でも切れたままだ！」

「へえ……お前さん、それであんな豪快なシユートを蹴れてんのか」

さすがに喧嘩沙汰になることは無いだろうが、しょぼくれた駆に代わって俺が話をし  
てやろう。

「てめえ……」

「お前さんの鍛え上げられたその身体を見るに、それ相応の訓練はしてきたんだろう？」

何が原因で怪我をしたのかなんて知らないが、逆それが理由でここまでやってこれた  
はずだ。辛い思いはしただろうがな」

「てめえに俺の何が分かる！」

「もちろん、生まれてこの方怪我の一つもしたことがないからお前さんの気持ちなんて  
少しも分かりやしないさ」

「なら部外者は引つ込んでろ！」

阿修羅みたいに深い溝を顔に刻んだ日比野は凄まじい怒声を荒げる。

不安そうにこつちを見ている駆を見ながら思う事はただ一つ。一応、夜だから近隣迷  
惑になつちやうよ？　ここ、結構広い公園だけど住宅街の中の一区画だし。

「が、お前さんが怪我の事について駆を責めるってのは割に合っていない行為だつて事を知ってほしい」

「なんだと?」

チラと駆の様子を窺う。

心臓の位置辺りに右手を当てているだけで、不安そうな表情はしているものの何かを言つて来ようとする気配は感じられない。全部、俺の采配で何とかなるか?

「小学生以来のお前さんは知らないだろうが、こいつは兄貴が亡くなったとき、同じくこいつも怪我をした」

「なんだと?」

「どの程度の怪我かは分からないが、少なくとも病院に入院するほどのものだし、前にサッカーの試合をしているときにピッチ上で倒れたつて話も耳にした。となると、結構な怪我だったと思うんだが」

「……本当か、駆」

手を胸に当てたまま、駆は辛そうな表情を浮かべている。

少し震えている腕。手のひらは胸をギュツとつかんで離さない。

「う、うん……ふう……僕は、兄ちゃんと一緒にいるんだ」

そこから語られる駆の怪我について。



居眠り運転に突っ込まれ、兄貴である傑さんはその時脳死に。目の前にいる駆は心臓に鉄パイプのようなものが突き刺さると言う大怪我も大怪我を負ってしまったという。

九死に一生を得ることになった駆は、傑さんの心臓を移植してもらってその怪我を乗り越えることができたそうだ。

思わず心臓を一撫で。

さすがにここまで大きな話になるとは思ってたぜ。

これには阿修羅日比野も啞然とした表情を浮かべている。逆によそよそしい関係にならなければ良いなと思わざるを得ない。こんな結果にしてしまったのは俺のせいなんだが。

「そう、だったのか……さっきは怒鳴ったりして悪かったな」

「ううん。日比野だって僕の怪我の事は知らなかったんだし、しょうがないよ」

「だが、そんな話を聞いたところで俺は試合で手を抜いたりなんかしないからな」

「うん！ 僕も、全力で日比野と……湘南と戦うよ！」

がっちりとした握手を交わす二人。

そんなに見詰め合っちゃって……腐女子が見たら感激しそうなワンシーンだな（白目）

そもそもまだ試合相手と決まってるわけじゃないのにお互い自信満々な様子ですね。

「まあ、そのためにはしつかり練習してレギュラーとして出られるようにしないとイケないんだけどな」

「ちよっ!? それは言わないで!!」

「……ハハッ! 良かったよ。今日お前らと話せて。これで心置きなく試合に臨める」  
「日比野……」

踵を返す日比野を見て、俺も少し前に帰ろうとしていたことを思い出した。

しかし、こうして二人の仲を取り持つことが出来たんだから、これで良かったのかもしれない。変にいざこざを残したまま試合に臨んで後々喧嘩沙汰にでもなったら大変だからな。この二人だけの問題じゃなくて二つの高校が出場停止になってしまう可能性すらあるし。

「それじゃあ、またな、駆」

「うん! 試合、うちが勝つから!」

「フツ……なんだそれ。勝つのは俺らに決まってるだろ」

大砲フリーキッカーの日比野が公園から去っていく。

……さつきから何気になんてたことが一つあるんだが、反対側でこつちの様子を窺ってる感じの奈々はどうしたんだ? 普通に入ってくればいいのに。まあ、さつきまでの二人の様子を思い出すと途中で割って入ってたら逆効果になってたかもしれない

から、そのままでも良かったのかも。

「あれ？　そういえばヤスって帰るんじゃないかったっけ？」

「お？　お前、それは俺に帰って欲しいって言ってるのか？」

「え、いやいや！　そんなことないよ！　もう少し僕の練習に付き合ってくれと嬉しいかなあなんて……」

「ふは……まあ、そこまで言うんだったら練習に付き合ってもやらんことも無いぞ？」

「ホント!？」

「ただまあ、明日の朝は絶対に起き上がれない程度まで練習してやるけどな」

「ええっ!？」

とりあえず、気が済むまで駆の特訓に付き合っただけレベルアップをしておこう。

このままFWのレギュラーを落とされて湘南戦で選出されることがありませんでしたってことにならないようにな。

## 第19話

『さあてやってまいりました神奈川県ブロック予選最終戦。江ノ島高校対辻堂学園！』  
さてさて。

ついに予選最後の戦いを迎えることになったわけですけども。

試合相手は予想を反して勝ち上がってきたダークホース。辻堂学園。

本来の予想試合相手の全日大付属——去年のベスト8を降したその実力は侮れないだろう。

昨日辻堂学園の名前を聞いたとき、そもそもサッカー部に所属してるほとんどの部員がその名前を知らなかった事を鑑みるに、相当な努力をしてきたんだと思う。そして、その時に鑑賞した試合内容もまた驚きを持ったものだ。

——30メートルを超える超ロングスローイン。

湘南、日比野の大砲フリーキックにも驚いたが、それは蹴りによって生まれた力技。

しかしながらこのスローインは体の使い方。下半身から上半身への力の流動。腕の振り方から手首のスナップまで。様々な要因を掛け合わせた技術と言っても過言じゃないだろう。

見た感じはただのヤンキーにしか見えないが、完全にアップを済ませてきている様子を見て油断ならないことを再認識する。

しかしだ。

そんな彼らと言えど付け込むところはある。

確かに、彼らはかなりの努力をしてきたんだろう。スタミナはかなりの数値として目に見えているし、体の作りもガツシリしている。薫が3人かかったところで蟻と象みたいな差を感じるし。

でも、ドリブルに関する数値はそこまで高くない。

超ロングスローインをする金大順キムデスンの平均値は高いが、それ以外の選手はそここの選手が多い。

辻堂学園が無名だったことを考えると、辻堂の監督がかなりの名監督なのか、選手たちの努力が全日大を降した理由だろう。まあ、全日大が無名の辻堂学園の事を侮っていたかもしれないという疑惑もあるが。

「不知火君」

「監督……どうしたんですか？」

「この試合、君にはかなり動いてもらうことになるでしょう。それに、もしもの時は」

「僕がFWとして動けば良いんですね？」

「……よろしくお願いします」

申し訳ないような表情を浮かべる監督の姿に、少しお道化て見せたくなくなった。

「監督、もしあの金キムって奴がスローインをして、次にうちがスローインする機会があったら僕に投げさせてもらっても良いですか？」

「そ、それは……分かりました。君の全力でやってみてください」

「了解！」

ビデオではそれなりに。

本物を見たら、俺はそれをしっかりと再現できるだろうか？

——いや、今の俺なら何でもできる。見せつけられたんだったら、俺もあいつらに見せつけてやれば良い。

心の中で何度も反芻する。何度も、何度も。

視界に大量の文字が浮かび上がってくるぐらいに、自信を体中に漲らせていく。

自己暗示。

何もそんなことをしなくても問題なく俺の体は見たものを再現してくれるのかもしれない。

でも、それじゃあいけない。何かがそれを許さなかった。

全て自己満足かもしれない。それでも、俺は俺として彼らと相對したい。

彼らの生き甲斐と向き合ってみたかった。

それでもしなければ俺は自分を嫌いになってしまいかもしれない。そんな気さえした。

——全力で、サッカーを楽しむ。

そのために、俺は俺の全力で彼らとの試合に臨もうじゃないか。

「ヤス……僕、頑張るね」

「あん？　なんだいきなり。今まで頑張つてなかったつてか？　お？」

「あいや!?　そんな事ないよ！　でも、ヤスには練習に付き合ってもらったし、それで結構巧くなったような気がするから……この試合で、僕は絶対に点を決める」

前を向く駆の様子を見て、フツと力を抜いた。

「いやいや、そもそもお前さんは控えだろうが」

「ま、まあ、そうなんだけどね」

同じように意気込んでる人を見て、自分の今の状態を見直すことができた。それが駆つてのもなんか笑えて来る話なんだが。

『キックオフ！　本日の試合は江ノ高のキックオフから始まります』

さて、中央に置かれたボールが蹴り出されてキックオフ。

前半は江ノ高のキックオフで始まったが、マコ先輩が保持しようとしているボールに目掛けて相手FWが一気に詰め寄った。しかも叫びながらのプレッシャーに驚いたマコ先輩はボールを後ろに戻してしまふ。

いきなりの叫び声に実況がラフプレーでしょうか。なんて言っているがそんなことは無い。示現流という剣術の一つにある『二の太刀いらす』は有名だが、そんな示現流には他にも猿叫えんきょうと言うものがある。

漫画などではよく「チエスト！」なんて吹き出しをつけられているが、実際には「キエー!!」と叫んでいる。これによつて、より自身の力を発揮できるだけでなく、その声量で相手の動きを一瞬でも止める作用が発揮する。

彼らはヤンキーにしか見えないが、よほど相手の監督の戦略性が優れているのだから。

これだけラフプレーをしそうに見えるのだから、さらに叫び声をあげることできついで当たりをされるんじゃないか？　なんて疑問を本能的に抱いても可笑しくない。見た目には悪いが、実際にこれでファウルをもらっている枚数が今までで一度も無いんだからさすがとしか言えない。

織田先輩がパスを受け、前にいる荒木先輩にパス。

足元でトラップし、そのままドリブルをしようとしたところ金のスライディングを受



け、ボールを転がしてしまい、荒木先輩はそのまま転んでしまった。その行為に火野先輩がファウルの抗議をしているみたいだが、金の足は完全にボールにいつていた。ちようどトラップして足からボールが離れた瞬間を狙ったんだらう。ファウルは認められず、そのまま試合は続行。

相手MFにボールを奪われ、そのボールを取りに行こうとした13番坂本がプレッシャーをかけに距離を詰めるが、ボールを足に当てられコートの外に出してしまう。ただ自陣にいた俺は速攻でゴール前まで戻る。一気にゴール前まで詰めてきた相手FWのすぐ側まで駆け寄る。

金がボールを持った。

『なんででしょうか……辻堂学園の選手もそうですが、江ノ高のDFだけじゃなくMFまでもが自陣の後ろまで下がっています。これには一体何の意味があるのでしょうか?』  
実況の言葉も当然なんだが、これは金が何をするか分かる奴にしか分からない事。

まさか、約35メートルのスローインをできるなんて普通の人は思わないし、見たことも無いだらうから。

『金選手のスローイン! ……え? ……これは、まさか……まさか一気にゴール前まで来てしまうのかあ!』

綺麗なフォームから放たれたボールはそのまま真つ直ぐゴールまで宙を舞う。

ちやうど俺が付いているFWに向かつて一本の軌跡を描いて飛んでくる。

「しゃあっ!」

「なあっ!」

相手FWよりも頭一つ分大きく飛ぶことで、ボールを軽々とヘッドでクリアする。

——もし江ノ高から点を奪取したんだったら、俺を何とかしないと点数は取れないぞ?」

なんてカッコつけてみるものの、クリアされたボールはまだ味方のコートの中を点々としており、江ノ高はまだ安心してできる状況になかった。

が、それを堀川先輩がスライディングでクリアしてくれた。

「ナイスクリアです!」

「ふんっ! 何とかクリアできただけだよっ!」

ツンデレ乙です。

見た目からして完全にオタクっぽい堀川先輩だけでも、そのスライディング技術は確かなものがある。尊敬すべき先輩の一人である。

さて、相手のコーナーキックから攻撃が再開されたものの、ゴール前まで飛んできたボールを紅林先輩がキャッチ。DFの俺へと戻された。

「上がれえっ!!」

「なにいい!？」

俺の怒号で一気に味方が上がり出す。

それにつられて動き出すあいてDF陣と、俺に向かつて真つすぐ突つ込んでくる相手FW。

「おらあああつ!!」

ヤンキーのようななしかめつ面から放たれる怒声は確かに心身ともにくるものはあるが、今の俺はチート製。つまり無双が可能と言う事。

それに加えて相手のドリブル技術とディフェンス技術はそこまででもないから、一気にドリブルで二人を躲す。それでも組織的に俺に詰め寄ってくる相手MF陣だが、ここで俺は急ブレーキをかけ、一気にシユートの体勢に。

「おつらあああああつ!!」

自陣から放つ超ロングシユート。

常人からは考えられない脚力で放たれたボールは一本の白い線を宙に描き、真つ直ぐ飛んでいく。

途中、相手DFが足を延ばしてボールを止めようとするものの、ボールの勢いに負けて足を弾かれてしまう始末。しかし、それによってボールの軌道は変わり、ゴールから外れてしまう。そのままゴールネットの横を通り過ぎたボール。

それを見て一つ息を吐く。

これだけの長距離シュート。入らなくて当然だとは思っていても残念だった。

歩き出す俺以外に動くものはなく、ふと疑問に思つて周囲を見渡した瞬間沸いた歓声に心底驚いてしまった。

「さつすが不知火だな！ あんなロングシュート持つてるなんて知らなかつたぜ！」

「いやいや、これぐらいだったらどんどん蹴つていきますよ！」

「おう！ 期待してるぜ！」

マコ先輩の言葉を皮切りに他の味方選手も声をかけてくる。

相手の金がこつちを睨んできているが、俺もそれに応える形でのロングシュートだったし……彼は俺の事を脅威に思つてるのかもしれない。

彼らがどう思つてるからは知らないが、同じサッカー選手の一人としてこの試合に臨もうと思つてる。

「油断してみろ……そしたら、今日も俺はハットトリックを決めるからな？」

## 第20話

前半も20分が過ぎようとしていた。

どちらも攻め手が決まらず、互いに無失点のまま時間だけが過ぎていた。

金がスローインで一気にボールを上げてくるという戦法を取ってくるものの、一気にゴール前まで下がることで相手の攻撃を防ぐ俺。スローインはオフサイドに適用されないって聞いたときは冷や汗をかいたものだが、実際に試合をしてみてもわかったのはそこまでDFが前に上がることは無いし、相手FWがいきなりDFラインを無視して上がり始めたら何かあると思うから何とかなかったが。

しかし、これをずっと続けられるってのは少し面倒な気はしている。

——後ろをチラッと見る。

「お？ 何だ何だ？ 俺の事が気になるのか？」

「くそ……」

意気揚々と紅林先輩の近くに立っている相手FWが非常に厄介だった。

確かに俺は自陣からでもシュートを蹴ることはできるけども、相手FWがこうもオフサイドを気にしないような位置にいるのは精神的に問題だ。身体能力を生かして、ギリ

ギリヘッドでクリアできる位置にはいるが、もし相手にスローインのチャンスが渡ってしまえばその瞬間に相手FWの所まで下がらないといけない。

しかし……それだけ何度も俺にスローインを見せてくれるってことは、金の超ロングスローを覚えても良いって事なんだよな（錯乱）

それにしても相手の類を見ないような戦術に皆参っているようだ。

攻め上がろうとする荒木先輩に詰め寄るMF、DFは大体3人。サイドにいるはずの選手がほとんど中央に集まっている。だからサイドから攻め上がれば良い。そう思っても今度は金のロングスローインが来るんじゃないかと恐れてサイドから上がれないでいる。

さて、いざ江ノ高の攻撃に移ろうとしているときの事だった。

『あぁつと!? ここまで火野、一枚目のイエローカードを出されてしまった!』

何気にうちで一番切れやすい先輩があつた火野先輩つてのが一番の問題だ。

相手のパスカットの時に何を言われたか知らないが、突然いきり立った様に相手にスライディングを仕掛けてしまった。それが完全に足にいつていたことで火野先輩はカードをもらってしまったわけだが……何をそんなに苛立っているんだ？

メンチを切りあっている二人を見て、審判の様子を窺う。

ギリギリのところまで織田先輩が止めに入っていたが、悪ければこれすらファウルにな

る可能性もあるんだから落ち着いてほしい。

悔しそうに顔を歪めている火野先輩に、ちよつとした心配がわいてしまった。

相手のフリーキック。

またしても金がキックの位置まで上がってくる。それを見てゴールキーパー近くまで上がってくる相手FW。だが、フリーキックしかできないからそこまで下がる必要はない。まるで俺は何かを企んでますよって顔をしてるが、ここで俺が下がったのを見てボールを上げてこようとするって算段だろう。

「おいおい。俺がこんなところにいるってのに余裕だなあ？」

「ああ、お前なんて余裕だよ」

「……嗚呼？」

実際、相手の中で一番能力が高くて厄介なのが金だからな。

それ以外はたいして何も思っちゃないんだ。それを他の皆が分かっているかどうかは別問題だが。

素早いフリーキック。

金の右足から放たれたボールは精確にうちのDF陣の間に飛んできた。

相手MFが一気にボール目掛けて走り出している中、一番近くにいた堀川先輩が距離を詰めるが、あと少しの所で相手がボールをキープしてしまった。

それを見て俺もボール奪取のため動こうとするが、後ろの方で相手のサイドバックが動き出しているのを確認し、その場で立ち止まる。もし俺が相手MFに飛び出していけば、全力で駆け上がってきている相手サイドバックにパスを出されて突破されてしまう。かと言って近くをウロウロしてた相手FWを無視して良いわけでもない。

……誰がシュートを打ってきても対応できるよう、この場で動向を観察しておこうじゃないか。

『おおつと!? DF不知火、ワントップの長谷川が手を挙げてボールを貰いに行っているのを見ても動こうとしないぞ!』

喧しいわ!

別に少しくらい距離を詰められたところで何とでもなる!

それよりも問題なのが――

「何やってんだ不知火!? しっかりマークつけよ!」

「……来たな!」

「はっ!」

俺の様子をうかがいつつも相手MFは直接ゴールを狙ってくることはせず、がら空きになつていたサイドにパスを出した。相手センターバックがオーバーラップを仕掛けていたのだ。俺はちょうど相手の真ん中辺り。センターバックまでそれなりの距離が



空いている。

そのままペナルティーエリア内でシュートを放つが、瞬間的な加速によって一気に距離を詰めて出した俺の右足がボールに触れたことで軌道がずれ、大きく後ろの方に飛んでいった。

『これはナイスセーブだあ！ 不知火、辻堂の組織的な攻めに対してしつかりと対応できていますぞ！』

「へっ！ 助かったぜ、不知火。さすがに今のは俺もまずかつたぜ……」

「いえ、まだまだこれからですからね。何とか仕事はしますよ」

「じゃあっ！ 俺もお前みたいに頑張るぜ！」

前半も残り10分を切ったところ。

相手はこんなにもチャンスを作り上げているというのに、うちは未だに決定的なチャンスを作り出せないでいた。

金のコーナーキックは精確にペナルティーエリアに上げられたが、紅林先輩がこれをキヤツチ。江ノ高ボールとなり、一気に織田先輩から荒木先輩までボールがあげられる。

またしてもサイドががら空きになっているが、その空白が罠かどうか悩んでいた荒木先輩だったが、手を挙げながら一気に駆け上がる火野先輩に向かってスルーパスを蹴

り出した。相手MFの足がギリギリ届かない位置を通るボールだったが、前からスライディングを仕掛けてきた相手MFに倒されてしまった。

が、うまい事ボールにいつていたためファウルにならず。

しかし、あのMF……さつき火野先輩が強引なスライディングを仕掛けた奴じやなかったか？ 嫌な予感が――

「てめええつ！ 不破あつ!!」

怒声、そして首元に掴みかかってしまった火野先輩。

そしてホイッスルが鳴り響いた。

『これはいけない。江ノ高FW、火野淳平。エキサイトして辻堂学園の不破に掴みかかってしまった。この行為に対して審判はイエローカードを出したが……この試合で2枚目という事は』

「退場しなさい!!」

「……く」

前半も残り5分少しと言う所で、ストライカーの火野先輩が退場。

これでうちは10人でこれからを戦っていかないといけなくなってしまう。そもそも攻めあぐねているつてのに、ここで攻め的人数が減るのは本当に痛すぎる。もし俺が前回みたいにFWとして動いたとしても、今度はDFが手薄になってしまう。

別に海王寺先輩や他のDFの方を信用していないわけじゃないが、今回は相手が相手だから……

『……で前半終了！ 攻めあぐねていた江ノ高はエースストライカーを失い、人数も一人少ない10人になってしまった！ 未だにノーゴールのままだが、後半からは10人！ 江ノ高はどうやって戦うのでしょうか!!』

ホント……俺は別に前みたいはどこでも使ってもらって構わないけれど。

そうしたら一人少なくなってしまうこの戦況の中でどういう選手の起用を取るのかが気になるところ。

バチン！

結構な音に驚いてその方向を見ると、退場をもらってしまった火野先輩を近藤監督がビンタをしているところだった。さっきのラフプレーに対して怒っているらしい。

それに対して火野先輩も愚痴をこぼしているが、近藤先輩から渡されたスコアブックを見て呆然としている。今になって呆然とするとか……よほど先入観に任せて辻堂学園の事を見ていたみたいだ。

何故か今回の試合において氣勢が小さい岩城監督も席を立ってしまった。

人数が少なくなってしまったことで江ノ高ベンチの雰囲気は少し悪くなってしまう。果たして、岩城監督はどんな気分転換をして帰ってくるのだろうか。

## 第21話

「後半、出たい方はいますか？」

休憩から戻ってきた岩城監督は、控えの選手に唐突に話かけた。

火野先輩が退場になってしまい、俺たちは10人で戦わなければならぬんだが、それでも精神的には出たいと思わないだろう。そもそもいきなりすぎるつてもあるんだが。

しかし、休憩がてらに出て行ったときと比べると大分明るい表情になってる。

髪が少し濡れてるから顔でも洗ってきたんだろうけど、それにしてもこのビフォーアフターの差が激しい。一体彼に何が起きたというのだ（意味深）

意味深と付すだけで何気に卑猥に聞こえてしまうこの不思議。

「出ます」

「お、俺も俺も……」

皆が戸惑いを隠せないでいる中、勇敢にも手を挙げたのが駆だった。

誰もが戸惑いを見せる中、積極的に手を挙げる駆に釣られて中塚も手を挙げた。

そして、静かに手を挙げている一人の選手。3年生のGK、李秋俊りあきとしさんだった。GK

のサブとして登録されてはいたが、今まで紅林先輩がスタメンとしてずっと活躍してきただけあって李先輩の活躍の場所は一切なかったのだが、いつも紅林先輩の後ろでイメージトレーニングをしていた李先輩の能力値は結構なものになっている。

経験は紅林先輩の方が高いけど、反射神経と身体能力は李先輩の方が実は高いんだけど。

まあ、その事を知っているのは今の所俺だけだろうし……さて、岩城監督はこの逸材の存在をどうするのだろうか？

「ほう？ 李くんですか」

「はい。不知火がしっかり守ってくれてますが、俺は奴らに点数を与えません」

「……なるほど。では、後半の頭から紅林君と交代です」

「はー！」

やる気十全の李先輩の後ろで何とも言えない表情をしている紅林先輩。

まあ、この大会を通してみてみればまだ一点の失点も無いわけだから、ここで交代させられるのは少し引つかかるものがあるのだろう。でもまあ、確かに俺が頑張つてゴール枠に入ってる感じのシュートを全部防いでいるつても大きいと思うが。

しかし、李先輩が言葉通り相手のシュートを全部止めてくれるって言うんだったら、俺ももう少し前に出られる。その点も含め、やる気に満ちている李先輩を選出したに違

いない。

岩城監督が後半から交代して出る選手に声をかけていつている。

李先輩、駆、中塚へと声をかけていき、そろそろ後半が始まるうとしているとき、監督が俺に話かけてきた。

「不知火君には、後半からも頑張ってもらう事になるんですが……」

「ええ、分かっています」

「前半、無失点で終わることができたのは君のおかげです。後半からは人数が減ってしまいましたが」

「と言ってもFWが減っただけなんで何とかなるかと。それに、駆と中塚が後半から頑張ってくれますよ」

幾分か驚いた表情を浮かべる監督の顔を見て、思わず笑ってしまう。

愚痴を言われなかったことだろうか。それとも二人の事を切り出されたからだろうか。

「中塚は分かりませんが、駆はいつも俺と一緒に練習してるだけあってそれなりに上手になってますよ。それに、あいつらだって俺たちと同じ部活仲間です。ちゃんと信じてますよ」

「……そうですか。それでは、後半もよろしくお願いします」

「はっ」

——他の部員に声を掛けながらDFラインに向かっていく。

今回の試合で俺がFWとして動かされる可能性がどれくらいあるかどうかはわからないが、今の所の俺の動きは前半と大して変わらないんだから、適当に頑張っついでいいじゃないか。

『後半のキックオフは辻堂学園からのスタートとなります！ さあ、前半で退場になってしまった火野選手の穴をどう埋めていくのか江ノ島高校！ 未だゴールの無いこの試合の行く末はどうなるのか!!』

後半が始まった。

前半と同様、相手FWがどんどん前線に上がってくるが、これに関しては監督に一つアドバイスを貰ってる。と言っても、前半で少し気にしていただけのこいつの存在を完全に忘れて、普通のDFとしての働きをしてくれと言われただけなんだが。

まあ、前半でボールの奪い合いでぶつかり合ったことがあったけど、チート性能を如何なく発揮するこのボディが難なく空中戦を制してくれたけれども。

「おいおい、良いのかよ俺の事無視して？ またスロージンで一氣にここまでボールを投げられたら面倒だぜ？」

「……」

「はん……それで前半得点を奪えなかつたくせに良く言うぜ。でかいのは図体と言葉だけで、実力が全く伴っちゃない」

「んだとお？」

「確かに金のスロインは大したもんだし、ドリブルも巧い。だけど、それ以外の奴に関しちや頑張つちやいるがそこまで巧くはない。それなのに、まさに荒くれ者どもの辻堂が勝ち上がったて来れたのは、ツと」

中塚がボールを奪いにピッチギリギリに詰めていったのに関わらず辻堂MFはバツクにパスを出した。まさにスロインを狙うための好機であるにも関わらずだ。そのつての能力値をみれば、金以外の辻堂選手の能力値の平均辺り。これを見るに、やはり辻堂の選手は足元の技術に自信がないのだろう。

が、バックパスを受けた選手に詰め寄った沢村先輩の隙を見て足にボールを蹴り出し、そのままボールはピッチ外に。それを見て俺はボールに集中し始める。少し離れたところにいる金が動き始めてる。

金の位置からゴールまでは約40メートル。

「不知火！ ワントップは俺が何とかする！ それ以外のFWのオーバーラップを警戒だっ！」



「了解！」

金の手からボールが放たれる。

一本の白い直線を描いて飛んでくるボールはそのままゴール前まで飛んでいき、相手ワントップのFWと李先輩の一騎打ちに。

「もらっ……」

『ああつとお!! 李だ、高い!』

「しやあああ!!」

結構大きな体の相手FWとのぶつかり合いにも負けず、ガツチリとボールを掴んだ李先輩はそのままロングフイード。

これが李先輩のフィジカルの強さだな。経験ある紅林先輩でもフィジカルで相手に勝っていたかはわからなかった。それを李先輩の鍛え上げられた体幹と筋力で空中戦をものにしたということ。

イメージトレニングは馬鹿にならないんだね。

敵陣へと切り裂いていくボールは駆の所へ。

高瀬は守備に回っていたために、駆がボールを受けてマコ先輩か荒木先輩に落とさなければならぬ。今の駆のドリブルでは一騎打ちに勝てるとは思えなかったし、あいつも自覚はしてるだろう。

「させるかよっ!」

そこへ相手のMFが飛び込み、駆とぶつかり合った。

勢いよく飛び込んできた相手とのぶつかり合いに、駆はそのままピッチに倒れ込んでしまった。頭同士の競り合いだ。もしかしたらどこか痛めてしまったのか？

——瞬間、駆の能力値が一気に跳ね上がった。

「は?」

「だ……大丈夫か駆?」

マコ先輩が心配して近寄っていく。

しかし、あれは本当に駆なんだろうか？ 流石にあんなに急激に能力値が跳ね上がる事なんて転生してから一度たりとも見たことがない。……もしや、あれは傑さんの心臓が?」

『金がドリブルで仕掛けるぞ! 両サイドに新堂と瀬田、そして中央にはスペースに飛び出しを狙う長谷川もいる。立て続けにピンチだ江ノ高!』

ドリブルを続ける金に堀川先輩と織田先輩が詰めていく。

それを見て後ろから上がっていた新堂にパスを出す金。

しかし——

「なっ!」

『あつと、これをインターセプトしたのは逢沢だっ！』

そのパスを狙ったようにボールをカットした駆。

少し前までぶつかり合いで倒れてしまった奴の動きじゃない。それに、一気に自陣のエリア前まで戻ってきた動きも一直線で、まさにここと決めつけてきていた。これじゃあ本当に駆じゃない……。

「てめーのドリブルの欠点は分かってたんだよこの一年が！ もらったあ！」

金と新堂がプレッシャーを仕掛ける。

前後からの仕掛けに、しかしながら駆は後ろに目が付いているかのように飛び上がり、フェイントを仕掛けて相手FW新堂を抜き去っていく。瞬間、俺の方を一瞥した。

「うお」

脳裏に湧き上がったゴールまでの軌跡。

そしてそれを決めたのは俺で、今ドリブルで上がっていく駆がラストパスを出している。る。

いつの間にか俺は走り出していた。

何かに突き動かされているかのような、そんな感覚だった。いきなりの走り出しに堀川先輩の突拍子もない声が耳に入ってくるが、それを一切無視して前へ前へ上がっていく。ただ一直線に。

駆が相手MFを左右の揺さぶりからの股抜きで一気に駆け上がる。

後ろからまたしても金が詰めていく。相手DFと挟まれた駆。近くにいる高瀬もDFが付いているし、左サイドをオーバーラップしている中塚にパスを出した所でシュートを狙える形にはならない。

「止めるっ」

『10番、金がタツクルにいったあ！ これを逢沢……な、パスだ！』

中塚でも高瀬でもなく、完全にゴールを狙ったパス。

『このパスに、不知火が飛び出してきている！ DFラインから一気にオーバーラップしてきた不知火が一気に飛び出してきたあ！』

相手GKが反応できない、それでいて普通の奴なら飛び出してからギリギリボールに届くまでのラストパス。荒木先輩でも良かったであろうこのパスは、しかしながらあの体型の先輩じゃほんの少し届かなかったかもしれない。

——だからこそこの俺か。

「うおおっ！」

『DF不知火、飛び出しからのダイレクトオ！』

力強いパスを、強引に軌道を変えてやる。

左足で蹴ったボールは一直線に相手GKの股を潜り抜け、そのままゴールネットを揺

らしたのだった。

『ゴオオオル!! 後半始まって10分といった所で試合が動いた! 先制点を決めたのは江ノ島高校一年、不知火だあ! 前の試合でハットトリックを決めた男がまたしてもこの試合で点数を決めたあ! そしてそのアシストをした逢沢の動きもまさに電光石火でした!』

「ふう……まさか、な」

シュートを決めたことの安心感と、拭い切れない違和感を胸に、江ノ高イレブンの抱擁を受け入れるのであった。

## 第22話

『さあ、先制点は江ノ高！ 後半も10分を過ぎようとしているここでの先制点は大きいでしょう。これからの展開が気になるところです！』

駆の様子がおかしかったんだが、むしろこの試合においては大きな結果に結び付けてくれた。能力値も格段に大きくなったことだし、これで駆自身に何の違和感もなければ良いのだが……

「駆、さっきのパスは」

「……えっ？」

ふと我に返ったような感じの駆の能力値は、以前の駆のものに戻っていた。

マコ先輩に話かけられても荒木先輩に軽く問い詰められても何も答えられない駆。それも、今のワンプレーについて全く覚えてない様子を見せている。やはりあれは心臓移植での後遺症的なものなのか。……だとしても今のところは悪い気配は感じないから大丈夫か。

さて、ボールが中央に戻ってきてきてリスタート。

俺はDFラインに戻っている。一点のピハインドになってしまった辻堂学園はこれ

で一氣に攻めてくるしかなくなってしまうたわけだが、個々の能力的に見ると金の能力だけずば抜けている彼らの攻めは、普通に抑え込むことができる。

相手は直前に切れきれの動きを見せた駆のマークを増やし、DFに当たっている。

という事はつまり、他の江ノ高選手のマークが減るといふ事。相手FWからボールを奪取した織田先輩が一氣に敵陣へとロングフィード。そこにいた高瀬がボールを受け、マコ先輩にヘッドで落とした。ここまでは江ノ高の定番の形。

そこにMF二人が詰めていくが、おかげでマークが手薄になつた荒木先輩に縦パス。

これを受け、荒木先輩はそのまま前へとドリブルするが、駆とアイコンタクトをしているのを見ると、二人でシュートまで持つて行こうとしているのだろう。

駆が荒木先輩にボールを貰いに行こうとする動きを見せている。

「させねえ！」

それを見た相手MFが距離を詰めるが、一転、駆は全く別の方向に走り出してしまった。これに反応しきれなかつた相手MFが戸惑いを見せる中、荒木先輩のスルーパスが敵陣を縦に引き裂いた。

『DFの裏を抜け、逢沢の元へとボールが行く！ 逢沢、これまでの試合でも見せてきたトリッキーな動きでマークに付いていた不破を一氣に置き去りにしたあ！』

ボールは駆の駆け出しているところに精確に飛んでいく。

そして、ラン・ウイズ・ザ・ボールで前へとボールを落とし、飛び出してきた相手 GK すら躲して見せた。駆の前に遮る者は誰一人としていやしない。駆の振りぬいた右足の延長線上を駆けていくボールはそのまま相手ゴールネットを揺らすのだった。『ゴオオオル！ 二点目は後半から出場した逢沢だあ！ 先ほどは素晴らしいドリブルを見せましたが、今度は自分でシュートを決めました！』

後半もそろそろ20分を過ぎようとしているところだった。

ふと辻堂学園イレブンの表情を見渡してみるが、全員がしつかりと前を向いている。むしろよりやる気を灯したような顔をしている。隙を見せたらすぐに噛みついてやらんとせんばかりの表情だ。

2点も取られてしまつては精神的に参つても可笑しくない。

しかもこの時間だ。肉体的にも疲労がたまっているはずの状態で、むしろ万全の状態。挑んでくる辻堂の選手たちには驚きを隠せない。それだけサッカーが好きなのか。

……いや、見た目からしてヤンキーっぽい彼らは向こうの瓜生監督に鍛え上げられた戦士たち。いや、容姿からすれば荒くれ者たちなんだが、彼らは自分たちの恩師に勝利を与えたいのか。男だからこそ分かる単純な行動原理。絆によって結ばれた彼らのサッカーってわけだ。

サイドから相手FWがドリブルで上がってくる。



「行かせないぞ！」

「くっ……」

それを遮るのは駆。

内側からプレスを掛けに行ってる駆だが、それに対してすぐにボールを蹴り出してサイドを割ることを狙ってこない辻堂選手。

「駆！ そのまま内側から外に追い詰めていつて！」

「えっ？」

「サイドラインギリギリまで追いつめないである程度距離を取って！ そうすれば相手はスローイン狙いのキックをしにくいはずよ！」

奈々の的確なアドバイスがピッチに響き渡る。

「ビビッてねーでスローイン狙ええ！」

「しくじっても俺らがフォローしてやる！」

そこに金と不破の怒声が届いてくる。

攻撃に出れないでいた相手FWへのフォローの声。それを耳にしたFWはそのままキックをし、駆の足に当たったボールは、しかしピッチの内側にこぼれてしまった。

それを確保しに動く駆だが、それにプレッシャーをかける金と不破の二人。

「駆！」

「ヤスー！」

オーバーラップをしていた俺が横からボールを要求。

ルックアップしていたおかげでしつかり前を見ていた駆だったが、今の所マークの付いていない俺にパスを出してきた。前線には高瀬と荒木先輩。そして、俺と同じくオーバーラップを仕掛けているマコ先輩に一気にクロスを上げる。

『江ノ高随一の万能選手兵藤誠がオーバーラップ！フリーでボールを受けてそのままバイタルエリアを駆け抜ける！それを見て逆サイドには高瀬がマークを振り切って突入う！』

江ノ高のチャンスが続いていく。

そもそも金のロングスローインは、言つてしまえばただのゴール前に飛んでくるだけのフリーキックみたいなもの。まあ、距離的には厄介な事には変わりはないんだが。それも、相手ワントップのFWのフィジカルじゃあ俺にも、ましてや李先輩にも敵わないんだから攻めを変えるしかないんだが。

「取らせるかあつー！」

「つぶせえー！」

これ以上点数を取られたくない辻堂DF陣が凄まじい勢いで自陣に戻り、マコ先輩にプレッシャーをかけていく。しかし、マコ先輩も巧いもので、しつかりとボールをキー

プしたままドリブルを仕掛け、ギリギリのところ綺麗にループシュート。

1人、2人とDFの頭を超えていき、このまま3点目が決まるかと思いきや、その少し後ろにいた3人目の長身なDFがジャンプし、ヘッドでクリアされてしまう。そのままGKがキヤッチ。

すぐさまリスタートとなり、ハーフラインの所、相手MFと中塚が競り合ったボールがそのまま点々と転がっていき、そのボールを追って沢村キャプテンと相手SBがスライディングをしあう。

「マイボール！」

「ウチだぜ！」

「辻堂ボール！」

「なっ……」

そのままサイドアウトになってしまったボールは辻堂のものになり、相手FWが一気に駆け上がる。ハーフラインまで上がっていた俺もそれを見て駆け出す。さすがにそのまま李先輩一人に対応させるわけにはいかない。

『出たあ！金のレーザービーム！』

フリーキックのように飛ぶボールはそのまま真っ直ぐゴール前まで飛んでくる。

飛び出しをしていた相手FWに李先輩が行っている。それを確認して、俺は中央から

上がってきている相手MFに集中する。

さつきから何度もワントップで飛び出しを敢行してるのに囷にしか使われない相手FW。可哀想。

『これに飛びつくのは9番長谷川……いや！ 左サイドMFの新堂が飛び出した！ かし不知火がしつかりとマークしていたあ！』

「ゼツテエ決める！」

「させねえ！」

同時に飛び上がり、しかし跳躍力で軍配が俺に上がった。

ぶつかり合いでもビクともしない俺の肉体に、ぶつかってきたはずの相手MFだけが弾け飛んだ感じ。もはや無敵の空中戦。そのままボールに激しい頭突きをかまして大きくクリアした。

それも、またしても金のスローインにならないように自陣の中。それも味方がいる所目掛けて。巧い事荒木先輩の所に飛んでいき、そのままドリブルを仕掛ける。今の攻撃で少し手薄になったところを一気に駆け上がっていく。

『不知火が競り勝ったあ！ 強烈なヘッドで一氣に味方が攻め上がっていく！』

——そもそも俺を抜こうってのが間違いなんだ。

それを全国に知らしめるための戦いなのかもしれない。

俺は、てめえらがどんな攻め方をしてこようとも止める。そして、油断を見せた瞬間に俺はてめえらの喉元を食い千切る。

それぐらいの気迫を見せておけば、攻めにくくなるはず。そうすれば相手は自然と俺を避ける様な攻めをせざるを得なくなるわけだが、つまるところサイドからのクロスで合わせようとしてくるはず。

李先輩のフィジカル、そして俺の空中戦を合わせればそんな攻めでも江ノ高のゴールは絶対に崩せない。紅林先輩は……何とも言えないが。

時間は矢のように過ぎていく。

辻堂学園は金を中心として、その体格と不良のような見た目から放たれる氣勢はさすがと言っても良いものだったが、それ以上に江ノ高のメンバーが巧かった。この試合内容、まさにその結果が如実に現れてしまった感がある。

『試合終了！ 江ノ高、辻堂学園を3対0で下し、決勝トーナメントに進出う!!』  
「やった……勝ったあ！」

「嗚呼……やったな」

辻堂は惜しい攻めを見せながらも1点も奪取することができずに敗退してしまった。

見た目からしてヤンキーな彼らのプレイは、それに反して質実剛健な内容で、ファウルを取られたのはただの一度きりと言うフェアプレイを見せてくれた。

そんな彼らに観客は全員が温かい拍手を送っていた。

「皆……すまん！」

いきなり火野先輩が頭を下げてきて、控えの選手を含め、全員が

「火野先輩……」

「俺の、勝手な感情で皆に迷惑を掛けちゃった……けど！ これからは、皆に迷惑かけないよう頑張るんで、よろしくお願いします！」

必死の懇願に、誰も何も言えないでいた。

ただ一人、マコ先輩だけが歩み出て火野先輩に声を掛けた。

「良いんだ淳平……俺たちは試合に勝ったんだ。確かにお前は俺たちに迷惑を掛けたかもしれないけど、俺達にはこれからがある。……へへっ、とりあえず今は喜ぼうぜ？」

「マコ……ありがとな」

申し訳なきように、それでいてどことなく嬉しそうな表情でマコ先輩と手を繋いでいる火野先輩だが、正直もう少し反省していただきたい。

試合に勝てたのは良いものの、正直一人いない状態での試合がどうなるのかなんて分からなかったが、出場してる選手の精神的負担は大きいものだった。まあ、途中退場になつた火野先輩もベンチで精神的に参つたのかもしれないけども。

とりあえず、この試合に勝つた俺たちは決勝トーナメントに進むことができたんだ。

今は、ただ嬉しそうに笑っている皆と一緒にになって喜ぶことにしようかな。

## 第23話

辻堂学園を下し、決勝トーナメントに進んだ俺たち江ノ高メンバーは、次の試合まで3週間あるという事で、試合があつた次の日は完全休養になつていた。つまるところ、試合が続いていた今まで行つていた朝練やら調整やらが無いという事で、ゆつたりとした朝を迎えることができていた。

「康寛、今日は部活の練習は無いのか?」

いつもより遅い時間に起床してリビングに向かうと、朝食を食べ終え新聞を読んでいる父さん——不知火友康<sup>ともやす</sup>。今年で37歳になる父さんは、白髪交じりになつてきた髪をオールバックに決めている。温和そうな表情を浮かべているが、いかにも仕事ができそうな風格を漂わせている——が声をかけてきた。

「父さん……今日の朝練は無いよ。昨日試合があつたから、今日は休みなんだ」

「そうなのか……いやあ、家でゆつくり康寛の顔を見れるのも久しぶりだなあ」

「なんだよいきなり。部活が終わつた後とかはそれなりにゆつくりしてるだろ?」

「ああ、そうだったな」

父のその言葉に俺は少し呆れ、父さんは一人苦笑していた。



俺は、両親に転生者であることを打ち明けたことは無い。それどころか、誰にもこの件に関する話はしたことがなかった。

他愛無い会話、他愛無い日常。

——俺が転生者だという真実を打ち明ける日は来るのだろうか。

「……言わなくても良いだろうか」

「ん？ どうしたんだ？」

「いや、何でも無い。学校行く準備でもしてくるよ」

「ああ」

結局、今まで通り真実を胸に隠したまま、今日と言う一日を過ごす事にしてしまった。

だからと言って特に何も起きないんだけどね。

少し、シリアスに感じられるようなセリフを言ってみたくなくなってしまふ事つてのは誰にでもあると思う。自らセンチメンタルになる。それこそ厨二病の元となっている温床なんだと思うが。

まあ、こうやってくだらないことをつらつらと頭の中で考えては消えていくこの過程も、一種の暇つぶしになっていると思えば悪い事ではない。

「貰ったあー！」

「んあ?」

「んなあつ!」

今は体育の時間。

サッカー部の練習は無くても一日は過ぎていく。つまり、平日普通の日の今日も授業はあるわけで、今は体育の授業の一環としてサッカーをしているわけだ。

何故かこのクラスには俺を含め4人のサッカー部員がいるわけだが、それ以外は普通のクラスメート。気を抜いても俺がボールを取られることは無い。

ちなみにチーム分けは俺と駆。それと、中塚と高瀬の2人ずつに分かれての編成となっている。しかし、授業のサッカーでクラスメート相手にマジになるつもりもないし、適当に流していこうか。にしても皆結構普通に運動してるなあ……俺の昔のクラスメートもここまで動いてたっけかなあ。

「おらおらおらおらあ!」

「はいはい、ボールは貰いましたよお」

「ちつくしよお!!」

突撃してきた中塚からボールを奪う。

足は速いがドリブルが雑すぎて簡単にボールを奪えてしまう。愚直な攻めは嫌いだ。嫌いなんだが、いかんせんもう少しドリブルが巧くならないとなあ。レギュラーにな

るのは難しいだろう。せめて、もつと足が速けりやな。

「ほおら駆、パスだぞお」

「うん！」

適当にパス。

俺が体育の授業でガチになったら皆の体が宙を舞う事になってしまふ。嘘でも冗談でも何でもなく、間違ひなく大怪我を負わしてしまふだろう。いや、流星に人間の体もそこまで貧弱じゃないか？ 俺は人間を辞めるぞ！ ジョジョオ！ とか叫んでおいた方が良いのかなあ。

「いくよ、康寛！」

「……は？」

適当にパスしたりカットしてたらいつの間にか奈々が参加してた。

一体俺が何を言ってるか自分でもよくわからない。でも、確か女子は体育館でバレーボールをやってたと思うんだが。しかも、奈々が参加したことで人数も向こうの方が多。とは言え、そこまでの戦力差にもならないんだが、さすがに奈々の参加はまずい。あいつ一人で何人力だよ。

その他大勢と化してしまつたクラスメートの男子の間をすると通り抜け、すぐに俺と一対一のシチュエーション。何だこれ？

「なんで奈々が男子の方に参加してんだ！」

「だって、向こうでバレーしてるだけなんてつまらないんだもん！」

「もんつて……お前え」

「康寛もなんでここまで上手になったのよ！」

「部員として巧くなって何がいけないんだか」

「それでも！ 認めたくないって思っちゃうんだよ！」

「何をだ！」

会話しながらも続く奈々のドリブルにフェイント。

最近だと結構夜に公園で一緒に練習してることもあり、奈々の癖つてのは大分わかっ  
てきてるし、どうやって抜こうとしてくるかも判断できるようになってきた。昔結構格  
ゲーやってたから、対人戦でどんな技をどういうタイミングで出してくるのか。それを  
感じ取れるようになったら、おめでどう、君も人間卒業だね！

「ハハハ！」

「甘いっ！」

「きやつ!?!」

ウイツチターン。

奈々の小さな体とテクニックを生かしたターン。

だけど、その動きも予測済みでした。ボールを奪った俺はそのまま駆にパスを出す。しつかりとパスを受け取った駆はそのままドリブルで駆け上がっていき、前に飛び出してきたクラスメートを容赦なく新しく習得しつつある幻のフェイントやらで抜き去り1点を奪取した。

「いやあ、クラスメートにも容赦のない奴ですなあ」

「……それを言ったら康寛も結構容赦なかったけどね」

「奈々は対象には入らないだろうに」

「それでもー」

イーツとあつかんべーしてくる奈々の姿がかなり幼く見える。

なんだ、俺はロリコンになってしまおうというのか……奈々が可愛く見えてしまうなんて。

奈々からボールを奪った俺はクラスメート男子諸君から嫉妬交じりの視線を向けられ、ちびちびと絡まれてしまう。お？　なんだ、俺のアイアンクローでも食らいたいとでもいうのかね？　と指をワキワキさせたら急いで逃げて行ってしまった。解せぬ。

そして奈々の周りには男子が集まり出してしまふ。

今は他の女子男子諸君もいないから簡単に集まれるんだろう。普段は周りの女子に煙たがられる悲しい生き物だからね。仕方ないね。

——しかし、さつきから気になってるんだが、学校の外からこっちに向かってカメラを構えてるあのおっさんは一体誰なんだ？

## 第24話

まさか学校の授業中に奈々とサッカーすることになるとは思ってたが、これからまた普通に夜サッカーの練習もするんだろうなあ。特に駆は。

前回の辻堂学園との試合の中で結構な働きを見せてくれた駆だが、それでも自分で動いたって記憶がない分よくやったと言われても嬉しくはないだろう。と言うわけで、今日も今日とて練習をするという動機だろうな。

「さて、今日も公園……お？」

と、歩いてやってきた公園だが、謎のマスクマンが駆と一対一の戦いをやっているじゃありませんか。と言っても、漫画みたいに拳と拳を合わせる喧嘩みたいなことをしているわけじゃなく、サッカーで勝負をしているわけだが。

いかんせん、駆とマスクマンのテクニクに差があり過ぎて駆が圧倒されている。足元の技術も、フィジカルも。

……しかしこの動き、マスクマンの動きがどうしてもビデオで見た彼に似ているような気がしてならない。

「この程度なのか？」

「え？」

おっと、ここでマスクマンがマスクに手をかけ、そのまま謎のボールに包みこまれたその顔を露わに……って、本当にレオナルド・シルバじゃねえか!?

何を話しているのかここからだとし聞き取りにくいけど、いつの間に駆はシルバと出会ってたんだ？ まさか、昔傑さんの伝手で会う機会があったのか？ しかし、そうだとしてもマスクをかぶる必要なんてなかったはずだし。

「うあああああー！」

「は？」

いきなり駆が叫びながらシルバにドリブルを仕掛けに行つた。

そして、またしても駆の能力が急激に上がるのを確認してしまった。

シルバに何を言われたのか知らないが、もしかすればそこまで激高するような内容の話が言われたのかもしれないし、シルバに出会つたことで何らかの記憶を思い出したのか。

それにしてもこんな急激に能力値が上がるなんて卑怯にもほどがあるが、これでもし後で駆に話を聞いて覚えてないって答えたら完全に二重人格みたいなもんだなあ。

駆の足元に吸い付くように動くボール。

全身の総毛が立つような鋭い感覚。



それを受け、厳しい表情をしていたシルバの顔に笑みが浮かんだ。

「駆っ！」

「なっ……」

木の裏に隠れていた奈々が飛び出してきた。

たぶん、駆の様子が変わったことに驚いて飛び出してしまったんだろう。一気に駆のまどついていた雰囲気が変わり、急激に上昇していた能力値も元の駆のものまで下がってしまった。

その事に納得できていないのがシルバで、駆の雰囲気が元に戻ったことを感じ取ったのか苦々しそうな表情を浮かべている。が、そこで駆が習得中のフェイントを繰り出した。

「いけえー！」

「……な」

全くボールの行方を目で追えてない。

完全に棒立ちの状態で抜かれてしまったシルバの表情は驚愕で満たされている。

しかし、俺もそのフェイントを自分の目で見ることができたので、少し練習すればできるようになるだろう。そして俺もシルバを驚かせることができるだろうか。

「よう、こんな所にレオナルド・シルバがいるなんて思っても無かったぜ」

「ん？ 君は……」

「ヤスー！」

「ヤスってことは……君が不知火君か」

不敵な笑みを浮かべ俺の事を見つめてくるシルバ。

意外にも俺の事を知っているらしい。

「俺のこと知ってるのか？」

「それはそうだ。高校からサッカーを始めたつていうのに、試合では相手のシュートのことごとくを止め、そしてDFなのに前の試合ではハットトリックを決めている。そんな新人君の話題を耳にしない方がおかしいんじゃないかな？」

しっかりと情報収集をされているようで。

そこまで知られているのもなんかくすぐったい感じがする。俺が最初にサッカーの技を知ったのは岩城監督に渡されたビデオとは言えシルバの技術。極論になるかもしれないが、俺にしてみればシルバこそ最初の師匠だからな。

「そう言ってもらえるなんて嬉しいな」

「なら良かった！ 僕は君と試合をするのを楽しみにしてるんだ。もし試合をすることになったらよろしく頼むよ」

「(ヤ)ち(ら)ん(ぞ)」

「……しばらく日本でサッカーやることにして正解だったよ」

——色んな意味でね。

その一言を残してシルバは去っていった。

すぐく気になる言葉なんだが、サッカーをすること以外に関しては特に関係なさそうだから考えなくても良いかな（適當）

まあ、世界的に有名なシルバに会えて良かったと思っておこう。

と、その後は少しだけ練習をして解散することに。

これはいつもの流れなんだが、そこでふと奈々の漏らした言葉が非常に頭に残っている。

『いつかきつと日本代表になってくれるよね？』

これは俺に向けられた言葉ではない。

昔、奈々と駆が何か約束事でもしていたんだろう。しかしラブコメをしているなあと思えない（苦笑）

駆が奈々のボールを少し強引に奪いに行こうとした際、そのまま二人がもつれ合う様にして倒れ、駆の上に奈々が乗つかる状態に。いやあ、ラブコメしてますわ（真顔）

こうして夜の練習に参加させてもらってる俺が言うのもあれだが、なんでこいつら付き合っていないの？（迫真）

独白なのに括弧が多すぎるって？

それだけ俺の脳は砂糖にやられてしまったんだ……納得してくれ。

そして次の日。

今日も今日とていつも通り学校へ登校してきまして、事件が勃発。

……誰かが事件を起こしてしまい、ここから一気に探偵ものの話になる。なんてことは無く、話は薫が持ってきた新聞の一面によって巻き上がった。

題名は『なでしこジャパンの救世主』。写真には奈々の躍動感あふれる姿が映っていた。そして下には制服姿の奈々の写真も。

あの野郎……サッカーの授業中に写真撮ってた男はこういう事だったんだな。

そして俺たちはなでしこジャパンの、奈々の試合の応援に行くことにしたのだった。

## 第25話

さあやって参りましたなでしこジャパン対SFフランクフルトの親善試合。

ただの女子サッカーの試合だったらそこまで興味は沸かないかもしれないが、今回は奈々が一選手として試合に臨んでいることを思えば見たくなっても可笑しくない。そもそも、幼馴染がこうして国際的な試合に出てるって考えるだけで結構なことだと思うのだが、そこまで駆は考えてるんだろうか？

「セブン……大丈夫かな」

「なんだ、奈々の事が心配なのか？」

ボソッと聞こえてきた駆の呟きに返事をしてやると、焦ったような照れている様な表情になる駆。お前が奈々に恋心を抱いてるのは大体わかっているからそこまで焦らなくても大丈夫だぞ、と天使の様な微笑をもって駆に話したらどんな反応をするんだろうか。

……気になるがやめておこう。

「うえっ!? う、うん……セブンがなでしこジャパンで活躍してるなんて知らなかったから」

「奈々がお前に隠し事をしてたのが気にいらなんだろ？ もう付き合っちゃえよ」

「いや！ 僕とセブンはそういう関係じゃ！」

「ないのは知ってるから早く公の関係になれと言ってるんだ」

あわあわして手を振り回したり顔を赤くしたり、一人百面相をしている駆の様子を少し見て、それからピッチ上に立っている奈々に視線をよこす。そこには周りのなでこジャパンのメンバーに話かけられている奈々の姿があつた。

あれだけのテクニックを持つてる奈々の事だ。少しなでこジャパンの一員として活躍してればその能力がすぐにわかるだろう。俺たち男子に交じってやり合ってもフィジカルで負けることのないそのテクニックに。

『ミーナちゃああん！』

薫や高瀬が奈々の話をしてるのを横で聞いていると、いきなり後ろから男子どもの大歓声が響き渡った。ちょうど真ん前で聞いてしまった俺は非常に顔を顰めている。カットカット……手で耳を抑えながらピッチに出てきたフランクフルトのメンバーを眺める。

そこには、昨年度優勝したメンバーがいる事には変わりはないのだが、そのメンバーの先頭に立って観客に手を振っている一人の女性の姿が目映えた。

「ミーナ・マイヤー……か」

「そうだ。日本じゃほとんど海外の選手は知られてないかもしれないが、そんな中でもあいつは別格だ。一人のサッカー選手としてもそうだが、ヨーロッパじゃアイドルみたいな存在だからな。ドイツ代表で次期エース。それにファッションモデルもやってる」  
「駆の隣にいつの間にか座って観戦しようとしていた日比野が事細かに教えてくれた。少し前までオランダにいたという日比野の言葉だ。ずっと日本で暮らしてる俺たちよりも情報を持ってても可笑しくない。」

しかし、駆と日比野の二人はどうしたんだ？

たぶん奈々の事を見てるんだろうが、2人して目を細めて……まるで眩しい物を見るかのように。なんだ、日比野も奈々に惚れてるとか想いを抱いてるとか、そんな理由じゃないだろうな？ さすがに俺の近くでそんな昼ドラ的關係に纏れ込んでほしくないんだが。

『この大歓声の目的はミーナ・マイヤーだった模様ですね。彼女は日本に来る前にファッション雑誌に登場するなど、日本でも人気の上がっている選手です。所謂女子サッカーにおけるシャラポワと言われる選手です』

18歳にしてドイツの次期代表ってんだからそのテクニクはかなりのものだろう。そのスタイル維持してなお雑誌に載るだけの意識を持つてるんだ。普段からかなりの努力を重ねているんだろう。これが英国人だったら周囲に努力してる事がばれない

ように隠れてやってるのかも知れない。あの国は、頑張つて何かしてるところを見られたいとは思わない種族だからな。

日本人のように普段から残業までしてあからさまに『頑張つてます!』オーラを出すことを良しとしない国民性だからそうなつてもしようがないんだが。かく言う俺も昔はそんなブラック性の強い男だったかもしれない。決して日本男児とは言えないが。

——試合開始。

最初は日本から。

身長からして負けている日本は足で。つまりパス回しで隙を作つて前線にボールを持つて行こうとする試合展開を考えているんだろう。一番背の高い選手でGKの福田選手で178cm。

それに対してドイツの中心的選手のミーナで184cm。他の選手もほとんどが170cm台で、160cm台の選手は二人しかいないという状況。はつきり言つてフィジカルで日本は負けているからテクニクで何とかするしかないのだが、そもそも海外の選手もテクニクは高い。こうなると最終的には気持ちの問題になつてしまふんだが、それで勝てるほど世界は甘くない。

奈々に渡つたボール。

それをドリブルで持ち上がろうと動き出した奈々だったが、そこに仕掛けたのがミ-



ナだった。観客席から見ても細いその身体だが、そのユニフォームの下に隠されているしなやかな筋肉はどれほどのものだろうか？

奈々の足元のボールを、近くにいたフランクフルト選手に奈々の意識が行った瞬間にボールを奪ってしまった。

「180cmを超える長身ながら無駄のない細身の体で、飛ぶように軽やかなプレーを見せる彼女に付いたニックネームが『E i n S c h w a n a u f d e m R a s e n』」

——ピッチの白鳥。

一足で一気に奈々のボールを奪い、ピッチを駆けていくミーナの姿は確かに綺麗なのかも知れないが、だからと言って女子に白鳥というニックネームをつけるのはなあ……観客は良いかも知れないが、それを受けてプレーをする彼女は……

あ、そもそもモデルやってるからそこまで恥ずかしいとも思わないか。彼女のことだ。逆に光栄なことと思ってるか、自尊心が強ければ私にこそ当たり前に似合ってると思ってるかも知れない。それとももつと良いニックネームを要望してるかも？

でも、そういう気概のある選手こそ強くて当然だし、これからの代表として主張ある選手として活躍できるだろう。

奈々に近づいた選手とワンツーで一気にドリブルで上がっていく。

それに対する日本のDF陣のまとまりがあまりない。バラバラとドリブルを仕掛けてくる選手に集まろうとしているだけの動きだ。そこにミーナはアーリークロスを上げようとする動きを見せ、一瞬その場に留まるが、つい引きつられて動き出した日本DF陣をあざ笑うかのようにドリブルを再開し一気に駆け上がる。

一人、二人。直線的に日本のDF陣営を切り裂いていくミーナはそのままミドルシュート。右足から放たれた迷いないシュートはゴールの左隅へと決まったのだった。

『ゴォオオォ!! 0対1、フランクフルト先制!』

「そんな……セブンがあんなにあっさり」

「おいおい、確かに奈々は抜かれたがあんなことでへこたれる様な奴じゃないだろ?」

「……確かに」

リスタート。

何故か日比野から大きく頷かれはしたものの、今度は奈々が気張ってドリブルを仕掛け始めた。周囲を見渡しながらドリブルを仕掛ける奈々。そこにプレスを仕掛けるフランクフルトMFだが、それをヒールリフトであっせりと躲してしまった。

あそこで躊躇いなくヒールリフトができる奈々が凄いと思わざるを得ない。

テクニクが必要になるだけでない。ありやあ、派手なフェイントだけあってDFを引き付けやすくするって言う欠点もある。しかし、ボールの行方を見ることなく相手D

Fを引き付けようとしている奈々には驚きだが。

そして、またしてもミーナが奈々にマークとしてついた。

同じようにボールが奪われるかもしれない。そんな不安もあつてか、チラと一瞥した  
駆の表情にはありありと感情が漏れ出ていた。

——奈々が仕掛けた。

身体を一回転させるそのフェイント。俗にいうルーレットだが、ミーナもそれを見て  
からしなやかに体を動かしルーレットで行く先を潰してしまった。が、奈々はそれ以上  
の動きを見せてくれた。

『出たあああああ!! あれがですよ、あれが……彼女がデビュー戦でいきなりハット  
トリックを決めたときに見せた、彼女の代名詞ともいえる“ウィッチターン”です!』  
先回りしようと動き出したミーナの事が背中で見えていると言わんなばかりにボー  
ルを操り、その逆の方へとドリブル。突破して見せた奈々の姿に動揺し、動くことがで  
きなかつた相手GKを嘲笑うかのようにシュートを決め、あつという間に1対1。試合  
を振り出しに戻してしまったのだった。

手に汗を握る試合とはまさにこのことだろう。

それを演出しているのがまさか俺の幼馴染だとは思うまい。それに、良いものも見せて  
貰った。男子相手だつていうのもあつたのか、それとも単に忘れていたのか。ウィッチ

ターンなるものを。

——これでまた、皆を驚かせるネタが一つ増えたわけだ。

ニヤリと、どうしても上がってしまう口角を抑えきれず、そのまま試合の観戦を続けるのであった。

## 第26話

試合は奈々とミーナを中心に進んだと言っても過言じゃないだろう。

それだけあの二人の活躍は大きなものだったし、そもそもあの二人で合計点数の半分以上を得点してるといふんだからお互いにとつて怖い選手であることに違いない。

最終的に試合は6対5で終了した。

全くもつてこれが女子サッカーの試合なのかどうかも疑わしい点数だが、正直、この二人の能力が突出しすぎてたせいで日本、フランクフルトともに守備陣が機能しなかったが、彼女たちの実力を一笑するだけの実力を兼ね備えてしまった攻撃陣を止めるつてのがそもそも厳しい話なんだが。

ちなみに、今回の試合で勝つたのはなでしこジャパンだ。

夜の練習が実になったのか、それとも最初からこれだけの実力を隠し持っていたのか。他の女子をテクニクで圧倒し、身長差をもものともせずドリブルで攻め上がっていく奈々の姿に男性観客陣は舞い上がっていた。

「じゃあ俺は行くから」

「え？　でも、久しぶりだし一緒に話でも」

「分かってんのか？俺たちは2週間後に敵同士としてぶつかると。そんな相手とどうして仲良くお茶なんかできる？」

美島の活躍を見れて嬉しかったと呟き、そのまま帰ってしまった。

「彼、膝をやってるんだね。しかも手術痕が一回じゃない」

「膝って……もしかして十字靭帯？」

確かに日比野は膝を怪我してみたいだ。

それも日比野のステータスの一つとして理解できた。

薫が言っていたように何度か手術をしているらしい。が、それであれだけ強力なシユートを蹴ることができるんだ。それ相応の努力をしてきたに違いない事も確かだ。

「ま、日比野の言ってた通りあいつとは敵同士。次のコマに進めるのは片方のチームだけじゃない。そう考えれば今あいつと仲良くしすぎるのも酷だ。情が移ったりなんかしたら大変だぞ？」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「あいつは気にしてなかったんだ。俺たちは俺たちにできることをするしかない。そう  
だろ？」

「う、うん」

こうして駆に語り掛ける俺の姿を傍から見たらおかんかったの。

俺は拙僧でも修行僧でもないぞ？　しかしながらここに在る面子の倍以上の人生経験をしてきて、二度目の高校生を満喫してる俺だからこそその言葉か……なんか、爺臭くなってきたような気がするの俺だけか？

「てか、そんな事より駆よ。少し気になってたんだが」

「え？」

「お前、日比野の相手できるのか？」

「……どういふこと？」

怪訝そうな表情を浮かべる駆に、俺は少し呆れてしまった。

「お前が昔あいつに怪我させたんだろ？　だから、またピッチの上でDFに付かれたときに強引にシュートに行けるかって聞いてんだ」

「そ、それは……」

「お前はFWなんだ。点を取りに行ける所で行かなきゃメンバーとして選ばれなくなるんだぞ？」

「分かってる！　……多分、大丈夫だと思う」

また俺がFWとして動くかもしれないってのは言わなかった。

ただ、駆の表情に影が落ちてる事に気づき、バンバンと肩を叩いて気を紛らわせることしかできなかった。試合は、俺たち江ノ高の先がかかっているけど、駆にはかなりのト

ラウマになつてゐるかもしれない。もし、また駆が試合中に同じようなシチュエーションを作つてしまつたら、もしかすれば駆はサッカーができなくなつてしまうかもしれない。

……正直、こればかりは俺がどうにかできる問題じゃないし、誰かが手助けしてやることもできない。

チラと奈々を一瞥し、握手して互いに称えあつてゐるように見えるミーナがそこにはいた。より代表選手に近い奈々と、それを見る駆。この先、こいつは間違いなく奈々の存在に焦ることだろう。なにせ、彼氏彼女の関係になるかもしれないんだ。全くその目すら見えてない自分じゃセブンは……なんて考えるかもしれない。

——青春してますわあ。

それから一週間。

俺たち江ノ高は湘南に勝つために練習に励む事になるのだが、この間のなでしこジャンプの活躍があつてからと言うもの、俺たちの練習中に部外者が訪れてくるようになり、結構な数の部員が練習に集中できないでいた。

織田先輩がマコ先輩にからかわれているのを見つつ、チラと奈々を見てみる。

確かに、こうして見てみると奈々は結構可愛い。と言うか、前世でもここまで可愛い



女子を目の前にするのは初めてかもしれない。そしてサッカーができるという体育系美少女ときたらもう、それなりにファンが付いても可笑しくない。

……かく言う俺にもちよつとした変化が起きてるんだが、どうしたら良いんだろうか。

この年になって初めて、今日、下駄箱の内履きの上に手紙が置いてあった。所謂ラブレターというやつだ。

いやあ……さすがに目を疑ったね。

今までこういう経験をしたことが無かったのと、そもそもそういう風に見られているなんて思ってもみなかったし。

しかしながら、俺は告白を断ってしまった。

ラブレターに記載されていた通りの場所に行き、出会った女子は別のクラスの子だったけども、普通よりも可愛いと思う。でも、断った。どこか、俺の心の中で線引きをしているような、自分でも分からないんだけど、ただ……

「あれ、こんなところでどうしたの康寛」

「奈々か……いや、少しいなだれてみたんだ」

「あはは、何それ」

部活に参加せずに体育館横の出入り口の前で黄昏ている所にやってきた奈々。

一応、奈々もマネージャーだからサボってるのがばれるのはまずいんだが、理由は何とでもなるだろう。ラブレターを貰った、なんて言ったら後が面倒になりそうだから一言も喋らないがな。

「康寛は、湘南に勝てると思う?」

「いや、勝つでしょ」

「凄い自信だね……」

「俺がDFをやるんだ。なら、日比野にだって一点も取らせないぜ」

正直、あいつの大砲フリーキックだろうが俺のDFからは逃れられないな。

ただ真つ直ぐ宙を舞ってくるだけのボールを止められないわけがない。威力は凄いが、言ってしまうえばそこまでの物だからな。シルバみたいな超絶なテクニックを持っているわけじゃないんだ。それなりのDFはできるみたいだが……

「ふふ……でも、康寛だったら本当に無失点で行っちゃうかもね」

「他の奴はどうだか知らんが、とりあえず日比野のあれは何とでもなるな」

「……ふうん。康寛がそう言うんだったら大丈夫なんだよね?」

「お? あんなんどうってことないぞ。俺なら普通に止めれるね」

「じゃあ、私から監督に伝えとくね」

「まあ、俺から言っても良いんだけど……よろしく頼む」

「うん、わかった!」

そのままサッカー部が練習に使っている校庭へと走っていく奈々は、一度振り返り、練習にちゃんと来いと一言だけ残して去ってしまった。今日ばかりはそんな気分にならないんだが、釘を刺されちゃしようがない。

——いつの間に俺も青春をすることになってしまったんだか。

人生、ままならんもんだなあ。

## 第27話

さて、本日はいよいよ湘南との試合を行う日となりました。

俺はいつも通りのテンションなので気負うことも無く相手のメンバーを見たり、戦術面を確認したりしていた。バスの中、駆の隣に座っていたが、こいつはこいつで鉄の心アイアンハート過ぎる。いくら何でも口を開けて爆睡するのは可笑しくて笑えて来るんだが。

試合が行われる場所は鎌倉学館。

俺と駆の母校でもある場所と言うことで、それなりに郷愁の念を抱いてしまっている自分がある。まあ、中学生時代は何にも部活に所属してなかったから鎌倉に来てこそまで大した感情は抱かないのだが。

しかし、ちらほらと懐かしい人の顔を見ることができるとのは良い事だなあ。駆が手を振ったサッカー部の顧問の人だつて知らないわけじゃないし、他にも俺たちの事を応援してくれてる同級生も見える。顧問をしていた先生は俺の事はあんまり知らないだろうけどな。

『いよいよ試合開始が迫ってきております。総体神奈川県予選決勝トーナメント第1回戦。江ノ島高校対湘南大付属。江ノ島高校は予選から超攻撃的サッカーを戦術として

勝ち上がってきたチームに対し、湘南大付属はこれまでの試合を1対0で勝ち抜いてきた鉄壁の守りのチームです。全く正反対のこの2チームの試合の結末は私にも予想がつきません』

しかし、このマイク放送。たしかうちの高校の放送部がやってるんだったよな？

女子生徒はあんまり喋ってないが、この男子生徒の喋りはかなり慣れてるなあ。うちのチームの事だけじゃなくて相手のチームの事もしつかり情報として喋れている。だからこそその放送部なんだろうけど。しつかりとした情報を言ってるんだから大したものだ。

今日の相手となる湘南チームで厄介な相手になる選手は、ゼッケン2から5番までの選手たち。この四人を合わせて『4本の矢』フォーアロウズと呼ばれているDF陣だ。神奈川の中ではかなりの連携を見せつけるDFだが、まあ……俺がFWとして上がることが無ければ直接マツチすることはないだろう。

だが、裏を返して見てみれば、それ以外の選手はそこまで得点力があるわけじゃないし、大砲みたいなフリーキックをする日比野だけを徹底的にマークしていれば点数を取られることは無いだろう。……と言っても、それはフリーキックを蹴るときだけの対応になるのは目に見えていることだが。

それに対してこっちのチームは皆積極的に攻撃に参加するという事もあり、放送部の



大したようなもの。

これであちの攻撃力を数値としてみると相手の湘南よりも圧倒的に優っている。その分防御力が向こうに負けているんだけれども。もちろん俺を抜かしての数値ではあるが。

「織田先輩」

「ん？ なんだ？」

「もしフリーキックをする機会があったら、俺に蹴らせてもらえませんか？」

「なに？ 不知火が蹴るのか？」

「はい」

試合が始まる前のミーティングで監督に個人的に言われたことではあるが、DFとしてはもちろん、FWとしても動くことができるDFとして動き、目立ってほしいと。皆の前で荒木先輩に思いっきり目立つようにと言っていた監督だが、何故俺にはサシで話してくるんだろうか？

「自信はあるんだな？」

「はい」

「……良いだろう。本当は荒木に蹴ってもらおうと思っていたんだが、お前の事も信頼している。思いっきり蹴れ」

「はー」

これで俺がフリーキックを蹴ることができる。

——日比野。お前のフリーキックなんて力があれば誰でも蹴れるってこと、証明してやるぜ。

『さあ！ 試合開始のホイッスルが鳴りました！ 10番、荒木のキックオフから試合開始です！』

ゆつたりとした動き出しからボールを保持する荒木先輩。

あれだけ監督に言われて火のつかないような男じゃないのは皆が知ってる事だ。

「おらあ！ もたついてるなら取りに行くぜ！」

相手FWがゆつくりと上がっている荒木先輩に突っ込んでいくが、これを走り出すことで一気に躲してしまふ。荒木先輩のドリブルに合わせでうちのFW陣が敵陣を上がっていく。それに釣られるように動き出す相手DF陣。しかし、さすがは4本の矢と言われていることだけあってしつかりとした守備的動きをしている。これではうかつに攻めることはできないだろうがそこはさすがの荒木先輩である。

躲した直後に中央のマコ先輩にパスを出す。が、中途半端なパスはマコ先輩と相手MFのちようど真ん中あたりに行ってしまった。これは奪えると飛び出した相手MFだ



が、このパスとして蹴られたボールはチョップキック。強烈にバックスピンの掛けられており、一気に荒木先輩の元へと戻っていった。

……これは初めての相手じゃなくても効きそうな有効な手段の一つとして俺も覚えておこうと思う。

そして自らパスを受けた荒木先輩はまたしても一人相手DFをドリブルで抜き去っていく。

『また一人かわしたあ！ これで4人！ 試合開始からまだ一分も経たないうちに一気に4人ごぼう抜きしてしまった！ そしてペナルティエリアまであとわずか！ これはまさかまさかがあつてしまうのかあ!?!』

5人目も一気に抜き、4本の矢のうちの一人、マイケル本田が荒木先輩の前に立った。超絶と言っても過言じゃない荒木先輩の足業だが、本田もこれに付いていく。しかし、それでも荒木先輩のドリブルは止まらない。そのまま押し込むようにして一気にペナルティエリアまで突入してしまった。

……いや、これももう荒木先輩一人で良いんじゃないか？ と思わざるを得ない。

迂闊に荒木先輩を倒すことはできない相手DF陣だが、何とかシュートを打たせまいとボールを奪いに集まっていく。試合開始からまだ一分。

「打てえ！ 荒木い！」

「先輩!!」

振り抜かれた左足。

一直線に白線を残すボールは、しかし途中で本田の足が掠って軌道が変わってしまった。

それをGKがワンタッチ。まだ生きているボールを日比野が蹴り出した。

「すっげ……」

キレッキレの動きを見せる荒木先輩。

今までの体型からは考えられないぐらいに動きが洗練されている。

先制点を奪うまでにはいかなかったが、この調子を維持していればいつかは点を奪うだろう。が、今回ばかりは俺も頑張ろうと思う。

——さて、点数を取らないと俺が先制点を奪っちゃいますよ？

## 第28話

コーナーキック。

もちろん蹴るのは荒木先輩なわけだが、ここでも荒木先輩は凄い事をしてみせた。

ゴールまでほぼ角度ゼロのところから蹴るというのにそこから直接ゴールを狙って見せたのだから。しかもこれがまた綺麗にゴールに入る軌跡を描き、残念ながら相手GKに阻まれてしまったものの、これで江ノ高の攻撃の幅がまた一つ増えたという事で、湘南にそれなりのプレッシャーを与えられたんじゃないか？ てかチートの俺が言うのもあれだが、この人も結構なチートじゃないか？

しかし、欲を言えばこの一連の流れから1点ぐらいは奪っておきたかったってのがうちの攻撃陣の本音だろうが。

相手のMFがボールを持って上がり、FWにパスを出す。

俺と堀川先輩がプレッシャーを掛けつつ、織田先輩がパスをカットした。

試合が始まってからそろそろ10分が経とうとしているが、未だに湘南はしつかりとした攻めができていない。それでも精神的に落ち着いて見える湘南DF陣を見ると、こういう展開ってのは慣れているのだろう。それはそれで悲しきチームの攻撃力としか

言いようがないのだが、そこまで精神的に鍛えている相手チームの監督はさすがとしか言いようがない。

俺としてはもう少し動きたいところなんだが……こうやって安心して攻撃陣の活躍を見ることが出来る時間帯が多いってのは良い事なんだろう。

「上がれえ！」

織田先輩がボールを保持したままドリブルで仕掛けていく。

荒木先輩にはマイケル本田がマークに付いていて、迂闊にパスを出すことができない状態にはなっているが、それを何とかするのがうちの司令塔——レジスタつてもんなんですよ。

マークについていた二人の選手の虚を突くように真横に出されたパス。

それを受けたのはマコ先輩で、敵陣のほぼど真ん中はぼっかりとペースができていた。

そこから出せる3人の攻撃陣は、皆が皆マークがついている状態だが——

「工藤！」

「よし——」

相手の守備の穴に糸を通すようなパスが敵陣を貫いた。

それを前で受けようとした工藤先輩だったが、そこに日比野が割って入ったことによ

り前を向いて攻撃することができなかった。が、それでも何とかボールをクリアされま  
いと足を差し出した工藤先輩だったが、思い切りクリアしようと足を振り切った日比野  
の蹴りを、ボール越しとは言えもろに食らってしまった。

苦悶の悲鳴とともに足を抑え倒れ伏してしまった先輩の姿が、その威力を物語ってい  
る。

「先輩っ!」

「工藤! 大丈夫か!」

マコ先輩が近づいていき工藤先輩の足を見ているが、あの様子では継続は不可能だろ  
う。実際、マコ先輩に肩を借りなきやピッチの外まで歩いていったが、左足を少し引き  
ずっていたし。このまま交代になってしまいうだろうが、それも先輩の容態を考えると  
しようがないことだろう。

……一瞬、監督と目が合ったような気がするけど、見間違いかたと瞬きを何回か。し  
かし、しっかりと俺を見て微笑んだ監督の表情を見るに、見間違ひなんかじゃなかった  
ことを思い知る。それから選手に控えの選手に指示を出す様を見せつけられ、すこし  
嫌な予感が胸の中にできてしまった。

そして、立ち上がったのは海王寺先輩だった。

— Oh …… Jesus .

『江ノ高、身体を張った活躍を見せてくれた工藤を下げて2年生、DFの海王寺を投入してきます。予選においてDFを交代で投入してきたのはただの一度きり。前回はここからDFの不知火がFWとして縦横無尽に動き回り勝利を収めました、どうやら今回の試合においても不知火を使ってくるようですよ!』

「頑張れよ、不知火」

「……うつす」

工藤先輩と交代で入ってきた海王寺先輩は、笑顔で俺を前線に送り出してくれた。多分、これから同じような目に合うかもしれない俺の事を励ましてくれてるんだろうが、あれを見てからだとは何分足が重い。

いや、俺の体の事だ。日比野のキックを食らっても大丈夫だろうという自信はある。が、流石に確証が持てないだけ不安も抱いてしまう。……あんな本気の蹴りを見せつけられたら、そりゃ誰だって不安にもなるさ。

敵味方全員に見られつつ、俺は本来のポジションからジヨグしつつFWの位置まで上がっていく。次のスタートは荒木先輩のコーナーキックから。当然、FWとして動くことになる俺は前線のど真ん中に立つことになる。

「ようやくお出ましか」

「来たくて来たわけでもないんだがな」

「ふん！ ……お前の事は俺が徹底的にマークする。簡単にシユートを決められると思  
うなよ」

そういつて俺のすぐ側を離れない日比野。

周りを見てみると、他の4本の矢のうちの3人も何気に俺の方に視線をよこしてい  
た。それに気づいているかどうか分からないが、とりあえず荒木先輩に視線で訴えてみ  
ることに。目と目があつた、が、少し目を見開いた先輩は意を決したように鷹揚に頷い  
ていた。これ……俺にボールが来るパターンじゃ？

「おいおい、俺ばつか意識してて良いのか？ うちにはあの『江ノ島タワー』だっている  
んだぜ？」

「あの長身の野郎か……残念だが、あいつについてはうちの先輩はあんなひよろ長い奴  
なんてどうにでもなるんだ」

「アツハイ」

「……………」

それをただただ自信を持って返せるお前の精神が凄いわ。

そうやって仲間の事を信じられる奴は戦力になる。まあ、それが実力のない奴の事を  
信じていたら鼻で嗤ったもんだが、実際にその先輩とやらの実力はうちのタワー君の実  
力よりも高く、実戦慣れをしているようだった。

そうこう考えてるうちに荒木先輩が動き出した。

一気に選手たちの視線がボールへと集中し、それを感じつつ俺も動き出す。

「く!? てめえっ!!」

「——おあつ!」

「なっ!!」

日比野のディフェンスを押し分け、一気に飛び上がる。

迫りくるボールを待ち受け、しかし、そこで甲高いホイッスルの音が鳴り響いた。

ボールはそのまま胸でトラップし、地面へと落とす。

「くそ……今のがファール?」

「くっ……」

日比野が俺を睨み付けているが無視してボールを蹴る。

しかし、あれがファールになるとは……でもなあ、俺にしてみればただジャンプしただけでそこまでDFを吹き飛ばそうとしたわけではないんだが。だから俺は日比野の視線を無視し、ポジション修正のためにジョギングを開始する。今回は残念だったが、次はしっかりシュートを決められるように動くでしょう。

——しかし、鎌学が座ってる観客席辺りから猛烈に嫌な感じがするのは何故なんだ



ろうか？

## 第29話

『江ノ高！ 残念ながら先制点を奪うことはできませんでしたが、不知火が見せた跳躍力には驚かされます！ 誰も寄せ付けず宙を舞う姿には凄まじい気迫を感じさせられました！』

なんて放送されちやいるが、単に俺がファールの概念を忘れていただけに過ぎないっていうね。恥ずかしくて穴があつたら入りたい気分だ。……それにしても、確かに今回は相手DFを思いつきりペナルティエリアでぶつ飛ばしたが、本当はファールになるんだらうか？

そういえばと、笛が鳴ったときの審判の位置を思い出し、混戦の最中にいた俺と日比野の姿は覚えていなかったかもしれないことを思い出す。

「ドンマイドンマイ！ その調子でどんどん行けよ！」

「うつつ」

マコ先輩に励まされ、少しぶすつとした表情をしてる荒木先輩からは軽くどつかれた。なんだかんだ丁度良い場所にボール来てたし、チャンスの一つ潰してしまったからなあ……できれば決めてほしかったんだらう。

とりあえずリスタートは湘南からという事でポジション修正。

FWという事で中央付近でボールの行方を追う事に。何気に4本の矢の全員が俺の事見てるような気がするんだが。気のせいであってほしいが、とりあえず俺がすることは変わりなしという事で、ボールを奪いに行きましようかね。

ボールの落ちる場所に走り込み、ボールを待つ。

相手MFが競り合おうとしてくるが、そんなものはお構いなしに飛び上がりヘッドでボールを落とす。荒木先輩から織田先輩、そしてマコ先輩へ。江ノ高の攻撃は止まることを知らないかのようにパスがつながっていく。さすがに今回は相手MFをぶつ飛ばすことにはならなかった。てか、そうしようとも思ってたんだが……日比野も結構良い感じに筋肉が付いてて体重あると思うんだが、どうして俺に吹っ飛ばされたんだ？ やっぱりこれもチートのせいなんだろうか。

しかしながらさすが4本の矢と言うべきか。

他のMDやFWは釣られて動いたりしているが、4本の矢はその隊形と言うか、陣形を維持してパスコースを潰している。そのためか、前半部分であったようにFW全員がマークされ、完璧に崩せず強引にシュートするしかない状況を創り出されているつてのが現状になっていた。と、俺的にしてみれば過去形に終わらせようという魂胆をありありと見せつけてやろうと思ってるんだが。

果たして、その思惑は荒木先輩にボールが渡ったところで空論のままだった考えを実行してみようと動き出す。

「ハイ！」

「っ、行けえ！」

「くっ!!？」

『おおっと！　ここぞ不知火が動き出した！　少し遅れて荒木が不知火にループ気味のパスを出したが、しかしこれは少し大きいパスなのでは!?!』

実況君が言うように、確かに俺がいる位置からしてみれば少しパスは大きく見える。

近くのMFが付いてきていて、前方にはDFがいる状況で荒木先輩がそんな適当なパスを出すか？　否である。

俺と相手DFのちようど真ん中ぐらいに落ちたパスはバックスピンの掛かっており、前に転がっていくことなくその場に留まる。試合開始直後に見せたチョップキック程の回転は無いものの、それでもこの精度のパスからのバックスピンと考えればさすがとしか言いようがない。

左足に力を籠め、一気に駆け上がる。

ボールまでの距離を相手DFよりも早く詰める。それだけで相手が驚いてる雰囲気がありありと伝わってくる。その一瞬の動揺を見逃さず、俺はボールを前に蹴り出す。

「……なっ!?」

「残念だったな」

ボールは相手DFの右足の内側に当たり、奥へと転がっていく。

その事に思考が追いつかないのか、それとも体が追いつかないのか。全く動く気配のない相手DFを置き去りにし、人数の少ない右側から相手ゴールへと向かって走り出す。そして、点々と転がりつつあったボールは無事俺の足元へと収まった。

『不知火! 一気にDFを抜き去り前に出たあ! これで残るはGKただ一人だあ! 』  
い、いや!』

「俺が行かせねえ!」

横から追いつがってきたのは日比野だった。

完璧に意表を突いたと思った荒木先輩と俺の動き出しに日比野ただ一人だけ感覚的に察することができたのだろう。しかし、いきなり動き出したことで息が上がっていた。それでもこいつは俺に追いつこうとしたわけだ。

……………。

「おもしろえ…………」

踏み込み、左足を振り上げる。

右側から迫ってきてる日比野を無視するように、あからさまなシュート体勢。

「させねえー」

それでも日比野はスライディングでボールをクリアしてこようとしてくる。

ともすれば直接足に当たってしまうかもしれないが、そこはしっかりとボールを狙っているのだから大したものだ。が、俺は口角が上がってしまったのを自覚してしまった。

スライディングしてくる日比野よりも早くに振り下ろされた左足をボールに当たる寸前で止める。日比野の足がボールに当たる直前、左足でボールを掬う様にして斜め左へと浮かせるように蹴り上げた。

「なあっ!？」

結果、ボールをクリアしようとした日比野は体勢を崩しただけに過ぎない。対して俺はと言うと、浮かせたボールを追いかけるために日比野の足をジャンプで躲して前へと進んでいる。さすがにあの体勢から強引に動くことはできないだろう。

目の前にはGKただ一人。丁度ペナルティエリアに侵入しようという所、今度こそ俺はシュートの体勢へ入った。

近くには俺を止めうる可能性を秘めたDFは誰もいない。本当の一对一。

GKはうまい事シュートコースを消す動きをしようとしているが、それでも俺には数か所狙って蹴ることができるコースを発見してしまっている。その中でも一つ。抜くことができれば完璧に決めることができるコースへと向け、俺は左足を振りぬいた。

日比野のキャノンシュートと同じぐらいの速度で放たれたシュートは一直線に飛んでいき、G Kの股下を抜けていった。一拍遅れて反応したらしいが、すでに股の下にはボールは無い。G Kが体勢を落としたのと同じタイミングで、ボールは白線を超え——ネットによつてその勢いを止められたのだった。

——前半25分。鉄壁と名高い湘南の門番を今、俺が破つた瞬間だった。

## 第30話

『先制点を決めたのはこの男！ 江ノ島高校の不知火だあ!! 前半25分と言う所で均衝が破れました!』

「しゃあっ!!」

ボールが点々とゴールネットを揺らし転がるのを確認し、左手でガッツポーズ。

股抜きからのフェイント、そして股抜きとか……やり遂げた感が半端なく胸の奥からこみあげてくる。荒木先輩の凄まじい個人技を見せつけられてからの俺の個人技とか、目も当てられないぐらいに霞んでないだろうか？ それでも1点。先制点を挙げてから荒木先輩よりも凄い。これは確実に言えることだね。

と、集まってくる皆の中に交じってる荒木先輩を見つけ、どや顔を一つプレゼント。目に見えてイラツとする荒木先輩の表情を見て更に口角が上がってしまうが、しようがないんや。予想以上の達成感と優越感で鼻息も荒くなるってもんですわ。

調子に乗って両手を鼻の高さまで持つて行って指を動かしてたら叩かれた。当たり前だね。

「くっそ……調子乗りやがってえ!!」



「あだ……パス、あざっした」

「けっ！ 良く決めたぜホント」

フエイントに股抜きを加えたらもうね、最強ですわ。

しかしながら、もし自分がまた抜きされたら……もう相手の事を敬うしかないな。今の俺の肉体的なスペックを考えると、すぐに反応できてしまうだろうという予測ができる。だからこそ余計そう思う。

湘南からのリスタートで始まる直前。向こうのベンチで動きがあつたらしく、一人の選手が下がっていく。7番MFが下がり、13番のゼツケンを着た選手がピッチに入ってきた。

『ここで湘南大付属は一人メンバーを代えてきました。守備的MFとして先発した7番、拓磨淳に代えて2年生、ゼツケン13番。九十九豊を起用します』

なんでも今回の総体予選では初めての出場となるそうだが。

実況の言う通りだとすれば困ったときの秘密兵器になるんだろうが……能力を視ることが出来る俺からすれば一目瞭然。彼は純粋なサッカー選手ではないようだ。

何も情報が無い状態で彼の登場の意味を考慮するとすれば、彼が『5本目の矢』という事になるだろう。が、俺の目に映る彼の能力値——異様に低いテクニクに異様に高いスタミナ。九十九って選手は積極的にボールに絡んでこない変わりに、相手選手を攪

乱することが目的なのではないだろうか？

今の所江ノ高がガンガン攻めてるってのもあって湘南は一切攻撃に移れてない。

このままある程度九十九って選手の動きを観察させてもらおうかな。

「ヤス！」

「はいよっ！」

湘南からのリスタートだったが、マコ先輩が相手MFのパスをカットしてボールを奪取。すぐまた江ノ高の攻撃になったのだが、ボールの行く先行く先に現れる九十九選手のせいで江ノ高はパスをせざるを得ない状況を創り出されていた。

しかし、やはりと言うか。

九十九選手は多分陸上の選手なんだろう。スタミナが異常に高い事を考慮すれば種目は長距離だろう。ただただボールの方へ走ってる様子を見ると、本当にそういう趣旨の指示を監督から言われているに違いない。

だからこそ俺が少し下がってパスを受けれる位置まで来たんだが、マコ先輩からボールを受ける事に成功したわけだ。

「行かせねえ！」

「君にはこれ以上仕事をさせられない！」

何も言わずに走ってくる九十九選手に加え、相手MFに日比野の3人が一気に詰めて

きた。おいおい……なんで俺に3人も人数かけるんですかねえ。と、周囲に意識を向けてみてもしつかりと江ノ高FWにはマークがついてるし、荒木先輩にも本田選手がマークについていた。

さすが鉄壁。守備がしつかりしてますわあ。

「そおい」

「くっ!?!」

一番左にいた九十九選手の右足にボールを当て、股下を通して強引にドリブルを敢行。

九十九選手と日比野の間に体を滑り込ませ、足に当たったことで軌道を変わったボールを足元に納める。さすがに日比野もただで通そうとするわけがなく、恐らくファール覚悟で止めようとしているのだろう。がつつり腕で抑えに来ているが、それで止まる俺じゃあないんだぜ?!

「俺を止められると思うなよおっ!」

「な、んだとっ!?!」

『不知火が、なananんと3人のマークを強引に突破してしまつたあつ!　これはまたしても不知火がシュートを決めてしまうのかあつ!?!』

左右から高瀬も薫も上がってきてる。

すっかりマークがついてはいるが、逆に言えば今の3人を躲した以上、前にいるのはGKただ一人。

「まだまだ!」

「お前にや止めれん!」

九十九選手……陸上選手だけあって戻りが速い。

が、それだけ。ボールに絡んだ動きができるわけでもないし、それが分かっちゃまった俺からすれば普通にドリブルをするだけで前に行ける。……シユートの時に身体で止めようとして来たらどうしようもないがな。

だが、そこまでディフェンスの練習はできてないのか、距離を詰めてこない。ペナルティエリアまでもう少し。なら、このまま一気にドリブルで持つていける!

「ぜええっ!」

「づうっ!」

そう考えた瞬間を狙ったように後ろから日比野が我武者羅にスライディングをかましてきやがった。しっかりとボールを狙ってはいたので、スパイクの裏が直接足に当たるとは無かったもののそのまま倒されてしまった。この間欧州のリーグ戦の試合を見たんだが、まさに外人張りの突撃である。つまりはファールの狙いと言うところ。そんなに痛くはないが、適当に足が痛いふりをして表情を歪めて両手で足を庇ってみた。

ピーー!

「俺が、ファール!?!」

イエローは出なかったものの、今のスライディングがファール判定に軽い抗議をしてみせる日比野。こいつはオランダの方に留学してサッカーをしていたらしいし、DFとしての技術も磨いてきたんだろが、ここではうまい事行かなかったようだ。審判に詰め寄り抗議をする日比野を止めに入ろうとする湘南メンバーだが、それよりも早くに審判が動いてしまった。

「なっ……」

『おおっとお!? イエローだあ! 日比野、ここでのイエローは痛い!』

そう、DFにとってイエローってのは非常に大きい事案だ。

一回は許されるファールも、次は無い。つまり、一回は少し危険なスライディングになろうとも相手のチャンスを潰すことができるのだから。しかし、一枚イエローカードを出されてしまうとそれができなくなってしまうのだから。しかも日比野は湘南でも一番の点取り屋なのだからより一層動きにくくなるだろう。

「不知火、大丈夫か!?!」

「ええ……何とか大丈夫ですよ。普通に続けられます」

「そうか……それなら良かったぜ」

「それと、今回のフリーキックは俺が蹴りますからね」

「は……………」

マコ先輩の手を借りて立ち上がりつつ、荒木先輩に意味深な視線を送る。

不可解な表情を浮かべる荒木先輩の顔を見て、次に岩城監督を見つつ、左腕を上げ親指を立てた。すると、岩城監督も笑みを浮かべ俺にグーサインをしてくれたのだからOKだと判断しよう。

「荒木先輩！俺が、蹴りますす！」

「はあっ!? おま、ここは俺だろうが！」

「ファールを貰っちゃったのは俺なんで。今回は俺に蹴らしてくださいよ」

「ファールは関係ねえだろが！……………しようがねえ、今回だけだぞー！」

その言葉とともにボールを頂戴し、ファールを貰った位置へとボールをセットした。

最中、日比野が物凄い形相でこっちを見てくるもんだから内心ひやひやもんだが、実際に何か問題が起きたとしても肉体的には問題ないんだだろうが。

「よっし……………FWとしての活躍、ここに極まりつてのを見せてやるぜ」

## 第31話

『さあ、フリーキックのチャンスを得た江ノ島高校！　ここは当然荒木が蹴ってくるのか！　……おや？　どうやらここは不知火が蹴るようだ！』

何故か魔術師と名高い荒木先輩を差し置いてのフリーキック選抜に、観客席の方でざわめきが起きているような気がするが気のせいにしておこう。さて、狙い目としてはカーブのように巻く様な回転を掛けて壁を超えるか。それとも力強く真っ直ぐ蹴ってゴールを狙うか。

距離は大体22mと言ったところだろうか。

どっちでも行ける。それは確信を持てる。チラと日比野の表情を一瞥して、笑みを浮かべてしまった。前半も残り数分。ロスタイムがどれくらいあるか分からないが、これを決めれば2点差。湘南にとっては後半の攻め方を考えざるを得なくなる時間帯になつてくる。そうでなくても攻められてないのにな。

『さあ、不知火が動いた！　どこを狙ってくるのか。こ、これは!?!』

さすがに欧州サッカーを見たと言つても、直接この目で見たわけじゃないから一回ですべてを覚えられたわけじゃない。が、それでも頭の中には彼等プロの技が入ってい

る。それを再現しようとするだけで良いんだ。

力強く、それでいて回転をしっかりとかけてやればおのずとボールはゴールに吸い込まれる。大胆に狙い、そして蹴る！

豪快な音とともに蹴り上げられたボールは、しっかりと枠を捉えていた。

「止めるっ!!」

が、それはG Kが跳べば間に合う所に行くと思われ、少し後ろから見ていた荒木もまたそれを感じ取っていた。同時に、相手G Kは横に跳んでおり、ボールを弾こうと腕を伸ばしていた。

走り出そうにも場所が場所。仮にG Kが前にボールを弾いたとしても到底間に合いはしないだろう。一番可能性がありそうな薫も小さい体を生かして相手D F陣の間をすり抜けることはできるかもしれないだろうが、結果的にはG Kに止められるに違いない。

『緩やかな弧を描いてゴールに迫るボール！ キーパー、しっかりと反応して——』  
伸ばした左手がボールに触れた。

この時点でG Kは確実に前に落とせた。そう確信をしたし、状況を見守っていた人々の大多数がそう思った。敵も味方も、誰が一番にボールに触れることができるか。それだけを考え、そして、ボールの軌道を目で追って目を見開いた。



『入ったあ！ 入ってしまったあっ!! 不知火のシュートはGKの手を弾いてそのままゴールに転がり入ってしまった! 前半も終わろうとしているところでの追加点だあ!』

「よっしー!」

「よっしやあ! よくやった不知火い!!」

チームの皆に詰め寄られ祝福される。

この瞬間だけでもこの部活に入って良かったと思える。いやあ……この身体の身体能力の高さに慣れてなかったことを思い出すと今までの苦労がここで報われている感じがするね。すぐにベンチの方を向いて左手を大きく天に突き上げた。もちろん、ベンチで待っている選手全員に対してだが、俺をこの部活に誘ってくれた駆に込める気持ちが大部分を占めてる。

理解したのかどうかわからないが、駆もこれに応えて手を突き上げてくれたのだっ  
た。

と、追加点の余韻もほどほどにリスタートをしたものの、すぐに前半終了のホイッスルが響き渡った。お互いに前半にて選手交代棒を一枚ずつ使ったが、状況は江ノ高の方が有利の状態。FWの工藤先輩が足にダメージを負ってしまったのは大きい事故だが、

それ以上にこっちは2点を取り、そして湘南の主力である日比野にイエローカードを与えることができた。

後半もこのままの編成で戦うのかと思いきや、MFの八雲に代えて中塚を。薫に代えて駆を投入するらしい。と、短いミーティングの中で俺も気づいたことをぼろぼろと話しておいた。途中から入ってきた九十九選手の実力についてを。

前半で動いた走行距離が短いせいか、妙にボールの行く先々に現れる選手だなあという印象のようだが、俺の意見から九十九選手の情報を奈々が調べ、結果やはり長距離の選手だということが判明した。まあ、皆が俺に畏敬の念を込めた視線を送ってきたのは予想外だったが。

『さあ、後半戦が始まります！ 後半戦は湘南からのキックオフとなります。前半で2点差をつけられてしまった湘南はどのような戦術を取ってくるんでしょうか!?』

俺はもともと薫のいたポジションに入り、駆がセンタートップに入った。

監督が言うには、元々俺はDFではあるものの、初めての練習の時に宣言したようにFW以外だったら……なんて話だから、とりあえず駆がいるときは右側で頑張ってくれとのことでしたとき。

そして始まった後半は、前半と変わらず江ノ高がどんどん攻める展開のままに進んでいった。しかし、俺は前半程がつつり攻めることはせず、全体の動きを見ながら展開を

していたので点数の変動は後半10分を過ぎたところでもまだ起きていなかった。

そんな中、湘南DFからのロングフイードによって前線までボールを持っていかれ、カウンターを食らう形になったことに焦ってしまった堀川先輩がファールを与えてしまったのだった。

距離にして約30メートル。

「あ……ぐ、ぐめん」

「気にしなさんな、先輩。逆にファールの無い試合の方が珍しいんだ。ここは未然に失点を防いだと思って次に集中しましょうや」

「不知火……そうだね。次はあんな奴のドリブルなんて絶対に殺す殺す殺すっ！」

「ははっ、その調子です」

落ち込んでしまった先輩を励ましつつ壁の一人として立つ。

大砲と名高いシュートを身をもって体験することになるとは思っても無かったが、前半で日比野に喰らわされたスライディングを思い出すと、大丈夫だろうと思えてくる。あの時は後ろから不意にやられたが、このフリーキックはこの目でしっかりと軌道を追う事ができる。

——日比野がボールの前に立ち、ジツと江ノ高メンバーを睨み付けてくる。その視界の中央に捉えられているのは誰なのかは分からないが、ただ一つ。その気持ちが込み上

げてきてつい笑ってしまふ。

一層、日比野の眉間に刻まれた皺が深くなつたようにも思えるが、ただただ俺は、日比野のフリーキックの威力を楽しみにしているのだつた。

## 第32話

さてさて、ついに日比野の大砲フリーキックが炸裂するときがやってきましたとき。

実際、日比野のシュートの威力はとんでもないものだし、昔の俺だったらこうやって相対するのも嫌だった。一発喰らっただけで意識飛ぶんじゃないだろうか。

そんな日比野だが、ボールを前にして凄いい形で俺たちを睨んできている。

鬼もかくやと言わんばかりの表情だが、そこまで憎しみを込めなくてもボールは蹴れるぞ？ あれだ、ボールは友達だと思っただ方がいいんじゃないかな？（すつとぼけ）

一步、二歩と下がっていき、十分な距離を取ったところで日比野が止まった。

誰かの息を飲む音が聞こえてきた。それなりに距離があるとは言ってもあの日比野のフリーキックを真正面から受け止めたいと思うほど酔狂な奴はいない。てかホント、あれを蹴るためにだけに筋肉つけてきたんじゃないかって思うくらいシュートだから、どうしても少林寺サッカーが脳裏に浮かんでしまうのは可笑しくない話じゃないだろうか（白目）

『さあ！ 湘南、日比野のフリーキックだあ！！ 距離は約30mといったところでしょ  
うか!? これは直接狙ってくるでしょうか！』

狙ってくるだろうね。当然。湘南のストライカーは日比野みたいなもんだからな。

こうやってゴール近くでファールを奪う事を念頭に試合をしてるようなもんだ。

ホイッスルが鳴り響く。

運命の一発。日比野のフリーキックがあと数秒先に放たれることを、目に見えてわかるほど一層深くなった眉間の皺が如実に表していた。

「うおおおおおおおっ!!」

怒声に近い叫び声がピツチ上に響いた。

巨軀が一気に加速し、走り出した。ボールの前で急停止し、そこから振り上げられた右足に全体重を乗せ、鞭がしなるように振り下ろされた右足がサッカーボールを捉えた。瞬間、凄まじい力が加えられたボールが歪み、一直線にボールが放たれたのであった。

体感的にはゆっくりと動き出す世界の中、ボールの軌道からどこに飛んでいくのかを予測する。弧を描くことなく直線的な軌道を描くであろうボールは、確かに俺の所を狙っていた。日本人の平均的な体格に比べ大柄な俺の体では、このボールはGKから死角になっていた。だからこそ、俺はこのボールを避けるわけにはいかない!

「ふ——しゃあっ!!」

少し首を後ろに逸らし、一気に前へと振り下ろす。

ちやうど顔よりも少し下あたりに飛んできたボールを額で打ち付ける。

一瞬の接触。予想以上の衝撃が体中に伝播していく。空中で勢いを殺しきれなかったせいか、体が少し後ろに飛ばされるような感覚。しかし、ボールは確実に前へと飛ばすことができていた。

「な……」

驚愕に歪んでいる日比野の表情を見て、口角が吊り上がるのを自覚した。

『す、凄まじい音が放送席にいる私の所まで聞こえてきたぞお!? 果たして、真正面から日比野選手のフリーキックを受け止めてしまった不知火選手は大丈夫なのかあ!!』

まだボールはピッチの中を転がっているため、俺の所に駆け寄ってくる仲間はいなかったが、心配そうにこちらを見てくる仲間たちに左手で親指を立ててやった。紛れもなく、俺は大丈夫である。

一転、各人安心したような表情を浮かべると、そのまま攻撃に積極的に参加していたようだった。俺が日比野のフリーキックを止めたっていう事実が皆に火をつけたのか、前半よりも一層攻撃が濃くなってるような気がする。

その中に駆もしつかりと混じっていているように安心だ。

日比野と相対してシュートを打とうとするときにどうしても怪我をさせたことがトラウマになっているのか、しつかりと打ちきれないでいたようだが、それも日比野の一

喝によって解消……とまでいかななくてもサッカーをする上でシュートを打てないという決定的な欠点を克服できたようだ。

敵に塩を送ってるだけにか見えないが、幼馴染として、試合相手として全力を尽くせてない駆を見るに堪えなかったんだろうか。まあ……おかげで攻撃が更に厚くなつて全く湘南攻撃陣が攻撃できてないっていう状況になってしまったが。

確かに湘南は日比野のフリーキックを中心として、あとはガッツリ守備に人員を割いてゴールを守り抜くっていうスタイル何だろうが、相手が悪かったな。

後半約25分に駆が3点目を。

後半約35分に荒木先輩が4点目を押し入れた。

そもそも湘南は攻撃に移れてないからなあ……

『試合終了のホイッスルが鳴り響く！ 江ノ島高校、湘南大付属を相手に4対0！ 鉄壁と名高い4本の矢を物ともせず高い攻撃力を見せられました！ 江ノ島高校、ベスト8進出っ!!』

「いやあ……今回も適当にDFでやってこうと思ってたんだがなあ」

「ヤス！ やったね！」

「駆……もう、日比野とは大丈夫か？」

「うん！ て言っても、全部スッキリ出来たわけじゃないけどね」



そうやって、握り拳を作って右腕を上げる駆に合わせて、俺も右手を握りこんで軽くぶつけ合う。この試合に勝利したことと、駆がまた一つ強くなったことに対して。

「しっかし、駆のあの『フアイφトリック』って言われてたあれ。ここぞって時に発揮したな」「うん！ これもヤスが特訓に付き合ってくれたからね。しっかり決めれたよ」

そして嬉しそうに奈々のところに駆けていく駆の後姿を見ると、なんだか尻尾があるように見えてきてしょうがない。あいつは犬か何かなんだろうか。

……しかし、こうしてみると駆の成長具合は凄まじいものがあるな。何だかんだで今日も1点決めてるし、ストライカーとしての資質があるだけじゃなく、しっかりと点を決めるだけだけの成長も見せる。

これが伸びしろってやつですか（白目）

## 第33話

湘南との試合に勝った俺たちは、そのまま鎌学と葉蔭学院の試合を観戦する事に。

監督は試合後に湘南の監督に話があるとか何とかで席を外してしまつたが、俺たちはストレッチやら体の手入れをした後に観客席に来ていた。

鎌学のイレブンが紹介されていくが、その中には1年生でスタメン出場している選手が二人もいた。俺もまあ……同じような立場に立っているのかもしれないが、そもそも江ノ高は二つのチームに分裂していたし、その時にスタメンとして出ていたから今の立場がある。

が、向こうは最初からサッカーの強豪校として名をはせているようだし、そんな高校のサッカー部でスタメンの座を奪えるってのはそれだけの實力があるという事だろう。実際、遠目でしか見れないがその二人の能力値はかなりのものとなっている。

それでも鷹匠さんとやらの實力が断然に高いんだが。怖い。

守備的MFのど真ん中に起用されているのが1年、佐伯祐介。さえきゆうすけ

そして攻撃的MFのど真ん中に起用されているのもまた1年、世良右京。せらうきょう

「ええっ!? 湘南の世良くんって鎌学に入ってたの!？」

「ずっとフランスにいたみたいだけどね。予選の直前に急遽帰国してチームに合流したんだって」

海外でサッカーをしていたってだけでもかなりの実力だと思っただが……

今の江ノ高イレブンの実力で彼らの攻撃力を抑えることはできるんだろうか？ 今でこそ俺がDFで頑張っちゃいるが、鷹匠さんを抑えてる間に別の選手に攻撃されちゃたまらんですよ。それこそ、宇宙の法則を無視したような動きをしなきゃいけないからなあ（白目）

『ゼッケン10番！ 鷹匠瑛!!』

と、鷹匠さんの紹介がされた瞬間に一気に観客席が色めき立ち、歓声で盛り上がる。

「おおっ!! さすが鷹匠さん。色んな人が応援に来てんだなあ」

「それだけじゃないわ。Jリーグのスカウトマンも結構来てみたい」

「え？ ホント？」

高校3年生でJリーグから目をつけられてるなんてなあ……

たぶん、高校卒業と同時にどつかのリーグに属するんじゃないだろうか。確か、J1とかJ2とかリーグごとで分かれてたと思うけど、鷹匠さんの実力でどこまでいけるんだろうか。さすがにいきなりJ1のチームに、つてことはあるんだろうか？

てか、試合相手の泊山学園の紹介がおざなり過ぎて笑うわ。確かにここは鎌学の本拠

地だし、鎌学の応援が中心になるのはわかるんだが。

そして始まる試合。

攻撃では佐伯と世良が中心となって攻撃を組み立て、鷹匠が前線で威圧を掛ける。隙を見せたら鷹匠本人がシュートを決める、と思わせておいてからの佐伯。日比野の大砲フリーキックとまでいかなんとは言えど、ペナルティエリア外から放たれたミドルシュートがゴールバーに直撃。そのままゴールネットに吸い込まれていった。

「なるほど……てか、世良は自分で行ける所はいかないんだな」

「そこ!? 確かに世良のバックパスも意表はついたけど、それよりも祐介の奴、あんなミドル持ってたっけか?」

中学生だったころの記憶を頼りにしちやいかんぜよ。

恐らく、その成長が佐伯を1年にして鎌学のスタメンまでにしたんだろう。下半身の筋肉に体の使い方。守備的MFとは言いつつ隙を見つけてオーバーラップするだけの観察力。これらは江ノ高にはとてつもない脅威になる。

世良のようなバックパスは荒木先輩でもできるだろうが、それをミドルでシュートできるまでの走りを見せられる選手は……ギリギリ織田先輩か。これもあらかじめそういう風な練習をしておかないといけないレベルだ。

泊山の攻撃は、その全てが2年生の掃除人スワイパーこと国松広実くにまつひろみがチャンスの芽を完全に排し

てしまっている。そしてすぐに攻撃に移っていく。

そんな国松さんの動きをしっかりと記憶する。DFの俺に求められる動きと言うのは、こういう事だろう。相手FWの前に滑り込むように体を入れ、ボールを奪う。フールを奪われることのない、完璧な仕事をしていた。

そしてもう一つ。やはり鷹匠さんの攻撃は、俺のさらなる飛躍に繋がる動きをしている。

恵まれた体格。そして運動能力の高さ。それは個人のものだからどうしようもないが、相手DFが二枚もついている状態でボールを受けたにも関わらず、どんな体勢からでもしっかりとゴールを向き、正確にシュートを打つことができる。

「——この柔軟性こそが、鷹匠さんをU—19代表まで押し上げた武器。彼にしかない『特殊能力』よ」

『ゴオル!! 後半25分、ついに鷹匠がハットトリック達成いつ!!』  
試合はすでに6対0。

圧倒的なまでの攻撃力に防御力を見せつける鎌学イレブン。

これが、俺たちの倒すべき目標であり、優勝候補の実力。

「はっ……おもしれえ」

「えっ？」

ゴール直後、ピッチからこっちを見つめてくる鷹匠さんを見ながら、俺はそう呟く。あの視線の中央に捉えている選手が誰なのかはわからない。だが、俺は直感的に俺を見ているんじゃないかと思う。てか、世良も佐伯もこっちを見ている。世良は荒木先輩で、佐伯は多分駆のことをみているんだろう。

一点目のミドルシュートを決めたときに駆を見てたし、そういう事なんだろう。さすがに全員が全員、俺の事を意識されても困るんだが。

結局、7対0で終えた試合。あまりのチームの完成度に皆言葉を失くしていた。

試合相手の泊山のメンバーが泣いてたのを見てしまい、何とも言えない空気になってしまったが、このまま試合を勝ち進んでいけばいつかは戦うかもしれない相手なんだ。いつまでの落ち込んでばかりはいられない。

……まあ、良くも悪くも、江ノ高メンバーにそこまで悲観的な奴はいなかったんだが。そして俺たちは次の葉蔭学園対相模ヶ浦高校の試合を観戦するのだった。

## 第34話

葉蔭学院と相模ヶ浦高校の試合を観戦したんだが、これもまた共に違った戦術を取り合う試合内容となっていた。

前半、試合開始から5分と言ったところで相模ヶ浦高校が先制し、大勢の予想を覆す結果をたたき出した。観客席から見ると分かるが、相模ヶ浦は全員が攻撃に参加し、全員が防御に動くという戦術をもって葉蔭学院を翻弄していた。

監督が言うには昔、オランダで同じような戦術『トータルフットボール』があったらしい。渦巻きのように選手全員がポジションを考えながら動いていくものらしく、当時のオランダ代表が体現していたようだが、それと同じような戦術を相模ヶ浦は取っているらしい。

全員が動き、攻撃して防御するのはサッカーと言うスポーツからすれば当然の事だが、それを実現するための体力が必要になる。つまり、GKを除いた全員が試合中ずつと動けるだけの体力が必要になるってことじゃないだろうか？

ただでさえ点数を取るスポーツで集中力も必要になるのに、それに加えて動き続けるとくれば相当の練習を積まないといけないだろう。

しかし、葉蔭学院は『湘南の皇帝』こと飛鳥亨あすかとわるがオーバーラップからのミドルシュートで同点弾を決め、試合を振り出しに。それを受け、サイドも警戒し始めた相模ケ浦は動きの精彩さを欠いていき、葉蔭学院の怒涛の攻めを受けることになってしまった。

全員がしっかりと攻撃と防御に絡んだ動きを見せた葉蔭の戦術に相模ケ浦は翻弄され続け、後半は一切攻撃に移ることはできなかつたのだ。

……それにしても相模ケ浦の選手たちは誰一人として悔しそうな表情を浮かべていない。

監督も手ごたえがあつたような表情を浮かべているし、これは、葉蔭学院を相手に戦術の確認でもしていたのだろうか。奈々の話だと相模ケ浦は強豪校でも何でもない高校らしいし、次の大会に向けての最終調整的な試合をしたとすれば……

「いやあ、何とも強かな奴らだなあ」

「え？ どういう事？」

「勝つたのは確かに葉蔭だが、相模ケ浦は別に勝とうなんて思つてなかつたんだろう。いや、勝つて次に進めればそれに越したことは無かつたんだらうが」

「……つまり、相模ケ浦はトータルフットボールの動きを葉蔭学院相手に確かめてたつて……!？」

「多分ね」



てか、それぐらいしかあいつらの表情を説明できるものがないしな。

そして数日後。

いよいよ葉蔭学院との戦いが迫ってきてる中、俺たち江ノ高メンバーはグラウンドでミーティングを行っていた。そんな中、もう戦術的に話すことはないのか、監督が質問をぶつけてきた。

「さて、皆さん。いよいよベスト4への挑戦です。そして相手は昨年度選手権予選優勝校の強豪、葉蔭学院。皆さんはこの葉蔭を相手にどんな試合をしたいですか？」

そんなの葉蔭に勝つだけに決まってるじゃないですかやだあ。

皆がそれぞれ自分の気持ちを述べていくが、その内容もほとんどが勝ちたいとか点を取りたいとか。中塚はモテたいとか、高瀬は高さだけじゃないところを見せたいとか言っていたが、普通にサッカーをしてくれるだけで良いんだよ？

「それじゃあ、駆くんと康寛くんはどうかな？」

「えっ……俺ですか？ 俺は……」

「そうですねえ……」

そう問われてふと思う。

果たして俺は何か思いを抱いてサッカーをしていたらどうかと。

「いや、難しいことは考えないでとにかく体を動かそうかと」

「試合を、楽しみたいです」

驚いて駆の顔を見てしまった。

皆も一斉に駆の事を見ていたから、駆は動揺していたが、すぐにマコ先輩と荒木先輩の餌食となつてしまった。

「てめええ!! 良いところ持つてきやがつてえええつ!!」

「おらおらああ!!」

「わああああ!!」

もみくちやにされる駆の様子を見て、それをしてる先輩方に呆れて笑つてしまう。

良い所を持つて行つたと言っても、これから試合をするのに良い所も何もないんだがそれは。

さて、次の葉蔭戦だが……やはり相手の戦力の中で一番注目しなきゃいけないのはリベロの飛鳥の存在だろう。それ以外の選手も基本的な能力が高いだけあつて、カウンターの攻撃が特に強いように感じる。

それ以外にもスピードスターにして技量の高い右サイドの鬼丸選手に、トップ下の真屋。そしてツートップの生沢、桂木といった3人の選手が得点に絡んでくる。守備陣は飛鳥が自ら指揮統率しているだけあつてかなりの防御力を誇る。これぞ、昨年度予選優

勝校の布陣だと言わんばかりの戦力である。

正直、なんでこんなに高校サッカー強いのか？　つてぐらい強い。

てか、鎌学もそうだが、日本の高校男児は何故こんなにもサッカーに熱中しているのだろうか……他にバスケットか野球とかあるだろうに、この日本じゃ一番高校で盛り上がってるスポーツがサッカーときたもんだ。

——傑くんのことにしてもそれがあるから……

——スグル？

——いえ！　なんでもありません……

少し離れたところにいる近藤先生と監督の会話が耳に入ってきてしまった。

この体になってから嫌と言うほど地獄耳になってしまったようで、今みたいに普通は聞こえないであろう会話も聞こえてしまう。完全にプライベートな話過ぎて聞いてしまった俺が自己嫌悪に陥ってしまいそうだ……

しかし、スグル……恐らく、傑さんのことなんだろうが、その名前を聞くだけであの時の駆の様子をありありと思い出してしまふ。急激に上がった能力値に、いつもの駆からは考えられないような超絶な技術を織り交ぜたドリブルに駆け引き、自然なフェイントの数々。

もしかすると、葉蔭戦でもあれだけの動きを見ることができるかもしれないと考える

と、駆には申し訳ないがその時の駆を見てみたいと思つてしまふ俺がいる。今後サツカーをやつていく中で絶対に必要になるだろう技術の多くを多用している選手を間近で見られるんだ。そんな欲を抱いてもしようがないだろう？

しつかし……暢気な顔して先輩にいじられてる駆が点を取りうる存在だなんて、誰が思うんだらうかねえ。

## 第35話

さて、やってまいりました葉蔭戦。

準々決勝になるこの試合、俺はいつも通りスタメンでの出場になる。

最初はいつもの通りDFとして動き出すわけだが、今日はFWになることなくDFに集中せざるを得ない試合内容になるのではないだろうか。相手の中心選手である飛鳥はりべロだし、どちらかと言えばDF寄りの選手であることには変わりないだろう。隙があればオーバーラップするのは当然の事とはいえ。

さて、ホイッスルもそろそろという時間帯。

相手のFWとMFに注目してみる。やはりと言うか、スピードに自信があるだけあって、速度の数値が高い鬼丸だが、それ以外の選手も軒並み能力が高い。うちの高瀬は運動能力と背の高さを買われてスタメンとして出場さえしているが、向こうは列記とした実力主義だというのが分かる人員の選出をしていると思う。身長が少し低くとも能力が高い。そういう選手をしつかりと起用しているのが葉蔭の強みであり、優勝候補としての誇りなのかもしれないな。

と、試合開始のホイッスルが鳴り響き、前半は江ノ高からのスタートで始まった。

荒木先輩がボールを中央で持ち、ゲームメイクしていく。そんな中、サイドから飛び出たのが薫で、味方の動きに合わせての動き出しはいつもの薫以上のものが感じられる。

そこから相手DFをフェイントで躱し、中央ゴール前に飛び出した火野先輩に合わせてボールを上げたと思いきや、その奥から飛び出していた高瀬にクロスが飛んで行き、完璧なタイミングでヘッドを合わせ、一気にゴールネットにボールを突き刺したのであった。

「が、しかしだ……」

『いや……オフサイドフラッグがあがっていた！ 残念！ ゴールならず!!』

「なっー」

しつかりとポジション修正をしていたのだろう。

ヘディングシュートをされていたにも関わらず焦ることなくボールの軌道を目で追っていた相手DF陣を見て、やはりと心中で愚痴る。まだ俺がFWとして活躍するよな展開にはなっていないが、これは今までの高校のサッカー部とは一味違った守り方であることには違いない。

そもそも、高校生が意図してオフサイドトラップを仕掛けられるものなんだろうか？ いや……それだけの特訓をしてきましたっていうのは分かるんだが、にしたって。に

したって今の動きにはあまりにも無駄が無き過ぎて何とも言えない。それもリベロの飛鳥がDF陣に指示を出していたように見えたが。やはり、葉蔭は一番飛鳥を注意しなければならぬ。

葉蔭のゴールキック。

さっきの守備を見て少し動揺しているうちのFW陣だが、一応今のところは問題ない。が、いつも以上に薫の動きが悪い。いや、攻め自体の動きは悪くなかったのだが、守備に関わる動きを全くしないのだ。今までも同じような感じだったが、今日と言う日に限って最大限の動かなさである。

相手MFからFWへとボールが移っていく。

江ノ高よりも丁寧なボール回しだが、これも大体が飛鳥の指示によるものが大きいのだろう。DFの要だというのにも関わらずでもボールを受けれる位置を取っているつてのが凄えや。FWからMFへ、MFからFWへ。伝統校の流れをしっかりと継いで来た言わんばかりのパス回しだが、その一つ一つの動きに迷いは無いし、キレもある。セオリー通りの動きだが、ボールが飛鳥に回った瞬間、セオリーという枷が無くなったような動きを見せ始める。

「……！」

「ちい!?!」

江ノ高のMFが死角になって見えないかと思いきや、オーバーラップを始めたFWにパスを選択した飛鳥。正直、俺と同じように全体が上から見えているんじゃないかと言わんばかりの前線へのパスだった。

それを堀川先輩が追っているのを見て、しかしギリギリ追いつけないであろう事も分かってるので、真ん中から上がっているFWに照準を定めてポジションを変える。いつでも反応出来るところまでポジションを修正し、飛鳥の動向を見守ることに。

今の飛鳥の動きは、今の俺が全体の動きを上から見下ろしているのとほぼ同じように全体をみているからこそその動きなのだろう。実際、そういう動きをピッチに立ちながらできるのだから流石としか言いようがない。

そうしてオーバーラップを仕掛けるであろう選手を気にしていると、本当にそのFWにクロスが上がった。

「ふっー」

FW目掛けてあげられたボールを一気にヘッドで打ち返す。

ギリギリのポジションにいただけに相手も反応しきれず、または俺のヘッドに驚いてか、その場から動けずにいた。そんなFWに関係なく試合は動いている。弾き飛んだボールはハーフライン近くにいた薫の足元に収まり、そのまま一気にドリブルを開始した。



「向井、10番チエック！」

「おうっ!!」

薫の動きに連動して上がり始めた荒木先輩にDFをマークさせ、当の本人、飛鳥は一気に駆けだしたのだった。一番近くにいたDFを薫に走らせ、本人はゴール前に真っ直ぐ走り出すとは……攻められてとは思えないぐらい冷静に状況を考え、判断で来ている。それが『皇帝』という渾名を付けられる要因になっているのだろうか……ホント、高校生とは思えないほど戦略が完成されてますわあ。こういう奴のIQがどれぐらいあるのかテストを受けてもらいたいものですな。

一切DFに参加しなかった薫だが、さすがに攻めになると能力をしつかりと発揮してくれた。俊足、とまでは言えないものの、全速力でドリブルする薫。先ほどと同じようにサイドから上がっていく薫を止めるべく相手DFが立ちふさがろうとするものの、これまた同じようにフェイントをかける薫。

葉蔭イレブンだけあって二度目はないと言わんばかりに食らいつくも、しつかりと攻勢に出ている織田先輩が薫からパスを受けたのだった。火野先輩、マコ先輩、荒木先輩、高瀬と、一気に攻勢に出た江ノ高イレブン。これにはさすがの飛鳥も守備するのに指示を出し続けるのは困難になったんじゃないかと表情を見てみればそんなこともなく。淡々と自分の仕事をこなしていますと言わんばかりの顔をしていた。

「不知火！」

「はいっとお」

攻めに転じていたはずの江ノ高ではあるが、オフサイドトラップやらを警戒して攻めあぐね、一旦息を整えるためにDFである俺の所までボールが回ってきたのだった。

さて、上から全体を見てみると、江ノ高イレブン全員がいつでも攻めに転じられるようなポジション取りをしているものの、それをしつかりとカバーできるようにDFを配置している飛鳥もまた、いつでもカウンターできる位置を確保しているようだった。

ただボールを持つているだけの俺に対して誰も突っ込んでこないってことは、それに俺の事も警戒しているらしい。……まあ、何だかんだ点数決めてきて俺が警戒されないなんてことは無いと思うけどね。客観的に考えても。

「動かないんだつたら取らせてもらおうぜっ！」

「無駄あつ！」

足元のボールを奪いに来た相手を躲すのにフェイントを仕掛けたものの、無駄にネタを挟んでしまった。時間は止められないが、俺も止められませんよって俺は言いたかったのかもしれないね（爆）

さて、恥ずかしい事を思いつつも一気にピッチを駆けあがる。

DFの俺がそんな簡単に持ち場を離れる様な事をしても良いのかと思われるかもし

れんが、そう簡単に俺からボールを奪える奴もいないと思うし、ある程度の距離だったら全速で走れば奪え返せそうな気もするからな。……まあ、俺からボールを奪えるような奴が足遅いのかっていう疑問もあるが。

「いかせないっ!」

このまま俺一人で突貫してやろうかと思ひ始めたとき、目の前に現れた飛鳥。

早くも飛鳥と俺の一对一のシチュエーションが出来上がってしまったわけだが。油断なく構えているつもりであろう飛鳥に対し、俺は笑いかける。もちろん心理戦を仕掛けに入ってます。

「かかって来いよ」

「ふっ……そんな安い挑発には乗らない主義なんだ」

「なるほど……が、逆にお前からじゃ俺に仕掛けられないってだけじゃないのか?」

「言ってくれるっ!」

仕掛ける。

と思つたが、ただのフェイントだったらしく、俺の出方を見ようとしていただけなのかもしれない。飛鳥の場合、個人技もかなりのものだから油断できない。荒木先輩のようにトリッキー、ファンタスティックに魅せるのではなく、実直に、堅実にボールを奪つてカウンターをしてくると言つた方式を取っている。

だからこそ、技で抜き去ったところで自信を無くすわけでもなく。その考え方、プレイスタイルを学ばせてもらえるってのは良い事だ。

さて……さすがにこのまま動かないってのは試合的に面白くないだろう。

いつちよ、俺から行かせてもらいますが、しっかりと学ばせてくださいよ？

## 第36話

目の前の飛鳥を抜いてやろうと意気込んだのは良いものの、これでもし俺が飛鳥を抜くことができなかつた時の事を考えると恥ずかしすぎる。真面目な顔してこんなことを考えてる俺ですが、一気に飛鳥を抜き去る。

……ためのフェイントをしただけで、つい反応してしまった飛鳥を無視してシュートを選択。いきなりの行動に反応しきれてない飛鳥を横目に、一気に左足を振りぬいた。

「っけえ！」

「くっ……」

飛鳥から少し離れたところを回転をかけて蹴ったおかげか、超人的な反応でボールに食らいつこうと足を出した飛鳥だったが触れることは出来ず、そのままボールはゴールを指してとんでいくのだった。

「っつあっ!!」

ここで好セーブをして見せた相手GKだったが、低めに飛んで行ったボールをピッチの外に弾き飛ばすことはできず、ゴール前にボールはこぼれてしまった。通常、そういったボールを奪取されないようにGKが確保に動くのだが、如何せん飛び出してし

まったGK。加えて、ゴール前に落ちてしまったボールを確保できるだけの余裕はGKにはなかったのだった。

ここぞとばかりに駆け寄る味方に、クリアせんとボール目掛けて走る相手DF陣。

——ふと、駆の姿が目映り込んだ。

全力でボールに向かって、真摯にひた向きにひたすら駆け寄る姿。まさに、シュートを決めんばかりの様子が、この目に映っていた。

「は……?」

瞬きをした後には駆の姿なんてどこにもなく、ボールの行方を決めようと走っている敵味方の様子があるだけだった。チラッとベンチを見るとハラハラした表情で江ノ高の動向を見守っている駆の姿が。

……もしピッチに立っているのが駆だったら、つてのを俺は幻影として見てしまったのだろうか? それにしても、随分と駆の事をかってるんだなと苦笑してしまう。と、その間にボールに追いついた葉蔭DFがボールを大きくクリア。俺がいるサイドの方、頭上を大きく超えていき、そのままラインを割ってしまう。

『おおつとお!! 江ノ高、早くも選手交代だあ!!』

「なっ!!」

表示された番号を見て薫が驚きの声を上げた。

『7番の場に代えて20番逢沢だあ！ いやあ、的場選手の出だしの動きはとてもキレイのある良い動きをしていましたが、ここでの交代には何か作戦でもあるのか!』

「なんで……」

と、気落ちした表情を浮かべながらベンチに下がっていく薫の後姿を見ながら、そりやそうだろうなと心中一人ごちった。

高瀬、火野先輩と、三人中二人がDF的な動きをしていたのにも関わらず、それを関係ないと言わんばかりにFWに限った動きをしていたからな。まあ、それでも今日の薫の動きはいつにもましてキレイが良かっただけ、どれだけ交代まで時間をかけるかと思っただが……岩城監督はそれを許さなかったらしい。

緩い先生にみえて、その実厳しく見る所はしっかり見ているのだから、今後岩城先生が監督を務めている間はメリハリのある部活動が続いていくんだろうと予期させてくれる。

「えっと、よろしくね、ヤス」

「ああ、頑張ってくれよ」

「うんー」

憶測の域を出ることは無いが、あの時見えた幻影がただの願望からなるものじゃないような気がしていた。薫には悪いが、もし薫じゃなくて駆だったら……なんて考えてし

まう。それだと最初薫が見せた攻撃は無かったものになってしまおうが。

リスタートは江ノ高から始まる。

薫のことは残念だったが、この試合を勝てば次も試合はあるんだ。その時心機一転して江ノ高サッカーの戦術にのめり込んでほしい。駆がポジションに入ったこともあり、早速リスタートしよう……あ。

位置的にMFがボールを投げるんだろうが――

「沢村先輩、ここは俺に任せてもらってもいいですか？」

「不知火……分かった。頼む」

「はい」

ボールを受け取りスローインの体勢を取ろうとしていた沢村先輩に声をかけ、スローインを譲ってもらおう。まだ均衡しているため、少しスローインに時間をかけても審判に注意されることはなかった。まあ、そこまで時間もかけては無かったってのもあるが。

前線を見る。

ゴールまで距離にして約35メートル。

ここから見える高瀬、火野先輩、駆……全員にDFが付いていた。その全員に対応することはできないだろうが、シュートを撃ち込まれても防げるような位置に飛鳥がいた。ゴールを背に、その双眸はしっかりと俺の姿を捉えていた。



一瞬、江ノ高FWに視線がいった。

「つけえ!!」

その一瞬で、俺は一気にボールを振り被った。

『不知火のスローイン! ……こ、これは!! まるで辻堂学園の金選手のようなスローインだあ! 一直線に真っ直ぐ、そして力強くゴールまでボールが飛んで行くうっ!!』

飛鳥の視線が俺に戻った。

江ノ高FW陣が動き出す。少し戸惑っている感もある動きだが、しっかりと自分の役目を果たそうとしていた。その中で一人だけ違う動きをしている奴がいた。

『ボールは一直線にゴール前まで飛んで行ったあ! ゴール前には長身の高瀬選手に江ノ高のエース火野選手もいるぞおっ!? 一体誰がこのボールをシュートまで持っているのか!!』

「俺だあっ!」

スローインはオフサイドに関係なく受け取ることができる。

葉蔭DF陣もそれをしつかり分かっているようで、飛鳥の指示のもと各DF、MFがそれぞれ江ノ高オフェンス陣に張り付いていた。クールな表情で支持を飛ばす飛鳥だが、内心どんな事を考えているのだろうか?

一気にゴール前に躍り出た高瀬が大きくジャンプ。

189センチメートルが精一杯跳躍。江ノ島タワーと渾名を付けられるだけあつて流石の空中戦を見せてくれる。葉蔭DFも懸命に飛び上がるが、頭一つ以上差がついていた。俺もそこに合わせてボールを投げたわけだが、バスケをやっていただけあつてさすがの跳躍力を見せる高瀬には驚きを隠せない。

無論、自分の事は柵に置いといて。

ギリチンのように振り下ろされたヘッドから繰り出されたシュートは、しかしギリギリでGKに弾かれてしまった。ゴール前に落ちたボールを目掛けて敵味方駆け寄ろうとするが、それよりも早くにボールに駆け寄る一人の選手。

『ッ、ッ、ッに逢沢選手が走り込んでいたあ!!』

誰もが呆然と駆を見ていた。

交代早々、DFに張り付かれて活躍できそうにないと思われていたのだろうが、ここと言う場面ですっかりと結果を残してきた奴だけあつて嗅覚が半端ない。

「決めるっ!!」

「くっ!」

駆がそのままダイレクトに蹴ったボールに相手GKは動くことはできなかつたが、反対側でDFをしていた飛鳥がボールに飛びついた。差し出された右足がシュートを阻み、そのまま大きくクリアになるようにボールを蹴ったのだ。

「つしやああつ!!」

「な、につ!」

その蹴り出されたボールを、俺のヘッドが捉えた。

スローインと同時に走り出し、DFとしてはあるまじき行為だとは分かっていたものの、一気に前線まで駆けた。そのせいでDFは堀川先輩一人しかいないことになっているが、駆の近くまでくればボールが来るんじゃないかと言う単純な疑問を解決すべく前線まで走り込んだのだが、直感はそのまま正解へと繋がった。

右足を伸ばした状態の飛鳥に、いまだ動くことができないでいる相手GKを尻目に、俺は勢いよく頭を振り下ろした。鈍い音とともに打ち落とされたボールはネットに突き刺さり、その勢いのせいか止まることなく回転を続けていた。

『ゴオオオオル!! 試合もそろそろ折り返しに差し掛かろうという場面で、江ノ高の頼れる男が決めてくれました! 1対0、ついに試合の均衡が破られました!!』

「……」

一見冷静な表情でこちらを見ている飛鳥だが、少しだけ口角が歪んでいる。二度も攻撃を連続で防いだというのに、最後の最後でありえないヘディングを見せつけられた飛鳥選手。いやあ……1点奪えましたからな。ここからは俺はDFに集中すれば良い良いとちやいますか? 全部駆とかに攻撃任せてDFに集中すれば決められることない

んとちやいますう？

……さて、葉蔭イレブンがそんな簡単に試合を終わらせてくれるんだろうか？

## 第37話

「おいおい、何だよありやあ!? すごい奴だぜ!」

「あんなヘツド、普通じゃできないなあ……」

「うつつ、あざつつ」

確かに、クリアしようと蹴られたボールをそのままヘディングするとか見たことない。

とは言え、飛鳥がしようとしていたのはクリア、と言うよりも前線にいる味方へのパス気味のボールで、そのままカウンターに持ち込もうとしていたような感じのする方向に飛んできた。そこに俺がうまいこと走り込んでいただけで、飛鳥からのボールを華麗にゴールしてやったというわけだ。

動体視力、反射神経、身体能力が高かったからできた業だね。まさにチートの権化です、ありがとうございます。

さすがに今の動きには驚いたのか、まだ呆然とした雰囲気をもとっている飛鳥だが、俺が見ていることに気づくと悔しそうに口角をあげていた。そして、チラと駆を一瞥。

得点を決めたのは俺のヘツドだが、あそこでしつかりとボールに走り込んでいた駆の

事も気にしているのかもしれない。まあ、俺はDFだから？ 基本的に後ろで守備を頑張ってますけど何か？

その後、リスタートと同時に果敢に攻めてきた葉蔭ではあったが、時間が少なくなっていたことと俺が何回かパスカットをし、ボールを奪ったりを繰り返したこともあり、そのまま試合の折り返しを迎えたのだった。

『さあ、1対0となつたまま前半戦を終えました！ 両校ともに素晴らしい攻めを見せてくれましたが、現在江ノ高が一步リードしています！ いやあ、葉蔭学園の飛鳥選手の指示も的確でしたが、それ以上に凄まじい動きで先制点を決めた不知火選手をどう攻略するのか！ 後半も見ものですねえ！』

前半の動きを見る限りでは、今までの高校と同じように葉蔭の攻めは止められる。

つまり、この試合も無失点のまま勝ち進む事ができるという事。このまま次の準決勝も勝ち進むことができれば、晴れて神奈川県代表として全国大会に進出することができるが……

ここで勝つたとしても次の試合相手は鎌倉学園。例の鷹匠先輩がいる高校である。鎌倉学園と言えば、その中等部に俺や駆が通つたもんだ。

中塚とかもいたらしいが……あんなトゲトゲな髪形だったら覚えてそうなもんだが、性格的な問題だな。あいつの事を覚えてなくても仕方なかつたんや。

取り合えず、後半戦に集中しよう。

今まで通りに無失点でいけるかもしれないが、葉蔭学園は何ととっても飛鳥が特に注意されているが、その他の選手の基本的な能力もかなり高い。鬼丸と言うスピードに自信のある選手以外に突出した選手はいないものの、欠点も無いという組織力を売りにしている。

それを飛鳥が司令官として動いているのだから油断はできない。

「——では、後半も君たちの活躍に期待しています。ここに勝つて、全国に江ノ高サツカー部の強さを見せつけましょう！」

『おおっ!!』

後半に向けてのミーティングも終わり、いざ葉蔭との決着を付けようと言う場面。

戦略は前半とさして変わらず、前半と同じように戦うことに。俺は変わらずDFとして配置。前半のように、いつでも攻撃に参加してもいいという許しを監督から受けたものの、いつもの事ではないだろうか? ……まあ、全員攻撃参加型の戦略を取ってる江ノ高で、岩城監督だからこそその言葉なんだろうが。

と、後半が始まろうとしている中、いつも通り力を抜いて立っていたら不意に視線を感じてしまった。結構な数の観客がいる中で感じた視線を不思議に思い、ふとその方向

を見ると一人の男性が。

そこにいたのはレオナルド・シルバその人だった。

あれえ？

あの人前に駆にちよっかいかけてませんか？　なんで俺の事みてるんですかねえ……そのまま大人しく駆に集中してくれればいいんですけど。

と、そんな淡い期待が叶ったのか、それともこの広い観客席で俺と目が合つて気まずくなつて外したのかは分からないが、取りあえずはこの一瞬の緊張から逃れることはできたわけだが。その次の瞬間、またしても誰かから視線を感じてしまった。それもレオナルド・シルバよりも強い視線を感じてしまったのだから締まりが悪かった。

こんな後半の始まる直前でこの視線の強さ。これから試合に集中しようとしている中で気を散らすような視線の主は誰だと少しだけ気になり、一瞥だけする事に。

そこで見ていたのは鷹匠先輩だった。

「うおっ!」

「? ……どうしたんだい?」

「あ、いえ……何でもないです」

少し離れたところにいた堀川先輩に心配されてしまった。

いやだって、凄い形相でこつちをみてるんだもの!　睨んだだけで目からビームが出



るんだったら本当にチームで焼かれるんじゃないだろうかってレベルで！

一瞬で視線を切ったから向こうが気づいているかどうか知らないが、あの表情はヤバイ。

あんな表情で見られたら、鎌学の今の後輩たちはどんな見られ方をしてるのかと不安になつてしまうレベルで。

そんなことはないんだろが。

『さあ、注目の後半戦。ホイッスルが今鳴り響きましたあ!! 前半を1対0で終えた江ノ高ではありますが、前半の勢いを保つことはできるのかあつ!!』

さて、強烈に叩きつけられる視線を無視して後半のキックオフに集中する。

後半は葉蔭学園のキックオフでスタートした。

両校ともに前半と同様の布陣を敷いているが、飛鳥と鬼丸の雰囲気だけが少し浮いているような気がする。これから何かを仕掛けようとしている感じだ。

が、何をするか分からない以上は基本的なDFをするしかない。それで飛鳥……葉蔭の思惑に対応することができれば越したことは無いが。当然、こちらの考えの裏をかこうとしてくるに違いない。

「つけえ!!」

相手MFがドリブルを仕掛けた。

それに対応するマコ先輩だが、あと少しでボールを奪えるという所でパス。ボールを受けたのが飛鳥だった。

「中塚あつ！ 9番チエツク!!」

「お、おう！」

後半から交代で入ってきた中塚に鬼丸をチエツクさせる。

テクニクは無いが鬼丸よりも足の速い中塚。冷静な表情をして何を考えているか分からない飛鳥の事だ。鬼丸を起点に攻撃を仕掛けてくるのは目に見えていた。すぐ近くは織田先輩の守備範囲になっているし、そっちは大丈夫だろう。

江ノ高はどちらかと言えば攻撃よりの布陣になっていると思う。だから、葉蔭のような組織だった守備はあまり得意とはしていない。故に一人一人が各選手に注意してほしいんだが、中塚みたいな馬鹿野郎は指示してこそ輝く奴だし。

飛鳥の精密染みたパスが鬼丸の元へと飛んで行くが、そこに走り込んだ中塚によって巧くパスを受けることができなくなると思いきや、そこで鬼丸がテクニクを見せつけた。

少しボールの方に近づき中塚に一瞬の戸惑いを持たせ、一気に跳躍してヘッドでボールを前に落としてそのまま自分で持っていくという荒業をやったのだ。が、その前には織田先輩。後ろからは中塚が追いかけてきることから無理せずパスを出した。

そのまま飛鳥までボールが回った。

コート中央付近、ゴールまで約35メートル。

俺のポジションはゴール近くだが、どんなシユートにも対応できるような位置を取っていた。それを分からない飛鳥ではないと思うし、そこからシユートを蹴ってくることはないだろう。

だからこそ、そこで左足でシユート体勢に入った飛鳥を不審に思ったし、それが左足だったのも尚更それを思わせる。

「っ！ 中塚！ しっかり9番チエツクしとけえ！ 李さん、9番注意っ！」

「へ？」

「っ!？」

李先輩はしっかりと反応してくれたのに対して、気の抜けたような反応を返してきた中塚は、動き出しが遅れてしまった。

その間、飛鳥の左足から放たれたボールは回転を掛けられてゴールに向かって飛んできた。それに気を取られた李先輩ではあるものの、俺がいることもあつてそのまま鬼丸に意識を割いてくれた。

と、俺が懸念した通り、回転が掛かったボールはゴールから逸れて鬼丸がいる方へと飛んで行った。気の抜けた反応を返した中塚だったが、それなりに鬼丸を警戒していた

ようで、距離を開けられることは無かったようだが、一瞬反応に遅れてしまい、結果鬼丸に突出される形になってしまった。

ゴールラインまでほんの少し。

江ノ高の守備的MFの皆さんが葉蔭イレブンをしっかりマークしているが、あそこからシユートまで持つていく選択が多すぎる。DFとは言え、下がり気味の飛鳥にも気がいてしまうし。

俊足の中塚に追いつかれるかどうかと言ったギリギリまで見極めた鬼丸が、ラインすれすれの所からマイナス気味のボールを上げた。

奴の表情を見る限り、味方FWを信じて適当に上げたボールには思えなかった。

それこそ、何か策があるような……

——そうかつ！

「つうおおおつ!!」

マイナス気味のボールには回転が掛かっていた。それも、直接ゴールを狙ってくるような軌跡を描いて。このダイレクトプレーには驚いたものの、李先輩はしっかりと反応してくれていた。少し飛び出してしまっていたものの、跳躍。からの真っ直ぐ体と腕を伸ばし、指先でボールに触れたのだった。

ほんの少ししか触れていなかったようだが、しっかりとボールを弾き出し、この危機

を乗り越えることができたのだった。

「不知火……助かった」

「いえ、李先輩こそ流石です」

まだ後半5分も経っていない。

前半とは打って変わって攻めに転じてきた葉蔭。今の江ノ高イレブンで打ち返せるのか？

## 第38話

後半開始から早々に冷やつとさせられる展開になってしまったが、逆に言えば向こうのチャンスを潰すことができた。

欲を言えばこれで葉蔭の士気が落ちてくれれば良いのだが、彼らの表情を見るに悔しがつているだけで、残りの時間を悲壮に過ごそうという気持ちはないようだった。

一度こんな大きなチャンスを与えたからにはもう相手に攻撃はさせない！

……なんて大きな言葉を言えればいいが、李先輩がギリギリで弾き出してくれたボールはゴールラインを割っていた。つまり、葉蔭のコーナーキックからゲームはリスタートするのだ。

十分に葉蔭の得点チャンスになっている。

キッカーは鬼丸。守備につく江ノ高イレブンの表情には、直前のマイナス気味のシユートの軌跡が映像として残っているのか、多少のばらつきはあるものの、全員が全員緊張を醸していた。

「不知火、ここは俺が確実に守る。お前はお前の働きをしてくれ」

「了解ですー！」

李先輩からの頼もしい言葉をいただいた。

実際、俺じやどうにもならなかったボールをギリギリで弾き出した人の言葉だ。信頼しないわけがない。

李先輩の強みは、明確なまでのイメージトレーニングをできる所にある。

そもそも李先輩は自分の弱い所を無くすべく尋常じゃないレベルの鍛錬を積んでおり、握力も100kgを超えているという話も聞いている。体の線が細い故の力不足を無くそうとフィジカルトレーニングを繰り返している姿勢には頭が上がらないのだが。

それを超える李先輩の強みが、先に述べたイメトレにある。

この人は楽をしようとはしないのだ。どんな時でも自分の最大限の力を発揮できるようにボールの行方、軌跡、その対処を考えている。考えることを辞めようとしめないのだ。

そうでなくとも、反射神経、身体能力共に葉蔭のGKよりも高い実力に纏まっているのだが。

さて、運命のコナーキックだが。

『鬼丸選手、どこを狙ってくるのか！ ゴールを守るのは江ノ高の守護神、李選手！ そしてDFには鉄壁の不知火選手が位置取っているが!?!』

やはりここは一度離れたところにいる飛鳥にボールを出すのか、それとももう一度マ

イナス気味のシュート性のボールを蹴ってくるのか。

まあ、流石に連続でそういうシュートを蹴ってくるとは思えないが、一応警戒だけでもしておこう。

鬼丸が動いた。

大きく蹴り上げられたボールはゴール近くを狙っており、しかしながらゴール前にいるFWおも飛び越えていった。

「なっ……」

ゴールから離れたところにいた葉蔭MFがボールをトラップ。

そのまま中央付近にバックパス。相手WF、MFが邪魔で死角になっている部分に誰かがいる。それは、上からの視点ですぐに判明。すぐに指示を出す。

「李先輩、逆サイド！」

「おう！」

『鬼丸選手からのボールを受けた白鳥選手だが、すぐにバックパスを出したぞ？ そこに、おおっと！ 飛鳥選手が走り込んでいるう！ この距離は飛鳥選手のミドルシュートのレンジだあ!!』

「おっおおお!!」

強烈なダイレクトシュートが放たれた。



スピンの掛けられたシュートは左に逸れていく。すかさず李先輩がダイビングし、真つ直ぐに左手を伸ばす。それでも足りないとはかりにピンと張り詰められた指先が、飛鳥のシュートを阻まんとボールに触れた。

そのほんの少しがボールの軌道を変える。

わずかに軌道がズレたボールはそのままボールに直撃し、ゴールネットを揺らすことなく弾かれた。

「うおおおっ!!」

そこに、相手MFの白鳥選手が走り込んでいた。

反応が遅れた堀川先輩が何とかボールをクリアしようと走り出す、到底間に合うような距離ではなかった。必死に、全力でボールに走る白鳥選手を止められるDFが、江ノ高サイドにはいなかった。

瞬間、俺は両足に力を込め、爆発させるように真横に跳躍。そのままシュートコースを消そうとするも、白鳥選手のシュートはそれよりも早かった。

単に、この瞬間だけゴールに対する意識が、ゴールを守らんとする俺の気持ちよりも大きかったという事なのだろう。

『ゴ、ゴオオオオオオール!! 後半10分に差し掛かろうところで、葉蔭学園、つい

に江ノ高に追いついたあっ!!　そして、これが江ノ高の今大会における初失点となります!　葉蔭が、鉄壁のゴールにシュートをねじ込んだあっ!!」

伸ばした足は、確かにボールに触れていた。

が、あくまで足先しか触れることができなかつた故に、シュートそのものの威力を消しきることができず、結果的にゴールの中を転々と転がっているボールを見る羽目になつてしまった。

しっかし……今まで無失点で来ていただけあつて、今回の失点つてのは結構悔しい。思わず、拳を形作っている左手に込める力が大きくなるぐらいに。

「すまない、不知火……俺のせいだ」

「李先輩、いや、これは先輩だけのせいじゃあないです。俺も、あと少しで止められましたし」

「それでもだ。シュートを止めるのはGKの仕事だ……次は、必ず止める」

背後にゆらゆらと気炎が立ち込めて見える。

葉蔭イレブンを睨み付けるように目に力を籠め、グローブを付け直すその様はまさに必殺仕事人のそれを彷彿させる。

……といつても、この世界に同じようなシリーズがあるかどうかは不明だが。

皆の表情を見るが、まだ1対1という事もあつてか諦めたような表情をしてる奴はいなかった。逆にやってやろうという意気が見える荒木先輩やマコ先輩。静かに闘志を燃やしていそうな冷静さを見せていた。

『おっと、ここで江ノ高は選手交代だ！ 交代する選手は……19番、高瀬選手と海王寺選手が交代だ！ こうれはもしや、不知火選手がFWになるのかあっ!?』

「不知火、監督からの指示だ。FWとして、全力で葉蔭に当たつて来いとのことだ」

「……了解つす」

「お前がC F Wで、逢沢は高瀬のポジションに移動だ」

俺が一番前で、駆がサイドにか……

あいつの場合は、相手DFの一瞬の隙をついて消えたかのようなポジション取りをする奴だから大丈夫だろう。逆に、WF FWみたいなポジションの方が合つてるのかもしれない。

一瞬の隙を見つけて攻めに転じ、しっかりと点を取る。

……まさにFWの鏡じゃないですか（真顔）

『高瀬選手のポジションに不知火選手が向かつていきます！ 彼がFWとして活躍した試合は数少ないですが、その全ての試合において驚くべき結果をたたき出しております！ 果たして、葉蔭相手にどこまで動きを見せることができるのかあ!?!』

「あー……」

興奮気味に話す放送席の男子に辟易するというか、恥ずかしくて観客席の方を見れないわ。何気にうちの両親が仕事の休みを取って見に来てるらしく、それを加味して一層その方向が見れないと言うか。

何も考えず真つ直ぐピッチの真ん中を見ているというのに、大体両親のいる所が分かるんだからたまつたもんじやないが。

確かに自分が親になって自分の子供が何かしらの競技で活躍してたらうれしいのかもしれないが、さすがにそれを子供の立場からしたら恥ずかしいというか。意識してしまふという感覚があるんだな。

と、徒然と考えてるものの、結局のところFWとしての仕事をしなければいけないわけだ。

今回、葉蔭学園とFWとして試合する上で特に実感している事が一つある。それは、やはり飛鳥選手が存在だ。

彼自身の実力が高い事は周知の事実であるが、その最たるものがポジション取りにある。自分自身のポジション修正は当然の事、常に味方のポジション指示を出してはシフトコースを消したりパスカットをしたりと、考え続けるサッカーを行っている。

技術的な物を見取りできればなあ。とは思っていたが、今回は戦術的な部分を吸収で

きるかもしれない。例えば、味方の位置を考慮して敵の死角に入ったりなんてね。

が、残りの時間はFWとして動くことになるから、その技術を俺が使う事はあまりないだろう。どうせだったらドリブルで正面突破しますから。

そういう死角を利用したりする技術は駆が駆使した方が良いだろう。体格的にも、そんなり相手の体の陰に隠れられそうだしなあ……俺だと少し体を小さくしないと隠れられそうにない。

「じゃ、もう1点取りに行きますかね」

「不知火……しっかり走り回らせるからな」

「荒木先輩。……どんだんパス回してください。勝つんで」

「へっ、流石の自信だな。期待してるぜ」

「了解っす」

さて、残りの時間。飛鳥選手の裏をかいて何点奪取できるだろうか？

## 第38. 5話

不知火がFWに移動した。

それだけで葉蔭イレブンに緊張が走った。

DFとしての実力もさることながら、FWとして動けば必ずネットを揺らしてきたその決定力を警戒していた。その存在を一番警戒しているのは葉蔭をDFの一人として支え続けている飛鳥であった。

後半も10分と言ったところで同点に追いつくことが出来たのは、正直運に寄るところが大きかった。あそこで葉蔭の実力で、と言いきれないのはやはり。

チラとFWとして出てきた選手を一瞥する。

長身で体格良し。それでいて俊足で反射神経も優れている。よく全体を見渡せていて、優秀なDFの鏡ではないだろうかと思うほどの人物。それが不知火だった。

……そもそも、高校に入るまで知られていなかった選手だった。

話聞く限りでは、高校からサッカーを始めたらしいが、実際にはどうなのかはわからない。あそこまでのテクニクを見せつける選手が、今までサッカーをしたことが無いなんて話をどうして信じられるだろうか？

(いや……それよりも、今は目の前の事に集中しよう)<sup>試合</sup>

先制された時のような予測のできない動き。

あれが二度も三度も続くわけがないと自分に言い聞かせ、リスタートに集中する。

……あの1点目の動きに動揺させられたのは事実だった。

ロングスローから走り込んで来てクリアに合わせられる。パスとして蹴り出しただけあって、それなりの衝撃が首にいつてもおかしくないというのに、さも当然とばかりにシュートを決め、先制点にしてしまったのだから。

『さあ、後半10分に差し掛かろうというところ。リスタートは同点に追いつかれてしまった江ノ高ですが、選手交代でどういう結果へ導いてくれるのかあ!』

江ノ高からのリスタートが始まったが、そのボールを受けたのはFWに移ったばかりの不知火だった。すぐに荒木に渡してゲームを作っていくのかと思いきや、前線の人、ボールを持ったまま佇んでいた。

その立ち姿は、以前荒木が湘南大付属相手に一人でドリブルを仕掛けたときのような雰囲気を漂わせている感じがする。

それだけの技術を持っているだろうし、油断できない相手だということも理解している。が、それがブラフであるという可能性も考えられないわけでもない。……<sup>不知火</sup>奴の場合  
は、一体どっちだ?

「奪ってやるぜー！」

『さあ、ボールをキープしたままの不知火選手に対してFWの桂木選手が仕掛けたあ!!』  
サイドには鬼丸もいる。

これで不知火がどう動くかでこれからの対応を考えなければならない。

FWとは言え、葉蔭かづかげのイレブンの一人として選ばれているだけあつて基礎の部分はしっかりしている。だから、そんな簡単に抜かれるなんて事は無いと思うが。

「なっ!?!」

『不知火! ボールを奪いに来た桂木を難なくかわし、そのままドリブルだあ!』

離れた位置からでもわかるほど綺麗な動き出しだった。

……いつだったか、あんな動きのする選手を見たことがあるような感覚に陥ったが、そんな実力のあるやつだったら今の今まで名前が出てこなかった意味が分からない。

「真屋! 鬼丸! 二人でチェック!」

「はいっ!!」

その後ろでは大月が控えている。

俺もいつでもプレスできるような位置取りをする。不知火のいる位置から、大月の体を使って少しでも意識が逸れるように死角に入り込む。

そのまま真っ直ぐドリブルを仕掛けて来れば奪えるように集中する。また、荒木に



バックパスを出しても対応できるようにDFラインを操作する。声には出さず、指を使って周囲のDFに指示を出していく。

『二人に囲まれてしまった不知火！ 後ろからは荒木選手が上がっているう！ サイドには逢沢選手が上がっていて、少し後ろには兵藤選手も走り込んでいるぞお!!』

二人のプレスが厳しくなる。

これはさすがにパスで対応してくるだろう。

——そう思った時だった。

一瞬、不知火に誰かのビジョンが被った。

その姿を認めた瞬間には全身に鳥肌のような、ゾワツという感覚が走っていた。

チラと逢沢のいる方向を見た不知火に釣られる様に真屋が体を動かした。それに合わせてるように動き出した不知火は、走り出そうとし、そこでもまた一つフェイントを混ぜる事で簡単に真屋を抜き去ってしまった。

それでもまだ鬼丸が追っている。

俊足の鬼丸は不知火の動き出しに一瞬動揺してしまったものの、何とか追いつけようとする。

(左かつ！)

一瞬視線が左を見たのを見逃さなかった鬼丸は、自分の感性を信じるままに足を出し

た。不知火はその方向にボールを出そうとしていた。このままボールを奪い、すぐに攻撃に移る!

と、頭に浮かんだビジョンは、しかし不知火が足元でボールを止めたことで消え去ってしまった。真屋があっさりとは抜かれたことで少し焦りもあつた鬼丸は、不知火の視線の動きに簡単に惑わされてしまったのだ。

(てか、こいつ全くボール見てねえっ!!)

全くと言つていいほどに足元を見ることのないテクニクは、とてもじゃないが高校生からサッカーを始めた初心者の域を超えていた。

無理矢理腕を伸ばし、強引に不知火のドリブルを止めようと試みる。

何とか不知火のユニフォームを掴むことが出来た鬼丸。ファールになる、という考えもあつたが、このまま不知火にドリブルを続けさせるわけにはいかないという、どこか脅迫染みた思いもまた、込み上げていた。

「じゃあっ!!」

「なっ!?!」

しつかりとユニフォームを掴んだはずだった。

それを、一瞬も速度が落ちることなくドリブル突破されてしまった。意地での抵抗は、しかし全くの障害にもなつていなかった。その事実には呆然としてしまう鬼丸だった

が、飛鳥の指示を受け、再びボール奪取のために動き出すのだった。

（二人があっさり……これは、彼の実力を疑うことができないな。このままだと大月一人だと抜かれるだろう。その後の不知火が通るであろうコースは——）

『一気に敵陣を駆けていき、すでに3人を抜いた不知火い！ このままゴールまで行ってしまふのかあ!!』

パスを出す霧囀気を出しながらそのまま真つ直ぐドリブルでFWとMFを躲していく不知火の様子を見ている飛鳥には、その姿に違う人物が映し出されていた。

それは、彼が今の自分を形作つたとも言えるような衝撃を受けた相手——逢沢傑の姿だった。

（そんな、馬鹿な）

ふと、その弟である駆の方を一瞥する。

見られているという感覚が無いのか、不知火の方を見続けているようだった。

その姿が、何かを待っているかのような霧囀気で。そのすぐ近くにはDFの稲葉もいる。鬼丸だつてしつかりと後方で待機している。

何も心配することなんてない。

ただ目の前まで迫り来つつある不知火の事だけに集中するべきだ。

しかし……何が起きるか分からないのがスポーツだ。

『不知火！ 4人目も抜いたあつ!! 残るは「皇帝」飛鳥とGKだけ、このまま本当に一人で行くのかあ!?!』

大月も抜かれ、ついに、自分の前にまで躍り出てきてしまった。

ほぼ一対一の状況。相對しているだけで伝わってくる不知火からのプレッシャーは、まさに傑のものと同変わらずと言った様相で。

体が震えるような感覚、背中に冷や汗が流れているんじゃないだろうかと思うほどの緊張だった。

「……っ!!」

「お前で、最後だっ!」

一気に抜きにかかろうと動き出す不知火。

その足技は、まさに荒木と同じような。いや、もしかすれば荒木よりも早い動きかもしれない。右に、左に。ボールは一向に止まる様子は見せない。だと言うのに、ぴたりと足に吸い付くような動きで惑わそうとして来る。

パスか、シュートか、ドリブルか。一瞬でも見逃すことが出来ない。

——来る!

「おお!」

「くう……」

その素早いボール捌きに何とか付いていこうとする。

右からドリブルで突破しようと思いきや、少なからず怒りが沸いた。

今までの選手ならいざ知らず、俺までもドリブルで突破できると思うなよ！

そんな恥辱も入った様な想いのままに、体を割り込ませようとする。

「うらあー！」

流れるような動きで不知火が背中を見せてきた。

回転——ルーレットか！

恐らく、右に抜けていくと思わせ、そのまま左から抜こうとして来るに違いない。不知火一人が少しだけ突出していたこともあり、近くにはパスを受けれるような味方もいない。

ここでボールを奪い、一気に反撃に移れば。

(……だ……な……?)

ボールの行方を、見失ってしまった。

ただの一瞬で。今までずっと不知火の足元から離れることのなかったボールが、ただの一瞬で消えてしまった。

『ぬ、抜いたああっ!! 不知火、飛鳥をも抜き去り、5人もごぼう抜きだあ!!』

「なっ!？」

驚き、後ろを向く。

過ぎ去っていく不知火の背中。そして、その足元にはしっかりとボールが納まっていた。一体、どうやって……

『ゴオオオル!! 江ノ高、2対1! リスタートからたつた2分で不知火が決めてくれました!』

少し飛び出していたところ、緩いループシュートを決められ呆然としているGKを岩本一瞥し、不知火の背中を見る。

その背中に映って見える傑の幻影に、ただただ呆然とするしかなかった。

## 第39話

『素晴らしいドリブルを魅せてくれました、不知火選手！ DFからFWに変わってほんの数分で葉蔭を相手に1点を奪いました！ そして、飛鳥選手を前に使った謎のフェイントの事も気になりますねえ！』

やっってしまった……

少し荒木先輩のドリブルを参考に攻めてみたんだが、本当に最後まで行けてしまうと  
は思ってもみなんだ。

湘南大付属を相手にしたドリブルを元に、一時的に能力値の上がった時に切れ味のあ  
るドリブルを魅せてくれた駆を再現できないかと頑張ってみたんだが。結果的に1点、  
葉蔭から奪うことが出来てしまったのは良かったことに変わりないだろう。

「さすがだぜ……ここまでくると、何も思い浮かばねえな」

「すいません。一人で決めてしまつて」

「いや、まあ……良いんだけどよ」

どこか呆れた表情を浮かべている荒木先輩だが、正直、これの元になったのは先輩と  
駆の二人ですからね。別に俺だけが凄い訳じゃないんですよ。

「一つだけ聞きてえ事がある」

「なんすか？」

「さっきのドリブル……誰に教えてもらったんだ？」

「ええと……」

何気に真剣な表情をしてる荒木先輩。いつもお調子者って感じの先輩がこういう表情を見せてくるのは珍しい事なんだが、さっきのドリブルかあ……

「前に駆の奴が凄えドリブルしてたじゃないですか」

「あん？ それがどうした」

「あれと同じように動いただけです」

「は？」

「だから、あの時の駆と同じような動きをすれば簡単に抜けるんじゃないかって思っただけですって」

空気の抜け始めた風船のように呆けた表情になってしまった荒木先輩を尻目に、さっきのドリブルについて思い出す。

一時的に能力が上がった駆のドリブルを基に、荒木先輩のテクニク、フェイントで相手DFを抜いていったのだ。

最後飛鳥を抜いた時に使ったテクニクは駆のものだったりする。チラと駆の表情



を盗み見てみたが、呆然としたような、どことなく諦めが入った顔になっていた。

そういう表情はだらしなく見えるから止めた方が良いと思うぞ。

と言うのも、このフェイントつてのが、今駆が猛練習している技だったりするのだ。未だ完璧な修得にまでは至っていない駆を見つつ、その進化前の『φトリック』を練習してみたんだが、結構あっさりと使えるようになってしまった自分に驚いたりしていた。

とは言え、駆の事だからすぐにでも進化技を会得するだろうと確信はしている。

……俺がすぐ使えるようになるんじゃないかって心配することだけが無いようにしてほしいが。

進化後のフェイントの事を奈々の奴は『φトリック・エボリューション』とか言っていたような気がする。駆も修得しているφトリックでも飛鳥には通用するだろうが、更なる強豪校を相手にするのであればとの事で、「技が進化する」という意味も込められているらしい。

どうせだから！

つて感じで俺は奈々がよくやるルーレットにφトリックを追加してどーん！

とぶつつけ本番で飛鳥にぶつけてみたのだが、良い塩梅でごぼう抜きの一にすることができたようだった。

結果を纏めると以上になる。

あとは、今俺が決めた1点を守り抜くか、一層激しく攻め立ててシュートを決めていき葉蔭を突き放すかだ。周りにいる江ノ高メンバーを見る限りでは、このままドンドン攻めていくって気概しか見えないが。

加えて、李先輩は俺が1点決めたというのに、より一層GKとしての役目を果たさんとはばかりの気迫が感じられた。……もう少し肩の力を抜いても良いのよ？

「はは……いや、まあ。あり得なくない、のか？ こいつ、確か今までサッカーやったことないって言ってたはずだよな……意味が分からん」

「ま、勝ち越したんですし、これからの事でも考えましようや」

「お、おう？ そうだな」

どこか納得いかなそうな感じだったが、俺も俺で説明が面倒なのでそのまま荒木先輩を自分のポジションに移動させる。

『さあ、後半15分と言ったところ！ 葉蔭リスタートから始まります！』

と、すぐにアナウンスが入り、葉蔭選手がキックオフ。

さて、FWとしての仕事をするのは良い物の、本職DFとしてはしつかりと守備にも貢献していきたいところ。1点目と違うのは、俺含めDFは3人もいるということだ。

この体になってからスタミナが無尽蔵なんじゃないかと思えるほど動いてくれるか

ら、無駄にコートの手端から端までダッシュしてても問題無し。むしろ、湘南の時に出てきた九十九選手が超サッカーうまい選手みたいな感じ。

不知火という選手を敵に回すと、如何に面倒な選手かお分かりいただけただけであろうか  
(ナレーション風)

「中塚あ！ しつかり鬼丸チエックしとけやあ！」

「はいいいっ!?!」

またしてもボーっとして中塚に指示を出す。

しつかり自分で動いてくれませんかねえ…… (呆れ)

と言うか、一度味方ゴールが危ぶまれるような事になってるんだから、そこらへんは学習していつてもらいたい。まあ、あのバカっぽさも中塚の良い所なんだが、長所短所で言ったら短所なのかな？

もう少しだけドリブルの精度が上がれば、自分の足の速さを生かすこともできるつてのに。知ってるか？ 今は葉蔭の鬼丸選手がスピードスターなんて言われちゃいるが、単なる足の速さじゃ中塚が一番速いんだぜ？ 無論、コートのは論外として。

スタミナもかなりのものだから、DFとしての技術を磨けば相手から「うっぎ……」と思われる良い選手になれるに違いない。

「お前は行かせん！」

「く……」

F WゆえにD Fよりの高いポジションで守備についているため、飛鳥へのチェックが簡単になった。これで相手は意表を突いてくるような動きをしない限りボールを出しづらいに違いない。

しかし葉蔭の皇帝と呼ばれるだけあって、静かに俺の死角に入り込もうとしたり、左右に体を動かしたり視線で味方のいるであろう方向を見たり。何としてでも俺の事を出し抜いて点に絡む動きをしようとしている。

しかし相手が悪かった。

いくら死角に入り込もうが俯瞰視点で飛鳥や葉蔭選手がどこにいるか分かるし、フェイントをかけられたとしても無反応でやり過ごせる。実際に動き出したときに合わせれば良いだけだしな。

そうこうしている内に、織田先輩と海王寺先輩でボールを奪っており、葉蔭サイドはシュートを蹴ることもできないうちに守備に専念するはめになったようだった。

こうなると飛鳥もD Fに集中しなければならぬが、今江ノ高で一番得点を決めてるのが俺だから、そうそう他の選手に意識を割くこともできんだろう。

が、さすがは葉蔭イレブンだけあって、飛鳥以外の選手もかなりの奮戦をしていた。

荒木先輩のテクニクにはM F二人がかりで対応し、偶に飛び出す織田先輩のミドル

はGKが前にパンチング。そこに俺が走りこもうとするわけだが、飛鳥とDF二人がかりでチェックにかかってきた。

しかし、俺ばかり対応していると……

『こ、ここに逢沢選手が走り込んでいたあ!! 不知火選手の対応に追われて生まれた空白のスペースを見逃してはいなかったっ!』

「な……!!」

「今度こそ決める!」

今の今まで姿を消していた駆が、ここぞとばかりに飛び出した。

江ノ高で一番得点に対する嗅覚が優れているのはこいつだからなあ……ここぞと言う場面の未来予知でもできるんだろうか?

GKとの一対一。

俺に付きつきりだった飛鳥が慌てて動き出す。

それと同時に俺も走り出し、もし前に弾かれたときに飛鳥よりも早くゴールに押し込めるような位置を決め打ちする。

2点目、ループシュートで決められた事が頭にあるのか、あまり飛び出さないGK。あと少してボールをトラップできるところまで走り込み、一気にシュートの体勢を取った駆。距離があるとはいえ、ワントラップでもしてしまおうと飛鳥に追いつかれると思っ

たのか、それとも――

「いつけええええっ!!」

振り上げられていた左足を一気に蹴り切った。

真っ直ぐ、ゴールネット目掛けて飛んでいくボールは、ちょうどGKの顔面の高さだった。走り出していた飛鳥だったが、足を伸ばすこともできない距離だった。

一直線の白線の残像と共に飛んでくるボールを防ぐため、GKは顔の前に両手を出した。懸命に飛鳥がGKの近くまで駆けている。前に弾くだけで良い。

ボールが、GKに触れた。

『ゴ、ゴオオオル!! 江ノ高、これで3対1!! 逢沢選手が押し込んだあ!』

「や、やった………やったあああっ!!」

「よくやった駆う!!」

駆のシュートは確かにGKの手に触れ、防がれたかに思われた。

走り込んでいた飛鳥ですらそう思っていたことだろう。

が、駆のシュートはGKのガードを何のその。前に弾かれることなくそのまま後ろに飛んで行ったのだった。当然、GKの後ろにはゴールネットが。

GK真正面という精度の甘さを見せてしまった駆ではあったものの、華奢な体からと

は思えない、威力のあるシュートを放ってくれた。その結果、また抜きを恐れたのだから、少し腰を落としながら駆のシュートを対処することになったG Kは、その威力を殺し切ることが出来ず後ろにこぼしてしまったのだった。

内心気落ちしているであろう葉蔭イレブンに、氣勢十分な江ノ高イレブン。

残り20分弱と言ったところでの失点は、彼らに大きな傷跡になったようだった。

## 第40話

『さあ、逢沢選手のシュートによつて3点目を得た江ノ高！ 点差は2点と広がりましたが、どちらが準決勝への切符を掴むことになるのでしょうか!? 熱い展開が繰り広げられることを期待しています！』

後半も折り返しを迎えてはいるものの、点差は2点。

葉蔭イレブンの決定力と組織力を考えるに、まだまだ安全圏内じゃあない事は江ノ高イレブンの全員が理解していることだろう。意気も十分に高まつている。

油断さえしなければこのまま勝ち進むことが出来る。確信に近い思惑が、俺の頭を過ぎっていた。

「荒木先輩……調子に乗つてないツスよね」

マコ先輩と話していた荒木先輩に失礼極まりない一言をかけた。

不機嫌と不可解を足して2で割つたような表情をする荒木先輩と対照的に、俺の絡みに面白そうだと笑みを浮かべるマコ先輩。

「あん？ 不知火い……そりゃあどういう事だ？」

「いや、江ノ高で一番調子に乗りやすい人なんで、まだ葉蔭相手に油断しないでほしい



なあと」

「て、てめ！ さすがに俺だつてんな事考えねえよ！ ……どんだけ信頼されてないんだか」

「荒木、そりや普段のお・こ・な・いつて奴だな！」

「うるせえよ!!」

「お前らは黙らんかあ!!」

「ずんずんと近づいて来ていた織田先輩を察知していた俺は、マコ先輩に荒木先輩の矛先が向いた瞬間からフェードアウトしていたため、直接雷が落ちる事は無かった。

リスタートまでの短い時間、皆の様子を窺ってみたが、特にこれといった心配はしなくても大丈夫そうだ。

「普段通り後輩に絡まれて愚痴を漏らす荒木先輩に、そこに茶々を入れ始めるマコ先輩。そして喧しくなった集団を締め上げる織田先輩。意気は十分に上がっていることに加えてこの団結力。」

「……心配するとなれば、団結力はあつても組織力で負けているところぐらいか。鬼丸や飛鳥といった一部の選手が突出している葉蔭に比べ、うちの選手は一人一人が秀でている。そこで何とかカバーできれば勝てるだろう。」

——いや、勝つ。

『葉蔭からのリスタート！ 残り20分と言う時間でどのような戦略で攻めるのかあ！！』

「いくぞー！」

「応っ!!」

「なんだあ……!?!」

葉蔭イレブンは、飛鳥を中心にほとんど全員の選手が上がってきたのだった。

まさにその陣容は背水の陣と言ったところだろうか。2点差まで離されて焦ることもないだろうが、それでももしないと点数を奪えないという考えだろうか。事実、中心で指示を出しつつ攻め上がってくる飛鳥の表情に、焦りと言う感情は見受けられなかった。

「こいつあ……全力でボールを奪いに行かないといけないみたいだ！」

「行くぜおいー！」

「くっ……!」

後の事を考えていないとばかりの全力ダッシュでボールを追いかける。

FWとしては守備に貢献し過ぎなのかもしれないが、それでも俺の体力が尽きる事は無いだろうし、問題ない。しかも、DFじゃなくてFWだからボールを奪った瞬間、そのまま相手ゴールに向かって駆けあがることもできるしな。

全力でピッチを駆けボールを追い回す俺に加え、織田・荒木・マコ先輩方が能動的に動いていることもあって、中々最前線までボールを出すことが出来ていない葉蔭イレブン。

飛鳥は精神的に強いだろうが、そのほかの選手はそうはいかない。

中々前へとボールを出せないことで焦り出したのだろう葉蔭MFが、安易なパスを出してしまい、そこを荒木先輩がカットしたのだった。

「不知火い！」

「はいっ！」

相手DF陣のほんの少しの隙間、まさに針の穴に糸を通すような精密さで飛んでくるボール。相手が触ることが出来ない、それでいて受け手側もギリギリ足を伸ばせば届く場所に出してくるパス。

これぞ荒木先輩の得意技、キラーパスだ。

オフサイドギリギリのポジションから一気に飛び出し。ギリギリではあるものの、俊敏さを生かして普通にパスを受ける。

相手守備陣の数名が手を挙げてオフサイドを主張しているが、フラッグは上がらない。

『オフサイドは無し！ 葉蔭、一気にピンチに陥ってしまったあ!!』

「く、待て……!!」

待てと言われて待つ阿呆がいるかってんだ!

必死に追いかけてくる飛鳥だが、ドリブルをしながらでも俺の方が足が速い。

俊足の鬼丸もこつちに向かつて走り出しているようだが、距離が開き過ぎていた。

ゴールまでは約40m。まだまだシュートするには遠いポジションではあるが、またしてもGKと一対一の場面になったのだった。

「ヤスー」

後ろから駆も同じように飛び出して来た。

少し俺よりも飛び出すのが遅れたものの、二人目のFWの飛び出し、追走というのは葉蔭DF陣にとっては厳しい状況になる。パスにシュート、連携ができるようになったんだから。

「くそっ……来やがれえ!!」

と言いつつもあまり前に飛び出すことの出来ていないGK。

残り35m程度。別にここから日比野のキャノン砲もどきをぶつ放しても良い訳なんだが、それでシュートを外したりGKの手で弾かれてもなあ……少々恥ずかしくなっちゃまう。

従って、俺はこのままドリブルを敢行。

飛鳥の足じゃまだ俺には追いつけないだろうし、追いつかれても駆にパスを出せば良い。まあ、駆の方に鬼丸が行ってるみたいだから簡単にシユートはさせてくれないだろうが。

『不知火選手！ そのままドリブルだあ!! このままシユートを決めれば葉蔭との差は3点！ 加えてハットトリックも達成してしまうのかあっ!!』

「行くんだ！ 不知火君っ!!」

「監督……へへっ」

岩城監督が立ち上がり、口に両手を当てて大声を出していた。

あんな精一杯監督にまで応援されちゃあ自分で行かないわけには、いかねえよなあ？  
どんどんとG Kとの距離が近づいていく。

飛鳥との距離はそれなりに離れている。俺がドリブルで近づいてくることに焦りを感じているのか口元が歪むG Kを目に、フェイントを仕掛け始める。

右に左にフェイントを仕掛け、どこに動くのか、シユートするのかを困惑させる。この一対一の場面において、俺がG Kの右に行くか左に行くかは半々なわけだ。味方からの援護を得られないG Kはどうしても止まってしまふ。

「そっだー」

「なっ……!!?」

戸惑い、両足を止めてしまった相手GKの股下を狙い、シュート。

少しして沈み込んだGKだが、既にボールは股下を完全に通り過ぎていた。ボールを遮るものは無く、そのままゴールネットを揺らしたのだった。

『ゴオオオオル!! 江ノ高、4対1!!』そして不知火選手は何とこれでハットトリック達成だあ!! 予選においてもハットトリックを達成していた不知火選手ではありませんが、まさか葉蔭学院がこのまま準々決勝で敗退してしまうのかあっ!!』

煽る煽る。

放送席の一生徒が生実況でそこまで煽って良いものなのか。

「うおおい!! ハットトリックってよおっ!?!」

「とんだ一年生だぜこいつあよお!!」

「流石だな」

「うつつ、あざっス」

皆が祝福してくれる。

駆の奴は点数に絡む動きが出来なかったと悔しそうにしている感じだったが、それでもおめでとうと声を掛けてくれた。こいつ、何だかんだで良い奴なんだよな。それに身長差も相まって小動物みたいだし。

しかし、こいつもこいつで飛び出してきてたから相手が守備に戸惑ったというか、俺

一人だけをチエツクすることが出来なくなつたんだぞ？　良い動きしてたんだがなあ。

「駆、お前が飛び出したからあいつがシュートを打てたんだ。お前も良い動きだったぜ」  
「先輩……ありがとうございます！」

俺も駆に声を掛けた方が良いのだろうかと思つて逡巡していると、先に荒木先輩が声を掛けていた。いやあ、なんだかんだ言つても面倒見の良い先輩ですからねえ。パスを出した本人だし、今の駆の飛び出しもしっかりと見ていたのだろう。あれには監督も含め、良い動きだと褒める事間違いない。

さて、またしても葉蔭学院からのリスタート。

後半も残り10分少々。ロスタイムを含めたところでそう大した時間にはならないだろう。ロスタイムの悪夢なんて言葉もあるようだが……この3点差はそうそう覆すことはできない。

それでも双眸に炎が宿つて見える飛鳥の精神には驚きを隠せないんだがな。

『葉蔭学院のキックオフから試合は再開されます！　その点差は3点！　ハットトリックを決めた不知火選手に1点決めている逢沢選手！　それ以外にも決定力のある選手が多い江ノ高選手の攻めをどう攻略していくのか！　今、キックオフです!!』

——長いホイッスルの音が響いた。

試合は、4対1。猛攻を仕掛け始めた葉蔭を相手に江ノ高は全力で守備に当たり、結果、江ノ島高校サッカー部が勝利を納め、準決勝に進出したのだった。



## 第40. 5話

神奈川県でも強豪の一角、葉蔭学院を相手に4対1という3点もの差を付けて勝利した江ノ島高校サッカー部。その部員の数名が岩城監督に呼び出され、部室に集まろうとしていた。

「はあああ……昨日葉蔭に勝ったばかりなんだからよお。少しは休んでたつて良いじゃねえかってんだ！　なあ、駆う」

「ははは」

僕と荒木さんの二人は、葉蔭戦の次の日に岩城監督に呼び出されていた。

葉蔭学院との試合に勝った僕たちの次の試合……鎌学との準決勝は5日後に控えている。その事に関するミーティングだったら全員呼ばれるだろうし。とすれば、個別に何らかの指導でもあるのかな？

僕は帰りのHホームルームRが終わった後に監督に呼ばれたんだけど、荒木さんとは部室に着く少し前に合流した。が、先輩も監督に呼ばれていたようだった。けど、それなら何で教室で皆に言わなかったんだらう？　ヤスも公太も教室にいたのに。

「にしても駆、お前不知火の奴と一緒にじゃねえのか？」

「えっと……僕が教室を出る前にはもういなかったの」

「ふうん……先に行ってるかもしれないねえか」

「はっ」

軽く雑談しながら部室に向かう。

面倒だのマック食いてえコーラ飲んでえだのと愚痴やら願望やらを零す先輩に笑いつつ「セブンに聞かれたら締め上げられますよ？」って言ったら「だあつ!? 少しくらい良いじゃねえかよ!」って叫んでた。

苦笑するしかなかったけど、そんなにセブンって……ドS、なのかなあ……

そんなこんなで僕と荒木さんは部室に着いた。

先に入ったのは僕で、メント臭そうな表情のままの荒木さんが後から。試合明けの日は基本的に練習無しで、体を休める事に専念するように言われてたから尚更だ。

まあ、それでも僕はセブンに夜練習に付き合ってもらったりしてるんだけどね。

「お」

「なんだ、荒木も呼ばれてたのか」

「マコ……それに、織田に海王寺、キャプテンまで」

そこにいたのはスタメンに選ばれてる人に加えて、僕や公太みたいにベンチ入りに選ばれた人たちだった。試合の事についてなのか、何か部活の事で大事な話でもあるの

か。

「あれ？ 駆、不知火の奴は？」

「え？ ……あれ？ そう言えば……」

中にいる人の中にはヤスはいなかった。

と言うよりも、ヤス以外のメンバーだけがここに集められたの？

まだ監督の姿が無いし、もしかすれば、これから監督がヤスに声を掛けてここに呼び出すんじゃない。

「ああ、皆さん。もう集まっていますか！」

と、部屋に入ってきた監督とセブンの様子を見て、ヤスはここに来ないだろうと勘付いてしまった。何せ、今監督は皆さんって言ってたし。何より、セブンが一緒にいるのに何も言い出さないなんてあり得なかった。

「ええ……でも、まだ不知火が来てないっすよお」

「そうです。監督、皆と言うのであれば、不知火もここに来ていないとおかしいのでは？」

マコ先輩に織田先輩が異論を唱える。

確かに、ヤスだけが監督に呼ばれていないことになる。けど、笑顔の監督と対照的にセブンの表情が、いつもに増して真剣さを帯びていた。

いつもと変わらない笑みを浮かべていた監督が、真剣みのある表情を浮かべた。その瞬間からもう、何かあるんだろうなと感覚的に実感していた。

「今回、君たちを呼んだのは他でもありません。その不知火君の事なんです」

監督の切り出しに、部屋にいた全員がどよめき出した。

ヤスはもう、江ノ高のサッカー部において群を抜いて巧くなった。それも、普通じゃ考えられないぐらいに。そりゃ、サッカーを始める前から結構運動もできたし、中学の頃からの友達だったから同じ部活に誘ったんだだけ。

「ああ、皆さんが心配されるような事は一切ありません。例えば、不知火君が不祥事を起こしたとか、部活を辞めるとか。そういうった類のお話ではありませんので」

と言う監督の一言で、半分ぐらいの部員が安心したとばかりの表情を浮かべていた。

確かにヤスって、初めて会った時から結構身長は高かったし、体格も良かったから怖いなあって思ったけど。あれで目付きまで凄かったら話しかけられなかったかも。

「今回、不知火君を呼ばなかったのは、皆さんにお聞きしたいことがあったからです」

「……それは？」

「このままで良いんですかと、私は問いたい」

監督の隣りに控えていたセブンが動き出した。

部屋の照明を消し、既に立ち上がっていたPCを操作し始めた。その様子はスクリー

ンに映っており、何かの画像を映そうとしているのは理解できたけど……と、少しして画面に映ったのは江ノ高の今までの試合結果だった。

また皆がざわつき始めた。いきなり監督に呼び出され、見せられたのが今までの江ノ高の記録なんだから。でも、少しだけ……ヤスの事に関してって言ってたし。つまりは、そういうことなんだろうか？

「この結果を見ていただいて分かる通り、我々は快進撃を続けてきました。ロングスローを武器にのし上がってきた辻堂。鉄壁の守備と日比野君のフリーキックを決定力としていた湘南。そして、遂には優勝候補の一角である葉蔭学院」

ゴクリと、誰かが息を飲む音が聞こえてきた。

「大会を通しての失点は1点。たったの1点です！これがどういう事かわかりますか？　どんなに守りの堅いチームであっても失点は免れないという中でこの結果」

「えつと……江ノ高が強かった、って事でしようか？」

ベンチ入りしている先輩が一言、手を挙げながら監督に向かって零した。

バン！　と大きな音が監督の方から。つい、ビクツと体を動かしてしまったのは僕だけじゃないはず。

「まさかつ！　まさかですよ！　確かに君たちのサッカーに対する情熱は大したものだ。それに、個人個人の努力も認めます。ですが、それだけで葉蔭学院を相手にここま

での勝利を収めることができましたか？」

「そ、それは……」

「良い、藤堂。監督、つまり、不知火の事を言っているんですか？」

言い淀んだ藤堂先輩の言葉を継ぐように織田先輩が監督に言葉を掛けた。

「はい。私が言いたいのは、今回の試合は特にそうなんです……不知火君が一番の活躍をしているのは皆さん、一緒にいてご存じの通りですが。このままで良いんですか？」

「え？」

「正直、不知火君についてはDFではなく、最初からFWとして活躍してほしい。そう考えてますし、今度の鎌学との試合においてはFWとして先発してもらおうと考えています」

そう言う監督の横でセブンが新しいスライドを表示した。

「これが、次の試合のフォーメーションになります」

江ノ高と鎌学のフォーメーションを模したスライドには、僕の名前は無かった。

「鎌学はトマホークを武器にして攻撃を仕掛けてくるでしょう。鷹匠君を先頭に、世良君、佐伯君。この3人が一直線に並んでいる特殊な攻撃陣です。ですが、世良君についても佐伯君についても、個人での決定力を持っていません。そして鷹匠君は言わずもがな

です」

動画が再生される。

セブンが試合を録画しにいった、直前の鎌学の様子が映っていた。

高い位置からのヘディングや、後ろを向いた状態からのシュートを決める鷹匠さん。パスを出すと見せかけ、決めるところで決めてくる世良さん。そして、3列目からの飛び出しで一氣にミドルシュートを決める祐介……

「見ての通り、鎌学の決定力の高さは高校随一です。これに対抗するには不知火君がDFとして活躍していただきたいところですが……」

顔に手を当て、消沈したとばかりに下を向く監督。

心なしか、セブンの表情も少し曇っているようだった。

「皆さんは……本当にこのままで良いんですか？」

「監督、はつきり言ってください」

強い口調で監督に申し出た織田先輩。

荒木さんやマコさん、キャプテンも頷いていた。

「——では、言わせていただきます。このままでは江ノ高は負けてしまいます」  
「なっ!?!」

驚いて声を上げてしまったが、皆もほとんど一緒の反応をしていた。

そんな中でも荒木さんとマコさんだけは笑みを浮かべながら監督を見ていた。

「岩城ちゃん……そりや流石にはつきり言い過ぎじゃねえか？」

「そうだけ。俺たちだつて鎌学相手だつて勝つて見せるぜ」

睨み合う監督と先輩方。

一触即発とまでは行かないものの、少しばかり重い雰囲気が漂っている。

が、それも監督が空気が抜けたように背中を丸めた事で霧散した。

「……はあつ。いえ、別に皆さんを無理矢理苛立たせて士気を上げるなんて事をしようと思つてこんな事を言つたわけじゃないんです」

「では、どういう事なんですか？」

「君たちは少し、不知火君に頼り切つていると言つてるんです」

途端、数名が顔を伏せたり周りを見回し始めた。

「これまでの大会の結果を通して、不知火君はDFとしても大きな活躍をしてくれましたし、FWとしても9割ほどの得点を決めています。ですが、今回の葉蔭との試合を経験して体感した方もいるでしょう」

これには誰も何も言い返すことが出来なかった。

全てをヤスに頼つてきたわけじゃないけど、でも……確かに江ノ高の中心として活躍してるのはヤスなんだ。DFとしても、FWとしても。



——悔しいなあ。

「不知火君がいれば確かに鎌学にも勝てるかもしれない……ですが、皆さんは本当にそれで良いんですか!?　ここは、江ノ高サッカー部は、皆で楽しむサッカーをする所です!　しぶとく最後までボールを追いかけて、ゴールを決める。どんなに泥臭くつたつて、皆さんが楽しまないとこの勝利に意味はないんです!」

その叫びには、監督自身の悲しみのような感情が入り混じっているような気がした。「へへっ……当たったり前じゃねえか!　あいつだけ良い思いさせようなんざ思つてねえっす!」

「確かに俺たち、不知火の事頼りすぎてたかも知れないな」

「あいつがいたから、今までゴールを守れた……」

皆が思い思いに言葉を口にしていく。

僕は、僕は——

「ヤスが、サッカーを楽しめれば、それで良いと思います!」

それだけ、ヤスにはサッカーを楽しんでほしい。

そんな思いで言つたんだけど、一気に静かになってしまったことに「あれ?」とドギマギしてしまった。

「そうだよな……俺たちだけじゃねえ。あいつだつて江ノ高サッカー部の一員なんだ

！」

「ああ。あいつにはいつも助けられてばかりだが、一緒に楽しまねえとな！」

一時は重かった雰囲気も、ここにきて明るくなり始めた。

同じ部員、仲間として、感情を分け合えないって……寂しいし。

「それでは！ 今日のミーティングはここまでとします。次は不知火君も一緒に、次の鎌学の試合について話しましょう」

「はいー！」

かくして、ヤスを抜いた話し合いは終わった。

「——つくしよいつ!! ……誰か噂でもしてんのか? ったく……」

## 第41話

さて、葉蔭学院を4対1で下した次の日、部活動は休みになり各々体を休めていた。かく言う俺も……なんて言いたいところだが、あれだけ走り回ったというのに筋肉痛すら無く、いつも通りに学校で授業を受けたり体育の授業で運動したりしていた。

さすが我が肉体……そうそう簡単に疲労状態に陥ることはないという事か。

で、その翌日には部室でミーティングをすることの事だったので、放課後真っ直ぐ部室へ。その最中、同じ部員の連中から意味深な視線を投げかけられたのには何か意味でもあるのだろうか……？ 特にベンチ入りの選手の中でも数人は嫉妬だか憧憬だかよう分からんような眼で見てるし。

なんだ……一体何があつたんだ？

ちなみに李先輩はいつも通り『漢』って感じの佇まいでしたとさ。

「——では、スタメンとして不知火君にはFWとして動いてもらいます」

「……DFではないんですか？」

「はい。葉蔭でも途中からFWとして動いてもらいましたが、守備的な動きもしっかりこなしてくれてましたので、同じように動いてください」

「はあ……了解です」

まさかの開始からのF W宣言。

スクリーンの図を見てもその通りの位置に俺の名前が書いてあった。

と言うか、一番最前線。3人いるF Wのど真ん中に配置させられていた。まあ、それもいつも通りの事なんです、開始早々からC F Wとして起用されるとは……

しかもD Fとしての動きも期待してるっぽいから、かなりの運動量になるんだろうなあ。

「あいや、出来れば最初はD Fとして動きたいんですが」

「え？ 何故ですか？」

「ああ……えっと、鎌学のトップは鷹匠さん、じゃないですか。なんで、一度自分の目で鷹匠さんの攻めを見てみたいって言うか体感してみたいと言うか」

……あれ？

見れば覚えられるかもしれないから進言してるのに、これだと何か意味深な発言をしてるようにしか思えないのはなんでだろう？ 単に、俺の心が薄ら汚れてるせいなのか。

「……なるほど。その点については考えてませんでした」

「うえ？ 今ので分かったんすか？」

「はは、まあ……今までの不知火君の活躍ぶりを見てきましたので、それなりには理解しているつもりです」

「あ、そつすか……」

それだけ色んな人の模倣してきたからな。

辻堂の金のロングスローイン。湘南、日比野の大砲フリーキック。葉蔭は、飛鳥のDFとしての動きが少々学ぶべきところがあつたというところだが。

荒木先輩のフェイントに駆のゆトリック。能力値が跳ね上がった時の駆のドリブルとかとか。

DFとしてよりもむしろFWとしての動きの方がより多く吸収してると言うか……華がある動きってのはやっぱり点に絡んでくる動きだろうし、ドリブルで相手を抜いたり、確実な決定力で点数を重ねたりだとか。

そう考えると大つぴらにこれまでやってきたなあと思えない。

てか、これ本当にサッカー高校デビューとか言つて大丈夫なんだろうか？

「ですが、既に皆さんにFWとして起用すると伝えてしまっているの、FWとして活躍してくださる」

「あつはこ」

「でも、鎌学は鷹匠君だけではありません。海外に行き技術を培ってきたMFの世良君。

同じくMFとしてその才覚を伸ばしている佐伯君。DFにはスイーパーとして名を馳せている国松君。それ以外にも鎌学には優秀な選手がたくさんいます」

「つまりは、FWとして見える物もあると?」

「そうです! 特に鎌学のDFの動きなんかはFWとして動いた方がより体感できますからね」

「なるほど」

確かに。

何もDFとしてじゃなくても相手の動きを見ることはできる、と。

しかし……今まで通り最初はDFとして、途中からFWとして動いた方がより多くの攻め方を肌で感じられるんだがなあ。

「岩城ちゃん、不知火がそう言ってるんだったらDFでも良いんじゃない?」

「え?」

「そうだけ。無理にFWにしなくても大丈夫だろ。そもそもうちには強力な攻撃陣が揃ってるわけだし」

突然の申し出に吃驚してしまった。

声を掛けてくれたのは荒木先輩にマコ先輩の二人。

先輩方の中でも特に可愛がってもらってるっていうか、仲が良い二人と言うか。

「最初は不知火をDFにして、途中からFWになるとして。前後半で役割を変えるとか、不知火が謙学の攻めを体感し終えたらFWになるとか。そういう感じで良いんじゃないですか？」

「ふうむ……それで行きましようか」

あれえ？

チームの命運を分けると言っていていいフォーメーションがこんな簡単に決まって良い物なんだろうか？ もつとこう、真剣みを帯びた白熱した展開に——いや、織田先輩以外にそこまで熱血染みた論争を起こしそうな人はいないか。

入部して間もない1年生が信頼されると前向きに捉えよう。

「監督！ それじゃあ納得がいきません！」

「君たちは……」

そう叫び出したのはスタメンから外されてしまった先輩方だった。

ほとんどの先輩方から俺は嫉妬の炎に塗れたような視線で睨み付けられていた。1年生は何も言わず黙っているかと思いきや、黙っているだけで彼らも俺の事を睨んでいた。

よく見てみるとその人員つてのが、元SCとして近藤先生指揮下に入っていた人たちだった。元FCのメンバーはそういう目で見てこないのが幸いだ。でもまあ、俺を睨ん

でいる先輩方を逆に睨んでいる人もいる。特に火野先輩とか（怖い）

しかしながら、彼らの気持ちの方が分からなくてもない。

高校からサッカーを始めたばかりの俺と違い、中学かそれ以前からずっとサッカーを続けてきてたんだろうし。ポツと出の1年生がそんな適当な感覚でポジションについて良いのか？ って疑問を抱いてもしょうがないだろう。

「ですが、不知火君が今大会において江ノ高の立役者なのは理解しているはずですよ。江ノ高サッカー部は実力主義。例え1年生であろうが実力ある者を起用します」

「ですけど!」

「ふう……私の主義については監督として就いた時にお話ししたんですが」

手を額に当て、困ったと言わんばかりに眉を下げる監督。

俺は俺で何も喋っちゃいけないが、どうすれば良いのか判断付かず単に黙ってるだけ。さすがにこんな部活内での揉め事に対応するだけのトーク力は無いんだ。それも俺が当人になってる話だし。

「岩城ちゃん。ならば、こいつと模擬戦させれば良んじゃない?」

「模擬戦、ですか?」

「そうそう。この部活は実力主義! その実力つてのを今まで散々見てきたと思うけど、鎌学と試合する前に各々メンバーの実力を把握するのもアリなんじゃないですか」



「？」

てか、各々の実力が前々から分かってなかったら監督としてどうなんだろうか。

でも……こうやって揉め事になりかけてる高校生男子を大人しくするにはそれもあり、か。

ここで隠れて練習を積み重ねていた選手が突出してくれば選手発掘にもなるわけだ。まあ、さすがに一朝一夕に技術が向上するとは思えんが（自分の事を棚に上げる）「わかりました。では、二組に分かれて模擬戦をすることにしましょう。4日後には鎌学との試合を控えていますので、激しいチェック等には十分に気を付けてください」

「はいー」

あらまあ……嬉しそうに俺を見てくることで。

我先にと部室を出ていく部員たち。まだ模擬戦についての詳細を一切聞いてないんだがなあ。血気盛んな男子高生たちだこと。

部室に残った面々を見渡すと、そこにいるのはベンチ入り含めたスタメン組全員と元FCの面々だけ。綺麗に元SCのメンバーが出ていったようだ。結構頑張ってたんだけどなあ……そんなに俺の事気に入らなかったのか？ それはそれで悲しい気持ちになるんだが。

「彼らの多くは元SCの子たちが多いようですね」

「す、すみません」

「いえ、織田君が謝ることではありませんよ。こういう部内でのぶつかり合いと言うのも青春の一つ。最後に綺麗に丸くまとまれば良いんです」

「へへ、岩城ちゃんおっさん染みてきたんじゃない？」

「な！ 私はまだ若いです！」

やんややんやと言いつつ監督と選手たち。

俺の気を紛らわそうとしてくれるのか、素なのか。どっちもあるんだろうが、ここは素直に仲間たちに感謝の言葉を贈ることにしよう。

そして行われた模擬戦は、結局SCとFCの二つに分かれて行われることになったのだ。織田先輩やキャプテン、高瀬もSCメンバーだったこともあり、人数的に少ないFCではあるものの、こっちのメンバーは既に昔のFCの戦力ではない。

荒木先輩にマコ先輩、薫に駆。現江ノ高サッカー部のメンバーとして活躍しているメンバーの協力は非常に頼もしかった。

——それにしても現スタメンとして活躍している方々以外のメンバーが酷かった。攻めも中途半端、守りも中途半端。真ん中の中継点になるのが精一杯って面子が多々見受けられた。

それを考えると一層今回問題を起こした先輩方に苛立ちが。

前半をDFとして動いてはシュートのごとくを止め、後半にはFWとして全力を尽くし、先輩方の自信を粉々にしてやらんばかりの快進撃を続けた。

途中、空中戦でまともにもぶつかつた高瀬とか、体を張つてシュートを止めようとしたキャプテンには申し訳ない気持ちで一杯だった。

結果、6対1の大勝。

後半開始直後に織田先輩、キャプテンのコンビに1点を許したものの、荒木先輩と駆が1点ずつ。そして俺がハットトリックを決め、試合終了直前にもう1点ダメ押しでシュートを決めたのだった。

## 第4 2 話

準決勝当日。

本日は鎌倉学園との試合だと言うのに少し意気が低い江ノ高サッカー部。

それもそのはず。今まで共にここまで勝ち進んできた部員のうち3人の部員が江ノ高サッカー部を辞めてしまったのだから。

元SC対FCの対決で、前は拮抗したぶつかり合いをしていたのにいつの間にかできた差に絶望してしまったのか辞めてしまった先輩方がいるのだ。それを残念に思っているのか良く思っていないのか、俯きがちのキャプテンに織田先輩。

まあ、キャプテンとだけあってモチベーションの回復が早い沢村先輩であったが、未だに引きずっていいような表情をしている織田先輩に、俺は何も言えないでいた。

実際問題、織田先輩が考える事になった一因は俺にあるんだから。

しかし、江ノ高サッカー部として活動してからずっと実力主義できてたのに変わりはないため、そこまで考える必要もないと考えている自分がいる。確かに短い期間ではあるが、それだけ俺はここで成果を残しているんだから。

とは言え……このモチベーションのまま鎌倉を相手にできるかどうか。

それが、今の江ノ高の正念場の様な気がしてならなかった。

『さあやって参りました！ 本日は準決勝、江ノ島高校と鎌倉学園の試合です！ 今大会を通してまだ1失点の鉄壁を誇る江ノ島高校。そして、U-19日本代表に選出され、日本を率いて活躍をしている鷹匠選手。決定的なまでの攻撃力を持ったトマホークが火を噴くかつ!!』

コートの反対側で各々体を動かしている鎌字イレブンの様子に、こちらを格下だと侮って油断している感じはない。むしろ、気合十分という熱気がこっちにまで伝わってくる。

……江ノ高との意気の差にただただ歯痒い思いをするばかりだ。こうなってしまう原因のほぼほぼが俺のせいなんだから。

前半はDFとして。後は様子を見てFWになる予定だ。

今日は、面目躍如の活躍をしないと……罪滅ぼしってわけじゃないが、それぐらいしないと俺の気が済まない。

「不知火……あんま背負わなくても大丈夫だぞ？」

「荒木先輩……」

「ありやお前のせいじゃねえ。自分の実力もわからねえ奴が進んで部活を辞めてったんだ」

「はい……あざっす」

荒木先輩からのありがたいお言葉をいただいたところで一つ、頬を叩く。

気合を入れ、前を向く。DFラインから見上げたところで目と目が合った選手が一人。例のFW鷹匠選手だ。

じつとこちらを見つめてくる鷹匠選手。

今までは観客席からずっと熱視線を送ってきたが、まさかこうして同じピッチに立つことになるとは……困惑の部分がある。まさか俺がサッカーを、なんて気持ちだ。

いや、鷹匠先輩に気を取られていたが、少し視野を広げて全体を見渡してみたら、相手選手のほとんどが俺の事を見ていた。鎌倉中学の時に見かけたことのある佐伯もまた、駆じゃなく俺に視線をよこしていた。

別に俺の事なんて気にしなくて良いから大人しく駆とお見合いでもしていてほしいところである。

実際、この大会で一番シユートを決めてる俺が注目を集めないわけがない。それは前の試合からも分かっていたことだが、これから先、試合を勝ち進んでいくたびに江ノ高だけじゃなく、俺の存在が広まっていく……まさかここまで俺の知名度があがるなんてな。

部員が減ってしまったのはしょうがないとして。

実際に試合にでるメンバーに変更があったかと言うと、そういう問題は一切なかったりする。それこそ、ベンチ入りもできなかった先輩方が自主的に退部してしまったという話だけで。

補欠がいけないのはチーム力としては痛い事だが、逆に部活としての活動資金の削減ができて良かったのではないだろうか（すつとぼけ）

キャプテンや織田先輩には悪いが、部員として過ごした期間なんて大した日数も経ってなかったし。ただまあ……ポジションをほいほい変えるのは正直どうにかならんものかと俺も思う。

——ピイイ!!

『さあ、試合開始のホイッスルが鳴り響いたあ！ 決勝に進むのはどちらの高校になるのか!? この試合を制して全国大会に進出するのはどちらの高校になるのかあっ!!』

そう……

解説の言う通り、この試合を勝ち進めば決勝に勝ち進むことができるだけでなく、全国大会への切符を手にすることができる。ただ漠然と試合をこなしてきたが、ここにきて少し緊張してきた気がする。

……気がするだけで、そこまで身体に影響がないだけましか。

江ノ高からのキックオフから始まった試合。

いつも通りDFの位置から相手の陣容を確認しつつ、江ノ高の攻めに対する対応を見極める。先頭、CFで敵陣に突っ込んでいる火野先輩。相手の裏をかこうと集中している駆。そしてサイドからの突破を狙っている薫。

しかし、全員がしつかりと鎌学DF陣に阻まれ、パスの出どころがない。珍しく荒木先輩がパスを出せずに足元にボールをとどめていた。そこに相手FW、MFがボールを奪いに行くが、さすがの足業で軽く避けていく。

が、前にボールを出せない。

中央付近、織田先輩、マコ先輩の辺りで回しているが、少しずつ防衛ラインを上げられている。

「くっ……」

「先輩……」

「っ、不知火……」

自分から前に出てボールを貰いに。

で、足元にボールが収まったものの、FWの鷹匠先輩がプレスをしかけてくる。あんな敵つい顔で迫られても困るんですが。

しかし、俺がボールを持ち、鷹匠先輩が向かってきた瞬間から鎌学イレブンの視線が集中した。その一瞬を見はからったように飛び出した駆に合わせ、一気にボールを蹴り



出した。

「なっ」

鷹匠先輩の驚いたような声が聞こえてくるが、何も気にしない。

確かに俺がいるところから駆の様子を確認するのは困難だが、俯瞰視点である程度判断することができる。

トマホークが鎌学の中央ラインを真っ直ぐにボールを上げてくる攻撃システムなんだろうが、俺からしてみれば適当にFWにボールを出せるからな。そんな複雑に考えようとは思わない。

そう、すべては俺が支配している（白目）

『おおっとお！ 前半開始から早速江ノ高チャンスだあ！ 不知火選手が大きく蹴り出したボールがそのまま逢沢選手の足元に収まった！』

「行かせねえっ！」

と、駆の前に出てきたのは鎌学でもトップの守備力を誇る国松選手。

スイーパーとして活躍する彼は、駆のボールをクリアしようとして牙をむく。

すぐ近くまで近付いてきた国松選手を駆は回避できるのか!?

……なんて大げさに言ってみたものの、現実問題数値で見た実力でいえば国松選手の方がすべて上。基本的に何も無ければ数本に1回程度しかドリブルで超える事しかで

きない。

「いいで、決めるー！」

「う、おおっ!?!」

新技炸裂。

……前の試合で何気なく俺がさらしてしまつたゆとりツクだが、駆がこれを使う機会があまり無かつたため隠し技みたいな感じになつていた。

が、そんなこちらの事情を知るわけもなく、駆がいきなり使つたゆとりツクに対応しきることができなかつた国松選手は突破を許してしまう。

周りの選手も、駆のフレイントに目を見張っている。

残るは相手GKただ一人。俺に集中していた鎌字イレブンも、これを機に駆に少し目が行くことになるだろう。別に俺なんか見てなくても良いんだよ？

てか、今更だが。

DFラインから一気にFWまでボールをロングパスしてシュートまで行けるこの形。トマホークより強くないですかね？

国松選手を置き去りにした駆はそのまま右足を振り上げ、シュート。

少し精度の甘いシュートになったものの、一対一で蹴られたボールはGKの指先の少し先を通り過ぎ、ネットを揺らしたのだった。

『江ノ高、先制い！ この試合スタメンとして選出されている逢沢選手がいきなり魅せてくれました！ あれは葉蔭戦で不知火選手が見せたフェイントのようにも見えましたがどうなんでしょうか!?!』

前半4分。

先制点を挙げたのは江ノ高、駆。

——なのだが、何故か目の前にいる鷹匠先輩は俺の事を睨み付けてきていた。しかも無言で。

……俺、どうしたら良いんだい？

## 第43話

駆が先制点を決めたとというのに、何故か俺ばかりを注視してくる鷹匠先輩。

正直、なんで俺ばかりを気にしているのかわからなかった。

……多分、俺が駆にパスを出したのが気に食わなかったのだろう。

それがアシストになってるかどうかは分からないが、原因は俺だし。だが、逆にこんなにも睨まれている理由が分からない、と言うのもまた不可解な気持ちにさせてくれる。

そもそも俺が前の試合に出てる時もこんな視線で睨み付けていたのかと思えば、それはそれで癪に障るものがある。文句でも何でも、言いたいことがあると言えばいいのに。

それが出来ないのが、違う高校のサッカー部としての痛い所か。

冷静になって先制点の事を思い出すと、俺がカウンター気味のロングパスを上げて駆に繋ぎ、パスを受けた駆はそのままDFの要である国松選手をドリックで抜き去って先制点を決めるといふ快挙を為して見せたんだが。

それで何故鷹匠先輩は俺を睨み付けているのだろうか（白目）

「不知火……お前、さすがだな」

「いや、あれは駆が決めてくれたんで」

「そうか……ま、それがお前の良い所か」

「はい？」

「いや、なんでもねえよ」

リスタート直前に絡んでくれた荒木先輩のおかげで少し気が楽になった。

皆に見られているなんて、さすがに自意識過剰だろうかと思つて誰にもこんな事は言えないままでいる。

先制点の起点になったからだろうか？

それとも今大会における得点王の座を狙っているのか。

どちらにしても相手チーム。敵であることに変わらない。であれば、俺がすることはただ一つ。徹底的にこの江ノ高が勝つための動きをする事だけ。それだけの愛着がこのチームにはあるし、何より先輩方……同級生たちとの想いに応えるためにもな。

『さあ、リスタートオ!! 先制点を決められてしまった鎌倉学館、鉄壁と名高い江ノ高の守りをどうやって突き崩すのかあつ!!』

鎌学からのリスタート。

全体的にゆっくり上がってくる鎌学のプレスには少しながら威圧感を感じる。

と言っても、一番にその圧力を感じているのは鷹匠先輩なのだ。

先制点での攻め。俺から駆へのパスからのφトリックは奇襲と言っても差し支えない攻撃方法だったこともあり、さすがに次はこの方法は通じないだろう。と言うか、駆に対するチエツクが厳しくなったはずだ。

とは言え、俺との練習でかなりプレス・当たりに対する抵抗ができるようになってきたから、簡単にボールを奪われることはないだろうけども。

駆がダメなら他のFWにパスを出せば良いだけなんだがな。

しかし……俯瞰視点で鎌学の攻めを見ているが、連携が非常にうまい。

江ノ高イレブンは個の力が高いチームだが、鎌学は同等以上の高い実力を秘めた選手で固められている。これが高校サッカーの中でも優勝候補と言われている高校の伝統的な力なのだろう。

特に、中央の縦一直線に連なっている選手。

FWの鷹匠先輩から佐伯、世良、そしてDFの国松選手。

そこを起点にして翼のように広がる布陣で攻め上がってくる様相はまさに圧巻。

と考えるなら、やっぱり先制点を江ノ高が奪う事が出来たのは大きい事だった。

俺は鷹匠先輩に睨まれていて周りの選手を気にしてはいなかったが、世良って選手も何気に苛立たしそうな表情をしていた。

まあ……それが俺に向いていないだけまだ良いか。

「世良っ！」

「……ちっ！」

荒木先輩とマコ先輩のプレスによってバックパスを選択した世良選手。

そのパスを受けたのが佐伯選手なわけだが、やはりこの縦のラインが鎌学の一本の太い幹になっている。

佐伯選手は、ボールをトラップすることなく一気に前線に上げてきた。まるで、先制点の起点になった俺のロングパスのようなダイレクトプレー。恐らく、いくらか以上は俺の動きを気にしているんだろうか。

「行くぞー！」

いや、これは単に鷹匠先輩のフィジカル、テクニックを信頼した上での攻撃。

つまるところ、鎌学の基本的な攻撃スタイル——トマホークが火を噴こうとしていた。

真っ直ぐに伸びるパス。飛び出す鷹匠選手。一気に駆け上がり、ゴール前でボールを受けようとしていた。

「しゃあっ!!」

「なっ!?!」

そんな鷹匠先輩をよそにマークをせず、前で一気にジャンプ。

大きく飛び上がった俺は、鷹匠先輩の驚く声が聞こえてくるほどの跳躍力でロングパスをカット。ヘッドでボールを落とし、そのまま織田先輩にパス。さすがに黙ってトマホークさせるほど気の良い奴じゃないんでね。

『おおっとお!! 不知火選手、驚異的な跳躍力でパスをカットオ! 鎌学の攻撃をシャットアウトだあ!! これが、江ノ高サッカー部が鉄壁と謂われている由縁だあつ!』

「てめえ……」

煽る煽る。

おかげで俺が後ろから鷹匠先輩に声を掛けられる事になってしまったじゃないか。

心身滅却。火もまた水の如し。

適当な事でも考えておけば目の前の脅威から気を逸らすことぐらいはできるだろう。両目を瞑って南無阿弥陀仏と、心中呟いておくが、俯瞰視点でしっかりと現状の把握程度のはして置く。これで油断してくれるんだったら安いもんだ。

スムーズに攻め上がった江ノ高だったが、いざ前線にパスを出したら佐伯選手と国松選手に阻まれパスをカットされてしまった。そのまま鎌学サイドの攻撃に。

駆や火野先輩が果敢にボールを奪おうと競り合おうとするが、巧い具合に直前でパス



を出されたり、体の小さい駆のフィジカルの弱さでボールを奪う事ができなかつたりと、個人技での差が出ていた。

だからこそ、試合開始直後のロングパスからのドリフトがうまい事得点に結びついてくれたんだが。……さすがにもう油断はしてないか。

そんなこんなでまたしても鎌学の攻撃。

江ノ高が攻めあぐねている感覚が強い。

が、前半開始早々に鎌学から得点を奪う事ができたのは、江ノ高イレブンには大きな心の余裕になっているはず。対して鎌学は、実力的には向こうの方が上だと言う自信からか、冷静さを感じられる。まだ前半だという時間的な余裕があるからこそその冷静さなのだろう。

——ピーーーーーッ!!

『あぁつとお!! 織田選手、ここでファール、イエローカードだぁつ!! この位置でのファールは少し厳しいかぁつ!!』

「なっ……」

全体を分析していたところで織田先輩がファールを取られてしまった。

相手は世良選手。攻め上がろうとしていたところをプレスしに行つた織田先輩だが……ここで見ていた分にはファールになるとは思えない。故意……自分から倒れて

フアールを狙いにいったのだろうか？

「審判、今のは明らかに彼が自分から倒れて！」

「ダメだ、織田君！ それ以上は!!」

——ピーーーーーッ!!

『あーっ!!? なんと、ここで二枚目のイエローカードだあ!! ここで江ノ高、チームの要である織田選手が退場になってしまったあ!』

……は？

呆然とした表情を浮かべる織田先輩と、それを見て笑み浮かべる世良。

笑みと言うのは、かなり彼の事を良く見ようとしている。それほどまでにあくどい笑みに思えた。

……冷静に考えると、相手の戦力を削ぐのは戦いにおいて基本中の基本ではあるが。だからと言ってそれを臆面もなく堂々と顔に出す世良の表情を見てみると腹立たしさが前に出てくる。

「こいつあ……納得いかねえなあ」

「あん？」

不審げな表情でこつちを見てくる鷹匠選手だが、もう遠慮はしない。

相手にも、味方にもだ。一切合切の遠慮をしてたまるものか。

飄々とプレイを続行する世良に、悔しそうに顔を歪めながらもピッチの外に歩いて出ていく織田先輩。二人の対照的な表情を見て、その思いを固めるのであった。

## 第4話

『江ノ高、前半15分でなんと織田選手が退場になってしまったあ！ 1点のリードはあるものの、ここでの人数差はこの後の展開に大きな傷跡を残してしまう事になるのではないでしょうか！』

「納得いかねえなあ……」

見方によっては、自分に非がない事を無理に強調しようとした織田先輩の思慮が足りなかつたという考え方もあるだろう。

相手の人数を減らしたことで、戦略的に有利な立場を作った世良選手の判断、行動はチームとしては正しい事をしているのだろう。

だが、それで感情が納得するかと言ったら別の問題だ。

そりゃチームのため、自分のためを考えたら当然の行為なんだろうが。

こう……腹の奥底からふつつつと湧き上がってくる憤怒の感情がめちやくちやにしてやれと囁いてくるんだ。べ、別に厨二病でもなんでもないんだからね！

なんて……茶化して考えようとしてみても収まらない腹のうち。

こりゃ、本当に鬱憤を晴らさないと気が済まないようだ。

——昔からこんな義憤に燃える様な男だっただろうかと、自問自答しては苦笑してしまふ。この気持ちに義憤からでも、世良に対する単なる苛立ちでも、もう理由はどうでもよかった。

フアールからのフリーキック。

キッカーは当人である世良だった。

距離は約30m。ゴール正面と言っても差し支えない場所からのキックだが、直接ゴールを狙うにはちようどいいポジションだった。

『さあ、鎌学のフリーキック！　ここは気持ちを切り替えてしつかりと守ってほしいところですよ!!』

「……………!!」

世良の足元を注視する。

姑息だが、通用するテクニクを披露してくれたんだ。ここでもそれなりのテクを魅せてくれるだろうと思つての注視。どれだけの人が俺の見取り擬きを知っているか知らないが……………

確かに、見せてもらった！

「李先輩、無回転だっ!!」

「く……………!!?」

キック直後のボールの回転を見て、叫んだ。

キッカーの世良はいきなり大声に驚いていたが気にしない。

忠告を受けた李先輩は、ボールを受け止めようとせずにしつかりとパンチングで前に突き出した。そこに詰めていた俺が大きくクリア。

やはり無回転つてのは軌道が読めない。いくらチートでもいきなりガクつと落ちる軌道には驚きを隠せない。が、叩き落すようにしてゴールを守った李先輩の反射神経には驚かされる。

「すまん……助かった」

「いえ、さすがです」

クリアしたボールはラインを割り、鎌学のスローイン。

つまり、まだ鎌学の攻撃が続くわけだが。

こつちを見て悔しそうな表情を浮かべていた世良に向けて嘲笑を一つ。あからさまに意識してやっただけあって向こうも気づいたようで、凄まじい形相で睨み付けてきた。故意とはいえ、これで俺の事を意識してる選手が二人。

……この嘲笑は、確かに世良のシュートが決まらなかつた事への意味合いも込められているが、それ以上に、彼の無回転シュートを見る事ができた事の方が大きい。

ボールの蹴る位置、蹴り方。かなりテクニクが必要とされるシュート。さすがに

すぐは出来ないだろうが、これをも習得できればますます攻撃手段が広がる。

リスタートと同時に投げ入れられたボールは世良の足元に。

それを確認し、距離を詰める。

「なんだよお前……俺を止めようつてのかわ？」

「ハッ！ 来てみる。お前は俺を抜けない」

「お前え！」

激高したように抜きにかかる世良だが、感情を表に出しただけでドリブル自体は冷静そのもの。あえてそういう風に言っただけか？

いっそ、向こうから仕掛けてくるように挑発しよう。

分かりやすいように、肩を下げて力を抜く。見た目で脱力している事がわかるように。視線もボーつとしてるように見せて、実際は世良の全体像をしっかりと把握できるようにしている。

明らかに苛立った表情を浮かべた世良は、仕掛けてきた。

一切視線はボールを見ていない。体の軸もあまりぶれてない。

ボールタッチは多く、足から離れないドリブルをしているが……覚醒した駆、テンションの上がつた荒木先輩と比べると、ほんの少しだけ劣る。

明らかに視線が動く。

いくら挑発されてもしっかりと周囲の確認は怠らないらしい。

が、数で不利に立たされている江ノ高がしっかりと守備をしており、パスをだせるようなスペースは無かった。

「ちっ！」

「舌打ちかい？ 自分の程度の低さが出てるなあ」

「なんだとっ!?!」

さすがに今の一言は効いたらしい。

今まで来そうで来ないという感じだったのが、一気にボールを前に蹴り出して抜きにかかってきた。

荒々しくも柔らかいという、なんだかよくわからない表現をしてみたが。強引だがフェイントで抜こうとしてくる世良。またぎからのシザース……視線は絶えず俺を見て、チラッとたまに味方の位置を確認していた。

「が、ダメ」

「……な」

世良が抜き去ろうとした瞬間。

抜き足差し足の感覚、それでいて素早くボールの前に足をさしだす。

威力を殺すように後ろに引き、クッションのように柔らかくボールを止める。



「え」

「上がれえー！」

いち早く上がり始めた荒木先輩にパスを出す。

マコ先輩、火野先輩、そして駆。江ノ高攻撃陣がどんどん前線に上がっていく中、俺はDFラインから全体を見渡していた。

織田先輩が抜けて数が少なくなった江ノ高だったが、より一層攻撃が激しくなっていた。一人少ない事を感じさせない動きでボールを回してはシュートし、こぼれたボールに食らいついでいる。

俺も、クリアのために蹴られてきたボールを受けては前線に回っていた。

その際、世良がしつこく俺をマークしてきたが……そのすべてを難なくかわしてパスしていた。

「俺は、こんなところで……！」

「こんなところ？」

3度目になるところ。

世良のプレスをかわしてパスを出したとき、世良の愚痴がこぼれたのを耳にしてしまった。積極的に守備につくような人間じゃない世良は、そのまま俺を睨み付けていたが、繰り返すように呟いた俺の言葉に、より一層眉間にしわを寄せて睨み付けてきた。

お前なんか何が分かる！

と言わんばかりの目。その双眸に映っているのは当然、目の前にいる俺だが……果たしてこいつは今この試合に立ってるのか？

「お前も俺も、今俺たちはここに居るんだ。どこでもない、ここにな」  
「……」

最初見たときから、どこか俺たちを見下しているような目をしていた。

世良の言うこんなところってのは、日本のサッカー部の事を言ってるんだろう。つまり、俺だけじゃなくこの試合そのものを通して別の何かを見ているらしい。織田先輩に對する行為も、八つ当たりの的なものがあったのか？

……はた迷惑以外の何物でもないけどな。

「ふんっ！ お前なんかに言われなくても——」

『ゴオオオオール!! 江ノ高、2点目を決めたあっ!!』

「なっ!!」

ずっと俺に気を逸らしていた世良が驚いたように自陣のゴールを見た。

俺はいつでも動けるように俯瞰視点で見ていたが、荒木先輩が個人技でMFを抜き去りそのままミドルシュート。何とかそれを弾いたGKだったが、そこにマコ先輩が走り込んでいた。

もちろん、相手DFも反応していたが、マコ先輩渾身のダイビングヘッドに間に合わず、動き出したばかりだったGKも手を伸ばしたものの、すでにボールはゴールの中をころころと転がっていたのだった。

『江ノ高、これで2対0！ 前半開始すぐから攻守の要である織田選手が退場になってしまい、不利な状況に立たされた江ノ高ではありましたが、なんとここで追加点をもぎ取りましたっ!!』

呆然とする鎌学イレブン。

喜びに包まれる江ノ高イレブン。

愕然とした様子だったが、次第に苛立たし気な表情でそれを睨み付ける世良に、俺はかける言葉が見つからなかった。所詮、元より他人同士どころかチームが違うんだ。そこまでこいつに対して善意で何かしてやろうという気は起きない。

これで折れるか折れないかはこいつの心次第だし……何より、それを決定するのも世良自身だ。

リスタートまでの間、俺は世良の事をずっと見下ろしているのだった。

## 第45話

江ノ高の攻撃は留まることを知らず、人数が少ない中でガンガン攻め上がり、鎌学ゴールを脅かしていたものの、前半は2点目以降得点を決めることができないまま折り返してしまった。

それでも、織田先輩が退場になってしまったというハンデのある中、ここまで戦うことができたのは、それだけ江ノ高の攻撃力が高い事を示している。守備は、まあ……何とも言えないが。

「それでは、後半は不知火君にFWとして動いてもらいます」

「……岩城ちゃん。なんだかんだ、不知火がいたから俺たちは無失点に抑えられてるけど」

「そうだけ。織田がいない今、俺たちが攻めるにや不知火がDFじゃないと——」

「それでもです。自ら辞めていってしまった方々に言い訳をするためでも、ましてや物申すために不知火君をFWにするためでもありません」

力強い監督の視線に、控室に集まった選手全員が黙り込んだ。

「この試合に、勝つためです」

静寂。

観客席から聞こえる雑音が、どこか遠くに聞こえる。

岩城監督のこういったところが魅力の一つだろう。しっかりと締める所は締めて、緩い所で部員に愛されるような性格。それが監督の持つて生まれた性格だとしても、学生時代に築き上げられたものだとしても、とても立派なものだ。

凜とした眼差しが俺を捉える。

正直、胃がキリキリしてるような感覚になるんで、そんな目で俺を見んでください。が、監督からの期待が高かったのか、後半開始早々からFWになる事が決まったのだった。

この際、誰かしらかの反対はあるんじゃない？

なんて思っていたものの、一切の反対も出ず。増して後半に対する情熱、やる気、勢いが増して終わってしまった。円陣を組み、荒木先輩とマコ先輩二人による掛け声で発破をかけて後半に臨むことに。

どうしてこうなった。

『さあ、注目の後半戦になります！ 不利な状況において2対0と言う結果で試合を折り返しております！ 後半戦はどのように戦ってくれるのかあっ!! ……おっとお、前半で獅子奮迅の活躍を見せてくれた不知火選手がFWに、火野選手と交代で海王寺選手

がDFに入ったようです!」

まあ、最初から前半はDF。後半はFWとして動くことは決まっていたようなもんだから別にいいんだが。

例の先輩方が部活を抜けていってから妙に皆の結束力が強まったような、俺のあずかり知らないところで何かがあったんだらうか? ここ最近ずっと真面目に部活に顔出してるけど、特にそんなイベント染みた事は無かったと思うんだが……

後半キックオフは鎌学からのスタートとなるんだが。

その二人の選手つてのが、鷹匠先輩と世良の二人なんだが……2人して俺の事を睨み付けてきやがる。胃に穴が空きそうになるんで止めてもらえませんかね。

ホイッスルと同時にキックオフ。

すぐに後ろに下げて攻撃を組み立てようとする鎌学イレブンに対し、俺は監督から前もって言われていた通り自由に動くことに。と言うわけでガンガン上がっていく。ボールのあるところ、相手がパスを出そうとする相手との間に割って入ったり。必要以上にはガッツリ行動していく。

スタミナの限界を考えないで走り続けられるってのは強みだ。

前線を俺一人が走り回って鎌学を圧迫し、自陣では他の全員がしっかりと鎌学攻撃陣に対応していた。

が、ボールを持った世良が一人走り出し、プレスに向かった堀川先輩とマコ先輩二人の守備もなんのその。ドリブルで真つ直ぐ二人を突っ切ってしまった。

ちよつと煽り過ぎただろうか？　と思わないでもない。

そのままシュートするかと匂わせておいて、隙を見て飛び出していた鷹匠選手にルーブ気味のパス。呆気にとられたように対応できなかった海王寺先輩。それを嘲笑うかのようにダイビングゴレーを放った鷹匠選手。

しかし、尋常じゃない集中力で反応して見せた李先輩。

横つ飛び、指先でボールに触れることができたものの、そのまま弾き出すことができずにボールはポストを叩いて点々とゴール内を転がるのだった。

『ゴオオオオル!!　2対1!　鷹匠選手、後半開始早々に反撃の狼煙を上げたあつ!!』  
直前までの世良選手のドリブルも流石の一言に尽きます!!』

自前のフィジカルもさることながら、圧倒的なバランス感覚、跳躍力を見せつけてくれた鷹匠選手。そして、吹っ切れたようにドリブルをしてからのルーブパスで味方に与するような動きを見せた世良。

数において不利を強いられている江ノ高では、少々守るに厳しい相手であることは間違いない。それに、俺もFWになってしまったという事も踏まえてだ。

「……駆、次のキックオフ、俺に任せてもらっても良いか？」

「え?」

「ま、見てろって」

自信満々な表情で答えて見せた俺に、駆の様子が一変した。

一気に目の前の人物の能力が跳ね上がる。

一体今の問答のどこに駆が覚醒するシーンがあつたんだろうか。それらしいキーワードでも喋つたか?

駆が少し驚いたような表情になった。

「お前、不知火か」

「えあ? あ、ああ……で、お前は誰だ?」

「ハハ! 別に良いじゃないか。俺は、お前とサッカーがしてみたかつたんだから」

「——そう、か」

今ので確信した。

やはりこの状態の駆は駆じゃない。

駆じゃない誰かが乗り移っている。転生なんてかましている俺にしてみれば、何が起きてても可笑しくはないという持論を持つちやいるが。

まさか目の前で二重人格らしき症状を見せつけられることになるとは思っても無かつた。



大体、この症状はサッカーをしている時、それもかなり限られた局面でしか出てきてない。練習じゃ一回もこんな姿を見たことなかったし。でも……試合中と言っても今までに何度かぐらいいしか見たことが無い。じゃあ、なんなんだ？

個人としては面倒な問題ごとを抱えているなど思わざるを得ない状況なんだろうが、本人に何も影響がない所とか、能力値が一定時間劇的に上がるところはチームとしては歓迎するべきなんだろうか。悩ましいところだ。

『さあ、1点差になってしまった江ノ高！ この後、どういった攻めを見せてくれるのか！?』

キックオフ。

俺が蹴り出したボールをそのままキープし、中央に佇んでいる駆。

まるで取ってくださいと言わんばかりの立ち姿だが、目の前に躍り出た鷹匠選手は一切手を出そうとしていない。その間、俺は敵陣を切り進んでいく。当然、相手からのマークが2人ついているが。

「お前……ホントに駆か？」

「……ん」

ふと見た駆の背後には、うつすらと気炎が立ち込めて見えた。

いつもの駆からは考えられない変わりように、さすがの鷹匠選手も戸惑っているよう

だ。ふと佐伯の事を見ているが、どうやら彼も同じように驚愕を目に張り付けていた。

「駆ー！」

横から荒木先輩が上がっていく。

それに合わせて出されたパスは、予備動作の小さいもので、目の前で守りについていた鷹匠選手も反応できないほどのものだった。

「しゃあっ!! 不知火、行けえ!!」

そんなパスを待っていましたとばかりにダイレクトパスで蹴り出す荒木先輩。

相手MF、DFが数人固まつてる中を貫くボールは、守備している鎌学イレブンを嘲笑うかのように真っ直ぐ縦に切り裂いていく。

当然、相手DFが足を出して止めようとするものの、本当にギリギリのところ足先が届かない。

「いかせるかあっ!!」

足元に収めたボール。

その直後に横からプレスをかけてきた世良。

そして、佐伯選手も寄ってきていた。なんだったらDF全員が俺に視線をよこしてきている感じがする。いや、選手だけじゃなく、監督も観客も、そのすべてが俺に視線をよこしている感覚に間違いはないだろう。

一瞬、駆からの視線を感じた。

「う、おおっ!!」

「なっ!?!」

世良も佐伯選手も気にしてないとばかりにシュート体勢。

まだゴールまで30m以上ある。正直、ここからシュートするなんて馬鹿げてると思う。そりゃフリーキックで蹴るならわかるが……

振り上げた足を一気に振り下ろす。いきなりのシュート体勢に驚いていた世良は、真偽半々ぐらいだろうが、一応手を下げ、DFとしての動きを見せたのだった。

『おおっとおお!!』 これはどうしたのか、不知火選手! ボールを蹴り損じてしまったかあっ!?!』

鋭く足を振り下ろし、蹴り上げられたボールはゴールのある方向には飛んで行かず、右斜め上に飛んでしまう。一瞬戸惑った相手DF陣は、一拍開けてボールに迫っていた。唯一、佐伯選手だけは動かずに俺の動向を見守っていたようだが。

地面に落ちたボールは、強烈なスピンによって俺の足元まで戻ってきた。

ちなみに、シュート体勢から俺はすぐ世良の横を通り抜けて前に進んでいた。

その足元にピタリと収まったボール。が、一人動向を見守っていた佐伯選手が前に飛び出てきた。行かせないとばかりのDFをするため、慎重さを前に押し出しているよう

な守備の仕方だが――

「行けえっ!!」

「え!？」

足元に収めたボールを一気に蹴り出す。

スピーンが掛けられたボールが俺の足元に収まるところまで想像していたであろう佐伯選手には驚きを隠せないが、さすがにここからのパスは予想できなかったか。

ボールは真つ直ぐにゴール付近まで飛んでいき、鎌学DF陣の死角を縫って飛び出た。駆らしき人物がボールを受けたのだった。

「駆、決めろお!!」

「……………くそおー!」

そんな駆の前に立ったのが国松選手。

他のDFの誰一人として反応できていない中での守備。

理論よりも直感で動いていますとばかりの飛び出しは、さすがに俺にもどうすることもできなかつたが。

ボールを受ける寸前で、駆の能力が元に戻ってしまつてた。

は？

と、気の抜けた吐息が口から漏れた。

言わずもがな、俺の反応だ。国松選手を前にして突如として能力値が戻ってしまった。駆は、ボールを足元に収めることはせずラン・ウイズ・ザ・ボールで一気に斜め前に。急な方向転換についていくことできなかった国松選手は体勢を崩してしまふ。

正念場。G Kとの1対1の場面を作り出した駆は、振り上げた右足を力強く振り下ろしシユート。精度が少し欠けたシユートは、しかし相手G Kはギリギリのところ指先が届かなかった。

『ゴオッオオオ!! リスタート間際、一瞬の出来事でした! たった数分の間にこんな事が起きると誰が予想したでしょうかあっ!!』

3対1……リスタートから約2分の出来事だった。

不敵に笑う駆。

今俺は、駆がどっちの人格を表に出しているのか分からなかった。

## 第46話

後半開始早々からの乱打戦。

鎌学が攻めては世良、佐伯、鷹匠選手といった攻撃陣が波状攻撃を仕掛けてゴールを脅かし、江ノ高のボールになると荒木先輩を起点に俺や駆が前線に攻め上がってシュートを決める。

正面から堂々と攻め上がることができる俺のスタイルと鷹匠選手のスタイルは似てるかもしれない。荒木先輩はテクニク派だし、駆に至ってはトリッキーな動きで相手を攪乱してボールを持ち込みシュートするという形をとっている。

まあ、もう一人の人格は格別に巧いボール捌きだった。

駆がラン・ウイズ・ザ・ボールで国松選手を抜き去り、ゴールを決められてから約2分後にゴールを決めるという超速攻をかましてくれたわけだけど。

さすがに同じ戦法は通じない……というか、かなり警戒してると思う。

いきなりテクニクを見せ始めた駆を警戒しない奴なんていないだろうし、ましてやゴールを決めてるんだからな。まあ、そこはトリッキーさで何とか相手を抜き去ってほしいところだが。

『江ノ高！ 逢沢選手が瞬く間にゴールを決めて3対1！ またしても鎌学を突き放したあつ!!』

鎌学からのリスタートが始まろうとしているとき。

どこからか視線を感じると思つて周囲を探してみると、またしても観客席にシルバの姿が。視線を感じたから俺を見てたんだろうが……多分、俺とか駆の事を見ていたんだろうか。

と、リスタートの位置に立つた鷹匠選手が猛烈にシルバに視線を送つてるのを見てしまった。何かしらの確執でもあるんだろうか？ と考えてみたものの、鷹匠選手とシルバは違う高校のサッカー部だからこそか？ それとも、実力的に考えて……シルバを気に入らないからとかかな。

それがシルバにだけ向かつてくれれば良いものの。

これでもかというぐらい沸き立つ気炎が、それを否定してくれる。

リスタートと同時に蹴り出されたボールを、しかし鷹匠選手はパスを出すことなくそのまま真つ直ぐドリブルを開始した。

俺はそれをただ見ている事しかできなかつた。

単に俺がFWだというポジションの問題もあるが、それ以上に呆れてしまつて動き出せなかつたのだ。

「うおおっ!!」

『鷹匠選手! これは凄まじいドリブルだあつ! 一人……二人、いつきに江ノ高選手を抜き去ってしまったあ!!』

FWとしてはこのまま見ているだけの方が良いんだろうけども、今の鷹匠選手の様子を見るに、止まるとは思えない。

荒木先輩やマコ先輩が直接プレスに行っているというのにボールをキープし続けている。本当に一人でそのままドリブルを敢行しようとしているのだろう。

それをするには自分の実力を信じて、やってやると思っただけでできないできない事だろう。実際、それをやってみせるだけの実力を確かに有している選手だとは思わけども。

……それで他の選手がどう思うかについては、俺がどうこう言えるような立場じゃないからなあ。

と、自分の事は置いといて。

このまま放っておくと本当に一人でシュートまで持っていきそうなので、FWながらも守備に徹することに。

一気に加速して距離を詰める。

海王寺先輩が必死に鷹匠選手に食いついているが、それもお構いなしにドリブル突破



を続けようとしている鷹匠選手。体重は海王寺先輩の方が重いだろうに……それだけ体幹をしつかり鍛えているという事なんだろう。

こつちにとっては非常に面倒な話なんだが。

左側、少し後ろの位置まで近付いた俺は、一応審判の位置を確認。

変に手が出てしまったとかボールが見えてなかったりすると、ファールを取られる可能性がある。位置的にフリーキックでゴールを狙える場所でファールを取られるのは痛い。

さっきは李先輩のセーブで守ったゴールだったが、今度は普通に狙ってくるかもしれない。そうなると、個人ではどうしようもない所を狙われるかもしれないし、良い具合に隅を狙われたらどうしようもない。

それだけ隅を確実に狙える高校生がいるのかって話だけでも。

……調子のいい時の荒木先輩とかだと、普通に狙えそうだな。

かく言う俺も、そういう精度の高いフリーキックをする選手をしつかりと見ておけばできるようになるかもしれないが、基本的には練習するしかない。まあ、前述した通り荒木先輩に全てを任せていいかもしれないが。

それはともかく。

左側に位置した俺は迷わずそのままスライディング。

巧い事ボールだけに足を当てて弾き出す。ボールはそのままピッチを割って鎌学ボールになつてしまふが、鷹匠選手の勢いを削ぐことができただけ良いだろう。

「くそ……！」

その鷹匠選手にかなり睨まれてるのはどういうことなんだろうか。

これは本当に白目をむいてしまいそうになる。できれば現実逃避をしてしまいたい。もし他の高校でここまでの視線に晒される事になつたら……すぐに部活を辞めてしまふだろうな。

ま、そもそも駆がいなかつたらサッカー部にすら入つてなかつただろうが。

だから俺をそんな風に見ないでくれ……

さて、鎌学スローインからのスタートとなるわけだが。

FWだが守備的ポジションに下げて様子を見ることに。

このままで完全に打ち合いになりそうだから、鎌学の勢いを本当の意味で削ぐためにもポジションを下げて様子を見ようと思つたんだが……高校サッカーで勢いが収まる事なんてあり得んと思うが。

『さあ、鎌学リスタートです。さきほど不知火選手の、堀川選手を彷彿とさせるような見事なスライディングで危機を逃れたものの、いまだ鎌学の猛威は続いております！』  
つまり俺じゃなくて堀川先輩でも鷹匠選手を止められると。

そんなことを考えていると鎌学がボールを投げ入れていた。

誰が攻撃の起点になるのかと思いきや、パス回しから俺の逆サイドに回っていったボールが佐伯選手の足元に。

「おああっ!!」

お? と思っているとそのまま足を振り上げてシュート。

回転のかかったボール。枠から外れたところに飛んで行く——そう思ったのも束の間。クククツと軌道を変えてゴールに向かっていく。

……ヤバイ。決まる。

「——っ!!」

いきなりの攻撃に驚いたものの、李先輩がしっかりとセーブ。

かなりきわどい所を狙ったシュートだったため危ないシーンだったが、李先輩のセーブが神がかっていた。シュート直前に動き出した李先輩の動きも秀逸なものだった。

弾かれたボールは横に飛んで行き、それを鎌学MFが取ってクロスを上げたものの、それも李先輩ががっしりとキープしたことで攻撃の芽を紡ぎ、攻撃陣は一気に前線に上がり始めた。

「上がれえっ!!」

一気に駆け上がる江ノ高イレブン。

人数が一人少ないというハンデを感じさせない動きで鎌学デイフエンダー陣に圧力をかけている。

李先輩から荒木先輩に。そこから個人技で鎌学イレブンを抜き始める荒木先輩。さつきまで感じていた鷹匠選手のような荒々しさはなく、むしろ息を飲む様な。つい魅入ってしまうテクニクでどんどん前へボールを持っていく。

口元に笑みを浮かべた荒木先輩は、どこかでスイッチが入ったのだろう。一切スピードが落ちることなく鎌学守備陣を翻弄している。

ホント……李先輩の頼もしさが半端ない。

そして江ノ高イレブンの攻めに対するバイタリティも。

パスを出すかと思わせて荒木先輩はそのまま一人でペナルティエリア近くまで来てしまった。鷹匠選手がやろうとしていたことを、この人はフィジカルではなくテクニクでやってのけたのだ。時には俺や駆とかの動きをブラフにして。

「いつけえっ!!」

そこまで来たのだ。

シュートまでの一連の動きをすべて一人でこなしてしまうのかと思いきや、シュートに見せかけた動きでパス。俺に出された———と思ったものの、その直線状にいる駆の存在に気付いていたのでそのままスルー。

『おおつとお!! 荒木選手のパスを不知火選手はスルーだあつ!! そこに、なんとそこに逢沢選手の姿があるぞお!!』

ゴールに対する嗅覚でボールを受けた駆。

そしてその前には感覚でボールを追う国松選手の姿が。

さすがにここは抜けないかと思いきや、またもゆとりツクを敢行。両足で踏ん張っていた国松選手は対応することができず、またしても駆に抜かれてしまうという結果に。

そのまま右足を振りぬいた駆。

だが、ゴール前に走り込んでいた佐伯選手がそのシュートを足で弾き、そのままボールはバーの上を飛んで行ってしまった。

交差する駆と佐伯選手の視線。

そのまま二人だけの世界に入り込んで俺に気付かないでいただきたい。その方が楽だから——なんて馬鹿なことを考えつつ、後半残り20分程度の時間をどう攻めるか思考を巡らすのだった。

## 第47話

気付いたら試合の残り時間は20分を切っていた。

互いにボールを持つては激しい攻防が繰り返されているけれども。今のところ実力が拮抗しているというか。点数的に優位に立っているのは確かに江ノ高なただけでも、今は互いにシユートが決まらない状態に陥っていた。

逆に、こんな相手を前にして、一人数が少ない状態でよくもまあここまで戦えてるものだと感心してしまう。確かに俺が動いてるつてのものにも一因だろうが、基本的に今はF Wとして動いてるから……味方の守備が神がかっているんだろう。

俺も守備に貢献していないわけじゃないが。

佐伯選手がクリアしたボールはそのままサイドから出ていたため、江ノ高のスロイーで試合は再開される。鎌学サイドでのスロイーとなるため、すぐ攻撃に移れるような感じはするが、どうしても人数差を感じてしまう。

それだけ、向こうの守備陣が厚く感じてしまうのだが……

「不知火！」

「はいよつとー！」

スローインを受けたマコ先輩のパスを受け、前を向く。

このままだと、今回の攻めも止められてしまうかもしれないという不安。そして、その後の鎌学の攻めでシュートを決められてしまうかもしれないという予感があった。

しかし、予感と言うが……実際に決められてしまうだろうという未来予知染みた何か  
が脳裏を過ぎ<sup>よ</sup>っていた。あまり時間を掛けられない。そんな思いが、確証染みたビジョ  
ンとして思い浮かんでいた。

これを逃したら、詰められる！

——その時浮かんだ、唐突なまでに一本の光の筋が視界を遮った。

それは、相手D F陣を二つに叩き割るようにゴールまで伸びていて、まるでこのまま  
真っ直ぐドリブルしろとばかりの白線に、しかし俺は笑みを浮かべていたことを自覚し  
ていなかった。

「右、左……真っ直ぐ！」

「はっ！」

最短かつ最良を示しているであろう白線を目で追っているが、つい漏れてしまってい  
たらしい。それを耳にした早瀬選手（RMF）が不審げな声を漏らしていたが、何も気  
にすることは無い。

何も考えないでそのままボールを蹴り出した。

右、左。そして真っ直ぐ。

頭に思い浮かんだ情景そのままにボールを蹴り出しては白線をなぞっていく。

「右、左……」

「なっ!?!」

足元はただ普通にステップをしただけ。

視線は荒木先輩、もしくはは駆。誰でも良かっただろうが、自然と視線は駆にいつていた。このピッチに立っている誰よりも一番に駆の動向が気になっていた。

『不知火選手、早瀬選手を抜き去ったあっ! しかし、鎌学DF陣が対応しようと距離を詰めているう! これをどのように攻略しようというのかあっ!!』

一人目の選手を抜き去った瞬間からそういう予期はしていた。

動き出す寸前まで、俺が動き出したらどうという動きをするだろうか。

ゴールまでの進行方向を阻むようにして出てきた相手MFを見て、特にこれと言った感情がわいてこなかった。ただただ目の前にある白い線がどこまで続いているのかだけ気をしていた。

「真っ直ぐ……」

「いかせ、なあっ」

『不知火選手、いこれで二人めだあ!! どこまで一人で持っていこうのかあ!!』



ボールを奪おうとしていたのだろうか。

動くことなく眺めていた選手が足を延ばしてきたところにボールを転がし、股下を通しただけだというのに少々大袈裟な反応じゃないだろうか。

——わからない。

歓声も何も聞こえないが、俺は俺の仕事をこなすだけ。

自分の目で、誰がどこにいるのか確認し、相手がどこにいるかもインプットする。

「行かせないっ！」

目の前に出てきた選手の顔を見る。

佐伯選手……同じ中学生だった駆に対抗心を抱いていると思っただが、何故俺をマークするんだろうか。俺なんかただボールをもつてドリブルしているだけだということ。

——ついに観客の歓声も耳に届くことは無くなった。

ただひたすら、真っ直ぐに伸びている光の筋をなぞるようにボールを蹴り出す。目を凝らすほど、意識を向けるほどに線は細く、太いジグザグだった線は繊細な曲線にまでなっていく。

あの時の駆のように、ボールタッチの回数を多くしてドリブルする。

目の前に立った相手の足元にスピンをかけたボールを転がし、一気に抜き去る。ちよ

うど進行方向に転がってきたボールを足元に収め、さらに前進。プレスをかけてきた相手は気にせず、ひたすら前へ前へ進んでいく。

『こ、これはあつ!? し、不知火選手が一人でどんどんと前進していくう!! 鎌学守備陣が身体を使って止めようとしているが、止まらないっ!! どうやったらこの男を止めることができるのかあ!?!』

——横からスライディング。

国松選手による精度の高いスライディングを、しかし俺は少しボールを浮かせることでやり過ぐす。

「行かせるかあつ!!」

世良がゴール前まで戻ってきていることに驚くが、それも関係なく光の道筋にボールを走らせるだけ。相手の動きもしっかり見ているが、一番はやはり光だ。……これだけ見るとただの厨二病の患者にしか思えないが、確かに今俺は光が見えている。

中央より少し左サイドにいる俺。ペナルティーエリアまであと1mくらいだろうか。

世良の位置が左側。GKが、世良の位置を鑑みて少し右側によっている。

ちなみに、俺が今まで辿ってきた光の筋は、ちょうどペナルティーエリアに差し掛かるところで切れている。つまり、そこで何かが起きるわけだが……世良の姿を捉えた瞬間に思いついたことをそのまま実施してみる事に。

「おおっ!!」

「くっ!?!」

一気にシュート体勢に。

それを見て世良は何とか止めようとしてくるが、構わずそのまま強引にボールを蹴り上げる。足の指先を丸くし、ボールの少し下あたりを蹴る。

蹴り上げられたボールは相手GKよりも右側……つまり、ほぼほぼ相手GKの守備範囲内という事。それを確認した世良は少し笑みを浮かべていたようだが……

「……な」

ボールは蹴り上げられてから少し右に曲がり、釣られるようにして左に動いた相手GK。だが、それを嘲笑うかのように左に一気に曲がるボール。驚き、慌てて右に動き出す相手GKだったが、時既に遅く。それ以上の曲がりを見せつけたボールがそのままゴールネットを揺らしたのだった。

『ぐ、ゴオオオオル!! な、何というシュートでしょうか!? 一度右に曲がったと思われたボールが逆方向に曲がり、GKの反対側へと吸い込まれたあっ!!』

これで4対1。

ここを逃したら鎌学に攻められる。

そんな予感から攻めた結果、シュートまで持つて行って決めることができなくて良かった

……しかし、あの光の筋は何だったんだろうか。とてもじゃないが普通じゃない。

まあ、転生してる奴が何を言ってるんだという話かもしれないが。

俯瞰視点やら相手の能力値を覗き見ることができたとか。身体能力が高かったりと、いろんな何かを兼ね備えていると思うが……こんな事は初めてだ。サッカーを始めて1年も経つちやいないが、これも何かのチート能力なんだろうか？

「おいおい！ すげえじゃねえか！ かああつ!! さすがだとは思ってたが、さすがにここまで奴だとは思ってもなかつたぜ！」

「あざっす」

「くそう……冷静に決めやがって。本当だったら俺が決めるつもりだったのに」

「はは、今回はいただきました」

「今回もだろうが！」

嬉しそうに俺の肩を叩きながら喜んでくれるマコ先輩と、ぶつぶつと小言を言っている荒木先輩。

「荒木先輩、なんか……こう、なんて言いますか」

「あん？ どうしたんだよ」

「光の筋が見えて、それに沿ってドリブルしてたんですけど……いや、自分でも変な事言ってると思ってるんですけど」

実際、変なことを言ってる。

妄想が目映るようになった、と思われる、完全に病人だ。それどころか変な薬でもやってるんじゃないかって思われるかもしれない。笑い話で済めばいいが――

「……良いんじゃないかねえか？」

「え？」

「それでシユートが決まるんだったら良い事なんだろ。まあ、あんまり気にすんな」

「はあ……」

まさかのお言葉。

何気に気を使ってくれたような発言に思えなくもない。とすると、かなり変な奴だと思われてるんじゃないだろうか？ そう考えると非常にだるくなってくるなあ……

しかし、最後の無回転がうまく決まってくれて良かった。直前に世良のフリーキックを見てなかったらそもそも蹴ろうとも思わなかったし。

だがまあ、あそこまで凄いい軌道になるとは思っても無かったからなあ。

ある程度余裕を持ったコース決めをしておかないと。あまり隅を狙いすぎたらそのまま逸れていくかもしれないからな。

――残り15分。

3点差まで離すことができたが、しかしながら鎌学イレブンの目から諦めの感情は見

えてこない。さて……このまましつかり対応し続けられるだろうか。

## 第47. 5話

——まさに『圧巻』の一言に尽きた。

『4対1——鎌倉学園、ここまでで江ノ高にかなり突き放されてしまったが、この後どのような対応するのかあっ!!』

全国の高校の中でも特に実力の高い部類に入る鎌学の部員たちすら寄せ付けることのない個人技に、観客の全員は息を呑んだ。一瞬の空白。のち爆発。

空気が震える。

止まらない歓声に中てられることなく、注目の的となつてゐる選手を見続ける選手がいた。

「あいつがレオの言つてた日本人か？」

「ああ……本当は違うんだが、ここまで見せつけられて違うというわけにはいかないな」「おいおい、あんな奴が他にもいるわけないだろ？」

そう言いつつ苦笑いを浮かべるリカルド・ベルナルデイ——リツキーの様子に、改めて不知火の様子を見る。直前に決めたシユートに、仲間から祝福されている姿がそこにはあつた。

逢沢傑の弟——駆の雄姿を確認するためにここにやってきたわけだが、まさかここまでのものをこの目で見る事ができるなんて。

そもそもが駆の中に眠っているであろう傑の魂を見るためにここに来たというのに、彼は……不知火はそれ以上の可能性すら見せつけてくれた。正直、何故俺がピッチに立って彼とサッカーをしていけないのだろうかという嫉妬さえ感じていた。

駆にしか見出すことができないと思っていたものは、確かに不知火が傑の動きをしていたという事実によって打ち壊されていた。そして、新たに駆に感じていた以上の興味が湧いてきていた。

「だが、あんな奴と一緒にサッカーができるってのは楽しみだろ？」

「ふん！ あんなクレイジーな奴、味方だったら良いだろうがな」

「はは、素直じゃないなあ」

が、確かにと思わざるを得ない。

味方ならこれ以上ないくらい頼もしい男だが、実際に敵になると面倒な敵になる。

不知火のポジションはDFとして登録されてるのかもしれないが、FWとしての動きも群を抜いているし、恐らくMFとしても動けるだろうという確信があった。

つまりはどこでも動けるんだらうという結果に、そんな考えを抱いてしまった自分と、そんな考えに納得してしまっている自分に苦笑した。



——敵になったらこれ以上面倒な相手は……高校サッカーの中でも多くない。  
「……レオ、本当に日本に来るつもりなのか？」

「ああ。あんな奴がいるんだ。1年日本でサッカーするのも悪くないだろう？」

「だが、それならドイツにだっているだろ。あいつも大概おかしい奴だが」

「あいつは何もしなくても世界に出てくるだろう。その前に、日本のサッカーを肌で感じておきたいんだ」

「はあ……レオがここまで言うんだ。俺が何を言ってもかわりやしないか」

「はは、よくわかってるじゃないか」

深く溜息を吐いたリツキーを横目に笑みがこぼれる。

視線をピッチに戻す。

たった一人の選手にいいようにシュートを決められてしまった鎌学だったが、未だに諦めてはいないようだった。全員、悔しそうに表情を歪めているように見えるが……

特に鷹匠君は不知火にかなり固執しているように見える。

同じFWとして活躍している彼の事をあまりよく思っていないのかな？

鷹匠君もかなりの選手だとは思いますが……とてもとても、不知火のいる領域とは比べようもない。と、言うのは自分にも当てはまることじゃないかと思ってしまう。

あれでサッカーを今年から始めたばかりなんだから笑ってしまう。

彼なら、もしかすれば皇帝カールともやり合えるかもしれない。

これからも成長するだろう彼の様子を見ているだけで胸が熱くなる。早く一緒にサッカーをしてみたい。

リスタート寸前、鷹匠君がこつちを見上げていたような気がした。

一瞬目が合ったような気がしたけど、それよりも不知火と駆の方が気になっていた。不知火の活躍で陰になっているけど、駆も今までの試合でしっかりとシュートを決めている。

確かに不知火の動きによるものや荒木君の動きによるものも大きいけど、それでもしっかりとシュートを決められる選手は多くない。あの裏に抜ける様な動きと、相手の意表を突くフェイントができる選手だ。

そう考えると江ノ高はかなり厄介な選手がいると言つて間違いない。

「鎌学の鷹匠つて奴、また一人でドリブルしてるな」

「ああ、彼はフィジカルが強いからね。一人でボールを持つて上がるのも苦じゃないだろう」

江ノ高の選手が鷹匠君にプレスを仕掛け行くが、物ともせずボールをもつて上がつていく。さつきと同じような展開。これを見て不知火が鷹匠君に詰めようとしてる。

このままだと完全にさつきの攻撃の二の舞になるが……さすがにそんな愚を犯すほ

ど鷹匠君は馬鹿じゃないだろう。

「てめえに、好きにさせてたまるかあつ!!」

フィジカルで押し返そうとするも、不知火を押し返すことができなかつた鷹匠君がボールをコントロールして味方へパス。パスを受けたのは世良。海外で試合を経験しているらしいが……最初にやった織田へのフールで不知火が強気になつたような気もする。

江ノ高の絆と言えいいのか。精神的なつながりというものが非常に強いように見受けられる。逆鱗に触れてしまったような形になつてしまつた世良には、少し相手の情報を見るようにと指示せざるを得ないが……確かに彼のテクニクは高い。

鎌学の監督はそれを理解して彼をチームに入れたんだらうけど。こと今回に関して は欠点になつてしまつた感じだね。

「くつそがあつ!!」

パスを受けた世良は、エリア外からのシュート。

回転が掛かつたボールは完璧に枠内を捉えていたが、江ノ高の守護神である李がそれを阻む。間一髪のように見えて、しっかりとゴールを守る彼の働きはかなりのものだね。

それに加えてFWでありながら守備にも貢献している不知火の動きは値千金。今回

も、世良がシュートを打つ寸前にプレスをかけた動きも繊細な動きだった。

普段の世良ならプレスされたらわざと倒れるだろうが……これは江ノ高の熱に当てられてしまったか？ それとも不知火に対抗心でも抱いているんだろうか。

プレスされた状態ではシュート方向は制限されてしまうし、何より威力も落ちてしまう。世良はそんな状態で良いシュートを打っていたが、しかしその程度のシュートは簡単に止められてしまった。

そのまま李の手から直接不知火へとボールは渡ってしまった。

今の彼の調子を考えると、このままだともう1点追加されることになるだろうが……果たして今の彼を鎌学が止められるかどうか。

「行かせない！」

「ふっ！」

「くっ……」

横からプレスを掛けようとした鎌学MFだが、さっきの鷹匠君のように一人でドリブルを仕掛けていく。しかし、その動きは鷹匠君のように荒々しさはなく、繊細なボールタッチでどんどんと進んでいく。

残り10分。

マークが不知火に集中し始めたところでパスが出た。

白線が真つ直ぐに伸びていき、逆サイドを走り上がっていた兵藤へと渡った。そこから荒木へと流れるようにパスが回っていく。

鎌学DF陣はなんとか攻撃を食い止めようと追いかけているが、プレスされる前にパスを出すことでしつかりとボールをキープしていた。

「これは、江ノ高が勝つてお終いだね」

「ああ……さすがにここまで離されたらどうしようもないだろ」

さすがにここまでの大差になるとは思っても無かつたけどね。

もつと接戦になると思つてたけど、不知火の実力があまりにも違いすぎる。

『荒木選手が自分でボールをもつて上がっていくう！ 前には不知火選手と逢沢選手が走り込んでいるぞお！』 さあ、どちらにパスを出すのか、それとも自分でシュートを決めてしまうのかっ!!』

エリア外中央でボールを持った荒木は、鎌学DFに厳しくチェックされながらもシュート体勢を取つた。

少し体勢を崩しながらのシュートは、狙いすまされたようにゴールの右上隅に曲線を描いて吸い込まれ、DFが必死で伸ばした足を嘲笑う様にゴールが決まったのだった。

### 第三章【招集】 第48話

結果からして、俺たち江ノ高は鎌学を相手に5対1で圧勝した。

この時点で決勝への進出はもちろん、全国大会への出場が決まったんだが、それ以上に鎌学に一人少ない状況で勝つことができたというのがチームの勢いをつけたのか、その次の試合。

翌日曜の決勝で棟光学園とうこうと試合したが、乗りに乗った状態の江ノ高は今までにないぐらいの攻撃力と防御力を見せ、6対0という完勝に終わったのだった。

相手は全く攻めることができないという状態。

シュート数は全体を通してたったの1本だけ。しっかりと枠内を捉えてはいたものの、李先輩の守備を抜くことはできなかった。

対して江ノ高は全体で12本のシュート。枠内は9本。

俺はDFスタメンとして出ていたため、そこまで攻め上がることは無かったが、一点は決める事ができた。それ以外は荒木先輩、駆、マコ先輩に高瀬が連携からのゴールを決めたのだった。

……こうして纏めてみるとホントに酷い結果だ。

相手のチームの選手、かなり落ち込んでたしなあ。

決勝という事もあり、棟光学園も全国大会への進出は決まっているが……謙学や葉蔭に比べると、残念ながら大したことのないチームだった。

逆にこっちのトーナメント表にいたチームには悪意を感じる。神奈川の高校の中でもトップのチームを相手にすることになるとは。まあ、おかげで江ノ高メンバーの全員がレベルアップしたと思うが。

で、全国大会が始まるまでの間は普通に部活動をして練習をするだけなのだが、部活内容は今までと変わらず。が、一つだけ変わったことがある。

……一つとというか、完全に私生活で変わったことがあるのだが、いろんなチームからスカウトが来るようになったのだ。

スカウト？　と思うかもしれないが、本当に色々な所から来ている。

つい昨日もきたばかりだし、今日もスカウトの人から事前に家に伺いますっていう電話を貰ったって母親が言っていた。

契約の内容としてはすべてC契約というもので、全てのチームから年俸480万を提示された。

まだ高校1年生なので、学業に専念させたいという両親の思いから、すぐに契約とい

うわけにはいかなかったが、後々調べてみたら480万という額は、C契約を結びたいという選手に対する年俵でも一番高い額らしい。

その上にはB契約、A契約なるものが存在しているようだが……Aまで行けば完全にプロ契約みたいなものだ。C契約でも結んでもらえるだけ良いか。

「——それでは、ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます。……ふう」

家に戻ってきていたスカウトの人が帰り、一息つく。

さすがにお金絡みの話だと緊張してしまう。プロチームとの契約も紛れ込んでいたこともあり、高校を卒業したらプロとの契約待たなし！ といったところか。実際にそのチームで動いてみたり選手の人と会ってみないと実情は分からないが。

と、リビングで寛いでいると電話が鳴り出した。

「康寛！ 電話よお！」

「今行く！」

誰からだろうかと思いきや、俺宛の電話だったらしい。

今スカウトの人が帰っていったことを鑑みると、どうしてもまた契約の話なんじゃないかと疑ってしまう。いや。非常にありがたい話なんだけどね？ 高校からサッカー

を始めた身としては、経験年数が1年にも満たしてない俺が果たしてチームと契約なん



てしていいものかと思ってしまうのだ。

表現しがたい感情だなあ。

「はい、康寛ですが」

「あー……君が康寛君か？ 私はU——16サッカー日本代表の監督を務めることになつた桜井一青だ」

渋めな男性の声に驚く。

U——16と言われてピンと来なかったが、日本代表という単語にドキツとした。

「えっと、よろしくお願ひします」

「おう。礼儀の良い奴あ好きだぜ。でだ。お前を今回の日本代表に招集したいと考えている。日程だが」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

「あん？ どうした」

「……メモするものを持つてくるので、少し待つてくださいい」

「お、そうか。分かつた」

保留ボタンを押して受話器を置いた。

ホントに、今日は想定外のことしか起きないようだった。

適当な声量で日本代表になつたつと大声を出した。これで電話内容は伝わつただ

ろう。家庭内は混乱の渦に飲み込まれることになるだろうが。

「もしもし、準備できました」

「ああ。今回はアジア大会に向けての合宿を行おうと考えてる。合宿場所は神奈川の〇〇ってところだ。試合で疲れてるところ悪いが、合宿は3日後から1週間にかけて行う」

「……わかりました」

「二つ確認するが、お前さんはDFで良かったんだよね？」

「二応、そうですね」

曖昧に頷く。

MF以外経験があるだけ何とも言いようがない。FWをやつて、DFとしては得点の多い方だとは思うけども。

「そうか……なら、それで行くでしょう。ま、試合中にポジション変更はするかもしれないがな」

「はあ」

「それじゃあ、合宿で待つてるぞ」

伝えることだけ伝えて電話を切ってしまった。

一切こつちからの質問を聞こうとしなかったが、そんなものなんだろうか。確かに現

場で聞くこともできるが、断られるとは思わないだろうか？

「やつ、康寛!？」に、日本代表つて聞こえたんだが、本当かいっ!？」

「お赤飯、お赤飯炊かないと!」

「U—16だけだね。あと母さん、別に赤飯なんて炊かなくて良いから、普通に飯作つて」

両親ともに混乱し、それを傍から見ると感じになつてしまった。

こうしてみると、そもそも現実味の帯びてなかった日本代表が、二人のおかげで自分が冷静になることができた。

しかし代表、か。

これからは海外の選手と戦う事になるってか。しかも、そうなると色々な高校から選手が集まつてくるんだろう。……U—16だから、日比野とか世良とかが招集対象になるのか。

俺なんかが行つても良い場所なんだろうか？

とりあえず、携帯で駆に招集されたことをメールし、床につくのだった。

## 第49話

あれからすぐに3日が経った。

桜井という監督の連絡を受けた日、夕食が豪華なものになったり、次の日学校に行ったら行ったで岩城監督に喜ばれるなど、過剰に喜ばれることになったのは良い思い出だ。

その時俺以外にも駆と荒木先輩が招集されていることを知ったのだが、周りにいたクラスメートに知られてからが大忙し。

「ヤスも代表に呼ばれたの!」

という純粋な駆の一言で一気に教室が盛り上がり、仕舞いには別のクラスの連中まで駆けつけてくる始末。最終的には岩城監督が収拾を付けてくれたことで何とか終わったが、元凶になった駆には軽く拳骨を落としてやったが。

そして合宿開始となる当日。

3人で合宿場所まで来た俺たち。

俺は事前に聞いていた通りDFで招集されているんだろうが、駆はFWで荒木先輩はMFか? と、聞いてみたところ何も聞かされてないらしい。駆は両親からまた聞きし

たと言うし、荒木先輩は桜井監督とは知り合いらしいし、恐らくMFとして使われることを確信しているようだった。

「ふうう……ドキドキするな。今日からこの合宿場所で1週間、他の代表候補と過ごすんだもんね」

「おいおい。そんなに緊張してたって変わりやしないんだから堂々としてりや良いのに」

「ヤスのいう通りだぜ。しかし、前にも呼ばれてる俺にヤスは分かるが、お前まで呼ばれるなんてなあ」

「あ、あははー……そうですよねえ」

監督室前まで来てドギマギし始める駆の様子には苦笑せざるを得なかった。

「が、確かに『日本代表』という肩書きにはしり込みしてしまってもおかしくはないか。

「まあ、さすがにヤスは堂々とし過ぎだけどね」

「はっ！ ヤスだから、としか言いようがないなあ！ ま、確かにお前さんはお前さんで場慣れしてる感が出てるってのは気に食わん！」

「ははっ、そんなこと言われたって俺は普段通りにするだけですからね」

さすがに鷹匠さんみたいな人がいるのは勘弁だが。

「かあ〜っ!! そんなん言えるお前が羨ましいわ！」

はははと乾いた笑みを浮かべる駆。

ぐきぎと歯を噛み締めて睨みでくる荒木先輩。

その二人の対照的な姿に苦笑しかできないが……

「あだっ!？」

だべっていた時に急にドアが開き、すぐ目の前に立っていた駆が運悪くぶつかってしまった。今のはドアの前につつまっていた駆も悪かったと思うが、それでも顔からぶつかってしまった駆にはご愁傷さまの一言を送りたい。

……ああ、鼻から血が出てら。

ソツとポケットからティッシュを取り出して手渡した。

「……………逢沢駆か」

「は、はひっ」

「それに、荒木に不知火康寛か。よし、すぐに更衣室で着替えてグラウンドに行くんだ」

「え、すぐですか？」

「遠くの奴は昨日から来てとつくにアップしてる。お前らが最後だ。さっさと出てこい」

「はい!」

元氣よく返事する駆。

その少し後ろで不敵な笑みを浮かべる荒木先輩は、グラウンドに集まってる強豪を思  
い浮かべてるんだろう。結構、変態的な笑みに見える。へへって感じがさらにそういう  
雰囲気を出している。

もちろん口には出さないが。

——そんなこんなでグラウンドに。

そこには数十人のサッカー選手らしき人物が集まっていた。

「うわあ……何人いるんですかね」

「おいおい、たしかAFC U-16選手権の登録人数は23人だったはずだぜ」

そういう荒木先輩の疑問ももつともだろう。

監督の指示に従ってグラウンドに行ってみると、そこにはかなりの大人数の選手が集  
まっていたのだから。これはもう数十人ではなく、百人ぐらいの人数がいるんじゃない  
だろうか？

見た感じ知ってる奴が数人。

葉蔭の鬼丸に鎌学の佐伯に世良。それと駆の幼馴染の日比野まで。

それ以外にも知ってる奴がいるかもしれないが、見た感じではそれぐらいだろうか。  
駆が佐伯や日比野と話している最中、桜井監督の隣にいた人が大きな声を出したことで  
視線が一気に集中した。

「——桜井だ。お前らみんなやたら数が多いんで面食らつてると思うが、心配するな。合宿が始まる今日からは宿泊所は30人分しか用意してねえ」

この言葉に周囲のサッカー選手たちがざわつきだした。

さらに監督は言葉を続けていく。このグラウンドに110人もいたことに驚いたが、この人数を10チームにわけて15分のゲームを行うというのだからまた驚いた。

まあ、それでこの人数を振り分けていくのには何も思わないが、たった15分の間で一人一人の選手の能力を見極めることはできるのだろうか？

「甘えてんじゃねえぞガキども！ イメージしろ！」

という切り出しから語り出し始めた桜井監督のイメージは、0対0の状況で残り15分。AFC（アジアサッカー連盟）U-16の大会において準決勝という状況での交代。

そんなシチュエーション。

「見せ場を作れ、結果を出せ。チャンスを潰せ、点をやるな！」

——その言葉で締めくくられ、一気にチーム分けの指示が出された。

何と運が良い事に、11人のチームの中には江ノ高3人がまとめられていた。普段通りの実力を少しでも出せるようにと言う監督の意図なんだろうか。それとも単純にそういう組み合わせになったのか。



ポジションはいつも通り俺がDFで、荒木先輩がMF。そして駆がFWといういつも通りの布陣。

相手に見覚えのある選手はいないし、実力も選抜されて集められた選手なだけあって平均的に高い能力値を出しているが、しかしその程度。荒木先輩どころか、まだまだ駆にもおいついていないという状態。

他のチームで世良とか佐伯とか。それ以外にも凄い長身のGKとかがかなりの能力を誇っていただけに苦戦を強いられることになったんだろうが。

まあ、相手に日比野がいる時点で少しは戦えるんだろうけども。

「いけえー！」

「くっ!?!」

相手チームからのキックオフで始まったミニ試合。

しかし、相手の選手の一人がドリブルで上がろうとしていたところをビタリと止める荒木先輩。今の先輩の能力値、体のキレはかなりのものだからなあ。

相手選手はテクニクに自信はあつたんだろうが、今の荒木先輩をドリブルで突破するなんて無謀な話だった。

ドリブルを続け、前線に上がっていく荒木先輩を止めようとした相手選手の裏を突く形で前に突出した駆が荒木先輩のパスを受け、そのままシュート。何とか追いついた日

比野がクリアをするが、ギリギリでといったところ。

とまあ、こっちの二人がいつも通りの実力を発揮してくれているおかげでDFは何もしてなくても大丈夫だろう。

相手のパスコースを潰してはシュートを打たせないように立ち回っていると、前線ボールを受けた駆が後ろから潰されてしまい、ファールに。

残り23mくらいの所だろうか。少し左前でファールを取られてしまったことに悔しがつている相手MFだったが、俺的には何も問題ないだろう。

「不知火！」

なんて考えていたら荒木先輩に呼び出された。

「はい？」

「フリーキック、お前が蹴るんだ」

「は？」

いきなりのご指名に、ふと桜井監督の方をチラ見してしまった。

が、特に何か指示だししている感じはなかった。つまりは荒木先輩の独断なんだろう。

というか、誰がキッカーになるかなんて監督言ってたか？

そういう話も何も聞いてなかったが、それは選手で決めるとでも言うのだろうか？

さすがにそれは無いと思うが。

時間は残り4分。

別に点数を何点取る取らないの問題ではないが、得点差も評価に結びつくだろう。と考えるならば、DFであろうともここはボールタッチすることができるといふ喜びだと思ふべきか？

0対0の状況で、岩城監督が俺にフリーキックを任せてくれたと思つて蹴つておう。桜井監督にインパクトを持たせるために……

「ふっー」

「へっー！ てめえのシュートなんて止めてや、なあっ!?」

ふわつと蹴り上げたボールはそのまま杵に向かって飛んで行き、それを止めようとしたり相手GKだったが、しかしそのボールは無回転。GK手前で軌道が一気に右に逸れていき、そのままゴール。

呆気に取られた表情を浮かべる相手だが、無常にもボールはネットを揺らしていた。

「よし」

「しやあっー！ さすがだぜー！」

長身の日比野が飛び上がったときに掠りそうになったのはさすがに焦つたが。

その後、何とか日比野ともう一人の相手MFが粘つた守備をしていたが、俺から駆へ

の縦パスで1点を奪取。それ以外は荒木先輩がフィールドの中央でフェイントを織り交ぜたドリブルを魅せつけていた。

結果、向こうのチームから点を奪われることは無かった。

15分で一度だけ相手にファールを与えてしまい、フリーキックは大砲でお馴染みの日比野が蹴ることになったのだが、それを俺がしつかりを止めたのだった。

前回試合をした際よりも若干威力が上がっていただけに足が少し痛くなつたが、何とかクリアすることができた。その際、何故か味方から変な目で見られたのは気になつたが。

ピ、ピ、ピーーツ！

かくして、U-16日本代表選手の選抜セレクションは幕を閉じたのだった。

選抜されたのは俺を含めた29名。予定として語られた30人よりも一人少ないが、110人という全国のサッカー選手からの選抜だ。

そもそも選りすぐられた選手たちだったが、さらに粒ぞろいの選手たちになつたのだった。

全国から来て、その場限りとは言え短い15分でしつかりとした結果を残したこのメンバー。GKの彼なんてかなりの体の使い方をしそうだし、これは結構面白いことになるんじゃないかな。

## 第50話

「か、監督……」

「うむ」

110人という16歳以下の選手を全国から集めてのチーム戦。

アジアでの大会だが世界。世界での戦いであることに変わりはない。

これまで以上に多くの人々が観客として訪れ、得点を決めた国の選手をもてはやす。しかし、点数を決められてしまい、負けてしまったら……国全体から代表選手全員の事を悪く言われるだろう。

「あいつは確定だな」

「はい。それと荒木も」

「だな」

そういつた環境下でしつかりと自分の働きをできる選手を集めたかった。

フィールド以外の環境下においての精神力。そして、たった15分という時間設定において自分の実力を明確に発揮しようとするやる気、負けん気を出してくれる人材を欲していたのだが。

「不知火康寛、か」

つい先日まで開催されていた神奈川県大会において優勝した江ノ島高校に所属する選手。荒木とも同じ部員なのだが……江ノ高が優勝した選手の立役者が、彼の存在にある。

もちろん守備の要としても積極的に動き、失点数を最小限に抑えたこともさるものながら、攻撃の要としても要所要所でしっかりと点に絡み、そして自らもシュートを決めていく。

本来のポジションはDF。しかし、それ以外にもFWとしてもこれ以上ないぐらいに活躍をしていた。それも、今大会においての得点王である。

「それ以外にもしっかりと攻撃に参加している逢沢駆。奴も良い動きをしている。DFの意識がボールにいった瞬間に裏をついてやがる」

「そう、ですね……これはちよつと、相手のチームが可哀想ですね」

「ああ。だが、これでも全国から来てるんだ。どうにかして対処できないようでは今後やっていけないだろう。そう考えるとあの日比野ってDFもしっかり対応しているな」

江ノ高と同じく神奈川大会に出場した湘南大サッカー部所属。

その時は、江ノ高に負けてしまったと聞いている。その時の下馬評では江ノ高がやや不利だという話を耳にしていたが……やはり下馬評はあてにはならないものか。

「しかし……15分で3得点か」

「凄い奴がいたもんですね……荒木もテクニックを見せてくれたとはいえ、逢沢もしつかりシュートを決めてますし」

「ああ。それに、一番は不知火のフリーキックだな。ありや荒木が蹴らせたんだろうが、まさか無回転まで蹴れるとはな」

あいつめ……自分でDFと言つて、確かに想定以上に冴えわたつた守備を見せてくれたが、あそこまで完璧なフリーキックをこの場で蹴れるとは。それに裏を突いた動きを見せた逢沢に合わせるようにして出した縦パスも精度が高かつた。

逆にこの3人の動きについていける様な、目立つた選手と言えば……相手守備についていた日比野ぐらいか。あいつのフリーキックも中々の威力を持つてたし、それを簡単 に止めて見せた不知火のディフェンス力もかなりのものだ。

が、それ以外に突出選手は見られなかった。

まあ、この4人の選手を見ることができて良かったと思うべきか。

「他には――」

――選抜された29人以外の選手たちは全員、翌日には帰っていくことになった。

北は北海道。南は九州から集められた人材だけに、帰らされた人たちは悔しいだろう

なあ……1泊2日で実家に帰らされる気持ちと言ったら……

選抜された29人。初日は宿の各部屋に荷物を移動して親睦を深めるといふ事をしたのだが、その部屋にいたのは世良と鬼丸だった。

鬼丸はあんまり関わりが無かっただけに良いとして、世良かあ。

……前の試合でかなりぶつかり合ったからあまり良い感情は持っていないだろうが、ここはさすがに世界を経験してきた世良だった。

「——僕は君が好きじゃない。だけど、君の実力は本物だ。……一緒にプレイできるのは光栄だよ。よろしく」

「お、おう……」

「あ、俺もよろしくな！ お前さんにや期待してるぜ！」

「おお……」

鬼丸は見た目通りの好青年だとして、世良がなんかツンデレみたいなことになってるんだけど。

これは驚きだあ……男のツンデレなんて誰が萌えるんだろうか。私生活じゃストイックなんだろうか。

しかし、発言のしかたが英語っぽいなあ。最初に結論を持ってきて後ろに内容を付け加える。まあ、実力は認めてるけど君の事は好きじゃないと言われるよりは耳当たりの



良い感じするけどな。

「短い期間だけど、これから一緒にやってくんだ。よろしくな」

「おうー」

「ふん……」

これはこれで不安なチームメートなんだが。

それと、俺が知らない間に駆と日比野の二人がチームメートと仲良くなつてたみたいだが、話を聞いてみると面倒な感じ。女子風呂と騙されて誘われたところには監督他数人が風呂に入っていた場面だったらしく、少し小言を言われてしまったらしい。

傍から聞いたら完全に犯罪なんですが。

駆はまだ見た目が可愛いからどうなのか分からないが、日比野の見た目で女子風呂の覗きはいかんでしょ。この見た目でこのたっぱ。完全に犯罪です。ありがとうございました、入り口はあちらですって言ったたらさすがに怒られたけど場が盛り上がったのでよしとしよう。

そんな馬鹿な話をしていたのが2日前で、今日も今日とて練習をしていた。

確かに合宿と聞いていたが、かなりハードな練習が続いている。2日ともに実践形式での練習だけあつて濃密な時間を過ごすことができたのだが、全員を使いたいという理由で回しながら練習を続けていた俺たち。

この二日間を通して思ったのが、俺の練習時間が周りの選手に比べて少ないという事。

周りの選手に比べて練習時間が短いと、あまり俺って期待されてないんじゃないという不安にかられてしまう。

まあ、それでも得られるものが多かったので良しとする。

短い練習期間の中で気になった選手は二人。

一人目が同じDFの島選手。日本中から集まった選手の中でも一番に注目している選手と言っても過言じゃないだろう。

彼は千葉県、八千草高校2年生。名前が島亮介。しまりょうすけ

最初一目見たときは変なDFをしているなど思っていたのだが、よくよく聞いてみると合気道をかじっているとか何とか。これは本人に聞いた話で、へえそうなんだあ程度の認識だったのだが、荒木先輩曰く、達人級の実力を持つているとのこと。

で、変な事だと思っていたのが合気道だったと知ったのもその時で、まさかサッカーに武道を取り入れるなんてと新鮮な気持ちを抱いたのだった。

『嗜んでる』と言ってた島エ……

そこからはもう、島選手の事を暇さえあれば見続けていたのだ。

なにせ、今回の俺はDF一本で練習に参加していたから、FWやMFのように実際に

相対する機会が無かった。だから何とかして少しでも技術を吸収できればと思つて彼のことを見続けたのだが、見過ぎたせいかな少し嫌な表情を浮かべていたのには申し訳ない。

それからもう一人FWで気になる人物が。

FWの風巻選手だ。東京蹴球学園高校2年生のFW、風巻涼かざまきりょう。この選手、ロン毛イケメンさんなのだが、今まで見てきた選手の中でもトップに入るレベルでストイックにピッチを駆けまわっていた。

それも、ただ走り回るだけでなく、攻撃はもちろんしっかりと守備にも貢献していた。うちの火野先輩と比べると体格は少し劣るものの、動き出しからのスピード、攻撃と防御の切り替え、決定力が巧かった。こんな選手がいる高校と全国で当たることを考えると厄介としか言いようがない。

あのクラスの選手がゴロゴロいると考えると守備が難しくなるが、まあ、今は代表に集中しよう。

「ヤッス！ さすがだな！ 俺がこんなに暇なのは久しぶりだぜ！」

「おいおい、そりや自分の高校じゃ攻められてるって聞こえるぜ？」

「はっはあ！ ま、俺が頑張ってるからな」

そういつて自慢げに腰に手を当てる遠野。

学年は俺よりも一つ上だが、何故か親しい感じになってしまふ彼。恐らく、このU-16で招集されたGKで一番巧い選手だろう。気迫こそ李先輩が勝っているものの、判断力と瞬発力。そして何より身長がでかい。

俺も李先輩も180cmオーバーだが、遠野は195cmと言う長身。

腕も長いし、瞬発力もある。貴様に重力は無いのかと聞きたくなる巨人だ。正直、こいつが味方GKで良かったとさえ思ってる。それだけのものを奴は奴は持っていた。

日本代表エ……なんて思ってた私を許してください。

「おーし起きろーガキどもー。今日はちよつと早いがこれであがつてしつかり身体を休めろ。明日は午前中はアップだけにして午後は対外練習試合だ」

と、監督の一言によって練習が切り上げられた。

試合相手はアメリカらしい。正直、そんなことを言われても俺にはどれぐらいの実力なのか全く分からないのだが、周りの選手の反応を見る限り楽な相手らしい。が、監督曰くかなり厄介な相手らしい。

今の日本はアメリカよりも格下らしい。

まあ、そう言われても試合をするだけだし、何とかなるでしょう。

——なんて、のほほんと考えてるのは俺だけなんだろうなあと、監督から手渡された

ユニフォームを見下ろしながら思うのであった。

## 第51話

ユニフォームを渡された俺だったが、さすがに俺はスタメンではなく、控えでの選出だった。

別にこの采配に不満なんて抱いてることもなく、練習試合なんだからいつも通りの動きでもしていればいいだろうと言う単純な考えのもと、のほほんとしていたのだが。

自分の割り振られている部屋に戻った瞬間、世良に舌打ちをされてしまった。

「……なんで君がスタメンじゃないんだい？」

「いや、そんな事俺に言われても。気になるんだったら監督に聞けば良いじゃねえか」  
眉間にしわを寄せて問いただしてくる世良。

それを見て『こええ』とわざとらしく世良を見ている鬼丸に、世良の一睨みが炸裂した。

「それで、君は悔しくないのかい？」

「ただの練習試合だろ？ それに、交代枠は9人まであるんだ。出れないなんて事はないんじゃないか」

「……へえ。そういうことか」

一体何がそういうことなのか教えて欲しい所だが、未だに厳しい表情をして考え事をしてそんな世良に直接聞くことはできなかった。

とりあえず俺に対しての追求が無くなっただけ良しとしよう。

その晩、普通にぐっすり睡眠をとって次の日。

練習試合に向けてのアップを実施している最中に、今日の試合相手であるアメリカの選手たちがやってきたのだった。

遠目でも分かるぐらいにアメリカンな人たち。というのが率直な感想だが、その実、彼らのフィジカルはかなりの物だった。

日本人よりも圧倒的に広い肩幅に胸板。それは本当にサッカーをするための肉体的なだろうかと言わんばかりの筋肉が見受けられる。いやまあ、それでプレスに対応してゐるんですと言われればそれまでなんだが。

——テクニクは今のところ分からないが、肉体的には問題なし。

あとは試合を行っている最中の彼らの様子を見て、いけるかどうか判断するだけなのだ。そこは巧いこと島さんが相手を抑え、なおかつどれぐらいの動きができるか引き出してくるだろう。

そう信じた。

……まあ、遠野もいるし、相手からゴールを決められること自体はないだろうと思っ

ているが。

そしていざ始まった試合。

スタメンとして出ている中で、攻撃陣では世良が、守備陣では島さんと遠野の3人が予想通りの働きをしていた。まだ動きに固さが残っている中での動きゆえにやりにくそうではあるものの、そんな中でもしつかりと自分の動きができていた。

アメリカンはアメリカンなんじゃあ……

今の感想は特に意味はない。

アメリカの選手たちはガンガンとボールをもつて攻め上がり、ゴールを脅かしていた。スタメンとして出ているFWは、攻撃的MFの世良を中心としているものの攻めあぐね、その間にボールを奪われて攻められるという形が出来上がってしまった。

前半はアメリカ側に攻められ、ボールポゼッションも相手側有利の状態で折り返すことになったのだった。

「……お前ら、これで分かったか。アメリカは決して手を抜いて勝てる様な相手じゃねえ。後半は前半みたいな事にならねえように気張れ！ いいな！」

「はい!!」

と、いう事でそのまま後半。

交代枠をガッツリ使っていくと言っていた監督の宣言通り、まずは5人の交代が決



まった。後半開始と同時に俺は出場が決定。軽くアップをしておくことに。

「……やつと君が出るのか」

「あ？ 世良か。監督が言つてた通りだろ？ 別にそこまで心配する必要なんてなかったんだよ」

「ふん。……僕の足だけは引つ張らないでくれよ」

「お、おう」

なんなんだ。

ここ数日世良と一緒に過ごしているが、完全にツンデレのそれだった。

いつからこんな性格に……ああ、この合宿で一緒になったときからこんな感じだったか。敵に回ると面倒だったが、これだと味方内でも面倒なんだが。勘弁してくれませんか。

「よ！ ヤス、お前にや期待してるぜ！」

「おう遠野。1対1で問題なさそうだったら抜かすから」

「おおい!! 何言つてんだ！ お前が止めるよ！」

「はいはい」

他愛ない会話である。

まだ駆も日比野も控えにいる状態だが、島さんもいるんだ。DFは問題ないだろう。

後半からは荒木先輩も攻めに加わったんだから、攻撃陣も厚くなっている。欲を言えば、もう少しFWを補強してほしいところだが、俺がそれを言ったら面倒臭そうだから言わないが。

後半開始。

俺はいつも通りのDFに徹し、攻めてきたアメリカ選手のドリブルを止め、パスを遮り前線にパスが出せるときはドンドンと出していった。

そもそもDFの俺にマークがつくこと自体あまりなく、自由に動いていたのだが、時間गतつごとに攻めに人数が掛かるようになってきた。

が、それまでに日本も選手を変えて対応を変えていく。

まずFWが変えられ、駆が出てきた。アメリカ選手は体格で劣っている駆の事を見て油断しているようで、俺が一気に出した縦パスに反応した荒木先輩がダイレクトプレーで駆にパス。

それは完全にアメリカDFの裏を突く攻めになり、まず1点。

そこで駆の存在に気を取られてしまったアメリカ守備陣に綻びが出てくるようになった。向こうの監督さんがサイドで身振り手振り交えて怒鳴り声を上げていたが、うちの桜井監督は一切の動きを見せない。

選手に指示を出そうともしない態度に戸惑いを見せている選手が幾人か。

それを全く気にさえしてないのが世良や荒木先輩。駆なんかは普通に荒木先輩に話を聞きに行っていたから、それはそれで凄いなと思った。こいつあ心臟に毛でも生えているのかと。

……ただまあ、MFが試合の中心になつて動いても問題ないだろうし、良いんじゃないかな（適当）

——駆が1点目を奪った後は日本の攻めが強まった。

世良が個人技を魅せれば、それに対抗するように荒木先輩がドリブル突破でアメリカ側を脅かし。荒木先輩ばかりに気を取られていると、気づいたら裏どりをしようとする駆の存在に苛立ちを見せていた。

俺は普通にDFをしているだけだったので何も無いのだが。

と、何ら変わらない動きをしているところに日比野が投入されることに。

誰が変わるんだろうかと番号を見るとFWの一人が交代に。なんかこの流れ、江ノ高でも見たことがある感じがするんだが……？

「不知火。監督の指示で、お前はFWだって」

「ほお……はあ……またか」

「はっ」

「いや、なんでもない」

日比野の言葉に諦め、ゆっくりと歩き出す。

同じDFをしていた島さんからは不審な目で見られるし、今までFWをしていたのに交代で出ていった選手を見やると俺の事を睨んでいた。

いや、別に俺からFWをしたいなんて監督に言ったことなんてないし。そもそも交代させられたのは君の実力不足か監督が十分だと判断するような何かをしたからなんじゃないかと。

懇々と言い聞かせてやりたい。

なんて呪詛に塗れた想いを抱いていたが、荒木先輩の不敵な笑みと駆のワクワクとしたような視線にやられてしまった。

こんな感情を抱いてしまった俺が違うんだと。

「はあ……」

溜息を一つ。

現状、1対0で日本が優勢。

フリーキックから攻撃が再開されるという場面。

「ま、ここはヤスに蹴ってもらおうとするかな」

「……ふん。せいぜい良いシュートをするんだな」

「はあ……俺っすか」

いきなりの大役が俺に回ってきてしまった。

何も考えてなかった状態でFWのポジションまで行こうとしていたところで世良と荒木先輩に止められた俺氏。

どうせだったからこそ先輩が蹴って俺にパスを出して、俺がヘッドでシュートを決めるつてのが良い流れだと思うんですが、それを良しとしないのがこの二人だった。出来るんだっいたらやってみるっていうスタイルだろうか？

「ま、やってみますよ」

チラと監督の様子を窺う。

多少怪訝に思ってるぐらいで、俺がフリーキックを蹴る事自体には反対じゃないんだろうか。普通にMFの誰かが蹴るんだという固定観念を持ってほしかったところだが、しようがない。

相手ゴールまで約30m。

射程範囲に入っているのが面倒でたまらなかった。

……今回の相手GKはアメリカ人で、かなり体格も良いから、普通に蹴ってみようかな。

「康寛お！ いけえ!!」

「頑張つてえ!!」

観客席から聞こえてきた黄色い歓声に、そつちをふと見やる。

そこには二人の女子が。一人は奈々で、もう一人は会ったことのない女子だったが、奈々と同じなでしこ選手という事もあって名前は知っていた。

むらさきまい群咲舞衣。少し前に奈々に話を聞いたところ、奈々が今やっているポジションを狙っているという少女らしく、おちおちしてらしないと気張っていたのが印象として記憶に残っている。

まあ、なでしこに入るんだつたら同じチームメンバーとして仲良くやりなさいなど思わないでもないんだが、そこは彼女たちの想いに委ねるしかないだろう。

「——しゃあっ!!」

息を整え、審判のホイッスルを聞いて走り出す。

そのまま勢いを足に乗せ、振りぬいた右足から放たれたボールは、GKの手に触れられることなくゴールネットを貫いたのだった。

これで2対0。

……普通にフリーキックが決まって驚きを隠せない俺。そして監督からの視線も強くなっているのに気づかないふりをする俺であった。

## 第52話

2対0。

後半もそろそろ終わりを迎えようとしている中、俺はガンガン攻め上がっていた。

というのも、荒木先輩の調子が時間を追うごとに上がっていき、フェイントを交えたドリブルはもちろん、ここぞという所でのダイレクトプレーの質と量がここ一番という所で光っていた。

そのプレーを処理することになる俺の身にもなってもらいたいところなんだが。

後半も半分を過ぎようとしているところで交代で出てきた駆に日比野も頑張って活躍をしていた。

特に駆なんかは慣れない環境でオドオドすると思っていたが、すっかり自分の働きをこなそうと動き回っていたし、何より裏どりしようとする動きがよかった。

それを狙って世良や荒木先輩がパスを出していたのだが、点を決める所まで結びつかなかったのは今後の課題として挙げられるのはしょうがないことだとしても、駆にとつて一つの収穫になったんじゃないだろうか。

「行け、ヤスー！」

「……………」

ここに来てアメリカ側からかなりの警戒をされるようになっていた。荒木先輩だが、またしても持ち味のフェイントからのパスを出してきた。

その相手が俺なのだが、俺も俺でマークがついている。

別にこのままドリブルで強引に突破できない事もないんだろが、それでファールを取られるのも癪な話。

DFが俺にプレスをかけようと寄ってきたところでバックパス。ノールックで転がっていくボールはしっかりと世良の足元に収まっていた。

「おおっ！」

「Shit!!」

ゴール隅を狙ったシュートは、しかし相手GKが飛びついてファインセーブ。

が、弾いただけのボールは点々とピッチを転がろうとしている。

……この場面、以前江ノ高の試合の最中でも見たことがあるんだが。相手GKが弾いたボールを駆が走り込んでシュートを決める。いち早く、なんて言葉じゃ片付けられない嗅覚でボールが来るであろう場所に走り込んでのシュート。

「ああっ!!」

それが今、またしても目の前で再現されていた。



その時と違うのは、相手がアメリカで選出された選手たちであるという事だけで、それ以外の環境はすべて同じようなものだった。

「——お前たち、よくやってくれた。正直、ここまでアメリカの連中を相手に戦うことができるなんて思ってもなかったぜ。……だが、分かっているとは思いますが、韓国の連中はもつと手強いぞ。今日みたいに楽に勝てる様な相手じゃないって事だけはしっかり理解しておくように。ま、今日はお疲れさん」

『あざっした!!』

桜井監督の言葉で今日の試合は締めくくられた。

結果、4対1と言う大勝。当初監督が言っていたような、苦戦を強いられるような場面はさほど見受けられなかったんじゃないだろうか。だからと言って他国の選手たちの実力を測る試金石にするつもりはないが。

あわや自身2点目かと言わんばかりのチャンスを得てシュートをしようとした駆だった、そこは相手DFが渾身の走り込み。何とかボールを弾き出した相手DFは、しかし錐揉みになって転んでしまったために日本がPKのチャンスを得た。

そのDFはイエローカードを貰い、とても悔しそうにしていたが……ホント、無茶するぜ。

そのPKを蹴ったのは荒木先輩。

その場にいた誰もが驚愕し、目を見開くような軌道を描いてゴールネットの隅に決まった。俗に言うバナナシュートだろうか。ボールってあんなに曲がるもんなんだなあ……と、一人のほほんと思うのだった。

この時点で3点差。アメリカ側はこの点差に焦りを感じているのだろう、一気に攻勢に出始めた。ここで向こうはすべての交代枠を消化した。

が、それが功を奏したのだろう。人数をかけて強引に突撃をしてきたアメリカ側の攻撃を凌ぎ切ることができず、最後の最後にシュートを決められてしまった感じだった。

そこからは日本側の攻撃が、ガンガン行こうぜ！ レベルの攻勢に。

左サイドでは風巻さんが走り回って前線をかき回し。右サイドではスピードを生かした鬼丸さんと、感性のままに動き回る駆がお互いにお互いを囿としあつて動き回っていた。

かく言う俺はど真ん中最前線で体を張って敵のマークを引き付けていた。

フールにならない程度に体をくっ付け、動けないようにしてくるのだから困ったもんだ。強引に動こうとすれば動けるものの、それじゃあフールになつてしまうため無理に動けなかった。

別に、強引に動かなければ問題ないだろう？ ニッコリしながら考えたのは秘密だ

ぞ。

ちなみに、後半終了少し前に4点目を決めたのは風巻さんだった。

中央に陣取っていた俺に対して上げられたロングパスをヘッドで落とし、それを受けたのが風巻さん。DFは俺に付きつ切りになっており、フリーになってしまっていた風巻さんはそのままドリブルで駆け上がり、GKとの1対1の場面。落ち着いてシュートを決めていた。

「あー……おめでどう?」

「なんで疑問形なんだよ」

パシツと頭頂部にチョップされてしまった。

練習試合を終え、代表参加選手が発表されたわけなんだが。江ノ高から選出された選手3人全員がメンバー入りを果たしていた。

荒木先輩、駆、そして俺。まさか全員が招集メンバーのまま参加することになるとは思っただけだったが、アメリカ相手に結果を残せたのはそれだけ大きかったらしい。

——で、高校総体に参加している江ノ高の話になるのだが。

まさかの3人、主力からメンバーが招集されるとは思ってもなかった監督からすると、今後のメンバー編成にかなりの思慮を割いたはずだが。

それでも1回戦、2回戦と順調に勝ち進んでいくことができる監督の采配はかなりの

物。

そんな岩城監督の指示のもと戦っていた江ノ高ではあったものの、ちようどその時に代表で招集されてしまったメンバー。その全員が江ノ高の主力であったことが大きかった。

3回戦目も同じように戦つたらしいが、そこは相手が一枚上手だったらしい。

今まで1点差で何とか勝ち続けてこれたらしいが、残念ながら3回戦目は1点差で負けてしまったようだった。

ちようど代表招集でチームを離れていて、同じチームメンバーとして悲しい結果になつたとしても何も言う事はできなかった。が、逆に少し前に辞めてしまった元先輩方が何を言おうと徹底的に抗戦することに。

部活動の事を考えるとあまり派手に動くことはできないけれども、少しは部活の助けになる事がしたかった。

で、俺は先輩方から妬まれる様な立場にいたこともあるし、気にすることなく矢面に立つことに。が、ここに来てチームに不和をもたらすことをしても監督に怒られるだけなので、自重する事に。

「ま、ヤスが残るのは分かるとして、お前が残るとはなあー！」

「あだ！ 痛いですよお！」

日本代表が決まった直後、江ノ高メンバーはのほほんとしていた。

そもそも荒木先輩は決定がほぼ確定していたような所はあるけれど、俺も駆も代表として招集されるメンバーになるとは思ってもなかった。

駆については、積極的な攻めが評価されたのか。何より、実戦で1点を奪えたつてのは大きいだろう。その後も攻撃の要所でしっかり絡んでいたつても評価の一部か。

俺については……あのフリーキックしかシュートを決めてない。

出場してから前半については適当にDFをし、後半についてはFWとして動き回っただけ。なんとか動けないかと思っていたが、まさかあんなにマークを付けられるとは……俺に恨みでもあるんですかねえ（すつとほけ）

他のメンバーについては、日比野が代表入りを逃してしまったのが残念だったが、FWの風巻さんやMFの鬼丸。それに佐伯君に世良といった人たちは代表に選出されていた。

練習試合で1点奪われてしまったとは言え、試合を通してゴールの守護神として働いていた遠野は当然、代表のGKとして精を出してくれるだろう。

「ただ、俺たちが離れてる間に負けたのが……残念でしたね」

「ああ……惜しかったみたいだけどな。俺たちがいないだけで負けちゃうなんて思いも

しなかつたぜ」

そう答えた先輩の横顔は寂しそうだった。

寂しそう、とは表現したものの、悲しそうな感じでもあるし、悔しそうな感じでもある。その全ての感情が入り乱れているんだらうけど、どう表現したらいいのかわからない。

それを感じ取ってしまったのか、駆も何も言わなかった。

U—16代表。

日本代表としてこれから戦っていくことになるが……江ノ高が負けてしまったという結果を耳にするのは、どうしても悲しかった。

## 第53話

U—16代表選手に決まったのは良いものの、それを聞いて湧いたのは同級生であり、それ以上に沸いたのがうちの家族であった。両親がそろって大はしゃぎも良い所である。まあ、自分の息子が日本代表に選出されたと聞けば、そうなくても可笑しくないだろうが。

そもそも、今まで碌にサッカーなんてしてこなかった人間がいきなり代表に選ばれて不審に思わなかったんだろうか？

「不知火、代表に選ばれたってホントか!？」

「ああ、昨日決まったよ」

「しらぬーい！俺だあ、付き合ってくれっ!!」

「おう、下半身にぶら下がってるもん切り落としてから出直してきな。それでも断るが」  
「ねねね、康寛君。今のうちに君のサイン貰っておいても良いかな」

「サイン？　おいおい、書いたことなんて無いんだが。まあ、良いぞ？」

「やった！　ありがと！」

一部、おかしい連中がいたのには驚きだが……いやまあ、喜んでくれるのは純粹に嬉

しいんですけども。

自分的には日本代表に選出されたこと以上に、江ノ高が総体で負けてしまった事の方がでかかった。なにせ、俺が初めてサッカーを経験したところだ。悔しくないわけがない。

とりあえず、代表に選出された時点で自分にできる事は発揮してこようとは思っている。荒木先輩と駆も一緒に代表に選ばれたことだし、手を抜くつもりはない。そもそも手は抜かないが。

つい先日終了したばかりの代表合宿だが。

俺にとつてかなり有意義な時間になったと記しておこう。

同じDFとして選出された島さんの動き、合気道の動きを見ることができたのが一番でかかった。嫌あな目で見られていたけども動きを見る事ができて良かった。

次いで世良と荒木先輩の動きを見れたこと。

特に世良の動きは前回の鎌学戦でしか見れなかったし、荒木先輩とはまた違ったテクを披露してくれるのがたまりませんなあ。荒木先輩についてはいつも以上の動き、いつもと変わった動きをしてくれただけで満足です。

駆は、まあ……あいつは嗅覚で動くタイプの人間だから俺が見ようと見まいと理解できん。どこにボールが飛んで行くかを見て、考え、反射的に身体を動かす。なんて超人



的な動きをするわけではなく。本当に駆自身の嗅覚、感覚で動くもんだからトレースで  
きないんや。

しようがない。

しっかし……遠野が異常なまでのGK精神を見せてくれたのもまた一つの収穫だっ  
た。

俺たちにしてみれば、同じ代表招集組として安心できるGK。しかし、これがもし総  
体での試合になると非常に怖いGKだ。長身、反射神経の高さ、そして的確な判断能力  
がずば抜けている。

それだけを考慮すると、李先輩以上の怪物かもしれない。

ま、李先輩は気力ですべてをカバーするタイプの人間だ。故に実力以上の真価を發揮  
する怖い人という認識がある。だからこそ李先輩と遠野の二人がそろったときの動  
きつてのは気になるとこと。

ま、今回李先輩は代表として招集されてなかったみたいだが。

——で、なんやかんやで始まった選手権、神奈川県予選。

正直、神奈川県予選で優勝することができた我が江ノ高にとつて敵となるような相手  
は鎌学、葉蔭くらいだろうか。それ以外にもダークホースが出現するかもしれないけれ

ども。

残念ながら初戦であたる相手はそういう実力ではなかったという話だ。

ちなみに初戦の相手は経政大付属湘南。日比野がいる湘南大が、日比野のフリーキック1点しか取れなかったらしい。特にFWの秋本直紀あきもと なおきという選手が厄介らしく、U-18では鷹匠さんとツートップを組んでいたらしい。

……能力を見る限り、そこまでの人物とは思えない。それだけ人材が少なかったんだろうかと気が引けてしまうほどの感覚だ。

「くうう……あいつ、目の前の相手に興味なしかよお！」

「俺らだって神奈川で優勝したのによお!!」

「ふ、2人とも……なんか悪役キャラっぽいよ」

まだ県の二次予選だというのに記者に取材されている秋本選手にうちの馬鹿二人（中塚・八雲）が嫉妬の魂をぶつけているが、取材ねえ……変な事喋れないし、面倒なだけだと思っただけだなあ。

で、申し訳ないと思いつつ取材内容を聞いていたところ、打倒葉蔭、打倒鎌学と話すだけで、眼前の敵には興味がない模様。ホント、俺らが神奈川県で一回優勝したことを知ってるんだろうかというレベルだ。

——それを言ったらのびた君。

うちの荒木先輩も負けちゃいない。

「とりあえず、打倒レオナルド・シルバ？」

取材に対して笑顔で言う荒木先輩の精神力も大したもんだが、いつも通りだな。

それを耳にしていたらしい秋本選手の顔が引きつっていたのも、偶然見てしまったのだった。

「あ、あいつ……どんだけ偉そうなんだよ」

「荒木よりヤスの方が目立ってるってのにな」

「うっせえよっ!!」

この先輩方の絡みもいつも通りいつも通り。

笑いながら逃げる二人に、それを追いかける荒木先輩。馬鹿だなあと俺も半笑いでそれをみていたのだが、取材の魔の手は俺と駆にも押し寄せていたのだった!

「君、不知火君だよ。初めまして、私、月間ユース&ハイスクールサッカーの谷本って言います。よろしくね」

「はあ……初めまして、不知火です」

「それでなんだけど、まずは君も今回のU-16選出おめでとう。そして、いよいよ選手権なわけだけど、抱負を聞かせてもらっても良いかな?」

「あ……何ですかね。とりあえず、目の前の相手を一つ一つ下して、勝ちを積み重ねる

ことができればと。そうじゃなければ、相手に失礼ですからね」

「なるほど。じゃあ、もう一つ。不知火君は経政大付属湘南を相手にどれぐらいの勝率だと考えてますか？」

はたと、おかしい質問に思考が止まる。

何を聞いてるんだろうか試合前に、なんて考えが視線に乗ってしまったのだろうか。目の前の女性記者の人が一瞬、たじろいだように見えたが、高校生相手にそんな感情を見せまいと頑張っていた。

できれば別の所で頑張ってほしかったが。

ジロリと女性記者の人を見ていたが、色んな所から視線を感じ、首に手を当てほぐすようにして周りの様子を確認。

今までふざけ合っていた先輩方はもちろんの事、奈々もこつちを見ているし。同じチームメイト。相手の秋本選手も真剣な眼差しをよこしてきてる。一番納得いかないのは、一番近くにいる駆がキラキラした眼で見上げてくる事だった。

犬かっ！

「百ですね。まず、負けること自体考えられません」

「へ、へええ……これはまた大きくでたね。でも、相手にはU-18に出た経験もある秋本選手がいるんですが」

「そもそも、目の前の相手に集中しているかどうかも分からないですからね。加えて、俺がDFをする間は1点も与えないって自信を持っていますから。チームのためにも、代表に行くまでの間は全力で当たらせてもらいます」

「……なるほど、貴重な時間、ありがとうございます！ 君とはまたどこかで会いそうな気がするから、その時はまたよろしくね」

「はい。ありがとうございます」

良い笑顔でお礼を述べてくれる女性。

が、すぐさまその矛先を駆に変えたようで、取材に慣れていない駆はあたふたしていた。ニヤニヤしながらその様子を見ていたのだが。

「おわ!？」

「おいヤスウ！ 言うじゃねえか!」

「あの秋本って野郎の顔、面白かったぜ!」

後ろからの衝撃に思わず呻いてしまったが、この仲の良さ感が江ノ島クオリティ。

先輩方は笑ってるが、さっきの秋本選手の言葉に対する意趣返しでも何でもなく、今の江ノ高だったら普通に勝ると判断しただけだったんだが。

そもそも打倒葉蔭、鎌学と言ってる時点で江ノ高よりも下だという事を先輩方は理解しているだろうか。うちのチームは葉蔭も鎌学も、どちらのチームも下した上で神奈川

県で優勝したんだから。

それを向こうの選手が理解していないというのは度し難い。

「まあ、俺も事実を述べただけなので」

「はっはあ！ そんな自信満々なのは嫌いじゃないぜえ!!」

「よっしやあつ！ 俺たちも元氣にあいつらぶっ飛ばすぞつ!!」

『おう!』

ま、まあ……俺の取材に対する言葉で士気が上がったんなら良い事だと思っておこう。

俺、駆、そして荒木先輩の3人は代表に行つてしまうというところで、どうしてもこの選手権全試合に参加することはできないけれど。それまで、俺たちは1試合1試合を大事にしていこうと思う。

「さて、しつかり行きますか」

とりあえずは、経政大付属湘南。

開幕ダツシユを決めるために、失点0で行きたいところだ。

## 第54話

試合開始。

経政大付属湘南のキックオフから始まった試合。江ノ高メンバーは荒木先輩、駆、そして俺の3人はベンチからのスタート。奈々はこの試合で大変な事が起きるかもしれないね、なんて駆に言っていたがどういふことだろうか。

さて試合模様だが。

キックオフと同時に前に飛び出していった秋本選手。

開いているスペースに飛び込んでボールを受けようとしているが、一人しか上がっていかないためにDFがしやすい。しっかりと織田先輩や海王寺先輩が離れてはいるものの、マークしている。

そこにパスを出す経政の選手。

「なっ!?!」

足元でボールを受け前へと走り出そうとした秋本選手だったが、走り出す瞬間に江ノ高DFが詰め寄った。一人飛び出していた秋本選手は為す術なくボールを奪われてしまう。

そこから江ノ高は全員で上がり始め、攻撃し始めた。

しかし守備に動こうとしない秋本選手。まだ前半ではあるものの、一切動こうとしない秋本選手によって生まれた人数差が仇となり、試合開始早々の6分。右サイドから駆け上がった薫がクロスを上げ、それに合わせて飛び上がった高瀬がこれをヘッド。

しかしそれを何とか相手GKが弾いたが、点々と転がったボールの先に走り込んでいた織田先輩がミドルシュート。強烈なミドルシュートに相手DF陣は一切動くことができず、ゴールネットに突き刺さったボールを呆然と見る事しかできなかったのだ。

『ゴ、ゴオオオオル!! 前半開始早々のこと、先制点を奪取したのは江ノ高だあ! あまりに早すぎる失点に、経政大付属の選手は呆然としている! ここから立て直すことができるのかあ!』

まだ立ち直れてない感じに見える経政大の選手たち。

中でも特にダメージを喰らってる感じに見えるのは秋本選手だった。さて、これで彼も攻められそうになったら守備に回るのかな? と考えてみる。

まあ、とは言え江ノ高メンバーと経政大メンバーの実力を比べると、こっちのチームの方が総合力が高いからなあ……普通にやれば問題なく勝てるだろう。

……これはこのまま俺たちの出番が無いまま試合に勝ってしまうんじゃないだろう



か？

で、試合を傍で観戦していたのだが。

前半だけで3点。1点目を決めた直後、精神的にダメージを負った状態の相手に追い打ちをかけるように火野先輩がシュート。そして、前半終了直前に高瀬がクロスをヘッドで合わせて追加点を決めたのだった。

正直このままのメンバーで行けるんじゃないかと思うのだが、後半はメンバーを交代して試合に挑むことに。FWに俺と駆が。MFに荒木先輩を加えての後半戦。

「……俺たち、出なくても大丈夫ですよね？」

「そりゃ3点も前半で取れるんだ。問題なんてあるわけないだろう？」

「君たちは代表に選出されてるんです。ここで試合の感覚を忘れないようにすることも必要だと判断しただけです」

「なるほど」

という岩城監督からの言葉で出場。

DFではなくFWなのは、相手に注意すべき選手が秋本選手だけという判断からのようだ。それに、代表でFWの可能性があるかもしれないからとも。……俺、DFが正ポジションなんですが？

「くっ……」

悔し気に顔を歪めている秋本選手の表情が印象的だが、こんな結果になってしまった原因の一つとして彼が守備に動いていないってのがあげられる。確かにFWとしては良い選手なのかもしれないがな。

で、前半は一切の守備の動きをしなかった彼だが、後半はどうなることやら。

『さあ、後半が開始となりました！ 前半は一挙3得点という攻撃力を魅せつけてくれた江ノ高ですが、後半からはなんとU-16代表に選出された3人の選手が出場することです！』

「おおおお、歓声が黄色いってのは良い事だぜ」

荒木先輩が観客席に手を振ると、それだけで女性の歓声が沸き上がる。

事実、今の痩せてスラツとした荒木先輩はかなりのイケメンだからな。女性から歓声を受けてもしょうがない。

「それで太ってたら可愛かったんですけどね」

「……さすがにもう反応してやらんぞ？」

「はは、とか言いつつ変な顔になってますよ」

「ぐあああつ!!」

頭を抱えて叫び出す荒木先輩に、先ほどまでのイケメンオーラは存在していなかった。これがいつもの江ノ高クオリティですわ。

特に緊張する様子も見られない俺たちに苛立ちを隠そうともせず睨み付けてくる秋本選手。ま、そのまま俺の事を見続けていようがFWだし。相手もFWだし。特に問題ないだろう。

向こうはFWとしての仕事自体あまりできていないのだからそこまで気にしなくてもいいだろう。

まあ、さすがに後半は彼も諦めて守備の動きをすと思うが。

後半は江ノ高からのキックオフ。

まずは荒木先輩にボールを回す。それを追いかける秋本選手の表情は必死さを感じさせるが、焦った気持ちで満たされている彼では荒木先輩のテクニックに翻弄されるだけ。

実際、強引にボールを奪いにいったものの、エラシコからのパスで簡単に抜かれてしまふ。

「なっ……?!」

「ふふん」

得意げにドヤ顔を浮かべる荒木先輩に苛立つ。

ボールはドンドンと前線に上がっていき、前半と同じような形で経政大を追い詰めていく。ボールをサイドに回し、サイドからボールを持って上がってクロスを上げ、決め

る。簡潔明瞭な攻撃。

先制点の時と同じように上げられたクロスを俺が合わせ、ヘッドでシュート。

「おおっ！」

「ぐあっ!？」

一気に飛び上がり、最高点で振りぬいた。

振り子のように力一杯振りぬいたシュートは、そのまま真つ直ぐ相手GKの胴体に吸い込まれ、思いつきり弾き飛ばした。ただのヘッドでこの威力ですよ……どうなってるんですかねえ。

で、弾き飛んでいったボールは、落下位置に走り込んでいた駆がダイレクトボレー。DFの間を縫うように白線を描き、ゴールへと吸い込まれたのだった。

『——試合終了お!! 7対0! ここまで圧倒的な内容になると誰が予想したでしょうか! 相手の攻撃を全てシャットアウトし、一気にサイドから駆け上がってクロス、そしてシュート。何より、不知火選手が見せたあのヘッドシュート! 放送席までその音が聞こえてきました! 何という威力でしょうか……!!』

しかし残念な事に決められなかったんだよなあ。

結局後半は駆が1点。俺が2点。荒木先輩が1点の計4点の猛攻勢を仕掛けたのだった。当然この試合を他校も観戦していることだろう。ピッチからざっと見ただけ

でも鎌学、葉蔭、そして蹴球のメンバーが見に来ていた。

当然、神奈川県大会を優勝しただけあって色んな高校から注目されるようになった。まだ選手権の試合に出ることはできるが、もう少し江ノ高メンバーの実力が高くなると鎌学戦はもちろん、葉蔭戦もきついだらう。

……代表戦までに何とかなれば良いんだが。

経政大相手に圧勝を収めた俺たち江ノ高は、少ししてなでしこジャパンの試合を観戦することに。もちろん奈々はスタメンとして出場しているし、この間見た群咲舞衣もスタメン出場していた。

試合相手はロシア。

フィジカル的にロシアの方が優っているものの、的確な連携とパスワークでその差を無くしていた。

前半に1点を決め、優位の状態で後半へ。その後半ではロシアに2点決められ逆転を許してしまったものの、1点決めて同点に。

「行けえっ！ セブン！」

「うおおお！ 奈あ々ちやああん！」

奈々にボールが渡るたびに大きな歓声が沸き上がる。

一緒に見に来ていた駆と中塚も大声で応援に徹している。

日本で開催されていることもあり、観客席にいる観客の多くは日本人。そして、奈々自身の可愛さも際立ってより一層応援に力が籠っている。

『出たああ！　これがなでしこジャパンエース、美島奈々のウィッチターンだあつ！　体格の優っている相手を引き付け、開いたスペースに飛び出した群咲にスルーパス！』

一気に飛び出したあ!!』

あのターンからのスルーパス。

敵陣にスペースを生み出す動きはとても参考になる。どのポジションでも相手を引き付ける動きは非常に有効だからな。

パスを受けた群咲はそのままゴールを向いてシュートを打とうとするものの、相手DFがしっかりとマーク。シュートコースを消しており、前を向くことができない。

後ろから一色選手が駆け上がっている。

声がかかり、一瞬後ろに気が取られた瞬間に相手DFが群咲の足元のボールを弾いた。が、一色選手も走り込んでいる事だし、あとはGKに止められない所にシュートを蹴る事だけだが……

「……………っ！」

「なっ……………」

『ゴ、ゴオオオル!! 群咲選手が決めたあ! これで3対2! 日本、これで勝ち越しだあ!!』

ボールを取りこぼしてしまった群咲選手だったが、すぐさま反転してダイレクトボレーをかましたのだった。そこまで走り込んでいた一色選手の頭の近くを蹴るという危ないシュートだったが……

が、その独特なシュートは相手GKも予測不能だろう。

実際、シュートに全く反応できず、呆然と逆サイドのゴールネットにボールが突き刺さるのを見ているしかなかったようだった。

「すげえなあ。あんな体勢でシュートなんて蹴れねえぜ……」

「まあな。そもそも中塚はノーコンを直さないとな」

「うううっせえやいつ!!」

吠える吠える。

顔を真っ赤にして否定する中塚だが、残念ながらシュート精度はかなり酷い。

自慢の足はかなりのものだから、これに精度も上がればかなりの選手に成長するんだが……こればかりはどうしようもない。ま、犬並みの足の速さで相手チームの選手を攪乱するのも一つの戦法だ。

なでしこジャパンは3対2のまま試合終了。

勝利を飾った選手たち。中でも、群咲選手と奈々の二人がとびっきりの笑顔を俺たちに向けて見せてくれたのだった。



## 第54・5話

つい先ほど行われた試合を録画したテープを再生。

テレビ中継のように綺麗に水平に撮ることはできなかつたが、十分ピッチ全体を見る事ができる。

「流れるようなステップからシュート……完璧すぎる」

江ノ島高校対経政大付属湘南の試合は、思っていた以上に江ノ高勝利を予想している記者が多かつた。

と言うのも、つい先日U-16に選出された選手を3人も擁しているというのも大きな要因の一つだが、何より不知火という選手の存在が一番だつた。

——不知火康寛。

今まで一切の情報の無い、真つ白な選手。

ユースで活躍していたとか、有名チームに在籍しているとか。そういった経歴が一切無い、ある意味で異色の選手。逆に言えば、プロリーグで活躍しているような選手にある紆余曲折とした人生が無いようにも見える。

まるで、今まさに生まれ落ちたばかりの赤子のような。

「はあ……こんな選手、どうすりや良いんだか」

例えば荒木。

彼も同じようにU-16に選出された経歴があるし、そこで逢沢傑とも一緒のピッチで活躍をしていた。が、そこから彼は何故か江ノ島高校に進学し、しばらく表舞台にその姿を見せなくなってしまった。

それは、ちょうど逢沢傑が事故で亡くなってしまった前ぐらいだろうか。

そして逢沢駆。

亡くなった逢沢傑の弟にして、同じサッカー選手としての道を歩んでいる。U-16に選出されたことも加味しても、ここまでのストリーは中々ないだろう。

で、件の不知火に戻るが……

「何も無い、か……ホント、どうすりや良いのやら」

「頭抱えて、どうしたんですか、先輩」

「ああ、西か……いや、次の記事の内容なんだが」

「高校サッカーの記事でしたっけ？ 有名どころで行くと鎌学とか、葉蔭とか、最近話題の東京蹴球学園ですか？」

とまあ、普通ならそうなんだよなあ。

最近だと神奈川県予選を勝ち抜いて総体に出てはいたが、日本代表に選出されて総体

の試合に出ていなかったから日の目には出てない。神奈川の中では異常なまでに注目されている選手の一人だが、まだまだ全国では有名と言うほどの選手ではないのだ。

「江ノ島高校だ」

「江ノ島高校？ ……そう言えば、今年神奈川県予選で優勝したのって、そんな感じの名前だったような。もしかして、その高校ですか？」

「そうだ」

「うわあ！ 本当ですか!? 良いなあ、僕も取材してみたいですよ！」

「……ならお前、俺と一緒に江ノ島高校に行くか？」

「……え？ 良いんですか？」

ふと思いついたことをそのまま伝えると、驚いているのか、西はきよとんとした表情を晒している。

「俺だけだと真面目な事しか書けそうにないからな。ここは若い奴の風でも取り入れようってな」

「そ、それって僕が真面目じゃないって事ですかっ!？」

「ははっ、そりゃ自分の胸に手を当てて聞いてみれば良いんじゃないか？」

「そ、そんなあ……」

「取りあえず、今選手権の真つただ中だが、もう少しすると代表の試合に行っちゃうから

な。早いうちにアポ取ってしまおう」

「あ、そう言えばそうですね。……あれ？ その江ノ島高校からは誰選ばれてるんですか？」

「お前……」

さすがにここまで高校サッカーに疎い奴だとは思ってもなかった。

思わず頭を抱えてしまった俺は悪くない。それを不思議に思つて首を傾げているこいつが全部悪いんだ！

「荒木竜一、逢沢駆、それと不知火康寛の3人だ」

「へええ！ 3人も代表に選出されるなんてすごいですね！ えつと、荒木竜一は前にも出てたと思うんですけど、後の2人って……聞いたことないですね」

「逢沢駆は逢沢傑の弟って話だ」

「ああつ！ あの逢沢選手の！ ……で、不知火つて子は」

「分かんらん」

「……へっ？」

むすつとした表情になっているのを自覚しながらも、ニヤついた表情をした西に苛立ちを隠さない。そのまま頭にチョップを一つ。結構強めに落としてやった。

「あいた!!」

「ばっか！ そんなん分かってたら苦労してないわっ！」

「な、なら何が分からないんですか？」

「……不知火って奴は少し前から表舞台に出てきたんだ。これまでにどこかのクラブでサッカーをしていたって情報も無けりや、中学、小学の時にサッカー部に所属してたって話も聞かない。そんな奴がいきなり高校サッカーで、県予選とは言いいきなり台頭できると思うか？」

「あー……それは確かに」

「だから、これからお前と一緒に取材をさせてもらおうと思つてな」

「え？ 今からですか？」

む、と腕時計を確認し、長針短針ともに6を指し示していたことに気が付いた。こんな時間まで集中していた自分に呆れるとともに、こいつが何故こんな時間まで居残りなんぞしていたのかが気になった。

「お前……まさか、ゲイか？」

「は!! いやいやいや、いきなり過ぎませんか!? 僕ノーマルですし！」

「そうか……良かった」

「そ、そんな風に思つてたんですか！ た、確かに僕はなよなよしてるとは言われたことありますけど」

「あるんかい」

パシンと一つ、頭を叩く。

小気味良い音を響かせた西を無視し、スケジュールを確認する。

別にアポを取ってるわけでも無し、試合後で疲れてるであろう少年に鞭を打つ行為はさすがにできなかつた。

「はああ……また今度にするか」

「確か、1週間後に次の試合があるんじゃないやなかつたでしたっけ？」

「ああ、そうだな。その前に何とか取材が出来れば良いんだが」

「そこは先輩の腕の見せ所ですよ！」

「うまい事言いやがって……」

江ノ高の監督は確か、二人いるんだったか。

一人はまだ若い先生で、もう一人が頑固一徹みたいな先生だつて耳にしたが……代表を控えてる選手の取材なんて許してもらえるんだろうか。

「ま、当たるだけ当たってみるか」

「よっ！ それでこそ先輩です！」

「……ふん！」

「あだっ!？」

まくのうち  
幕内

何故今回、取材を受けてくださったんですか？

不知火

実のところ、取材を受けたことが無かったので受けてみようかと。これと言って特に深い理由は無いんですが。

幕内

いえいえ、お受けしていただいてありがとうございます。

それで何ですが、不知火選手はいつからサッカーをしているんですか？

不知火

高校に入学してからですね。同級生の逢沢駆選手が俺の事を誘ってくれて。それでサッカー部に入ろうと決めました。

幕内

高校から、ですか？　今までにどこかのクラブに所属していたとか、そういった事も

なく……

不知火

そうですね。なので、ここまで成長できたのは監督の岩城先生のおかげですし、初心

者の俺の事を暖かく迎え入れてくれた今のチームの仲間たちがいたからこそだと思つてます。

幕内

そうですね。ちなみにポジションは――

「はああ……取材してきてなんだが、逆に謎が深まったなあ……」

高校からサッカーを始めた奴に、そりゃ昔の情報なんてあるわけないよなあ……それにしても大人びた奴だったな。あれだけ江ノ高で中心選手になつてるんだつたら、もう少し自分の実力を笠に着て威張つてそんな感じがあつたんだが。

荒木君はいつも通り、お調子者つて感じは出てた。

逢沢君は高校生になりたつて感じが抜けてなかつた。

……こりゃ確かに江ノ高で中心選手になつてもおかしくないな。一人だけ精神年齢が高い。さすがにチームを率いてるのは彼じゃなさそうだったな。サッカーを始めたばかりの初心者だからな。

「いやいや……あんなプレーを見た後でこの内容つてもなあ」

「先輩、これはこれで面白いんじゃないですか？」

「は？」

「だって、こんなに凄い才能を秘めた高校生が出てきたんですから、これからの日本の



サッカー、どんどん盛り上がっていくんじゃないですか!? もしかしたら、不知火君がその時日本代表の中心選手になって活躍してるかも!」

目を輝かせて純粋なまでの想いを語る西。

普通だったらあり得ないと一笑して終わるだけだが、サッカー経験が1年も経ってない、本来なら初心者としてベンチ入りも難しいところ。それが、DFにFWをこなすだけの実力にまでなってるんだから。

……西みたいに純粋に考えられれば楽なんだが。

気楽そうな西を見ると、ちよつと苛立った。

「じゃ、後の編集はお前に任せる。よろしく」

「え……? って、えええつ!? な、なんで僕がこれをつ!」

「今後の糧にできると思つて励んでくれ! 俺は帰つて酒でも飲むとするよ」

「ま、幕内さんの鬼いいつ!!」

「はっはっは! 何とでも言つてくれたまえ!」

乱雑に渡した資料を胸に抱え、泣き言を喚きたてる西を無視して歩き出す。

さあつて、取りあえずつまみでも買つて、缶ビール片手に仕事の疲れでも癒すとしま  
すかね!

## 第55話

まさか俺に取材が来るなんて。

考えもしなかったことだが、この間試合をしたときついでに話を聞かれたし。日本代表に選出されたつてのがやはり大きいか。

それにしてもあの幕内つて記者の人、俺が高校からサッカーを始めたつて言ったらすげえ驚いてたな。まあ、当然だろうけど。

圧勝で終わった試合の、その日は試合が終わつてすぐに解散。全員疲れを癒すために家に帰ることになったのだが、翌日。

次の試合相手になる厚樹北高校についてのミーティングが行われたのだった。

奈々が実際に試合している厚樹北の様子をビデオ撮影した動画を見たが、鎌学の鷹匠選手や世良選手、葉蔭の飛鳥選手のように突出した能力の選手はいなかった。

が、改めて考えてみるとそれが普通なのだろう。

それでもなけりゃ、あれ以上のレベルの人間がプロの世界にゴロゴロしているということだし。それは勘弁してほしいなあ……

で、次の試合までの6日間については、今後俺たち3人がいなくなった時の事を考え

での練習をするようだった。

で、試合形式は、その時のスタメンメンバーとベンチ入りメンバーに俺たち3人を加えての練習試合だった。

確かに俺、荒木先輩、それに駆の3人はスタメン、ベンチ入りのメンバーとしてやってきただけあって、それが一気に抜けてしまうのだからこれからの事が心配になっても仕方がない。

少し前に行われたばかりの総体での結果がそれを表しているし。

あの時江ノ高が破れたばかりの相手は、上記にあるような突出した選手を抱えている高校が相手で。と言う事は無く、ただ単純にチームの総合力の差で敗れてしまった形だった。

体格差で薫がやられ、足が速いだけだった中塚はテクニクでやられ、高さが取り柄として出場していた高瀬は、同じくらいの身長でよりDF力の高い選手に完全に静かにされてしまったという。

「俺、バンバン動き回っても良いんすよね？」

「はい。ただ、怪我だけはしない、させないように気を付けてくださいね？　これから選手権だけでなく、君は日本代表として選出されているわけですから、最大限自分の体を労わると言う努力もしてください。良いですね？」

「分かりました。取りあえずまあ……無理をしない程度に」

「お願いします」

と、いう事で久し振りの江ノ高内戦の始まりだ。

前回は俺のスタメン、ポジに関して怒りを覚えてしまった方々との戦いだだったが、今回は総力戦。全員が全員、しつかりと試合に臨もうと考えているだろう。

さすがにスタメンとの試合に気後れしてる人がいるかもしれないが、それはそれ。もしかすると、ここでの活躍がスタメンに選ばれる切っ掛けになるかもしれないんだから、それを後ろ盾に頑張ってもらおう。

確証はないが、おそらくそうなるだろう。

……そう考えると、あの時辞めてしまった方々は勿体無い事をしたとしか思えませんが、後の祭りか。

さて、対江ノ島スタメン組の陣容だが。

D Fは俺、錦織<sup>にしじわり</sup>先輩、三上先輩の3人。

守備的MFに浜先輩、桜井先輩。攻撃的MFに荒木先輩、遠藤先輩、それから元SCの中村<sup>かずま</sup>一馬先輩が。そしてFWに駆と工藤先輩というメンバーが割り振られた。

そしてGKは、なんと李先輩がこちら側になっていたのだ。

理由は特にないと岩城監督が言っていたが、これは完全にチームの実力の差を鑑みての事だろう。

これで全員のヤル気が上がってくれば最善だという意図は透けて見えたが……

向こうのスタメンチームの采配だが、駆が抜けた穴に薫が入り、荒木先輩の穴は沢村先輩が埋める形をとっていた。俺のポジションには当然、海王寺先輩が入っており、堀川先輩とのコンビを成している。

キャプテンのポジには八雲が入っており、逆サイドに中塚がいるという面白い展開に。足の速いだけの中塚側から攻め入るか、独特な動きで翻弄してこない分八雲側から攻めようとするか。

ま、そこは荒木先輩がしっかりと考えてパスを出すだろう。

が、こつちが向こうの実力、性格を把握しているのと同様に、こちらの事もしっかりと把握しているはず。加えて、こつちのメンバーのほとんどがあまり試合経験の多くないメンバーだ。

それでも構わず俺はやるんですがね。

ピーーツ!!

試合開始のホイッスル。

厚樹北高校のミーティングの翌日、江ノ高内戦は開幕を告げたのだった。

「じゃ、予定通りいくぞー！」

「はあこ」

「て、てめえ……なんて気の抜ける声を……!」

「まあまあ、いつも通りいつも通り」

「ははは……」

力無く笑みを浮かべる駆。

苛立った風に表情を歪める荒木先輩。

うむ、これがいつも通りの証ですわ。

やはりと言うか。スタメンとベンチ・ベンチ外のメンバーの実力は結構な差ができていた。経験の差が出るのは仕方ない事だが、俺たち3人がいない状態だと……試合にすらならないだろう。

勿論、スタメン側が圧倒する形で。

しかし、こちらのGKは李先輩だし、向こうの攻撃で注意すべきなのが長身を生かした攻撃を仕掛けてくるであろう高瀬の存在か。

火野先輩はフィジカルに注意しないとイケないし、荒木先輩と付き合いの長いであろう織田先輩とマコ先輩は……どうすりや良いんだろうか。ま、後で対策を聞いておけば良いだろう。

「左サイドカバー!」

「おらおらおらおらあ!!」

良い感じに中塚が足を生かして突撃してくる。

あいつの場合は足が速いだけで別段テクニクが高いわくじやなく、むしろ下手と言っても過言じゃないクロスを上げてくる。故に中塚を集中的にマークする必要はないと思っている。

逆に、こういった場面においては、その近くでカバーに入っている選手へのパスコースを失くしてしまうのが一番。

「止めるー！」

「ぐ……まだまだあつ!!」

「いや、んここまでだ」

「んなあ……!?!」

前にボールを運ぶことに集中していた中塚の目の前に出現。

一瞬で足元のボールを奪取し、荒木先輩にパス。

瞬間移動してきたように思っているかもしれないが、単純に後ろからマークしていただけ。錦織先輩が注意を引き付けてくれていたからこそできた芸当だ。

ま、あいつが予想以上に単純つてのもあるが。

荒木先輩がボールを持って上がろうとするが、しっかりと数人でマークに付き始めた。

自由に動かされては困る人物なだけあって、抜けなくマークされている。

「先輩っ！」

「……くそっ！」

後ろから声をかけ、パスを受ける。

さすがに俺だってあれだけのマークをつけられるのは勘弁してもらいたい。中盤でパスを受けた俺だが、すぐに火野先輩が走り寄ってくる。が……

「しゃあっ！」

「な……!?!」

すぐに前線へロングパスを出す。

駆のマークには織田先輩と堀川先輩の二人がマークしているが、織田先輩では駆の俊足には追いつけないだろう。で、堀川先輩はお得意の必殺スライディングがあるが、どうなるだろうか。

一人前線を駆けあがる駆。

少し後ろから走り出し、援護しようとする工藤先輩。戦局が一気にこちら側に傾いたところで、紅林先輩が前に詰めだした。前後でプレッシャーを与えてボールを奪おうとしている。

ループシュートで上から狙うか、股抜きで下から狙うか。



とは言え、そこまでのボール捌きを駆が出来るのか。なんて問題もあるが……  
「くっ……」

「よしー」

駆がバックパス。

ボールを受けたのは遠藤先輩。

あのタイミングだったらゆとりツクでも。と思ったかもしれないが、そもそも自分のチーム内で駆のフェイントの事を知らない人はいないだろうと判断したのかもしれない。

紅林先輩も、そのフェイントは把握してるだろうし。

「こっちだー」

「いけ、不知火！」

中盤から飛び出した俺がパス要求。

荒木先輩は相変わらずプレスを受けており、パスを出す場所が見当たらない。かく言う俺も火野先輩からプレスを受けていたりするんだが、問題なくシュートを打てるが。

「くっそ……!!」

仕掛けてきた火野先輩の動きに合わせてボールを浮かせ、火野先輩の仕掛けを直接受ける。審判（岩城監督）の目には、俺の足に当たったように見えるだろう。

故に、足が痛いふりをしてファールをアピール。

それを見ていた審判は、笛を口に咥え——  
ピイイ!!

——甲高い音を鳴らしたのだった。

「そ、そんな!?!」

鳴らされた火野先輩はファールじゃないと訴えるものの、ニツコリと首を振り、否定する審判に一步後ずさっていた。さすがにイエローカードが怖かったか。

距離にして約40mだろうか。

ゴールまでの距離を考えれば、ゴール前に詰めている味方に合わせるようなロングパスか、ショートで出すかの二択だろう。

が、工藤先輩は海王寺先輩よりも身長が低く、前線にはしっかりと人数をかけてきている。予想外のポジショニングをするであろう駆であつても、この人数差は厳しいだろう。

故に、俺はここから蹴る。

「ふう……いくぞおらあああああつ!!」

絶叫にも近い大声。

味方がゴール前からササッと避けていくのが見えた。

単に湘南の日比野を参考にしているだけなんだが。

十分に取った助走、からのシュート。

久し振りのキャノンシュート。勢いよく振り抜かれた右足から放たれたボールは真っ直ぐに白線を残して飛んでいく。一応、一番人が少ないコースを選んでのシュートだったが、コースにいた誰もが避けるような動きをしていた。

さすがにDFは当たりにくるだろうと思っていたが、反射的に避けたって感じがありありとする。

が、GKの紅林先輩はそうはいかない。

さすがにキーパーが自分の仕事を放棄するなんて事はしないだろう。ちなみにボールの軌道は、真っ直ぐ紅林先輩の胴辺りを目掛けて飛んで行ってる感じ。

日比野よりも強いシュートだけに、本物のシュートを受けたときに威力が低くて笑みがこぼれるとか。そこから芽生える友情みたいなものは……ないですよ、やりすぎましたごめんなさい。

「ぐっ……!!? う、おおおおっ!?!」

獣のような叫び声。

バシッ!

紅林先輩がボールを手で受け止めた瞬間に大きな音が聞こえてきた。シュートを受

けるのにかなりの葛藤があつたらうに、顔を歪めながらも真正面から両手でボールを受けに行くとは……

勢いを何とか殺そうとする紅林先輩だったが、何分日比野よりも威力が強いだけに、どうにか受け止めてやろうと躍起になっていたのかもしれないが、残念。

ピイイ!!

「く、くつそ……!」

「そ、んな、馬鹿な……!」

何とか両手で受け止め切った紅林先輩だったが、勢いを殺し切ることが出来ず、ギリギリボールはゴールの線を超えていた。つまり、俺のゴール。

それをただ呆然と見る事しかできないでいる全員。

……あれ? これ、単に俺が化け物みたいなフリーキックを公開しただけなんじゃ? と思わないでもないが、ただ単に運よくフリーキックが出来ただけだと思っておこう。

## 第56話

1対0になってからはスタメン組の攻撃がより激しいものになったが、残念ながら本気でDFを始めた俺の守備を容易く超えよう者はいなかった。

高瀬が中央でパスを受けようものなら俺は高瀬よりも高く飛び上り。

マコ先輩や沢村先輩がミドルシュートを打とうものなら身を挺して防ぎ、足を生かしてパスコースを消したりと、縦横無尽の活躍をしたのだった。

その度に敵味方から変な目で見られていたが、そんな事は一切気にすることなく続行。

1点目は日比野のキャノンシュート。

態度は兎も角、パスやファールの貰い方では世良を参考に。

フリースローでは金選手のスローイングのような長距離を再現してみたり。

全体的な動きでは佐伯を、DFの統率では飛鳥選手を参考に指示を出してみたものの、ついてこれなかった部分があったり。

色々な選手の動きを取り入れ、全力でスタメン組の動きを阻害し続けにし続けた結果、前半は無失点で折り返すことに成功。

ちなみに、こちら側は2得点を決めている。

1点目は俺。2点目は荒木先輩のミドルシュートがゴール隅に綺麗に決まった。

「さすが不知火……あのフリーキックはやばかった」

「ああ。あれを真正面から受け止めようとしてた紅林も凄かったが……あの威力はなあ」

「おや？」

何故か味方から白い目で見られているような気がするんだが、どうしてだろうか。全力で動き回ってるだけだろう！俺は悪くなあい!!

後半も前半と変わらない布陣で展開。

そもそも、スタメン組がこの布陣から1点くらいは奪ってくれないと話にならないという事か。なら俺が手を抜けば良い？残念、そうはならない（暗黒微笑）

ここでスタメン組の誰かが、普段以上の実力を発揮してくれることで、俺自身の実力の向上にも繋がるというわけだ。

「さて後半も止めるぞお」

「アカン……向こうが可哀想になってきた」

「不知火がいるだけで鎌学よりもキツイ守備になってるのはどうしてなんですかねえ」

「知らん」

錦織先輩と三上先輩のキャラブレが激しい件について。

こんなキャラだったかなあ……まあ、今の方が付き合いやすいからこのまま継続してどうぞ。

何気に代表合宿で一緒になった島選手の合気道の動きを試してみようと思つてみたが、そもそも俺のフィジカルとスベックを思い返して、別段そんな事をする必要もないんじゃない？　と思ひ至つてしまった。

それだったら飛鳥選手みたいに指示を出して、組織的な動きをしてもらつた方がやりやすいというもの。鳥瞰視点で全体を見渡せるからこそその強みもある。

これでオフサイドトラップも仕掛けやすくなつたというもの。

火野先輩と薫が何とか裏から抜け出そうと走り出すが、指示を聞いてくれる先輩方が良い動きをしてくれるもので、すぐにフラッグが上がり、笛が鳴る。

それでも、俺が中央を守備していることを鑑みて、サイドからのドリブル突破。サイドチェンジからの攻撃の組み立てなど、向こうは向こうで組織だった攻撃をしてくる。

残念ながらサイドから高瀬を狙うアーリークロスは、身長差なんてものでもない俺の跳躍力で全てを無に還す。残念だったな……ここは俺のテリトリー！

……なんて、心の中で考えるだけでも恥ずかしいんだが、そんな自分が馬鹿らし過ぎで笑えて来る。笑みが絶えない人生って良いよネ!!

後半20分。

流れるようなパス回しから攻撃の糸口を見つけようとしているスタメン組だったが、堅い守備に攻めあぐねている模様。

じりじりと時間だけが過ぎていくことに焦ったのか、パス回しをしている最中、少し長めのパスになった所を荒木先輩がカット。

慌ててボールを奪い返そうとするものの、荒木先輩のフェイントの交えたドリブルを簡単に止めることが出来ず、敵陣への進攻を許してしまう。

嗚呼……また追加点か、と思つた時だつた。

「殺す殺す殺す殺すううう!!」

「んなっ!?!」

「よしっ!!」

海王寺先輩がマークしてる間に、少し離れたところにいる堀川先輩が猛烈な勢いで走りこんでのスライディング。

これがまた綺麗にボールに当てに行くのだから驚きだ。

そのボールを織田先輩が足元に納め、そこからの攻勢は凄まじかった。

俺のDF外にいるマコ先輩にパスしてからのミドルシュート。

何とか前に弾いた李先輩であつたが、サイドに零れてしまったボールは火野先輩が奪



取。そのままダイレクトで蹴ったと思いきや、身体で守り切る三上先輩。

そのままボールをクリアできず、サイドラインぎりぎりまで八雲が足元に納め、沢村先輩にパスを出した。いつでも走り出せる準備だけはしておいたものの、ミドルシュートを狙わずサイドに展開。

俺に対するケアだろう。

普段の沢村先輩だったら間違いなくシュートを打ってたと思うが……単に慎重になっただろうか？

そのまま高瀬のケアをしているものの、サイドからずつとゴールネットを狙っているのがあり感じられる。が、ゴールエリアの外からは絶対に打つてこない。

どのタイミングで狙ってくるだろうか……？

じりじりと中央から逸れる動きをする高瀬に注意しつつ、全体に意識を張り巡らせる。

——しかしまあ、正直言って1点くらいだったら奪われても良いとは思ってる。

それでスタメン組の意識が向上してくれるんだっただら。

が、それはそれで上から目線だっただけに話になるんで、そういう事はしない方向で。1点も取れなかった……と意気消沈しても、このチームだったらすぐ盛り返してくれるでしょうと。

自分勝手だとは思っているが、そういった信頼があつた。

「俺が……っ！」

「くっそ……っ！」

ボールを受けた薫が、お得意のフェイントを生かしてドリブル突破。

体格で優っている錦織先輩だったが、テクニックと俊敏差がここで出てしまったと言つたところか。

いつでも高瀬のカバーのできる位置で、薫の動向に集中する。

またぎフェイントをしようがボールを蹴り出すまで動かない。

右、左、右……そのままシユートしようともヘッドでクリアしてやらんばかりの集中力。

右でシユート体勢！

そのまま打つてくるかと身構えたところでパスが飛んでいた。

確かに逆サイドに火野先輩が飛び出してきてたのは分かっちゃいたが……！ 走り出そうとした瞬間、高瀬が体を入れてきた。別に何とでもなるが、無理矢理突破しようとするとならぬとファールを取られるかもしれない。

もう少しDF粘ってくれても良いんやで……!?!

「いけやあっ!!」

「くっ!」

飛び上り、渾身のヘッドシュートがゴールネットに突き刺さった。

李先輩も薫の動きに惑わされていたらしく、何とか伸ばそうとした左腕だったが、指先が少し触れただけだった。意地の守備も、虚しくゴールを奪われる形になってしまったのだった。

「よっしやああっ!!」

「やったなっ!」

皆、そこら辺の高校から得点するより喜んでるんじゃないかこれ。

先日試合をしたばかりの経政よりも。なあにこれえ? 俺のせいかな? 完全に俺がラスボス的存在になってるような気がするんだが!?

ちよっちキレちまったぜ……!」

「では、これからはポジジョンチェンジしてもらいましょうか」

「え、つと……監督?」

「折角の機会なのでね。少々面白い事をしてもらいたいでしょう。DFを錦織君と三上君の2人で。中村君と遠藤君のポジジョンを少し下げて、4人の守備的MFに。そして、荒木君と不知火君にMFを」

「は……?」

思ってもなかった采配だった。

が、中々に面白い采配だなとも思う。これで俺が中盤辺りで好き勝手に動けるような配置になったようなもの。

確かに今までMFはやったことが無いポジションだが……

「まさか、お前が俺の横に立つとはな」

「いやあ、荒木先輩と一緒にできるなんて光栄ですなあ（棒）」

「かつこ棒ってなんだよ!?! ったく、ほんつとうにてめえはああ……!?!」

後半25分。

前半からの動きで、マコ先輩と織田先輩を観察することができたし、そろそろ圧倒的な攻勢というのを見せても良いかもしれない。例えそれが、一個人による動きだとしても。

くうう……面白くなってきた!

## 第57話

なんだかんだ時間が過ぎていき、試合が終了した。

あの後、中盤で動き回った俺に合わせて戦場を駆けまわった駆と荒木先輩の尽力により、向こうの攻撃をシャットアウトしまくり猛攻を仕掛けまくった。

相手が中盤にボールを運ぼうものなら俺がどこまでも走り回って追いかけてまわしていたのが大きいかな。湘南の九十九選手じゃないが、それだけのスタミナがあれば不可能じゃない。

で、ボールを奪っては荒木先輩や駆にパスをまわしたり、もしくは俺が自分でドリブル突破してからのシュートする。ループ気味の軌道でパスを出してみたり、的を絞らせないように動きまわった。

結果、5対1。

あれから俺と工藤先輩、荒木先輩で得点を重ねて試合終了。

必死にボールを弾いていた紅林先輩だったが、これだけの猛攻となるとすべてを捌き切ることはできず、試合が終わった後は悔しそうな表情をしていた。

というか……スタメン組の皆が悔しそうな表情をしている。

かと言って控え組が嬉しそうな顔をしているわけでもなく、微妙そうな表情で俺の事を見ているのはどういふことだろうか？ まあ、岩城監督が凄い嬉しそうにニコニコしていたから、あの動きで良かったんだろうが。

「では、皆さん。お疲れ様でした。今日の試合を通じて各人得られたものがあると思います。選手権、次の試合まではあと数日しかありませんが、各々気を緩めることなく精進してください。また、厚樹北は優勝候補の一角としての實力を持っていますが……今の君たちであれば勝てると考えています。それでは、今日はここまで。お疲れ様でした」

『お疲れっした!!』

……予定通り厚樹北高校との試合を終えれば、俺・駆・荒木先輩の3人はその3日後に日本を発つことになる。正直、日本代表として戦う以上に江ノ高の一員として頑張りたいと思っている。

ま、代表に選出されたからにはそっちに行かないといけないんだが。

が、問題なのは厚樹北に勝った後の試合だ。

その次の試合は……確か、湘南かもう一つの高校……相模ヶ浦高校だったか。の、どちらかの高校が勝ち上がってくる。湘南は堅い守備が持ち得の戦術で虎視眈々とゴールを狙ってくる。

特に日比野のフリーキックは脅威の一言だからなあ……

で、もしその湘南を打ち破って進出してくるのであれば、それはもう列記とした強者の証。と言うか、特徴ある選手を抱え込んでいる高校は基本的にうわつよいつてイメー  
ジしか持っていないんだが。湘南下すって、結構な突破力必要だと思うし。

で、部活における練習試合が終わった後の事。

もう全員家に帰ってほとんど就寝しているだろう時間帯。

いつも通り何故か何かを買い忘れるマイマザーと、便乗して何かを頼んでくるマイ  
ファザーの命令により俺はコンビニに行くことに。まあ、まだ8時を回ろうかという時  
間なのだが（偏見）

公園を横切ろうとしたときだった。

ま、いつも通りボールを蹴る音と二人の声が聞こえてくる。

まあ二人して逢引でもしてるんですかねえ……としか思えなくなってしまうてい  
る自分にも驚きなんです。取り合えずメールで母親に少し遅れると送信して公園に  
突入。

何？ 空気を読め？

……はは、彼らだけ蹴球の試合を見に行っていたのに別段ハブられたとかそういう訳

でもないだろうけど少し根に持つてるとか。そんなんじゃないですよ？

「駆」

「え……や、ヤス！」

「ヤツホー、不知火君で良いのかな？」

「……群咲さん？」

二人しかいないと思つてたら三人もおつた！

男1で女子が2。背格好からして女子二人の方が大きいからおねシヨタかなつて一瞬変なことを考えてしまい、回れ右をして歸つてしまおうかと思つたものの、名前を呼ばれてしまったからには対応しようじゃないか。

「私の事は、気軽にマイマイって呼んでね！」

「おうマイマイ、よろしく。俺、康寛。ヤスつて呼んでね」

「ヤス、よろしくね！」

目の前で女子がキヤピキヤピ（死語）している。

正直ついてくのが精一杯なんですけどどうすれば宜しいので？

駆を見ても目を逸らされ、奈々に助けを求めても目を逸らされ。どうすれば宜しいの

で？

それからしばらく普通にサッカーの練習が始まった。



カポエイラだかなんだか知らんが、妙な体術を交えてドリブルしてくるものだから対処に困ったが、それも最初のうちだけ。一つ一つ技を見ていつてそれに対処していつたら、次第に問題無くなっていくという寸法。

俺はDFだからこういった攻め方をされるのは有難い。こんなドリブルを見たことが無いつてのも一つの理由だが。ちよつとだが、レオナルドに通じるところがあつたら収穫である。

この動きは実際この間ロシアと試合をしている時も出ていた。

特徴が何となくフェイントに影響しているというか、最後にマイマイが決めたボレーなんて完全にそんな感じの動きだった。てか、シユートと言うよりキックみたいな蹴り方だったからつい笑ってしまったが、しつかりゴールに決まってるんだから見習わなければ。

「んつとに……！ ヤス、かつたい！」

「エロい」

「んにやあ!! そ、そうやってド直球にい！」

「ほい取った」

「いやあつ!! きいい悔しいい!! もう一回」

「はいはこ」

どうしてこうなった。

マイマイのテクニクをある程度見れたら今日は終わりかなあと、後駆の必殺技の進展具合も見れば十分だと考えていたんだが。まさかここでマイマイに1対1で引つ張られることになるとは思ひもしなかった。

これは完全に両親が心配してるパターンですわ。

しかし目の前で悔しそうに顔を歪めている少女つてのも中々良いものですなあ。このためにずつと1対1のドリブルを止めているようなもの。

「もう、そろそろ疲れた……」

さすがに20分動き回って疲れたようである。

日本代表の選手を務めているだけあつて結構な俊敏さで俺を抜こうとしてきた。また、スキを見てはシュートを打とうとしていたが、例の如くすべてシャットダウン。その方が俺もマイマイも実力が向上するだろうからね。

これで俺の対応に一つも文句を言つてこないのだから間違つてないんだらう。

「俺も両親が心配してるだろうからそろそろ帰るな」

そこまで遅くなっているわけでもないからあんまり心配なんてしてないだらうが。

「うん、じゃあまたね!」

「おう」

「ヤス！」

「うん？」

今まさに帰ろうと踵を返した瞬間に呼び止められ、咄嗟に振り返ろうとした。

すると、すぐ後ろまで誰かが迫ってきている——多分マイマイだとは思うが、一体何だろうかと思つたときには何か柔らかい何かがかくつついた。

「……………」

「……………は？」

頬にキスされた。

いきなり近づいて来たから何をするのかとドキドキしてたが、これだと本当にドキドキするような事態になつてしまうのか？ 同い年なようで年上な女子にキスをされてドキツとしてしまう辺り俺もどうなんだつていう疑問もあるが、それ以上に何も考えられない。

キスの感触が柔らかかつたなあなんて。

煩惱に塗れた童貞の少年が考えそうなことですわ。

……………ほっぺ、赤くなつてないかなあ。

「じゃ、俺も帰るわ」

「え!?! 今のは!?!」

「ばいばーい！」

「ああ！ ヤスが壊れた！」

俺だつて恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ！

## 第58話

上の空である。

登校してる最中も授業を受けてる最中も、飯を箸で搦んで口に運んでいる最中も。味わうことなく嚙下してしまった。得意の数学に専念してみようかと思ってみても、予想以上に先日日の感触を思い出してしまつて集中できなかった。

ふと、頬を撫でる。

なんか、駆に見られているような気がして恥ずかしく、そのまま顎を撫でる動きをしてごまかそうとしてみる。

今まで生活してきて彼女のできたことのなかった俺だ。あんなん、どう対処して良いのか全く想像もできなかった。

事の発端は先日日のマイマイにある。

駆と奈々と4人でサツカーの練習をして、別れ際に頬にキスをしてきたマイマイ。

柔らかかった唇の感覚が今でも残っているようで、ふと右頬を撫でてしまう自分がいる。こうして考えると恋愛を初めて経験したばかりの中学生みたいな心情になつてしまつているが、事実、この世界では初めての経験だからなあ。

初心な少年がお姉さんに恋をしてしまった感覚。悪くはないが、かなり恥ずかしい想いをしてしまった。こ、この年でキス一つにドキドキするなんてっ！ 無駄にツンデレっぽく考えてみても結果は同じ。……しかし可愛かったからなあ。

数日後に日本を発つて世界を相手にサッカーをするというのに、こんな気持ちのまま試合に臨んでも良いのだろうか？ まあ、気づいたらサッカーでも普通に対応できるかもしれないってのが怖い所なんだが。

とりあえずサッカーに集中しよう。

まずは3日後に迫っている厚樹北高校との試合。

それからは日本を発つて、世界でサッカーを経験してくる。

大雑把な流れだが、大体こんな感じの流れでサッカーをすることになるだろう。まさか1年も経たないうちに日本代表になるなんて、と毎日思ってしまったているが、そろそろ自分の実力を信じるのも良いのかもしれない。

とりあえず、3日後の試合に集中するのが良いのかもしれないが。

別の高校と試合をしているビデオを見せてもらったのだが、目立った選手がいなくて高かった。これは普通に勝てるんじゃないだろうかと思うんだが、どうなんだろう。実際に選手を俺の目で見れば一発なんだが。

で、早速俺は岩城監督に呼ばれてしまった。

まあ、何を言われるのかと思いつつ、どうせスタメンかそうじゃないかの違いだろうと当たりをつけていた。

「不知火君」

「ええつと、スタメンの話ですか？」

「あつはは……そう、ですね。正直に言つて君は江ノ高で一番の得点源であり、守備においても要となる存在である不知火君を外すのはどうかと思ひますが……」

「あー……まあ、皆の成長を考えるのなら、それが一番でしょうね」

「……正直なところ、君の成長を一番に考えるのが一番だと考えてしまう自分がいるんです。それほどまでに君の実力はこのチームにとって大きな存在になっている。ですが——」

「あいや、それ以上は止めましょう」

いつになく監督の熱意がピンピンとしているが、受け止めることはできなかつた。

正直面倒くさいというのが一番先頭に立っていたのだが、それと同じくらいに思つたことが、皆が思っている以上に成長を見せている事だつた。

たつた数日間でここまで成長するのと言わんばかりの成長率である。別に俺が何かしたわけでもないんだが、マイマイのキス事案に悩まされているうちに気付いたら皆が巧くなつていたという驚愕の事実。

呆然とその様子を見ていたのだが、俺が何かしらのアドバイスをしたという。

俺にそんな記憶は無いのだが。どうしてもマイマイの事を考えてしまうというか、間近に迫ってキスをしてきた時の表情を思い返しては勝手に悶えている自分がキモいと思っっているのだが、まさか俺が……という気持ちで一杯である。

「俺がいなくても皆頑張ってくれるはずですよ。荒木先輩も駆もいませんけど、簡単に負けるような奴らじゃないと思います」

「——その通りです」

自信満々に宣言し、監督も頷いた。

次の日、変わらずマイマイの事をついつい考えてしまっているが、今日は厚樹北との試合でのスタメンが発表された。俺は控えでのスタート。荒木先輩と駆も同じようにベンチだ。残り数日残っているため、全員が練習に励んでいる。

スタメン組から3人も抜けるのだ。

その間に実力を伸ばし、発揮して結果を残せばそのままスタメンに残れるかもしれないからなあ。全力で頑張ってもらいたい。

この人生初めての飛行機は海外へ出発する便。

だから急いでパスポートの発行やら海外で使える様な日用品を買いそろえ、新しいキャリアバッグを買ってもらって詰め込んだり。大分両親にお世話になってしまっ



申し訳なくなっていたのだが、何気に嬉しそうに買い物をしている母さん。そわそわしながら海外の話をする父さんの様子を見てるとこれでも良いかと納得している。

そしてふとしたタイミングで思い出すマイマイの存在感。

家で思わず「うがあ！」と叫んで母さんに心配されてしまう始末。

自分で言うのもなんだが、初心過ぎやしないかね？

——で、厚樹北との試合日。

俺の代わりにスタメンとして出場した海王寺先輩が目覚ましい活躍を見せ、相手の攻撃をしっかりと防いでいる間に堀川先輩が得意のスライディングでボールを奪取。そのまま反撃に繋げていた。

厚樹北も実力は高い選手で構成されているのだが、江ノ高の攻撃力・守備力が完全に上回っていた感じだ。前半だけで江ノ高のシュート数は8本。3得点の猛攻を見せ、厚樹北は1本しかシュートを打つことはできなかった。それも、李先輩がしっかりとセービングをし、無失点で後半へ。

後半も実力の差を見せつける結果に。

いやあ……俺、駆、荒木先輩の3人は一切出場することなく厚樹北を降してしまった。

一応、交代枠は全部使いきったものの、調子確かめるように選手を出していった監督には敬意を表したい。なにせ、向こうの選手たちがかなり悔しそうに表情を歪めてい

たのを見てしまったから。

次の試合相手がどっちになるのか分かっていないが、取りあえず今日の試合を通しての感想。試合を観戦するだけの楽なお仕事ですわ。チームの攻めの中心になっていた織田先輩とマコ先輩はさすがと言ったところ。荒木先輩も不敵な笑みを浮かべて見ていたのだからかなり安心して試合運びを見ていたに違いない。

……まあ、何というか。一方的な試合内容でした。

結果を見れば5対0。普段だったら男が泣いてのを見てもむさ苦しいと言うだけなのだが、試合が終わって崩れ落ちるように泣き出した厚樹北の選手たちを見て何も言えなかった。実際に俺が試合に出ていればもう少し楽な気持ちだったろうが、完全に客観的な立場になってしまったからこんな気持ちを抱いてしまったんだろう。

いつもこんな試合してたかな（白目）

とりあえず、安心して日本代表戦に臨めることを良しとしよう。

## 第59話

さて、出発の日である。

両親揃って空港まで送ってくれたのだが、頑張つてとか、気張つて来いよとか激励の言葉をいただいたのは良いのだが。その後にはまじまじと2人の愛を見せつけられたのだった。つまり、衆人環視の場で抱き合う2人の様子に、何とか無関係を装つてその場を離れる事に専念したのだった。

で、集合時間までには全員が集合完了し、最後に姿を現した桜井監督の号令のもと、飛行機に乗り込んだ。しかし……長距離の飛行だから大型。離着陸の時だけ微かに振動するものの、穏やかな時間を過ごすことができた。

どれぐらい時差があるか事前に調べてきていたため、飛行機の中で就寝。この体になつてから睡眠不足に悩まされることは無くなったし、思った通りの時間に寝れるし想定通りの時間に目を覚ますこともできるようになった。眠気に悩まされることがなくなつて喜ばしいはずなんだが、布団の中で目を覚ます度に残念な気持ちになるのはなんでだろうか。

到着。

と、すぐに日本の報道陣の熱い出迎えを受けることになった。

昔U-16に出場したことのある荒木先輩や、それ以外にも有名な高校に所属している選手が取材陣に囲まれ、なんてことは無く。その前に監督があつての顔つきをさらに厳しくして取材陣を睨み付けて『選手の体調をお考え下さい。それからの取材でしたら、選手との相談の上受け付けようと思います』と一喝していたのだから驚きだ。

もつと奔放な人だとばかり思っていたが。

……なんて思っていたが、後から聞いた話になるが、中には日本人の事を良く思っていない人もいるらしく、そういう人がいつ何をするか分からないがための行動だったらしい。よつぼどの事が起こることのない日本だ。平和ボケしてる、なんて話を耳にしていたが……まさか自分がそれを実感するような日が来るなんてなあ。

基本的に鉄壁のこの肉体を超えられるものはいるかっ！

なんて厨二な事言ったところで怒られるだけだろうし、今日からしばらくの間はホテルでジツとしてるでしょう。

——2日間の現地練習。

今回の大会を勝ち進んでいくと、日本のライバルである韓国と当たるだろうと監督が言っていた。まずは予選リーグを勝ち進む事が重要なわけで、対戦国はベトナム・キルギス・オーストラリアといった面々。

日本を合わせ4チームの中で上位2チームに入った国が決勝トーナメントに進出することができるといふ寸法だ。事前情報ではそこまで強い相手ではないとのことだが、それでも油断することなく試合に挑みたい。

もしそれで負けてしまったらただの慢心。もしくは単純に運が悪かったか、となるが……そういつた運も絡んでくるから面白いスポーツなんだが。

「行ったー！」

「しゃあっ!!」

「ぐっ!?!」

当たり前のように2日間は練習と休息に時間を費やした。

前回の練習だけでは見ることでできなかった個人的な動きを見ることができて最高の時間を過ごすことができた。中でも同じDFの島選手の動きが一番の収穫だ。前も思ったことだが、FWのズボンに手を掛けて動きを止めることで審判からファールを喰らうことなく相手を止めることができるのだから最高だ。

攻められてる時は、大抵の場合大人数で攻め込まれている。

そこをカウンターすることができれば得点の機会を増やす事が出来るんだから良い事尽くし。後は上手く相手ゴールを奪う事ができれば最高の戦術になる。

監督もそれを理解しているだろうが……実戦でできるかどうかには掛かっている。

まあ、大丈夫だろうが。

「しっかし……お前、いつ合気道なんて習ったんだよ」

「いえ、島さんの動きを参考にして」

「はあ？ ……前から思ってたんだが、俺の動き、”見て”たのか？」

「まあ、練習の時から見てましたね。同じDFとして使える技術を盗んでいこうかなと」

「……はああ」

何故か盛大に溜息を吐かれた。

彼は同じDFとして活躍する島選手。合気道の達人らしく、DFの動きとして合気道の技術を取り込んでいた。それも、審判に見えない位置で腕を使って相手の動きを阻害する事が出来るんだから、俺も使えないかなと思っていた。

で、練習中は基本的に島さんの動きを見続けていた。

そのおかげもあってか、少しは合気道の動きを出来るようになった。

だが、そんな事する必要もなく肉体でガツチリDFすることができていた。だからあまり島さんの動きをする機会は無かったのだが、今回の練習で初めて披露したわけだ。日本人よりもフィジカル的に優れているであろう外国人を相手にするわけだから、使える技術は使っていこうかなと考えたわけだ。

「技術を盗むって……程度があるだろうが」

「え？ まあ、見たらできるんで」

「うっそだろ!？」

ハハハ。

そんな事言われても分からんよ。

練習では良い感じに連携が取れるようになってきた日本代表勢。

特に世良と荒木先輩の二人の動きが切れに切れてた。今までの動きの中でも特に足元の動きが細かく、1秒間に2〜3回のボールタッチを魅せていた。いやあ、良い動きを見させてもらいましたわ。

世良は荒木先輩のように魅せるようなフェイントをするわけではないが、一定の場所に留まってパスやフェイント、視線で動作を予期させるような動きをしてからのパスなど、相手の考えを読んでいるかのような活躍ぶりだった。

——予選リーグも、世良と荒木先輩の独壇場だった。

まだ動きの硬い味方FWに代わって荒木先輩がハットトリックを達成。世良は真ん中で荒木先輩にパスを出したり、前線へボールを出し、攻撃の手を緩めることなく相手を追い詰めていた。

おかげで攻められること自体が少なく、試合中は楽をさせてもらった。

DFは右サイドに俺、左サイドに島さんが入っている。江ノ高と同じような感じの采

配。攻めに比重を置いているような感じだが、桜井監督の人となりを考えてと納得できる。

フリーキックでは俺に蹴らせてもらい、1点を奪っている。

荒木先輩が蹴れば良いと思うのだが、何故か監督から俺が指名される。指名されたら蹴るしかないのだが、上手い具合にゴールに吸い込まれてくれるボールを見ると嬉しい気持ちになるのは正直なところだ。

「えー、7対0の大勝。しかも得点シーン以外にもファンタジックな見せ場が多く、U-16の予選リーグとしては異例の記者会見となったわけですが」

で、何故か俺と荒木先輩。鬼丸の3人が記者会見の的になっていた。

荒木先輩はハットトリックを決め、鬼丸は攻めの要となつて多くの見せ場を作つていたから納得なんだが、何故俺までここに呼ばれてしまったんだろうか。しかも荒木先輩はこの雰囲気慣れていいのか携帯を見ている始末。

どないせいっちゅうねん。

俺よりも駆の方が多く走り回ってましたよ……と小声で言つてやりたくなつた。

「それでは、DFとして無失点の一助となり、フリーキックでは豪快な得点を決めてくれた不知火くん。今大会の目標は何かありますか？」

「えつと……今回の試合については味方が大いに活躍してくれました。故に、僕は特に



何もすることが無かったなと言うのが正直なところです。それで、今大会の目標は優勝です」

「ほう……では、日本はこの大会に優勝することができると？」

「はい。しっかり守ってしっかり攻める。それができるチームが勝てると考えています。このチームは、優勝します」

「ほほう。大きく出ましたね！ では、次は——」

何とか自分へのインタビュを乗り切ることができた。

ホツとしている間に荒木先輩が発言。ずっと見ていた携帯のメールの内容は、江ノ高が大会を勝ち進んだという事実だった。携帯をずっと見ていたという態度が一転、チームの事を想う選手の一人になった瞬間だった。

それも、この大会を優勝して日本に帰還するという自信も見せるパフォーマンスまで。

……まあ、頑張るしかないかあ。

## 第60話

予選を順調に勝ち進んで本戦リーグ。

日本を離れて早一か月が経つんじゃないかと思うものの、あくまでそれは体感時間。数週間も経ってないが、早くもホームシックを感じているんだろうか。

なんていうものの、実際にはここでの生活に何ら不満があるわけではない。

あると言えば、日本でできたことができなくなったという事だろうか。当たり前だが、さすがにテレビゲームの類は持つてきていけないし、暇つぶしになるような物はトランプやらボードゲームと言った昔ながらの物に限られていた。

それでも楽しく遊べているのは偏にチームメートの雰囲気が良いからだろう。

中には世良とか世良とか、偏屈の塊みたいな男もいるが、それ以外のメンバーは基本的に気の良い奴らが多い。適当に過ごしているだけでも有意義に過ごしているから特に問題は無かったりする。

まあ……前世の取り柄の一つで、英語を話すことができたので会話に困ることは無かったが、それが原因で俺が通訳みたいな事をするはめになるとは思っても無かった。

「いやあ、まさか不知火が英語話せるなんてな」

「まあ、下手の横好きと言いますか」

「それにしたって流暢に話してたけどなあ」

何故か英語が話せるだけで話題の人になってしまふ俺氏。

まあ、基本的に高校生で英語を普通に話せるつても珍しいか。どうしても注目的になつてしまふ。前世でも高校生で満足に英語を話せる奴はいなかったからしようがないだろう。しかし、俺たちの目的はあくまでサッカーをしに来たのであつて、俺が英語を話すのを見るため聞くための日程では無い事だけは強調しておこう。

決勝リーグと言え、今まで戦つた3チームの内1つは戦うかもしれない。

というのも、決勝リーグで戦う相手は予選リーグ4組のうち上位2チームになつた国々だ。つまり、4×2で8チームが決勝リーグに残っている。初戦から準々決勝、準決勝、決勝と3試合を行う事になるのだが、それに優勝するためにすべての国が総力を挙げて応援をする事態になつている。

——つまり、我が国を一番に！

と考える輩も相応に存在するという事で、基本的にホテルの外には出ないようにと日本選手に厳命されているのだつた。ま、数週間しかない外国。それも命の危険性を訴えられれば、お土産を期待しているであろう子供も大人もすべからず黙り込むだろう。

そこで一目を置かれてしまつたのが俺、というわけだ。

基本的に何も無ければ家を出ない。何もしない。それどころか動きたいとも思わない。と言うのが俺の信条の一つだったわけだけれども、高校生としても少し頑張ろうと思っているからこそ動いている感じだ。逆に言えばそれが無ければこんな事はしないのだが。

決勝リーグを順調に勝ち進んでいく最中、日本は無失点のまま勝ち進んでいた。

それでいて毎試合2点以上の得点を決めていくんだから世界中で話題になっていたらしい。中でも得点源になっていく荒木先輩は話題の的になっていた。そして何故か俺も話に挙げられているのも気になるところ。

別に俺としては普通に試合をしているだけなのだが……テレビや新聞で話題に上がっているのをホテルに宿泊している人から聞いたのだった。というか、最近になって握手やらサインやら求められるようになった。握手ですら気恥ずかしいが、サインなんて書いたことも無かったから苦労した。断ろうものなら悲しそうな表情をされるんだから書かざるを得ない状況に陥ってしまうのだが。

で、一気に決勝まで駆け上がった日本チーム。

相手は2失点で決勝まで勝ち上がってきた韓国。守備力、攻撃力ともに決勝での相手にふさわしいと言わんばかりだが、宿泊しているホテルで取つてあるスポーツ新聞には日本優勢と書いてあった。

韓国側には江ノ高を苦しめたロングスローをしてきた金の姿もあったが、何よりもアジアのジダンと呼ばれる朴鐘玄パクジョンヒョンが一番の強敵であることは間違いなかった。それ以外にも機動力、守備力の高そうな選手や決定力のありそうな選手もいそうだったが、この2人を基本的に注意しておけば問題ないだろう。

「しかし、金の奴……スタメンじゃないんだな」

「まあ、交代で入ってきたときスローインで投げってくる時は困りますけど、金以外にも戦力がいるってことじゃないですか？」

「なるほど。確かに、あいつがスローインの時に入ってくるってのは困りもんだな……」  
なんて話を荒木先輩や駆としていたが、その事を桜井監督に喋るとそれなりに対応が取れるようにしようと全員で情報を共有することに。30メートル以上のスローインは驚異的だと言うのが認知されているようで、DFの俺にしても仕事量が減る事を考えると非常にありがたい対応だった。

『さあ、やってまいりました決勝戦！ 日本対韓国の試合をお送りします！ さて、今回日本代表に選出されているメンバーの中で特に注目すべき選手はMFの荒木選手でしょう。トリッキーなフェイントを駆使して韓国代表の選手を翻弄してほしいところです！ そして、DFの要と言えどももちろんこの人不知火選手っ！ 日本が未だに無失点でこの大会を勝ち進むことができてるのはこの選手によるところが大きいでしょ

う！』

どんな盛大な説明の仕方なんだ。

どうして俺をそんなに持ち上げてしまうんだろうか。

それで俺を標的に攻められても困るんだが、それだけの評価をされているという事なんだろう。出来ればゲームに登場することになったら高めの能力評価をしてほしいと願望だけは高く持つておこう。

——キックオフ。

韓国側からのキックオフで始まったこの試合。無失点の日本に続いての低い失点率を誇っている韓国は、序盤は様子見でパス回しでもしてくるのかと思いきや、前半開始早々から強気の攻めを仕掛けてきた。

仕掛けられる俺たちDFの気持ちを考えてほしい所だが、しょうがない。

予想以上に細かいパス繋ぎでFW陣を翻弄し、人数が多くなってくるとサイドチェンジをして横に縦にと揺さぶってこようとしてくる。そして、その動きにつられるように前線に動いてしまったちよつとした穴に、韓国選手がパスを流し込み、一気呵成に攻撃を仕掛けてきた。

で、その攻撃のサイドにいたのは俺だった。

味方も、まさか俺がここにいるからちよつと前にも大丈夫じゃね？　なんて考え

てなかったらどうな？ それだったら俺に過剰労働と責務の押し付けとしてジュース一本の罰則を設けたいところ。

『さあつ、早速韓国のエースストライカー洪正秀ホンジュンスと日本きつてのDF、不知火康寛のマツチアツプだあ！ ここを抜かれてしまおうと一気に不利な状態になつてしまおうが、果たして!?!』

実際に良いように言われるが、今は目の前の選手に集中しよう。

体格はそこまで大きくない。どころか、江ノ高の薫より少し大きいくらいだろうか。それでエースの看板を背負っていられるのだから凄まじい。確かに、その能力値は薫よりもかなり高い値でまとまっている。薫もまだまだ成長途中ではあるものの、同じ年ぐらいでここまでの差が出来るものだろうか。

……いや、俺はバグみたいな存在だから何も言えない。

鋭い視線で俺を睨み付けてくるジュンス。ドリブルで抜こうとしているのか、それとも味方が上がるのを待っているのか。まあ、どちらにせよ俺にしてみればここで守備している他出来る事は無いのだが。

ジュンスの全体を隈なく見つめる。

一つの動きに惑わされることが無いよう、全体を一つの動きとして見つめるように。両の瞳で全体を見ることが出来るように。すぐに、視界に映っているもの全てが背景の

ように、一枚の写真のように平面になった。

ただひたすら、引き伸ばされたように時間が、体感速度が遅く感じるまで意識を全周に行き渡らせる。この時間、気付けば口元が開いている感覚がするのが難点だ。気でもやったように口を開いているもんだからテレビ映りは悪いだろうなあ……ヤバイ（白目）

「……？！」  
クツッ

『洪正秀、少し遅れて上がってきたMFにパスを出した！　ここは慎重に動きたいという事でしょうか！』

一切突撃をかまして来ようという感じを出さなかったなあ……

気付けば後ろを向いてボールを下げていたジュンスの様子を見ると、悪態をつくように苛立たし気な表情を見せてくれた。それに対してニコツとアルカイツクスマイルでも浮かべてやろうかと思つたが、時と場合を考えてやめておいた。

それが原因で、本当の意味で怪我するレベルの故意による事故を未然に防ぐことができるんだから。日本人として最低限のマナーは守らないとなあ。

それからというもの、ジュンスにボールは渡るものの、俺が近づくとすぐにボールを味方にパスを出すという結果になってしまう。彼が自分から突撃をしてくることは一切なかったのだつた。



……俺的には別にそれが楽で良いんだが、それほどまでに避けられてしまう原因があるのだろうかと思ってしまったのだった。

## 第61話

さて、前半が終わったわけだが。

日本と韓国は互いに無得点の状態で前半を折り返したのだった。ちなみに俺が守ってたサイドについては、ボールがあまり来なかった。途中から味方もそれに気づいてい  
たのか、俺に構わず普通に他の場所を守る動きをしていて驚かされたが。

俺が動く、それに合わせてパスを出して徹底的にボールを奪われないようにするの  
だから驚いた。と言うか、俺ばかり警戒されている感じが凄い。そ、そこまで警戒され  
るようなことをした覚えはないでござんす（震え声）

まるで俺を避けるようにパスを回していく。

ボールを奪われないようポゼッション（ボールを支配・維持すること）しようとする  
動きは確かに今まで試合してきた国の中で一番の動きだった。特に、ここまで俺の周囲  
を避ける様な動きをしてくるチームも無かったから、すごく新鮮に感じてしまう。

……逆に、それが導火線に火をつけてしまったらしく荒木先輩の情熱がパトスを燃や  
したように大変変態な事に。とまあ、言葉遣いに変になつてしまうぐらいキレッキレの  
フエイントで韓国側のDFを惑わしていた。一度の切り替えしだけでなく、またぎやエ

ラシコを組み合わせたフェイントを使ってパスを出したり、相手の意表をつくような動きをしていたのが、人数をかけてDFをしていた韓国側は辛くも日本の猛攻を防いだのだった。

——前半の動きはかなり良かった。

と、桜井監督は言っていたが、内容には納得できてなさそうな表情をしていた。この顔は練習中にもしていた表情だ。動きは良くても点数を取れてなかった時、大体こんな顔をしているのをみんなは知っていたからか、先の言葉を掛けられた俺たちの中で嬉しそうな表情をしている奴は一人もいなかった。

「良いか！ あれだけ押ししても決められないのは、お前らの気持ちがあいつらに負けるからなんだよっ！ 全身全霊かけて、あいつらに一泡吹かせに行くぞお!!」

『オオツ!!』

後半も同じ布陣。

前半と同じ勢いで攻める事が出来ればシュートを決める事が出来るだろうと、監督は言っていた。それと同時に、フリーキックは俺が蹴ると限定されたのも大きかった。絶対荒木先輩が不満そうに顔を歪めているだろうと思ひ、恐る恐る様子を窺ってみたもの……あまりそんな様子を見受けることはできなかつた。

……これこそ嵐の前の静けさだろうか。

駆に当たることも無く前を見据える先輩の様子を見て、そう思ってしまうのかもしれない。

世良が蹴るか先輩が蹴るか。っていう世界の中に俺みたいなサッカーを始めてそんなに経つてない、それこそぼつと出の後輩が指名されて嫌だと思ふかと。

そして後半。

前半、ベンチで試合の動向を見守っていた駆がFWとして投入されることになった。

ちなみに、全国から実力者を集っているこの面子の中で体格も小さく、突出した能力と言えばボールへの嗅覚。それなりのフェイントで食い込むことができたような感じの駆だが、世界を相手に試合をこなしてきたことで結構巧くなっていた。

日本、それも高校サッカーだけでは経験することのできない雰囲気。

それぞれの国からやってきて、国を背負ってサッカーに挑んでいるという気迫。

中には強引にファールを狙って来ようとする奴もいたが、彼らの気迫を生で受け止めていた駆が、このメンバーの中で一番の伸びを見せていた。

……ま、それも能力値を見ることができる意味不明な特技を持つてる俺だからわかる事なんだが。もしかすれば監督もそれを感じ取っているかもしれない。だからこそここでの起用、つて事なんだろうが。

『さあつ！ 後半戦のスタートです！ 日本はFWの選手を入れ替えて来たようです

ね。日本代表として活躍を見せてきた逢沢傑選手の実の弟、逢沢駆選手だあっ!!」

実況エ……事前に紹介文の許可を受けたんだろうか。

さすがにあの事故から年月は経ってるし、傑さんの弟ってだけで結構な注目を浴びても可笑しくないだろうから、ここで慣れることができればとは思う。が、もう少しプライベートと言うか、個人情報について留意してほしい。

だがまあ……変わりようなない真実だし、どんどんと注目度が上がっていくとどうしたって目につく項目だ。それも、駆がこれからサッカーを続けていくというのなら嫌でもくつついてくる内容だけに、慣れるしかないとアドバイスすることしか出来ないのも確かなことだった。

日本のキックオフ。

今大会を通してそれなりに得点を決めている駆だが、韓国側はそこまで駆を警戒していないようだった。ちなみに、FWのジュンスはずっと俺の事を警戒していてボールを持つてもドリブルで突っ込んできたことは一回も無い。

……何故そこまで俺を警戒してるんだ（白目）

確かに、俺の横を抜こうものなら何とかしてでも止めに掛かるけれども。それでも一回ぐらいはチャレンジしてみるっていう精神で挑んできても良いんじゃない？ 最低でもアジアのスポーツに関心のある人たちはこの試合を見ているわけだから、強い攻め

気で魅せようって思わんのかね？

まあ……無理には言わんが。

と、言うわけで、何とかして相手を突っ込ませるために簡単な挑発を試みよう。いつだったか挑発を試みたら突っ込んでできてくれたことがあったような気もするし、取りあえず審判が見てない所で分かりにくい挑発をば。

「……はっ」

「……っ！」

日本の攻撃が遮られ、カウンター攻撃を仕掛けてきた韓国。口角を吊り上げ、目の前のジュンスだけに見えるように嘲笑をしてみたのだが、それなりに効果があった感じだ。

前半は基本的に無表情、というか、俺の所にまずあまり攻めて来なかったから面と面合わせることもなかったのだが。ほんのちよつとの嘲笑を見落とさなかったジュンスは、若い感情を爆発させたかのようにボールを蹴り出してきた。

向こうの監督が手を振り上げている様子が端に見えた。

フェイント、またぎで左右に揺さぶりながらじりじりと前進してくる。足を延ばしてもギリギリ届かない所でボールをキープしてるのがさすがと言ったところ。それでも強引に俺が斬り込もうとすると、足首を鋭く動かし距離を取って様子を見てくる始末。

冷静なのか熱くなってるのかわからないが、言えることが一つだけ。最初ボールを受け取った位置からあまり前に進んでいないというところだ。

「……………くっ！」

最終的には後ろから迫っていた味方にバックパス。

大分日本サイドに敵味方が集まってきてるし、それを考慮して立て直しを図ろうとしたのだろうか、少しパスが長いなあ……

「よしっ！」

「くそったれ??!!」

『おおっと!?』 FWの逢沢選手がここまで下がってきていた！ しかしながら今のパスカットは韓国側も想像していなかったでしょう！ そこから、バックパスで不知火選手へ。そして日本の攻めの要と言えばこの人！ 荒木選手にボールが渡ったぞおっ!!』

自陣に戻ろうとしたジュンスは、ほんの少しだけこつちを見ては悔しそうに顔を歪めていた。ホント、さつきから悔しそうな表情しか見れてないんだが、もつと楽しそうにしてた方が人生楽しいぞ？（煽り）

日本代表の攻めはシンプルだ。いつも通り、荒木先輩と世良を中心にして攻め上がるスタイル。守備的MFには佐伯もいるし、攻撃陣のための布陣は完璧に整っている。

特に荒木先輩と駆のラインが凄く、裏に抜け出そうとする駆に合わせて多種多様なパ

スで韓国DF陣を翻弄する2人の姿に実況も興奮気味に会場を盛り上げている。

——が、得点には至らない。

荒木先輩と世良がミドルから狙うとGKがそれを阻み、駆が飛び出そうとする最後の最後でしつかりとGKとDFが対応してくる。特に、林東国イムドンクの存在が大きかった。

『消防士』の異名を持つているらしい彼は、フィジカルも強い上に素早い動きでシュートを阻む動きをしてくる。間合いの取り方が何といても巧い。シュートを打とうとするときにはしつかりとプレッシャーを仕掛けてくるものだから、日本代表の選手はゴールを決めきれないでいた。

でもまあ、俺みたいに厨二病みたいな異名じゃなくて良かったなあ。消防士……日のない所に煙は立たないってのを表してるんだらうっ!? なんだよ鉄壁のDFって。一回でも抜かれたときの皆のがっかりした表情を見るかもしれないという状況に追い込んで何が楽しいんだ!

……とまあ、愚痴をぶつけてみるが、日本対韓国の試合は全く動いてない。

駆が何とか動き回ってDFを攪乱しようとしているが、そこまで効果が出ているように見られない。ミドルもGKのナイスセーブで止められてるし。このまま千日手で試合終わったりしないよなあ……

なんて考えていた矢先の事だった。



——ピイイイツ!!

『おおつと!?』 韓国、これは痛い位置でのファールですなえ! しかし、ここで止めていなければゴールが脅かされる展開になっていたでしょう! ……おつと、さすがに足に行っていた事もあってかイエローカードが出ていますね。さて、このフリーキックのチャンス! 日本は誰をキッカーとしてくるでしょうか!?!』

そんな実況の声を効きながら俺は一步、また一步と歩みを進めていく。

まさか俺がフリーキックを蹴ろうとは思っても無いだろうが、残念ながら俺なのだ。残念、というか……普通に考えたら軸として動いている荒木先輩に蹴って欲しいんだが。

『おつと! ……ここで不知火選手がボールの前まで来ました! これは……? ……?』 なんと不知火選手、フリーキックはすべて決めているという圧倒的な決定力を持っているのとです! 韓国の選手にしてみればまさか、と言った気持ちでしょう!』

だから……俺をそこまで持ち上げるのは止めてくれと何回も言ってるじゃないか!

## 第62話

さて、フリーキックを蹴ることになったわけだが。

はてさて、どんなシュートを蹴ろうか悩みどころだ。ここで俺がシュートを決めれば先制点になるわけだから、当然日本が有利に試合を運ぶことができるようになる。しかも時間帯も今は後半戦に突入しているわけだし。

左サイドからのシュート。

距離は30メートル弱。壁の枚数は5枚。GKが味方に指示を出して空白の空間を埋めようとしていた。そして、韓国のDF陣も巧い具合に穴を埋める動きをしていた。

日本のFW陣も何とかポジジョンを確保しようとしているが、相手のDFに阻まれ巧く前に出れないように見受けられる。

『さあ、不知火選手！ 直接狙う事ができる位置でのキックとなりますが、ダイレクトに狙うか！ それとも味方にボールを上げるのか！』

……俯瞰視点で見下ろして、一人だけ違う動きをしている味方を発見。

皆が攻めてる中で一人違う行動をしていると何してんだ！ って言われそうなんだが、その一人ってのが駆なのが面白い。どうしても笑ってしまいそうになって耐える

が、少しでも空気漏れしてしまった。

「……………」

一番近くにいた韓国の選手に見られてしまったようで、凄惨な形で俺を睨み付けてきた。いきなりの表情に驚いてしまったが、何故俺がそんな顔で見られなければいけないのか（憤慨）

俺が悪いのは自覚している。

『走り出したっ！ さあ、不知火選手…………… 蹴ったあつ!!』

ボールを蹴る右足に神経を集中する。

腰をひねり、左腕を振り下ろす事で威力を増す。が、距離的にそこまでの威力は求めてない。だからこそ少し力を抜くようにして足を振りぬく。想像していた軌道に沿って飛んでいくボールの行方を追う。

——直感に従っていた。

駆の姿を捉えた瞬間に、確信染みたものを感じ取ってしまったから、そう動かなくて、なんて強迫観念にも似た感覚が襲い掛かってきたのだった。それこそ、こう動くのが当然と言わんばかりに自然と体が動いていた。

『ボールが曲線を描いて、ゴールに向かわず……………これは味方へのパスだ！ しかし、そこには誰も走り込んでいない！ これはミスキックかあ!? いや、これは!』

「い……っけええっ!!」

味方が誰一人として走り込んでいないスペース。

当然、韓国側のDFも反応が遅れているし、味方からも「何でだ」という視線を送られるがしやうがないんや。放送枠の人は全体を見下ろせるはずなんだが……

DFラインの裏を取る動きをしながら一人相手の最終ラインを飛び出した駆。それを逆サイドの選手が手を挙げてオフサイドの主張をしているが、ギリギリで飛び出した駆の動きを正しく見ていた審判は、旗を上げることなく試合の動向を見守っていた。

白線。

力強く蹴り出されたボールは真っ直ぐに芝生の上を飛んでいく。

相手のDF陣は一切反応できていない。唯一、ゴール前を守っていたGKだけが反応することができ、横っ飛びでボールを弾き出そうとする。が、直線を描くようにネットに飛来するボールを弾ききる事は出来ず、逆にGKの手を弾くようにゴール内を転々と転がるのだった。

『ゴ、ゴオオオオル!! 日本、後半20分、先制点です! 誰も走り込んでいないと思っていた所に逢沢選手が走り込んでいました! いやあ、それにしても見事な状況判断です! パスを上げた不知火選手がしっかりと全体を見渡すことができていたからこそその軌道! それにしても逢沢選手も良い所に走り込んでいましたねえ』

いやあ、パス一本でゴールを決めることができたつてのは日本にとっては大きい。

前半を通して韓国は何故か俺のいるサイドを攻めて来ようとしなない。例えば俺からボールを奪いに行つたとしても大きくサイドチェンジしたりと、大分制限される様な形の攻め方をしているから、これからも大丈夫だと思うが。

さすがに失点を許してしまつたからには、さすがに攻めに転じると思つていたのだが……

『試合終了おー！ 日本がこの大会を制しました！ 優勝です!! 韓国もよく攻めてはいましたが、日本の守護神とも呼ぶべき不知火選手の前には決定機を演出することもできないままでした！』そして、優勝した日本は何といつても荒木選手の活躍が大きかつたでしょう！ 韓国との試合においても1点、得点を決めていることも含め、この大会の得点王に躍り出ました!』

さすが、の一言である。

アジア大会で得点王とか意味が分からん。それが高校の先輩だつてんだから世の中分らないものだ。しかも、数か月前の先輩の姿を知っている人からしてみれば凄い事なんじゃないだろうか？

だつて、あのアザラシの物まねをネタとしてやって、見た目通り過ぎて周りの皆が納得して、その上で笑われていた人が、この広いアジアの中においてサッカーで得点王に

なったのだから。

『そして、今大会において多大な活躍を見せてくれた不知火選手がMVPに選出されました!』

あつれー?

何故か表彰台みたいな台に歩かされ、テレビカメラを近くまで寄せられてマイクを持った女性が近づいてきた。当たり障りのない質問……この大会を通して一番うれしかったこととか、今まで応援してくれた人たちにどんな言葉を言いたいですかとか。なんか、そんな質問ばかりされて適当に終わってしまった。

あれえ……なんで俺がここに立ってるんですかね。

思い返してみても特にそんな……しかも、韓国との試合じゃ完全に避けられてたせいもある。全然動いてないんだが。でもまあ、1アシストしているわけだし、俺がこの試合で活躍したと思われても良いのかもしれないが、今回に関しては先制点を決めた駆とかにも焦点を当てるべきじゃない? ねえ、俺ばかりインタビューしないで他の選手にも行きませんか? あ、行かないですかそうですか……

助けて!

しかし、そんな視線を日本選手のいるベンチに送っても、荒木先輩なんかはニマニマと笑みを浮かべて俺の様子を見ているだけで、助けてやろうなんて気持ちすら持ってな

い。いつもの荒木先輩だった。

どうせ後である人もインタビューされることになるんだろうが……何とも恨めしい気持ちになってしまう。

——翌日、ホテルにあつたスポーツ新聞には日本サッカー代表選手の集合写真と、俺がインタビューしている最中の様子、そして駆に上げたフリーキックの切り取り写真がでかかど張り出されているのだった。

## 第63話

さて、韓国との決勝戦を終え、荷造りを終えた俺たち日本代表組は日本に帰還することになった。俺たちが海外で試合をしている最中も江ノ高サッカー部は選手権での試合をしているところだった。

俺、荒木先輩、駆の3人がスタメンから外れてしまったものの、織田先輩やマコ先輩を筆頭に何とか勝ち進んでいるらしい。そこで俺たち3人が帰還すれば、戦力が戻るだけでなく次の試合に勝ち進むための戦力になるわけだ。

まあ、さすがに日本に戻ってすぐに試合に出されることにはならないだろうが。身体に疲れが溜まつてる状態で、岩城監督が俺たちを試合に出すとは思えないしな。で、日本に帰る当日になったのだが。

もう少して日本に帰るための飛行機の便が出発するという時間帯。なのに、集合時間に間に合うかどうかわからなくなりそうな時間にホテルのショッピングフロアに来ている荒木先輩。そして、英語が話せるという理由だけで連れ去られてしまった俺は、フロア内を探索しているのだった。

「荒木さあん……そろそろ行かないと遅れますよ？」



「まだお袋のモン買ってねーんだよ。頼まれてたバッグ買ってかねーとぶつ殺されちゃう」

「いや、まあ……それは分かりますけど。日本でも通販で買えないもんなんですか？」

「ああ、ここで逃しちまったらぜってー絞め上げられる……っ！」

嫌そうに表情を歪める荒木先輩の横顔を見ながら溜息を吐くことしか出来なかった。

最低でもここから走って間に合う時間までには出発したいもんだが。なんて考えていると、すぐ近くに見知った顔を見つけてしまった。相手はまだこっちには気づいてないし、同じように荒木先輩も気づいていない様子。

向こうもバッグを探しに来たのか、陳列されているバッグを上から下へ、横に移動しながら商品を見ているようだった。ありやあ、バッグを見定めるといふよりもお目当ての商品を探しているような感じだ。

右にスライドする荒木先輩に、左にスライドするその選手。

「えーと……あつたこれだ！」

そして、お目当てのバッグを見つけた荒木先輩が手を伸ばしたとき、ほぼ同じタイミングで横から手を伸ばした選手——朴鐘玄の存在に気が付いたのだった。

「……………」

パクパクと口を開いたり閉じたり。

鯉も驚きの開閉を見せつけてくれる荒木先輩はさておき、折角お目当てのバッグを見つけたのだから会計を済ませてもらいたいところだ。が、バッグを離そうとしない所を見るに、朴鐘玄がどういう反応をするか……

しかし……今俺たちに気付いただろうに、荒木先輩じゃなくて俺を見てくるのは止めてもらえないだろうか。

「お、おい不知火！ お前、韓国語話せたりしないのか!？」

「いや、流石に韓国語は手を付けてないんで」

「ぐがあああつ!!」

救いの手は無かつたんや（絶望）

どうしたものかと頭を抱えそうになったとき、第三者からその手は差し伸べられたのだった。

「よお、荒木に不知火じゃねえか」

「あ、金じゃねえか！ ちよーど良かった。通訳してくれや。このバッグ、お袋に頼まれたヤツだから譲ってくれって」

少し前に朴鐘玄の事を、確かに頭はジダンだとか悪口を言つては金に通訳されてしまっただけあつて大分居心地悪そうにしてるけど……正直、あんなに座りの悪い状態になつて荒木先輩を見るのが初めてだった。どうでも良い事だが、ゾクゾクするという

か、もつとからかいたくなる表情だった。

「……………いつもお前と同じだよ」

「はあっ!? こつちはもう飛行機までの時間ねえんだっての!」

韓国語は分からないため力になれない。

金がいなかったらこのままずっと取り合いになってたかもしれないことを考えると、凄惨な怖い。さすがに時間が迫ってきてる事は理解してると思うし、多分大丈夫だとは思わうが……

と、内心焦りつつ3人の様子を見守っていたのだが、こちらに時間がないと通訳してくれた金のおかげか、朴鐘玄がバッグを掴んでいた手を放したのだった。あとは荒木先輩がバッグを会計して終わり。早く集合場所に行かないと、と思った矢先の事だった。

「おわっ! つてええ……………てめえ! 急に放してんじゃ…………」

『Shit!!』

——ドンドン!

二回の発砲音。

目の前で黒人系の男性が胸元から銃を取り出し、上へ向けて弾を撃つたのだった。

その瞬間、何が起きたのか分からなかった周囲の人たちは何事かとこちらに視線を向けていたが、原因が銃声であると理解した瞬間に広がっていくどよめき、悲鳴。

遠くの人は何だ何だと野次馬根性を出してる人も少なからず存在していたが、多くは今の一連の流れの中で走り逃げていった。

『動くな！ 動いた奴はぶつ殺す！』

「な、なんだ……!?!」

ちょうど、俺と荒木先輩がいるシヨツピングフロアの客と従業員が人質だと言っている。荒木先輩が金に何事かと聞いているが、この国じゃ珍しくない事件とのこと。平和な日本じゃ逆に珍しくてどうすれば良いか分からない人もいると思うぐらいに何も無いからなあ。

しかし……このままだと完全に飛行機に乗り遅れるな。

とりあえず、駆が集合場所に行ってくれてることを願うばかりだ。さすがに3人も飛行機に乗り遅れて江ノ高に向かえなくなったら最悪だ。それに、次の試合は明日。それも相手は葉蔭なのだから。

「くそ……明日は試合だったのに……!」

『おい貴様！ 何か言ったか!?!』

「の、ノーノー!」

平和な日本で育ってきたせいとか、テロリストたちを相手にする対処法を知らないだろう荒木先輩は思わず愚痴をこぼしてしまった。が、すでに周囲からホテルの宿泊客はい

なくなっており、テロリストたちが徘徊する音しかない場所で、その呟きは大きいものに聞こえてしまったらしく、テロリストの一人を興奮させてしまう。

興奮、というほどのものではないが……荒木先輩の頭に向けられた照準は上に向けられ、AFC大会のために天井からぶら下げられた多数のサッカーボールの飾りつけを撃ち落としたのだった。

『シヤラップ！ シットダウン！』

特に荒木先輩が焦っているのだが、金も少し焦っているようだ。

が、朴一人だけは冷静に状況判断をしているように見受けられた。韓国じや徴兵制度もあるし、金が言うにはオリンピックピックでメダルを獲ったりワールドカップでベスト16に入ると免除になるらしいが……そういった経験を積んでる分、何が起きても対処できるような心構えをしているのだろう。

で、ジツと静かにしている間に荒木先輩が携帯を取り出して何か、たぶんメールでもしようとしているのだろうけど。まさかこの場面でそんな愚行を犯すとは思わなかった。

それを目にしたテロリストが荒木先輩から携帯を奪う。何をしているかを知らされるつてのはテロリストにしてみれば一番されたくない事だろうし、現状を伝えることがどれだけ相手を興奮させるか分かってない。

『そうだ。こいつを見せしめに殺して政府のやつらをここに来させよう』

拳銃の銃口が荒木先輩に向けられた。

金の制止も虚しく、奪われた携帯を取り返そうと楯突いた荒木先輩が一番最初の標的に定められてしまったようだ。

「オオッ！」

『グアッ!?!』

さすがにこのまま見守っていると本当に荒木先輩が殺されてしまうという所で、金が近くにあつたボールを手に取り、勢いよくテロリストの顔面に向けて投げ飛ばしたのだった。

ハーフラインからゴール前までボールを投げ飛ばせるほどの勢いが、3メートルぐらゐから顔面に受けた男は、大きく後ろに仰け反り、鼻血を流しながら倒れていった。かいていたサングラスが歪んでるのを見ると、かなり痛かつただろう。

ズドン！

吹っ飛ばすように倒れた男に、追い打ちをかけるように朴が腹部を踏み抜いた。

それにしても結構な音したぞ。

『このガキどもがつ!?!』

「つぶねえなあ……」

「不知火!」

一連の流れで一人のテロリストを沈めてしまった金と朴の動きに激高したように銃を向けようとした男がいたので、俺はそいつに向かって足元のボールを蹴り飛ばし、金と同じように顔面に当てた。

が、助走を取れなかったからそこまでの威力にもならなかったと思うが……倒れたから良ししよう。後もう一人、何とかできれば――

――ドン!

「……あ?」

『このガキどもがあっ!!』

最後の一人、それ以外にもテロリストが潜伏してるかもしれないが、少し離れたところにいる男が持っている銃口から煙が上がっている。銃口の先にいるのは俺氏。は?と思う。

「え? ……マジ、か」

「不知火っ!!」

見下ろしてみると、自分の左の脇腹から赤い液体、血がにじみ出ていたのだった。

まだ痛みは来っていない。最後の男は、俺を撃つたことに興奮しているのだろう、口元をにやつかせて俺の事を見ている。それを見た瞬間、脳が沸き立つ感覚……血液が集中

するのを感じ取った。

「うおあああつ!!」

『な、なんっ!?!』

荒木先輩が近くに落ちていたボールを蹴り、ふわりと浮かせたボールを朴がオーバーヘッドで蹴り飛ばし、テロリストの横顔に当たてぶっ飛ばした。そいつで最後のテロリストだったからか、そのまま荒木先輩は俺の方に走り寄ってきた。

「お、おい! 大丈夫か!?!」

「まだ大丈夫です。取りあえず止血だけでもしておかないと——

『くっ……貴様らみんな死ねえええ!!』

「や、やべえ、手榴弾だっ!」

金が焦ったように声を荒げた。

それを聞いて、傷口を抑えていた手を放して俺は駆け出した。

手榴弾はちょうど俺のすぐ近くに投げ飛ばされていたのが幸いだ。テロリストの男は、周囲にいた客に取り押さえられていたこともあってか、ピンを外してすぐに投げつけていなかったら無理だったろうけども。

「う、おとおおっ!!」

——ドオオン!!



「す、すげえ……」

急いで駆け寄って手榴弾を掴み取り、天井近くの空いている窓の間に向かって大きく投擲。外に向けて投げ飛ばされた手榴弾は、窓から外に出てすぐに大きな爆発音を響かせたのだった。

……あ、危なかつた。

少しでも戸惑って投げ遅れたら、今頃俺はスプラッタな事になってたに違いない。まさにグロ注意な凄惨な事に。銃で撃たれても走り出せるだけの頑丈さと言うか……タフさがあつて良かった。

「ぐっ……さ、さすがに……ちよつと」

「お、おい不知火！ お前……血、血が……っ!？」

これは……さすがに飛行機には乗れないだろうなど、血で染まった腹部を見るしかなかったのだった。

## 第四章【凱旋】

## 第64話

「お、勝ったか！」

電話を耳に当て、江ノ高が葉蔭を相手に4対3で勝ち上がったことを聞くことができた。

——あの時、テロリストの男に脇腹を撃たれた俺は、結局飛行機に乗る事は出来ずに入院することになったのだった。さすがに怪我を負う事になった原因であるテロリストがいる国はちよつと……と両親が心配したのだが、血を流している状態で飛行機に乗るのはどうかと俺が宥める事になったのだが。

で、入院することになった俺だが……入院費はなんとタダ。

ただより怖いものは無いと良く言われていた、まさに無料で入院することになったのだった。理由は、テロリストが最後のあがきとして投げた手榴弾。俗に言うグレネードだが、あれをホテルの外に投げたのを見ていた人質の中の一人が資金を立て替えてくれたのだ。

『私だけじゃなく、このホテルを救ってくれた人物に何もしないというのは私の意に反

する。それも、君のように才氣溢れんばかりの若者を見捨てるなんてとんでもない！……ふむ、日本人の君は悪いと後ろめたく思うかもしれないが、奇特な人間がいるものだど流してくれるだけで良い。もしかするとお礼も受け取ってくれないのかもしれないがね』

と、ダンディズムの極致にいる様な男性がすべてを済ませてくれた。

テロリストと居合わせてしまった事は最悪の事態だが、俺としては運がよかったのかもしれない。まあ、結局日本に帰ることはできなかつたのだが。

駆と荒木先輩は無事、日本に帰ることができた。

試合にも出たらしい。いや、出てなかつたら俺がぶつ飛ばしてやってたけども。

脇腹を撃たれてしまった俺の事を心配していた荒木先輩だったが、2人して飛行機に乗り遅れるかもしれないという事態は江ノ高の試合に響いてしまうという事で、金と朴に頼んで無理矢理送らせたのだ。

まさか朴がバイクの免許を持つてるとまでは思つてなかつたが、無事日本でサッカーができているようで何より。

——で、俺の怪我なのだが。

診断結果は、完治まで1か月。問題なく運動できるようになるにはそれ以上の期間が必要になるだろうと医者に診断されたのだった。

……普通に考えれば、日本でサッカーできるようになるまでどれぐらいの期間がいるのだろうかと考えてしまう所だが、毎日この期間が少しづつ短くなっていた。

医者の方が信じられない物を見る様な視線を俺に向けてくる毎日なのだが、こればかりは俺の体の回復力もまた、転生の際に貰う事ができた恩恵の一つなのかなと達観することぐらいしか出来ないのだが。

全治1か月から3週間。3週間から2週間と少し、少しが消えたと思っていたら10日で完治するかもしれないと真つ青な顔で言われ、気付けばそろそろ問題ないんじゃないかなと自分の脇腹を見下ろしつつ歩き回っていた。

最初こそ少し痛みの走っていた脇腹は快調になっていた。

もう、痛みを感じる事すらない。この時、銃で撃たれてから3日目のことだった。

『やあー！ 君がああ、の不知火君か！ いやあ、あの時はどうしたものかと思つたものだが、こうして君に出会つて話をする事ができて非常に嬉しく思つているよ！』

『はあ、ありがとうございます』

『先日のAFCの決勝も存分に働きを魅せていたし、こうして僕が来なくても、遅かれ早かれ誰かが来ていたのは間違いない。それはもう、君の様な選手をスカウトしたいと思つているのは僕だけじゃないだろうからね！』

『はあ……』

——傷がどんどん回復しているのは良いのだが。

俺の状態が良くなっていることを知ったこの人が、俺に会いに来たとのこと。

……スカウト、とか言ってるからそういう関係の職に就いている人なんだろうが、なんでまたこのタイミングでここに？

『今日は、どうしてここに？』

『もちろん、君をスカウトしに来たのさ！ まあ、君はまだまだ成長するだろう。今後の君の活躍にもよるが、才能ある選手を青田買いしようって魂胆さ。君の将来の選択肢の一つにしてもらえれば幸いだ！』

『そ、そうですか』

ガンガンと前に出てくるスタイルの会話方式には俺もビックリ。

なんてアグレッシブに会話をするんだろうさすが外国、なんて馬鹿みたいな事を考えていたら、俺が怪我をして入院している間に、このスカウトの人が所属しているクラブチームの見学をさせてくれるとのこと。

正直、入院している最中は何もすることが無くて暇だったから渡りに船とばかりに快諾。すぐさま医者への許可を取りに行き、顔色の悪い医者からOKの言葉をいただきざ車に乗り込んだ！

さすがにテロリストの暴動に遭って数日。

近辺のテロリストに対する警備が高くなっている今、こうやって昼間から堂々とテロ行為を仕掛けてはこないだろうという希望。日本政府からもそれなりに抗議の連絡は何かしらあつただろうし。

で、スタジアムに向かっている道中、この辺りの名産物や何が美味しくて何がまずいかとか、何でもない世間話をして会話を楽しんでいた。特にこのタコスが美味いという話が一番印象に残っている。

……日本に帰る前に一回は食べに行きたいものだ。

『さあ、ここが我がホームグラウンドだ！ 君は運がいい。今日はあるチームと練習試合をするんだ。まあ、このチームの実力からすると負けてしまうかもしれないけどね』

『そんなに強い所とするんですか？』

『ああ。練習だからね。少しでも強い所と戦って成果を得たいのさ。……正直なところ、向こうのチームの相手をさせられてるってのも否定できないけど』

『あー……』

残念過ぎる。

いや、これが強者と弱者の定理なのか？

強いチームは選手の調子を確認、整えるために弱いチームと試合をして勢いづける。開幕試合を白星でスタートするための調整試合だと言われれば……納得して飲み

込むしかない、か。

ま、弱いチームの方に分類されてしまったこのチームは何とかして勝とうとするだろうが。

『ちなみに、どこのチームと試合をするんです?』

『ああ、そういえば言っただけだね。ドイツのフランクフルトさ』

『フランクフルト……』

『そう。若き皇帝と名高きカール・フォン・ゼッケンドルフを擁しているチームさ。彼から得点を奪うのがどれだけ難しいことか』

『若き、皇帝……』

厨二病真つ只中な二つ名。

さすがの俺でもそんな二つ名はつけてほしくない。

年齢は俺よりも少し上。だが、17歳という年齢でドイツ代表入りが確定している生粋のサッカー選手らしい。ポジションは俺と同じくDFという事で、例のカールという奴を観察しておこう。

もしかすると今後の俺の動きに役立つものを見せてくれるかもしれないし。

「はあ……この怪我がなかったらなあ……」

思わず左脇を一撫で。

目の前で開始されようとしているサッカーの試合を見つつ、悔しい気持ちを感じていた。逆に言えば、この試合を見ることが出来ているのは銃で撃たれたからなんだが……複雑な感じだ。

ま、ちよつとした海外旅行ができると考えればこの怪我也良かったのかもしれない。いや、良くは無いんだが、この体だからこそ楽しめる休日みたいなものだ。

どうせ、日本に帰ったら同級生に話を聞かれたり家族に心配されたり、もしかすると取材されたりするかもしれないことを考えるとだ。今のうちに楽しんでおいてリラックスしておくことも大事なんじゃないかと考えてしまう。

……いや、これが一番の選択肢だろう。

——今、一瞬カールの視線がこっちに来たような気がしたけど……気のせいかな。



## 第65話

試合の観戦を終え、俺は病院に戻っていた。

別段運動をしていたわけじゃないため、特に先生に何か言われることも無く手洗いがいに風呂に入ってそのまま就寝。怪我を癒すために睡眠時間を多く取るのだ。……いや、もうほとんど傷が塞がっていると、そういう話はおいといて。

先日、クラブチームの練習試合を見せてもらったんだが……もの見事に宣言通りの結果。つまり、完敗を喫していた。というか、相手が強すぎたとあって3対0というスコアになってしまっていた。

まあ、相手は一部リーグで勝ちを重ねている相手で、こっちは2部リーグの中堅程度の実力だというのだからそれもしょうがない事なのかもしれないが。

——いやあ、それにしてもカールという選手が凄かった。

相手がドリブルで仕掛けてきたとしても、ほとんどその場から動くことなく相手の足元からボールを奪取。そのまま前線に大きくパスを出すというカウンター攻撃。この形から2点も奪っている。

そして何より、筋力が凄まじかった。

湘南の日比野よりも体格は劣っているものの、その足から繰り出されるシュートは何者にも触らせないと云わんばかりの威力。ドゴンと事故でも起きたのかと言わんばかりの音を響かせ、足から放たれたボールはそのまま真っ直ぐゴールネットを貫いていた。

言わずもがな、カール自身のロングシュート。距離にして30m以上の距離からのシュートだった。

……俺が言うのもなんだが、あいつも結構なチートな奴と言うか。

何でも、駆の兄貴、傑さんですら一対一で抜くことができなかつたとか言う鉄壁のDFらしい。故に、同年代でその可能性の秘めている選手を今の内に引き抜いてしまおうと考えているとか何とか。

完全に青田買いなんだが、サッカーでそういったことは禁止されてないのだろうか。それともなんだ？ 俺が入院中であるから暇だろうと考えて、あくまで善意で行った行為ですみたくないな？

嫌いじゃない、この考え。

まあ、強いチームで色んな事を学ぶつてのも有りだろうが、どうせだつたら弱いチームに入団して強いチームを倒していきたくていう願望もある。ジャイアントキリング。それを実現したいと考えているわけだ。

現役のプロ選手の実力を知らないからこんなことを言っているが……もしプロの選手がみんなカールみたいな実力の高い選手で構成されていることを考えると……ヤバイ（小並感）

——さて、入院してから1週間。

ついに退院することができ、俺は速攻で日本に帰国するための便に搭乗した。

この日本行きのも、例のあの人が用意してくれたらしく、病院から飛行機に搭乗するまでの間、誰かしらにエスコートしてもらおうという事態に遭遇していた。まさにVIPのような扱いには心臓がバクバクしたもんだ。

なにせ、俺の周囲を黒服黒眼鏡の男性が二人は最低でも張り付いているんだから周囲からの視線も凄かった。まあ、俺が活躍したような感じで海外のメディアも報道していたし、もしかするとあのテロリストたちの親玉が……みたいな漫画の主人公か！

さすがにそこまで大事にはならないだろうが、念には念を入れた感じのエスコートで見送られた俺はそのまま飛行機に。

飛行機の中は、それはもう静かで……ずっと寝ただけだが、何事も起きずに日本に付くことができた。連続してテロリストに遭うことは無かったわけだ。

「うあああん！ ヤスううう!!」

「か、母さん……あいや、ま、あゝ……はあ」

人前で抱き着かれることに恥ずかしさを覚えるものの、海外で撃たれて病院に入院して滞在期間が延びるという事態を犯してしまった俺に、母さんからの抱擁を嫌がる事なんぞではしなかった。

しかし、何故かできている人の波。

視線のほとんどが俺に集中しているような気がするのは何でだろうか。あと、テレビカメラが俺を中央に捉えている気がするのは何でだろうか。

「もう怪我の具合は良いのか?」

「父さん。ああ、もう大丈夫。運動しても問題ないって医者に言われてきたから」  
「そうか……」

ホツとしたように息を吐く父さんの様子を見て、無事日本に帰ってこれたんだと実感してしまった。ふと、体から力が抜けるような気がして、ふらついてしまう。

「や、ヤス!」

「あ、いや、何でもない。ちょっと、フラッシュが目に入って」

「ふ、フラッシュ……ッ!」

キツと鋭い視線を周囲に這わせる母さんの姿に、俺は驚いてしまった。

今までこんな怒気を発したことなかったから、俺の事でここまで怒ってくれているんだろう。が、まあ……ここで母さんが怒気を感じるがままに感情を昂らせても良い事

は無いから、母さんの手を掴んで前に進むことに。

ただ単に、安心感から力が抜けてしまったというのを隠そうとしただけに、俺にも悪い所はあったのだ。少しして、呆然とこつちを見ていた父さんの手も掴んで強引に前に進んでいく。

途中、取材したそんな男女の群れがあつた気がするが、ただひたすら前だけを向いて歩き続けた。

しょうがない。

申し訳ないが、今は家族との時間を大切にさせてほしい。

後でだったら何時でも取材に応えてやろうではないか。そういう思いを視線に込めて取材陣の人たちを見ると、何故か一歩後ずさっていた。普通に見ただけだったんだが、なんだろうか。

「あー……今は家族の時間を。取材については明日以降、お願いします。ただ、私は一人の高校生でしかないので、高校の部活の監督。それと江ノ島高校代表の方。そして、私の両親に話を通してからの取材を、どうか、お願いします。……本日お集まりの方々には申し訳ないですが、お時間を取らせて申し訳ありませんでした。それでは」

踵を返して自宅へ。

いやあ、やっぱり日本は落ち着きますな。

何より、周りにいる人のほぼ全員が日本語しか話さないってのが安心する。母国に帰ってきたんだという安心感。この肉体じゃなかったらテロリストに遭った時にどうなっていたらどうかという不安が、今になって出てきた。

その苛立ちが少し出てしまったが、まあ……問題ないだろう。

そもそもアポ無しで集まってくる取材陣は、一体どうやって俺が乗る飛行機の便の情報を得たのだろうか。と言うか、俺という存在がそこまで有名になるとは思っても無かったってのも大きいが。

「つと……駆か、どうした？」

『ヤス！ 今日、日本に帰ってくるって聞いてたから……その、もう怪我は大丈夫なの？』

「おう。向こうで優しい人がいてな。その人が面倒見てくれた感じだ」

『そっか……また、一緒にサツカーできるんだね』

「おう。俺はまだ生きてるぞ。安心しろ」

『……うん。それじゃ、また！』

「おう」

携帯を閉じて一息。

駆からの電話だけは少し気を使う。

あいつの兄貴が亡くなってからそこまで経ってないからな。そこは気を使つていかないと……つてか、俺がその対象になつてるのか。しかも死ぬかもしれないという事実が駆の精神にストレスを与えるかもしれない。

ま、葉蔭戦では問題なかったみたいだし大丈夫だとは思うが。

その葉蔭戦に出られなかった俺は、明日試合が予定されている鎌学に参戦できるかどうかの問題が残っている。直前まで怪我で入院していたから、岩城監督が試合に出ることを許してくれるかどうかがわからん。

てか、両親が許してくれるかどうかだが。

「はあ……怪我の問題じゃないからなあ」

完治した左の脇腹に手を当て、今後の展開がどうなるかに考えを巡らせることしか俺にはできないのであった。

## 第66話

「——これが、証明書です」

「……そう、ですか」

岩城監督と二人で会話をする俺氏。

何気に緊張するんだが、今俺が手に持っているのは日本の病院で出してもらった無病息災の意を示す証明書の紙。つまり、問題なく運動することができますよと書いてある紙を監督に提出していた。

今の時間は平日、それも学校の職員室だ。

そりやもう、普通に学校に登校したのは良いものの、同級生やら部員やらにもみくちゃにされるといふ惨事に遭ってしまった。まあ、惨事と言ったらやはりテロリストに遭ったことなんだが。

俺が銃に撃たれたって話はすぐに広まっていたらしく、それに対する心配が半分。逆にテロリストを倒してしまったんじゃないかという疑惑が4割。残り1割は俺がテロリストがねぐらにしている拠点を潰してしまったんじゃないかという邪推だ。

質が悪い事に、俺がテロリストの本拠地を落とすという事を本気で考えていた奴が



いたことだ。

何気に俺の身体能力の高さを信用していたというか……お前の実力はまだまだこんなものじゃないと言われたときにはどう対応しようかと。

正直、自分でも卑怯な手だとは思ってる。

というか、そのためにこの紙を持ってきたんだろと言われてもしょうがないと思う。そこままでして試合に出たいのか！ なんて言われるかもしれないが、逆にこうでもしないと試合に出れないかもしれないのだ。自分の事を心配してくれるのはありがたいが、余計に心配するのはナンセンスだ。

「——わかりました。……ですが、取りあえず練習試合に出てください。その様子を見て、試合に出れるかどうか判断しましょう」

「はい。それで十分です」

「はは……君は、銃で撃たれたんですか」

「は、……はい。この、脇を」

「そう、ですか……」

一応、傷跡を見てもらうために制服をめくって確認してもらった。

今も生々しく残っている銃創痕は、生涯にわたって残るだろう傷跡になっている。が、まあ……戦争ものの映画やらを見ていた影響か、これぐらいの傷跡だと逆にカッコ

よく思えてしまうのは馬鹿な男子の勲章だろうか。

が、一人の教師として、また、一人のサッカー部の監督として接してくれる岩城先生からすると何とも言えない傷だろう。しかも、先生自身サッカーに打ち込んでいる人だ。

俺が撃たれてしまったと聞いたときも、相当な心配をかけてしまっただろう。

だからこそ、俺は勲章かなと浮つく気持ちを腹の底に押しとどめて先生の反応を待つのだった。

「嗚呼、なんと行って良いものか……まさか、代表として海外に行つて、こんな事に巻き込まれてしまうなんて……何と行っていいものか……」

「あ、いやあ……正直、外国でテロに遭うかもしれないってのは考えてましたんで。まさか撃たれることになるとは僕も思つては無かつたんですけど」

「ふふ……こうして、君がまた元気な姿を見せてくれるだけでありがたい事です。この証明書も、それを示すために持つてきてくれたんでしょう？」

「は、」

「なら……その気持ちを無駄にすることはできませんね」

ありがとうございますと、一言告げ、そそくさとその場を後にしてしまつた。

正直、あんな真つ直ぐな目で見られる俺の気持ちにもなつて欲しいもんだ。同じ

部員対策として出してもらったものだからこそ、ここまで純粋な気持ちを向けられると困るんだ。

——もし、俺が転生者だという事前知識が無いままにこの世界を楽しんでいればこんな気持ちを抱くことは無かったのかもしれないが……あいにく、大人としての精神を持ち合わせてしまったせいで余計な事を考えてしまう。

若いころの俺だったら自分の事しか考えなかつたんだろうが。

——そして部活の時間帯。

今日は学校に登校してからずっと心配されまくつたなあ。

クラスメートはもちろん、違うクラスの同級生にも心配される始末。少しの間学校を休んでいるうちに話が広まっていたらしい。同級生には駆が、先輩方には荒木先輩や他の先輩から広まったらしい。

俺がテロリストに撃たれたって事実が。

……中には俺がテロリストを全員ぶっ飛ばしてしまったという噂話も広がっていたのはどうしたもんかと頭を抱えたが。

「不知火……」

「荒木先輩」

「その、あー……なんだ……怪我、大丈夫なのか？」

遠慮がちに聞いてきた荒木先輩。

前の試合ではしっかりと活躍してくれたみたいで良かった。まさか俺の怪我の事を考え過ぎてサッカーができなくなりましてたつてトラウマにならなくて。見た感じ駆も問題なさそうだったし、俺の考え過ぎで済んでたってことか。

「大丈夫ですよ。病院からも運動しても良いって許可貰ってますし」

「そ、そうか！ ああ、そうかそうか！ いやまあ良かった良かった！ もしお前にもしもの事があつたら……あつた、ら……いや、申し訳なかった」

「あいや!? 顔を上げてくださいよ！ 別にそんな事しなくても良いですつて！」

さすがに頭を下げられるとは思ひもしなかった。

いや、まあ、テロリストが興奮した原因の一つが荒木先輩の携帯事案。あれが無かつたら撃たれることは無かつたのかもしれないが、逆にあのおかげで荒木先輩は日本に帰国する便に搭乗する事が出来たのだ。

どっちもどっちだったかもしれない。

荒木先輩が穩便に済ませてれば日本でサッカーが出来なかつたし、俺は銃で撃たれてしまったけども生きてたし、向こうでクラブチームの観戦できる貴重な経験もできたし。

銃で撃たれたのは貴重でも何でもない、ただ運が悪かったただけなんだが。

……それから少しの間、謝り倒してきた荒木先輩を連れて部室へ。

折角の決勝だ。俺だって少しは皆のために貢献したいと思ってる。

が、思った以上に皆が俺の事を心配するもんだから今日はサッカーの練習ができなくなるんじゃないかと恐々としていたら、岩城監督が場を収めてくれた。

何とか事情を説明してくれたものの、俺の傷跡を皆に見せることになって非常に気まぐず雰囲気になってしまったが、どうしようもない。どうせ、皆に見てもらわない限りには納得しないだろうし、傷口が塞がっていると見せるには最適な行動だ。

「——つと、普通に動けるな」

「うわあ……さすがヤス。でもそこにあんまり憧れないなあ……」

「おう、どういうことだ」

普通にパス練習をし、ダッシュをこなし、皆に紛れて紅白戦もこなしてみたが体には一切の問題なし。まあ、医者から問題なしのお言葉をいただいているからこそその運動なんだが。

しかし、脇腹を撃たれたことを皆が知っているせいか、ガッツリ体を当ててくることが無かった。まあ……正直俺も、誰かが怪我をして復帰したばかりだったら無理に仕掛

ける事はできないか……

あれ？ 俺がおかしいのか（迫真）

「康寛っ！」

「うお……ど、どうした？」

「もう……もうっ、ほんつとに……っ！」

全ての練習が終わって休憩中。

一人飲み物を取りに歩いていたところに後ろから抱き着かれた。

中々に柔らかい感触が。と行けば俺も嬉しかったんだが、ぎゅうと力強く抱きしめられているせいか、そこまで感触を楽しむことができない。……しかし、そこは治ったばかりの傷跡がある場所なんだが。

声ですぐにわかったが、奈々が後ろから抱き着いてきたのだ。

精神年齢はもう結構歳喰ってるはずなんだが、結構ドキドキするもんだ。今も手汗をかき始めてる。そもそも何故こんな展開に陥ってしまったのか理解できん。あばばば。

「心配、したんだからね」

「お、おう。ごめん」

「ホント、会えなくなるかもしれないって……」

「すまん」

後ろから抱きしめられ続ける俺はここからどうすれば良い？

正面からだったらまた違った行動ができたのかもしれないが……できれば頭でも撫でてやりたいところだが、後ろ向きだとどうしようもない。と言うか、そろそろ人が来そうなんですが？　そろそろ離れてもらわないとマズイ事態になるような気がするんですが？

しかし……この感触も捨てがたい、か（にっこり）

## 第67話

いやあ……良い経験をしたもんだ。

あの後、顔を真っ赤に染めた奈々の顔を見ることができたのは眼福でしかなかった。そりゃあ、あんなに可愛い女の子の恥じらっている顔を見れたのだからご飯が3杯いけるってもんだ。

運良く、他の誰にもあの状態を見られなくて良かった。

体を抱き寄せ合う男女二人と見れば、すぐに変な噂が広がる事間違いない。高校生になれば、それなりに体が成熟してるからね……そりゃあもう、男子に関してはエロい話で盛り上がっているのを良く目にする。

そして経験談だが、高校生だった時に良く猥談をして盛り上がっていたと同級生の女性に語っていたが……今となっては懐かしい話だ。

さて、準決勝の相手、葉蔭を降した江ノ高の次の相手。

決勝戦の相手はあの鎌学。そう、鷹匠さんやら佐伯やらがいる鎌学を相手にしないとイケないのだ。復帰して早々の相手が鷹匠さんの体当たりだと考えるとちよつと考えさせてもらいたい（迫真）



それにしても、皆良い感じに能力が高くなっている。

鎌学の選手がどれだけ成長してるか知らないが、今の江ノ高だったらどこの高校にも引けを取らないんじゃないだろうか。だから、ちよつと抜けて文化部で遊んでても良いかもしれない。

べ、別に鷹匠さんのジャンピングヘッドの圧力と見た目にビビってるわけじゃねえし？

で、だ。

この間見ることができたカールの動きを見て、少し思ったことがある。

あの動きは俺の動きに似てるんじゃないかと。純粹な才能でサツカーをしている彼にこんなことを言うのはあれなんだが、俺の俯瞰視点のような感覚で全体を見渡し、必要最低限の動きでボールをカットしていた。

まさに生粋のチート。

これはもう拌んどくレベルだが、この動きを参考にして俺もカットができるに違いない。それと、ミドルからの強烈なシュートは参考になった。今までは日比野のフリーキックを参考にキャノンシュートをしていたが、あの小さい足の動きからあれだけの威力を蹴れると考えると……まあ、当然威力が高くて動作の小さい方を選ぶよね。

という事で練習練習つと。

もう鎌学との決勝に近いから、その前にはある程度形にしておいて。いざという場面ですぐにボールを蹴れるようにしておかなければ。

「——ごめんね」

「なんだよ、急に」

で、今日は決勝の前日。

いつも通りに学校に登校している最中の事である。

途中、奈々と出くわして一緒に歩いているのは良いものの、ずつとだんまりする奈々に話しかけられなかった。意気地のない男だと思つてもらつて構わないが、この年頃の女の子の考えてる事が分からないのだからしょうがない。

と、思つた矢先に奈々が謝つてきたのだ。

「康寛が撃たれたつて聞いて、もしかしたら、私がサッカーに誘つたのが原因なのかなつて思つちやつたの」

「ふつ……海外でテロに遭うなんてちよつと運が悪かつたぐらいの事だ。別に奈々が気に病む事じゃない」

「それでも！……それでも、もしかしたらつて考えちやうの。ここに、康寛がいなかったかもしれないつて」

「馬鹿が……俺はそんな簡単に死なねえよ。……そういう風に生まれてきたからな」

「……………え？」

「いや、なんでもない」

変に勘ぐられても面倒だが、どうしてもそういう風……なんて言ってしまう。これが俺の運命だ、なんて真顔で言う奴がいたらそれはもうただの変態か、それともナルシストか面倒な狂信者だ。

しかしまあ……………なんだ。ここまで奈々に思われてるつてのは悪いことじゃない。ないんだが、駆とイチヤイチヤしてたんじゃないのかって話なんだが？ 確かに傑さんとか、駆も結構どころじゃない怪我をしてるから、心配するのはしょうがないけどな。

「ま、海外にいると日本よりもテロに遭遇する確率はでかいのは確かだ。本当にそんな確率を引き当てるとは思ってもなかったが、今俺は生きてる。だから、な？そこまで気に病むな」

「……………うん。うん……………そう、だね」

そしてまた無言タイムに突入。

本日は晴天なり。風も冷たくないし、日差しもちょうど良い感じ。こんな日にランニングでもしたらいい感じに汗をかけるんだろうな。

……………こうでもして別の事を考えてないと間がもたん。いや、そもそも俺の気持ちがあく然間に合っていない。間に合っていないとか、俺は今何を考えてるのかも正直わからなく

なってる。

なんだ、閑話休題とか言って何か俺に話題でも何でも良いから振ってくれよおつ！

「……明日の決勝、勝てる？」

「謙学か。そうだな……俺がいるんだ。負けるわけがないだろ？」

「……フフツ、そんなに自信満々に言えるって、やっぱり康寛はすごいね」

「すごい、のか？ いつも通りのつもりだけどなあ」

「なら、康寛はいつもすごいってことだね」

「まあ、奈々がそう言ってくれるんならそれで良いよ」

別にくさい事を思うつもりはないが、やっと奈々の笑顔を見れた気がする。俺が撃たれた後、ずつと落ち込んでるような顔をしてたから。しかし、ホントに可愛いんだよなあ……奈々って。

## 第68話

決勝戦当日。

皆が皆、というわけじゃないが、全員がそれなりに緊張した面持ちで控え室にいた。これからついに決勝戦が始まるわけだが、その前に一声。いつも通りキャプテンの言葉と岩城監督の激励を受け、動き出した。

『——さあっ！ いよいよ出てまいりました我等が江ノ高イレブン！ 今、決勝戦のス  
タジアムに足を踏み入れた！』

大歓声。

とてもじゃないが高校選手権予選の決勝の観客数じゃない。

なんで予選で客席が満員になるってんだ。ざっと見ただけでも空席が見つからないんだが？ 色でまとまってる所は他の高校の連中だろうけど、それ以外にもたくさん  
人で埋まっている。

「的場くーんっ！」

「逢沢くーんっ！」

「不知火くーんっ！」

江ノ高、じゃなくて個人の名前を叫んでるあたりファンでもできたか？

まさか俺まで呼ばれることになるとは……いや、少し前に国際試合まで出たから、それで知りましたって人がいてもおかしくないのか。しかし、なんで俺がMVPに選出されたんだっけ。

「……いやあ、すげえなあ」

「確かに……高校サッカーにファンでもできたのか」

「でも、まだ圧倒的に鎌学のサポーターの数が多そうだ」

江ノ高への歓声もすごいが、それ以上に鎌学に対する応援が凄まじい。

メガホンをもって全員が息を合わせて「鎌学っ！ 鎌学っ！」と叫んでいる。鷹匠さんに佐伯、世良までいるんだ。前は俺たち江ノ高が試合を制したが、向こうの実力も相当高いからなあ……

それでも俺たちは勝つだけなんだが。

中でも一番用心しなきゃならないのは、やはり鷹匠さんか。俺がDFとして動いている間はダイレクトだろうがヘッドだろうが、鷹匠さんの攻撃をシャットダウンするだけだ。

もしFWになったら……国松さんが一番面倒だな。

駆も相当実力が高くなってるが、それでも感覚で動いてそんな国松さんのことだ。駆

が持つてる独特の嗅覚を感覚で止めてしまいかもしれない。まあ、国松さんが直接DFしてくる前にミドルをぶちかましてやれば、何回かに1点は奪えるだろう。

あまり難しく考えないで攻めに入ろう。

『さて、何といても江ノ高選手の中で一番注目されているのは、間違いなく不知火選手でしょう！ つい先日行われたアジアでの大会においてMVPに選出され、その名を世界に知らしめてきた選手です！ 帰国前に怪我を負ったと話を聞いたのですが、今はどういう状態なのでしょう！?』

なんともまあ……熱狂的な説明なこった。

まさか俺が一番の注目選手つてのも納得したくない。

どうせだったら鷹匠さんとか、荒木先輩でも注目しておいてくれた方が気楽にできる。まあ、最初はどうせDFとして動くし、そこまで注目されるような動きにはならないと思うが。

「不知火。……やるぞ」

「はっ……紅林先輩、誰に言ってるんですか。俺は、誰であろうと止めるだけですよ」  
当面はDFとしての働きだな。

向こうの戦術はトマホーク。直線的な動きで一気にシユートを決める動き。例え俺が鷹匠さんだけをマークしてれば良いってわけじゃない。前に試合をした時からどれ

だけ成長していることやら。

それと、今日のGKスタメンは紅林先輩だ。

李先輩は少し前に手首を怪我してしまっただけで、少しの間休養という事になっていて。しかも、李先輩は今度の韓国代表の選手として選出されたらしく、そっちの方にも力を入れてるらしい。

まあ、このチームでゴールを守る守護神として活躍してるんだから当然だろうが。

——そして、ついに開戦。

江ノ高のキックオフが始まった試合は、まず駆がボールを蹴って荒木先輩がボールを保持するという形に。そのまま前線まで上がれば誰かにパスを出してシユートを狙う事もできるが……今回の相手、鎌字の選手がそう簡単に隙を見せてくれるとは思えない。

さすがに、世界相手にするほどの選手が一堂に会してるわけじゃないだろうが、それにしても世界で戦えるような原石がたくさんいることには違いない。ね？ だからスカウトの人も俺だけを観察にきてるわけじゃないと思うんだ。

江ノ高は厳しいマークの中、しっかりとパスを繋いで前線にパスを出そうとしているが、それを最終ラインで鎌字DF陣がしっかりと裏への対策を取っていた。少しでも隙を見せれば荒木先輩から駆への縦パスを狙えるが、いかんせん、国松選手がしっかりと



駆をマークしていた。

しかも、今までの高校の選手と違って、裏に抜けようとしたときの動きを直感で感じ取っているような感じだ。

駆自身、MFがパスを受ける前に動き出すから相手の不意を突いて裏に飛び出せていたものの、直感同士の対決となると……そりゃあ、経験の多い国松選手の方に分がある。

問題は、いかにして国松選手の不意を突くことができるか、という所にあると思うが……っ！

『おおっ?!』 荒木選手から逢沢選手に出したパスを、鎌学のスイーパー国松選手がしっかりとマークしていたあ！ カットしたボールをすぐさまMFの佐伯選手に預け、今度は鎌学の攻撃とばかりに前線へとボールを運んでいくう!!』

「いくぞ……っ！」

やはりと言うべきか。

前回、鎌学と試合をしたとき以上に選手の厚みが増している。

一番面倒なのが佐伯か。同じくMF——攻撃的な、なんて言葉は付くが——として動いている世良も確かに面倒だが、それよりも後方で全体の動きを見つつ、守備の動きをしたり攻撃に絡んだりするポジにいるのが面倒だ。

「世良と思わせて、佐伯。とかな」

——こうして鎌学と試合をするのは2回目だが、非常に厄介な相手だ。

向こうにしてみればどう思ってるか分からないが、ここまで完成した布陣を築き上げた監督。そして監督の意図を汲み上げ、トマホークを完成させた選手たち。本当に……厄介な相手であることに違いはない。

「だからこそ、全力だ……っ！」

ふと、脇腹に手を当ててしまう。

違和感を感じない。ユニフォーム越しに感じる熱が、腹部に当てた手の平を通じて感じ取れた。佐伯が世良にパスを出し、難なくパスが通る。全体を見渡す仕草をする世良の様子を見て、前回やってくれたマリーシアを思い出した。

ズル賢いなんて意味のマリーシアだが、国によつては意味が異なってくる。

……世良の働きは確かに大きい意味を持つだろうが、こつちにしてみればそんなのは関係ない。ただ世良が悪い奴として印象付けられ、鎌学のチームの印象も悪くなつてしまったというのが江ノ高のメンバーとしての心情だ。

そんな世良がボールを持っている。

俺は鷹匠さんをマークしつつ、他の選手が上がつてきてもすぐ対応できるような位置を取っている。そして、裏に抜けられないよう堀川先輩とDFラインの修正をしている。いつパスを出してきても良いように、ラインを上げたり下げたり。

これは、最終的にはサイドの審判の判断に任ざれてしまう所が大きいが……鷹匠さんほどの選手に裏に抜けられてしまうと、GKとの一対一という状況では決定力のある鷹匠さんの攻撃力だと決められてしまう確率が高い。うまい事オフサイドにするか、素早い戻りでDFしなければ。

『さあ、今度は鎌学の攻撃だあ！ お馴染みトマホークが火を噴くことになるのか、江ノ高、どうやって対処するんだあ!?!』  
世良がゆつくりと上がっている。

鷹匠さんだけに的を絞らせないよう、味方が上がるのを待っているのだろうが、逆に言えばその時間で江ノ高のDF陣も戻ることができる。まあ、世良はミドルからもシュートを狙うだけの技術もあるし、どこか守備に解ほれがないか探してるんだらう。

が、時間をかければかけるほど戦況は混雑としてくる。

俺が鷹匠さんをマークしてるってのもあるだろうが、堀川先輩も別のFWを見ているし、パスの出どころが無いのだろう。トマホーク、ここに敗れたりい！ みたいなことは大にして言わないが、最終的には鷹匠さんがシュートを決めるだろうから、どうしても一番集中するのは鷹匠さんだな。

——なんて考えていたら、早速世良がパスを出そうとしている。

鷹匠さんがいち早く気づいて裏を取ろうと動き出した。もし、ここでDFしてるのが

俺だけだったら簡単にラインを上げてオフサイドにすることはできるだろうが、さすがに堀川先輩が動きについてくることができない。

故に、鷹匠さんの動きに合わせて動くしかない。

『パスだあ！ 裏に抜け出した鷹匠選手に合わせてボールを出したあ！ しかし、不知火選手がしっかりとマークしているう！』

「くっ！」

一人突出した動きで抜け出そうとする鷹匠さんを何とかマーク。

他にもFWが前に上がってきているが、織田先輩や堀川先輩も戻ってきている。このまましつかり鷹匠さんを、なんて考えてると……

「……っー！」

「なっ!?!」

鷹匠さんが急停止。

飛んでくるボールに向かってジャンプした。そのままボールを受けるわけは無いだろうなと思っていたが……空中でボールをヘッドで受け、進みたい方向にボールを落としました。

てか、体の使い方がうますぎる。空中戦が強いとか、これから鷹匠さんの事は心の中でリオレウスとでも呼んでやろう。うむ、空の帝王みたいでカッコいいだろ（適当）

うまい事前にボールを出したりオレウスが腕を使って強引に突破しようとしてくるが、それを何とか抑えつつ、他のDFが上がってくるのを待つことに。……いやあ、実際、声を荒げるときの鷹匠さんなんて口から火い出てそうだ。

「殺つたああつ!!」

「チツ！」

『危ない場面になりそうなところ、江ノ高のスナイパー堀川選手がしっかりとクリア！』

いやあ、それにしても不知火選手、鷹匠選手を相手に全く力負けしてません!』

いやあ、危なかつた危なかつた。

このまま鷹匠さんに突進されてたらミドルからでもシュートするからなあ。今、紅林先輩がGKしてるけど、普通にシュートしても手弾くんじやなかるうか。

リオレウスだけに火の玉シュートってか、ワロエナイ。

## 第69話

まだ前半5分も経っていないが、江ノ高、鎌学ともに攻撃をした。

ただ、江ノ高がじっくりとパスを回して隙を狙うような攻撃だとすれば、鎌学は一瞬でも隙を見せたらどこからでもカウンターを仕掛けることのできる攻撃型でもあり、カウンター型でもあるチームだ。が、攻撃に偏っているかと言えばそうでもない。

国松選手のような人がいる限り、鎌学は攻撃型とは言えない。

なにせ、駆が嗅覚で動くいわゆる感覚的な動きを、これまた感覚的に守備しなければならぬ所を嗅ぎ分けて動く人だ。つまり、駆一人で攻撃に移ろうとしても、他のDFを綺麗に抜いたところで国松選手には止められてしまうのだ。

だから、攻めるときは最低でも二人で、それもお互いにしっかりと連携を取れる程度には練習をしておかなければいけない。

——と、考えると、やはり攻撃は波状攻撃と言うか、色取り取りな戦術ができるチームが強いのかもしれない。一つの攻撃方法しかないチームは単調になりがちだ。それに対する対策を取るだけで守備が完成してしまうし、そんなプレーは観客も飽きるだろう。

さすがにバルサみたいな短いパスを繋いで前線に運び、パスでもって中央突破する事は出来ないし、C・ロナウドのような個人技を持つていけば、サイドを制する事もできるんだが、そこまで欲は出さない。

少しずつサッカーの知識やら有名クラブの情報やらを取り入れるようにしてるが、確かに有名クラブに所属してる選手のムービーは凄い。凄いと言いたいようがない。

……のだが、俺にはやはり、実際にこの目で実物を見た方が良いというのも理解できなかった。

我が家はサッカーをライブで視聴できるO<sup>オ</sup>u<sup>ウ</sup>O<sup>オ</sup>u<sup>ウ</sup>（有料の民放放送）を契約してないため、動画を見るとすればヨウツベやスポーツ番組でしかない。どんな選手であろうが、色々な角度からシユートシーンを撮っているのは非常に助かるのだが……それでも自分の目で見ることに上の物はない。

少し前に見たカールが良い例だ。

彼はまだ若い。若いが、かなり完成されているように見えたのもまた確か。そんな選手以上に世界で活躍している選手がいる動画を見はしたが……後々技術として残っていたのは実際にこの目で見たカールの方だったのだ。

『試合開始からまだ4分！ 目まぐるしい攻防、今の所実力は拮抗していると云ったところでしょうかっ！ 鎌学では国松選手。江ノ高では堀川選手が良い動きをしました

が——』

「ふう……」

ほっと一息。

少し前まで怪我人だったが、それを知ってか知らずか、めちやくちや圧をかけてくる鷹匠さんの容赦の無さには脱帽しますわ。しっかし、堀川先輩のスライディングが本当に巧くて笑えて来る。失敗するとイエローカードを出されても可笑しくないし、距離的にFKで直接狙える位置だ。

まあ、サイドからのスローインになってしまったのはしょうがない。

金みたいなのロングスローインができる奴はそうそういないだろうし、定石としてサイドに上がってる選手にボールを出すだろう。鷹匠さんがいるんだ。そこから速攻でロングボールを上げて攻撃を仕掛ける事も出来るし、ゆっくり攻める事もできる。

色んな戦術をとることが出来るチームほど面倒な事はないなあ……

『鎌学のスローイン！ ボールは世良選手に渡ったあ！ ここからどうするのか、直接ゴールを狙ってくるか、それともゴール前にいる鷹匠選手を狙うのかっ!?!』

織田先輩が詰める。

前に試合したときは世良のマリーシアで織田先輩が退場になってしまったから、その雪辱を晴らす良い機会だろう。まあ、試合には勝ったから個人的な因縁でしかないんだ



が。

と、なると……

焦ることなく世良は後ろにいた佐伯にパス。が、どこからでも鷹匠さんにパスを出せるし、フィジカル的にどこからでもシュートを狙ってくるだろうから油断することはできない。

『佐伯選手にパスが渡り、ボールを、蹴ったあつ！ 鷹匠選手がエリア内で待っている！』

「攻めてきた……！」

さっきの鷹匠さんが見せた、少し下がりがりながらのジャンプ。からのヘッドでボールを落としてドリブルをし始めたのを思い出すと……少しでも油断すると、本当に大変なことになる。

それは理解してるが、どこからでもボールに合わせる事ができる技術つてのは怖いもんだなあ……

まあ、頑張れば俺もできないことは無い。

「ふっ……！」

「なに……!?!」

『おおっと不知火選手が、と、跳んだあつ!?!』

飛んできたボールに合わせて前に大きくジャンプ。

助走は一步。前に足を出すと同時に力を入れて飛び上がり、鷹匠さんの機先を制した。やはり、鷹匠さんに合わせてボールを上げてきていた。が、そのボールを先に奪う事で攻撃を封じてしまう。

相手より先にボールに触る。

攻撃を未然に防ぐための当たり前の手段だよなあ？

『な、何という跳躍力……！　こ、これが不知火選手が世界に見せてきた脚力です！　おそらくは鷹匠選手に出されたであろうパスを、誰よりも高い位置でカット！　かつてあれだけ高い跳躍力を見せた選手がいたでしょうかつ！』

ヘッドで一気にボールをクリア。

体を逸らしてから、全身のばねを使ってボールを弾き飛ばす。

いつも通り、ただボールをクリアするだけじゃなく、前線にいる選手にボールが届くようにボールを弾き飛ばした。前線にいる選手……もちろん駆だ。

『佐伯選手が上げたパスをクリアア！　そしてボールは……あ、逢沢選手の足元に収まったあつ！　江ノ高、一気にカウンターだあつ!!』

「なんだとつ!?!」

向こうの監督が慌ててる姿が見える。

が、前回も同じような攻撃をしたような。と言うか、俺から一気に駆までボールを繋げる雑ながらも効果的なカウンターができるってのは違うチームでもやってたから、記録に残っててもおかしくないんだが……

さて、トマホークも真つ青な縦パス。

自陣ペナルティエリアから前線までボールをぶつ飛ばし、持ち前の感性でボールが来ることを予測していた駆が前線を駆け上がる。が、それにいち早く反応していた国松選手が駆を追う。

やはり鎌学は国松選手が一番厄介なDFか。

佐伯も戻ってることだし、速攻で攻め上がらないとシユートすら蹴らせてもらえなさそうだ。

とりあえず、今はDFとしての働きに集中するしかない、か。

## 第70話

前半は30分を過ぎようとしてる所だが、いまだ両チームとも無得点のまま試合は進行していた。

江ノ高は駆を中心として荒木先輩や高瀬、薫が何度となく攻めているが、その度に国松選手を中心として、佐伯やらがDFに奔走し、いまだ無失点に抑えているのだった。

対して鎌学はと言うと。

言わずもがな鷹匠先輩がガンガン攻め上がってくるのを俺が基本的に抑え、他の選手については堀川先輩や織田先輩が中心となって攻撃を止めていた。時たまに佐伯や世良から飛び出るミドルやらロングがゴールを脅かしてはいたが、何とか弾き飛ばしていた。

均衡が保たれたまま後半に行くのかと思われたこの試合。

サイドからドリブルで駆け上がりシュートを放った薫の攻撃が防がれ、すぐさまGKがDFに渡したボールは佐伯へ。そして一気に鷹匠先輩へとカウンター気味にロングパスが蹴られたのであった。

佐伯から直接鷹匠さんへパスが出るのは3度目ぐらいだろうか。

2 回目の攻めと同じように両サイドのMFと共に攻め上がってくる鷹匠さん。サイドの二人は堀川先輩と、すぐさま戻ってDFの働きをしてくれる織田先輩に任せ、俺は鷹匠さんにマンマーク。

先ほどと同じように俺がパスをカットするか。

それともその前に鷹匠さんがサイドを上がっているMFの選手にパスを出すのか。が、どちらの二人もマークをされていて、虚を突くようなパスでもない限り普通のパスはカットするだろう。

俺が江ノ高所属だからとかそんな理由ではなく、誰しもが考える通常のパスコースであれば、頑張つて足を延ばせばパスカットできるからな。

『——佐伯選手の大きなパスが一気に前線にいる鷹匠選手のもとへと伸びていく！ しかし不知火選手もついているが、どのような攻めをみせるのか！』

「……ッ！」

一度目のように後ろにジャンプしてボールを受けるのか？

それならある程度ボールの位置を予測できるし、そのまま奪い取ってカウンターに繋げられることもできる。それを鷹匠さんも分かっているとと思うが……

「っしやあー！」

「はっ!?!」

『おおっと!? 鷹匠選手、ヘッドでサイドに大きくパスだあつ! それにしても何という体幹の強さでしょうか! 空中戦を制したのは鷹匠選手う!』

いやいや……

俺も固定観念を抱いてたのかもしいけど、それにしたってヘッドでサイドに展開するなんて思いもなかった。だって鷹匠さんだぜ? この人だったら一人でドリブルして点を奪いに来ると思うじゃん?

慌ててサイドを見るが、堀川先輩がギリギリで追いつけなさそう。

俺は変わらず鷹匠さんをマークしているが、鷹匠さんに折り返してシュートを撃つのだろうか。俺を警戒しているのであれば、このままサイドにシュートを撃たせるんじゃないだろうか、なんて疑惑が湧き出てくる。

『右サイドから早瀬選手が上がってくる! 江ノ高は織田選手が対応しているが、止めることができないまま攻め込まれているぞお! 中央には鷹匠選手がいるが、不知火選手がそれを見ている! さあ、鎌学はどうやって攻略の鍵を見出すのかあつ!!』

アジア大会でされたことだが、俺がない所から攻めるつてのが一番の攻略方法なんだろうか。俺にしてみれば、試合に出ているのに一切ボールに触れることができなくなるつてのは精神的に不安になる。

だって、試合に出たのにボールに触らないんだぜ?

一体全体俺はどここの初心者だよって話だ。守備はまあ、よしとしても攻撃に一切参加できない選手ほどお荷物なものはないんじゃない？　なんて考えてしまうんだが、実際どうなんだろう。

プロで『そんな奴いらぬネ！』なんて言われたら速攻契約解消、棒読みのあざつしたーを浴びせて家でふて寝する自信がある。

しかし、サイドから上がってくるMFの選手に織田先輩も対応しきれない。

それを見てオフサイドにならない程度に上がる鷹匠さんの対応をしつつ、全体を見渡す。何度かカウンター気味のパスを出したものの、得点に繋げる事の出来ないままでの駆は凄く悔しそうな表情をしている。

忌まわしき世良は何を考えているのか知らないが、余裕そうな顔をしている。

まだお互いに無得点のまま前半を折り返しそうだというのに余裕な奴だ。少し腹が立つ。

——江ノ高陣地の深くまでドリブルで攻め上がった早瀬選手は、一旦ボールを落ち着かせた。一旦、と言ってもほんの少しの時間だけ。すぐにクロスを上げた。

『クロスが上がった！　ボールの行方はやはりゴール前にいる鷹匠選手……いや!?　このクロスは鷹匠選手を超えて生島選手に渡ったあ！』

「なっ!？」

逆サイドから上がってきていたMFの生島選手にパスが通った。

堀川先輩がついているものの、織田先輩と同様に勢いを止めることができないでいる様子。俺にできることは、鷹匠さんにパスが出たら勢いよくクリアする事だけ。いやまあ、他にもあるかもしれないけど、さすがに他の人に鷹匠さんの相手をしてもらうてのは骨が折れるだろうから、最終的にはやっぱり俺が相手するほかない。

ゴールラインギリギリまで上がったところで切り返し。

「殺す殺す殺す!!」

「ああっ!!」

「そ、そんなっ?!」

そこを狙って、ペナルティエリア外で堀川先輩がスライディングをしたものの、ここ一番の集中力をもって切り抜けてきた生島選手。正直、強引にサイドから切り崩してくるとは思っても無かった。

一切合切の攻めを中央のライン……トマホークで攻めてくるとしか。

そこからグラウンダー気味の低いパスが、早い弾道で飛び出した。斜め後ろに蹴られたボールは、鷹匠さんの事を知らないとはかりに飛んで行く。何とか対応しようにも、前に出すぎてしまった。

もしかするとそれを狙っていたんだらうか。俺が動きにくくなるように、鷹匠さんが



俺にプレスをかけてくるし、審判に見えないところでガンガン体を押し当ててくる。俺がこの程度のプレスで倒れない事を知っての事か何なのか。

『パスは、エリア内で待つている鷹匠選手ではなく……世良選手が走り込んでいるう！完全にフリーの状態だあ!?!』

「……………」、だつー！

「く…………つそー！

俺がいる所から逆サイド、ゴールネットの左上隅に、世良が放ったシュートは糸を引くように突き刺さった。

——試合が動いた。

それも、鎌学にしてやられた形だ。韓国にもやられた事だが、俺が関与しないエリアでボールを回してゴールまで持つていけば、確かに俺はボールに触れない。が……悔しい事に、鎌学の選手の方がまだ地力が高い感じか。

うーむ、俺が対応されてるつてのが何気に嬉しいのやら悲しいのやら。なんて思ってたら一人、うちの選手の様子がおかしくなった。

まあ、言わずもがな駆の事なんだが。様子がおかしい、というよりは人格が変わったような喋り方になるし、サッカーのスタイルも全く違うものになる。二重人格とでも言えばいいのか。

前半も残り10分程度。

しかし、駆が今みたいな状態になったときには何か起きるっていつものこと。さて、何を見せてくれるのやら。

## 第71話

少し雰囲気がおかしくなった駆だが、残り時間が少なくなつた前半で何かできることがあるだろうか。……いや、今まで駆の様子がおかしくなったことを思い出すと、残り時間なんて関係ないとばかりの活躍を見せてくれそうだ。

で、その気になる残り時間は約6分。

アデイシヨナルタイムを含めるともう少し長いだろうが、駆の皮をかぶつた別人さんには1点でも多く決めてもらいたいところ。

『江ノ高、1点先制点を決められてしまいました。この後どういふ動きをするのかあ！』

鎌学スイーパー国松選手を中心としたDF陣に苦戦しているが……！』

国松さんの嗅覚マジ半端ない。

あれはあれで一種の固有能力だと思つるのは俺だけだろうか。そもそも感覚的にポールの動きを嗅ぎ取つて守備するつて、そこらの警察犬よりも優秀なんじゃない？ いや、言いすぎなのは理解してるけど。

しっかし……韓国戦でやられたことをまさか鎌学相手にやられるとは思つても無かつた。俺の守備範囲外でパスを回してシュートまで持つていく流れ。確かに、韓国戦

には佐伯や世良が出てたし、肌で感じた戦術をそのままそっくり江ノ高相手に使っただけなんだろう。

……俺もサッカー混ぜて欲しいんだが（迫真）

『さあ、江ノ高キックオフ！ ボールは荒木選手に渡り……おっと、逢沢選手がボールを要求しているのか、キックオフの位置からほとんど動いていません！ これはどうした事かつ!!』

大胆不敵も良い所。

が、いきなり中央付近でボールを要求したこともあつてか、相手DFも思考が追いついてない様子。それを知ってか知らずか、荒木先輩が駆にパス。唯一というか、位置的に距離を詰めていた佐伯が驚いたような表情をしているのがよくわかる。

なにせ、自分の存在を無視してることのようにパスを出すのだから、荒木先輩の意図が読めないとともに、舐められたもんだと意気込んでいるのだろう。が、今の駆を相手にしてそんな事を思うこと自体が間違っている。

……駆が豹変するのは前にも経験してる事だと思うが、納得できないでいるのだろうか。もしくはそんな不確定要素を排しているのか。分かんなくてもないがな。まさか二重人格なんて思わないだろうし、そもそも人格が変わることサッカーが巧くなるとか（笑）思ってるのかもしれない。

普通はそう思うだろうが。

『ボールは逢沢選手の足元に収まったまま、ピッチ全体を見渡しています！残り時間が少なくなった前半、どのように攻撃を組み立てていくのでしょうか！』

ゆつくりと、足元のボールを前に転がしながら全体を見渡す駆。

足元を一切見ようとしませんが、今までの駆と違い、ボールと足が一体になっている感覚がある。人が変わったようなサッカーをするときの兆候の一つだ。

そんな駆の顔を遮るように立ったのが世良だ。

未だに疑問を表情に浮かべている佐伯の様子には納得できるのだが、口角を吊り上げていかにも愉しもうとしている感じのする世良は……どうなんだろう。単に駆とのタイマン一対一を望んでいたのかどうなのか。

「さあ、来い……!?!」

『な、なんと逢沢選手、世良選手の足元にボールを当てて華麗に抜き去ったあ！あまりに一瞬の事で、何をしたのか目が追いつかないところでしたっ!!』

意気揚々と駆の前に立った世良だったが、残念。

一瞬で抜き去られて駆の異常さを引き立てるだけの脇役に転じてしまった。それを本人に言うとは、これでもかと言わんばかりに睨まれるから何も言わないが。

それから、他のMFが駆からボールを奪おうとチェックするものの、少し視線を動

かしてパスを匂わせただけでドリブル突破してしまう。薫や高瀬を見て、ほんの一瞬。パスかと迷わせたその一瞬を狙ってのドリブルだ。

分かっているも警戒せざるを得ない。その心理を突いた、まさに心理戦のエキスパート。普段の駆に出来る事じゃアない。

いやあ、事故つてから二重人格になってしまふとは……

『二人、二人……！ どんどんと鎌学イレブンを抜き去っていく逢沢選手逢沢選手！ この独走、どこまで続くというのかあつ!! つ……！ また抜いたあつ!!』

3人、4人！

視線で左右に揺さぶりを掛け、自身は真つ直ぐ前に進んでいくだけ。

佐伯も何とか駆を止めようとしたものの、前後に一瞬の緩急を付けただけで抜き去ってしまった。しばし呆然としていた佐伯だが、ふと思いついたように駆を追いかけた。た。

そりやそうだ。

たった一人が鎌学イレブンの中央を突破しようとしてるのだ。それを止めようとしているのは、普通のサッカー選手としては当然の行為。

駆に合わせてサイドを上がっている薫と高瀬の二人の守備に人員を割かれているせいか、思ったように駆に集中しきれない。

「……うおっ!？」

そんな駆を止めようと、DF最後の壁である国松さんが立ちふさがる。

が、そこでゆとりツク。GKとの距離が空いていた事もあり、余裕をもって国松さんの守備を抜き去ってしまう。最後の意地とばかりに、イエローも厭わんとばかりに後ろからスライディングを仕掛けるものの、予測してたかのように軽くジャンプして躲す駆。

あとはもう、ゴールに流し込むだけだった。

少しフェイントを混ぜ、GKが動き出したのとは逆の方向にボールを蹴る。何とかボールを追って横つ飛びしたGKだが、伸ばした手はボールに触れる事は無かった。

一瞬の空白。

『——、ゴオオオオル!! な、何という事でしょうか! 逢沢選手! たった一人で鎌学イレブンを置き去りにして得点してしまったあ! リスタートから流れる様なドリブル! 誰も逢沢選手を止める事は出来なかったあっ!!』

これで1対1。

駆が今の状態を保ってられるなら、鎌学戦で負けることは無い。

と言うか、ほとんどの高校に負けないんじゃないだろうか。中盤で荒木さんがボールをもつて前線にボールを出して、それを駆が受けてそのままドリブルで敵陣を切り裂

く。

そのままシユートしても良いし、サイドを使ってワイドに攻撃を組み立てても良い。何というか、普段の駆以上に戦術の幅は広がるのは確かだ。

……ただ、何というか、それだと面白くはない。

何といえれば良いのだろう。

ただ、今の駆が駆じゃないという確信があるせいだろうか。

本来の駆の実力でサツカーを楽しんでほしい。駆がシユートを決めてほしいという欲がある。本来の江ノ高の姿で、鎌学に勝ちたい。

「……っふう」

一呼吸。

長く息を吸い込んで、大きく吐き出した。

ちよつと冷静に考えると、いかに自分が変な事を考えてるのかは理解できる。チームメイトが得点を重ね、試合を振り出しに戻してくれたのだ。それを喜ばない馬鹿はいない。

いや、実際駆が点を決めてくれたのは嬉しいのだが。

「おい、不知火。……どうしたんだよ」

「荒木さん……いえ、特に、なんでも」



「おいおい……駆がシュート決めたつてのにそんな不景氣ツラそうな面ツラアしてんじやないよ」

「まあ……そお、つすね」

そう、ぐだぐだ考えてもどうしようもないし、うだうだ悩んでもどうすることも出来ない案件だ。駆の事情もある。……正直、単に俺の我が儘でしかないつてのもあるのだが。

ま、取りあえずは前半。

同点で試合を折り返すことができたのは大きいな。

## 第72話

——解離性同一性障害って言葉聞いたことがあるだろうか。

一般的には二重人格とか、多重人格って言葉で耳にしたことがあるだろう。この障害は、本人にとつて堪えられない状況に陥ったとき、それが自分の事ではないと感じたり、その時期の感情や記憶を切り離して思い出せなくすることで、心のダメージを回避しようとすることから引き起こされる障害だ。

中でも、この解離性同一性障害はもつとも重い症状で、切り離れた感情や記憶が成長して、別の人格となつて表に現れるものだ。

「——不知火。後半も、よろしく頼む」

「……あ、ああ」

今、俺の目の前にいる駆は、その症状に完全に一致してるんだが（白目）

それともなんだ？ 今の駆は高校生になつて中学の頃を思い出してしまった二年生のな感情を隆起させているんだろうか。所謂中二病だが。

俺の呼び方がヤスから不知火に変わつてるのは人格が変わつた兆候の一つなんだろう。そうとしか思えん。いつだか駆が兄貴と巻き込まれた事故で、自分だけ生き残つて

兄貴が死んでしまった……その記憶を忘れようとしてるのか、それともダメージ回避のための自己防衛本能だろうか。

ま……取り合えず、本人に異常がない事が一番だが。

いたって普通にサッカーしてるだけにしか見えないからなあ、普通は。

だが岩城監督の表情は厳しいし、奈々も前半、駆の雰囲気が変わったぐらいの時からハラハラした表情になってたから、もしかするともしかするのかもしれない。

「……では、後半からは火野君と海王寺君を交代します。いつも通り、海王寺君は不知火君のポジションに。火野君のスペースには……兵藤君に下がってもらいましょう。不知火君はCFに。逢沢君は不知火君の後ろ」

「は、はい」

おっと、今までにないポジションング。

マコ先輩を後ろに下げて？ 駆が俺の後ろ？

岩城監督、完全に攻撃する事だけを意識してるなあ。俺の代わりに海王寺先輩が入ったとは言え、マコ先輩を下げてFWの枚数を増やすなんて。

……あれ？ 攻撃、意識してるのか？

俺がFWになって駆が後ろで、マコ先輩が下がって……前線からのプレスを期待してるのか、それともカウンター型にしようとしてるのか。まあ、どこでも良いからボール

を奪ったら前に運んでそのままゴールを狙うという形にしたいんだろう。

前半じゃ駆が1点奪ってるのに、俺を最前線にする理由は分らんが、駆にパサー的な役割でも期待してるのだろうか。

・前半

F W 逢沢

高瀬 的場

M F 兵藤 荒木

M F 沢村 織田 火野

D F 堀川 不知火

G K 紅林

・後半

F W 不知火

高瀬 逢沢 的場

M F 荒木

沢村 織田 兵藤

D F 堀川 海王寺

G K 紅林

「……よっし！ このポジションニングは初めてだけど、岩城ちゃんが言ってるんだ。俺たちは勝つためにここにいる！ ……そうだろ？」

『おっ!!』

激を入れたのはマコ先輩。

やはり、と言うかマコ先輩が言うのと皆の雰囲気が違う。チームの中心だけあって、皆の気持ちをもつにまとめるのが凄く上手だ。

……しかし、駆が俺の後ろつてのがなあ。変、じゃないんだが大変な事になりそうだ。

『——さあ、運命の後半戦！ 鎌学は特にこれといった動きは無いようですが……江ノ高の方は選手交代があったようです！ 火野選手に代えて海王寺選手！ そして、DFとして活躍していた不知火選手は最前線、FWに！ 逢沢選手は少し後ろのポジションに落ち着いていますが、これは後半、どのような展開になるのでしょうか!!』

まあ、俺は基本的に前線でボールを待つて、後ろからのパスを待つていけば良いのだが。同点で折り返してしまった事に加え、後半も鷹匠さんを中心にガンガン攻撃してくるだろうことを考えると、俺もDFに参加した方が良いのだろうか？

……とりあえずは江ノ高の守備陣と駆の様子を見つつ、だな。

後半、キックオフは鎌学からのスタートだ。

同点の状態。ゆっくりと攻め上がってくるのかと思いきや、鷹匠さんがボールを持ったまま真つ直ぐドリブルし始めた。俺がDFからFWに移ったことを良い事に、一気に中央を突破しようという戦法かつ!?

と心の中で叫んでみるものの、実際現実的じゃないこの戦法。

戦法とも言えない、ただの蛮勇としか取られないこのドリブルだが、これがまた鷹匠さんがするから通用してしまおうという難点。なぜこのタイミングで鷹匠さんがドリブルをしたかと言えば、恐らく今のうちの守備力、対応力を見るための策略の一つではない気がする。

実際、向こうの監督も焦ったそぶりを見せてないし、そういう事なんだろう。

そんな鷹匠さんに走り寄ってプレスを仕掛けたのは駆だった。

いつもの駆なら、強引に前へ進もうとする鷹匠さんに押し負けるはずだが、今の駆は何と体をうまく使って鷹匠さんに喰らいついていた。強めに身体を押し当てられても上半身と下半身の体幹を巧く動かし、逆に駆が鷹匠さんにプレスしている。

普段の駆だったら簡単に抜かれてたかもしれないが、ここで時間稼ぎができたおかげで江ノ高の守備陣も態勢を整えられた。

まあ、他にも怖い選手がたくさんいるからの絞りは切り切れないんだが、それでも江ノ高は変則的ポジションで守備を固めている。

「つく……!!」

「いただいたあ!!」

『鷹匠選手、逢沢選手の寄せに溜まらずバックパスを選択……が！　そこに不知火選手が走り込んでいたあ！』

「なんだとっ!?!」

巧い事走り込んでパスカット。

いつも以上に力を込めてスタートダッシュしてしまったが問題ないだろう。

チートと言うか、人間卒業おめでとうなんてネットでタグが付けられるかもしれないがそんなの関係ない。チームのために俺は頑張るんだ！　的熱血な感情はそこまで昂つちやないが、少なくとも負けたいとは思ってない。

カットされたボールを奪い返そうと鷹匠さんと世良が詰め寄ってくる。

前門の世良に後門の鷹匠とか、マジ怖いんですけど。

「う、おおっ!」

「んなっ!?!」

エラシコ、からのドリブル突破と見せかけてのパス！

どこにも視線を向けてないからフェイントミスだと思われるかもしれないが、俺が蹴り出したボールにはそれなりにスピンを掛けていて、ちやうど駆が走り込んでくるであ

ろう所に行くように調整はしていた。

ホンの少し、想定場所からずれてしまったものの、少し驚いたように目を見開いた駆に、半分だけ顔を向けるようにしてニヒルに笑って見せた。

これぐらいお前にだってできるだろう？ と内心ネットリ呟いてみる。

顔は良い感じだからニヒルに笑っても似合っている、と自覚している。ナルシストではない。

意図が通じたのかどうかは知らんが、小さく笑みをこぼした駆は足元に収めたボールを前に蹴り出し、ドリブルを開始。ちようど、俺に張り付いていた2枚すぐに追い抜いていった。

駆のドリブルに合わせてるように、俺は前線へと向かって駆け出した。

一人だけのドリブルだとDFはその一人だけを対応すれば良いのだが、俺が突っ走るとあら不思議。相手は戦力を分散せざるを得ない！ 当然だよネ！

何とか前に行かせまいと世良が後ろから強引にタックルを仕掛けるが、頭の後ろに目が付いているんじゃないかと思うぐらい正確なタイミングでボールを宙に蹴り上げ、スライディングを回避。

もう、あいつ一人で良いんじゃないかな？

……正直言わせてもらえば、少しボールを前に蹴り出しておいて、足だけで世良の



タツクルを受けたと審判に思わせられれば、最低でもイエローは固い。最悪、一発レッ  
ドつてのもあり得るから、今後はそういった技術も覚えていけばいいかもしれない。

まあ、それを本人が許容するかどうかは別として。

驚いた表情で駆を見る鷹匠さん。

啞然とした貌を晒している世良。

攻撃は最大の防御とも言ううし、ここからはガンガン攻め上がってみますかね。

## 第73話

後半開始4分。

駆の擬似単独ドリブルでの中央突破。

俺はほぼ横並びで前線へと走りながら駆のドリブルを見ているが、やはり人格が変わったときの駆のドリブルは一味どころか二味以上にキレが凄い。何と言ってもボールタッチの回数が半端ない。

これだと無理矢理後ろからボールを奪いに行こうとしても、ファール覚悟での突撃にならざるを得ない。鎌学側のハーフコートでファールを取れたら非常にでかい。フリーキックは誰が蹴ることになるかは微妙だが、勝ち越しを狙うには持つてこいだ。

右を上がっている薫を見てパスを出す雰囲気醸しておいて、足が少し止まった際にドリブル突破。後ろには荒木先輩に横には俺。もしボールを零してしまつたとしてもいつでもカバー出来る。

前に俺が一人で鎌学イレブンをドリブル突破したときは、白い線に沿うように前進していったが、今回の駆の動きは味方全員の動きを加味してのドリブルだ。身体能力ではなく、純粋なテクニックでのサッカー。

これが人を魅惑しないわけがない。

『逢沢選手、鎌学イレブンを物ともせずどんどん前に斬り進んでいくうつ!! 一人二人と選手を抜いて……! つ、遂にバイタルエリアに侵入したあ!!』

DFを抜いて、後はGKと最後の一对一としゃれこもうという所だが、そんな駆の前に何とか追いついた国松先輩の姿が。

「ちつくししょう……! たった、一人にやられてたまるかってんだあつ!」  
気迫。

が、すでに何人ものDFが抜かれたこともあつて非常に焦っているのは明確だった。ほぼ横並びで攻め上がっている俺と駆。二人に注意を払わないといけない現状。駆よりのポジショニングで守備するしかない国松先輩。そして前に出ることができずゴールを守る事に専念せざるを得ないGK。

すべてが、駆にとって都合な状況だったのだろう。

『な……な、逢沢選手つ! これはミスキックでしょうか!? 前に蹴り出したボールは少し長すぎでは!』

前にボールを蹴り出した駆だったが、実況の通りボールは少し長すぎる。

ほぼほぼ駆とGKとの真ん中に行くようなボールの蹴り出しをしてしまったのはシュートすることもできない。と思うだろうが、蹴り出されたボールの回転は逆回転。

つまり、ボールが地面に落ちた瞬間、強烈な逆回転によって蹴り出された方向とは逆の方、GKではなく駆の方に向かってボールが転がり出した。

『な、なんとこれはっ!? 回転が掛かったボールは不規則に動き、今逢沢選手の足元に収まったあ!!』

——結局一人でドリブルしてしまった形になった。

最後に至っては自分から自分にパスを出すような不可思議な形になっていた。しかも、パスを出した瞬間に駆の能力値が変動。駆には悪いが、能力値だけ見ると急激に弱くなってしまったとしか言いようがない。

が、そんな駆でも瞬間的な閃き力と言うか、動的な直感が非常に高いというか。

逆回転を掛けた本人だからこそ、大体どのあたりにボールが転がっていくのかはある程度予測が付くんだろうが、それでも完全にそれを把握しているわけじゃない。それなのに、駆はボールを蹴った直後に真っ直ぐ走り出し……鎌学GKよりも先に、少し足を延ばしてボールをトラップしたのだった。

『っ、繋がったああっ!! ま、まさに自分から自分へのラストパス! DFのいない、開いたスペースを狙っての虚を突くドリブル! これには鎌学GK五条選手も対応がおくれてしまったあっ!!』

ワンタツチ。

確かに能力値は戻って、本来の駆が今サッカーをしているんだろう。

が、明らかに能力値が跳ね上がる前の駆よりも巧くなってる。別の人格の影響が出ていると言えば聞こえは悪いが、ラストパスを受けたボールタッチの、その柔らかさがそれを物語っている。

——熱が籠っている。

それを見るだけで胸が熱くなるような、腹の奥底から自分でも抑えようのない熱気が、感情として湧き上がってくるのを抑えることができない。怒りでも悔しみでもなく、ただただ嬉しくて、嬉しくて……

「ああっ……いー」

『ゴ、ゴオオオーール!! 2対1!! 後半入ってすぐ、逢沢選手が並み居る鎌学選手を一人でドリブル突破し、そのままゴールを決めましたあっ!!』

駆の変貌ぶりか、それともたった一人に出し抜かれてしまったせいか、鎌学の選手たちは呆然とした表情を浮かべたまま固まっている。

一瞬の静寂、のち爆発的に聞こえてくる歓声。

日本代表として活躍した選手の一人でもある駆が突出したテクニクを見せたんだ。これで沸かないわけがない。しかし……二列目の荒木先輩にボールが渡った瞬間から攻撃に切り替えられる今の江ノ高の攻撃スタイルは、ある意味完成している。

逆に、荒木先輩を潰されてしまうと中盤からのパスが期待できなくなる弱点もあるが、そこは織田先輩やマコ先輩に頑張ってもらうしかない。それか、DFからのロングパス、一気にカウンターと言う戦術に切り替えるか。

ま、何はともあれ勝ち越せたんだ。

後はこの1点を守り抜けば良いんだろうが……鎌学イレブン、特に鷹匠さんと世良辺りはこのまま試合が終わることを良しとしないだろう。残りの時間は体力・時間の限り乱打戦になるに違いない。

だって、駆を見てたはずの鷹匠さんが俺の事凄く睨んできてるんだもの（白目）

それにしてもあの繊細なボールタッチには驚かされたが、それをすぐ横で見、肌で感じる事が出来たんだから最高だ。駆には申し訳ないが、代表でプレイしてる時以上の輝きっぷりだったし。

ボールタッチを増やすことが出来れば、それだけで簡単なフェイントになるし、ボールも奪われにくくなる。良いこと尽くしじゃないか。

「駆！」

「あ、ヤス！」

「いやあ、凄かったよ。一人で持っていくなんてな」

「あ、あはは……」

何とも言えない表情で乾いた笑みをこぼす駆。

さっきの自分の状態の事を覚えているんだろうか？　なら、完全な二重人格じゃあなののか？　しかし、サッカーの時にだけ出てくる人格……サッカーだけだったって話だが、深刻なまでの状態じゃないことを喜ぶべきか？

取りあえず、あまりその事を刺激しないようにはしておこう。

「こつちが勝ち越したから、鎌学も躍りになって攻撃してくるだろう。でも、俺たちは俺たちの仕事、鎌学に負けないぐらいガンガン攻めて、逆に突き放してやろう。そうじゃなきゃ、鷹匠さんが怖くてたまらん」

「うんー」

「よし。後は、荒木先輩がうまい事パス出してくるのを期待しよう」

チラと後ろにいる荒木先輩を覗き見る。

軽く太腿を擦ってストレッチしている先輩は俺の視線に気づいたのか、怪訝そうに眉を顰めたのだった。何で疑惑に思われてる感じになってるんですかねえ。

しかし、鷹匠さんの攻撃を抑えないといけない堀川先輩と海王寺先輩はご愁傷さまで。できるだけ俺も守りに参加するようにするけど、なるだけカウンター重視でいこうかね。

一番の難点は、国松選手の守りを抜かないといけないって事ぐらいか。

さつきも言った通り、江ノ高が勝ち越してしまったからには鎌学の攻撃がさらに激しいものになるだろう。鷹匠さんが俺の事を睨みつけてくるぐらいには機嫌も悪くなってるし。

『後半始まってすぐに勝ち越した江ノ高ですが、鎌学の選手たちがこれに黙っているはずがありません！ 気を緩めずに追加点を狙ってほしいところですよ！』

言うは易しつてやつだ。

まあ、こつちが追加点を決めたとしても鎌学も得点を決めてくるだろう。

そこは李先輩からゴールの守護を任された紅林先輩の活躍を期待するしかない。鋭い眼光からの振り下ろしヘディングシュートとか怖すぎワロエナイ。

しかし、これが鷹匠さんのパスをカットしてからそのままシュートに持ち込んだつてのはデカイ。後半始まって一本目のシュートだし、そりゃ鷹匠さんも眼光鋭くなりますわ。



## 第73. 5話

「な、なんなの……あの子……」

「なっ！ 言った通り凄い奴だろ！ あの不知火つての！ いやあもういつもあいつには興奮させられるからよ、どうしてもあいつばっかり追つちやうんだよなあ」

「……凄いつてもんじゃないわ。日本代表に選ばれてるぐらいだからそれなり、とは思ってたけど」

一組の男女の視線の先には、鎌学のハーフコートでしのぎを削りあっている鎌学と江ノ高の選手たちの姿がある。その中でも特に縦横無尽にピッチを走り回っている不知火の姿があった。

つい先ほどは逢沢選手が単独でドリブル突破からの同点弾。

そして、後半開始早々には不知火選手が鷹匠選手のバックパスをカットし、すぐさま逢沢選手にパス。そこからのドリブルも見ごたえあつたし、シュート直前に魅せた、まるで自分から自分へ出したかのようなラストパスも見ていて熱くなったものだ。

そして追加点は勝ち越し逆転のシュート。

これを一人の選手が為したのだからその選手、逢沢駆君にご熱心になってもおかしく

はないんだけど。

「逢沢君もここぞつてところで輝きを見せてくれるけど……」

「そうなんだよつ！ 彼も彼で非常に面白いプレイを見せてくれるんだが、彼でも、荒木君でもない……そう！ 一番はやっぱり不知火君の非常識さだ！」

「非常識……そうね、非常識って表現はしっくりくるわ」

サッカーは陸上競技ではない。

故に、短距離走の記録も無ければ長距離走の記録もない。陸上競技で重要視されるタイムはそこまで注目されない。だけれども、不知火君を見ていると彼の走力そのものが気になってくる。

まあ、今後彼がサッカー選手としての人生を歩むことになれば自ずとテレビ番組を取り沙汰されるでしょうが。

「速過ぎるし、何よりあのスタミナ。全然無理してるようには見えないけど」

「そう、それが彼の特徴の一つだ。足が速いのはもちろんの事、それを維持し続けることが出来るだけのスタミナ……それだけでも相手にとっては十分厄介な相手だろうけど、彼の場合——」

「——確かな巧さがある。それも、日本代表入りを認められるだけのテクニクが」  
こんな選手を相手にしなければならぬ謙学の選手たちはご愁傷さま。

そして、これほどの逸材が将来の日本のサッカーを明るくしてくれるだけじゃなくて、確実に日本代表の選手として活躍してくれるだろうと言う期待がある。

「そう言えば少し前に聞いたんだけど、彼って本当に代表で海外に撃たれたの？」

「……本当さ。だからこうして普通にピッチに立って、チームのために活躍してる姿が信じられない。まあ、無事だったってのには安心してるけど」

「そう……」

日本代表として海外入りしている選手の一人である不知火選手が撃たれたと聞いたときは驚いたものだ。とりわけ、これからの日本を背負っていくことが出来る選手として持て囃<sup>はや</sup>され始めた頃、ちょうどそんな頃合いだ。

他にも韓国代表の選手もテロに巻き込まれたと聞いているが……撃たれたのは日本人選手一人だったらしい。しかも、画質は荒いものの、その時の様子を捕えた動画がサイトが上がっていたのだから相当波紋が広がったものだ。

数人がかりで拘束されているテロリストらしき男が胸元から何かを取り出し、放り捨てた。それ——恐らく手榴弾——を不知火君と思わしき人物が駆け寄って拾い上げ、思いつ切り斜め上に放り投げたのだ。

それからほぼ一秒。大きな爆発音とともに画面が揺れる。

近くにいた人たちの者と思われる歓声が上がリ、画面に映っている人々が嬉しそうに

身振り手振りしているのが分かったが、歓声の中心にいる人物が片膝をついてしまったのだった。

それを見て撮影者が慌てて駆けだしたところでその人物は見切れてしまい、その数秒後に動画は終わっている。

——この動画の再生回数は、投稿日から数日で全世界で再生されることになり、既に数百万回を記録している。

「日本を代表する若者、勇気ある日本人、若き侍に最後の侍ね」

『とあるホテルで買い物を楽しんでる最中に起きたテロ。男が投げたグレネードが爆発する寸前、勇気ある日本人の学生がグレネードを外に向かって投げた。彼は、直前にテロの男によって脇腹辺りを銃で撃たれていたにも関わらず、痛みを屈することなく私たちに救出するための最善の手段を取ったのだ！』ってその動画の説明文にあったね。それでそんなタグが付いてるみたい」

「日本のイメージ向上には良いかもしれないけど……」

私は銃で撃たれるなんて事を経験したことが無いから何も言えないけど、あの動画の終わり際で見えて例の人物の足元には赤い液体が見えた気がした。つまり、それぐらいの出血をしているという事。

そんな状態であれだけの動きをしたのだ。当然、かなりの無茶をしただろうし、相当

の痛みを感じたはず。だからこそ気が抜けた直後に膝をついてしまったんだろうけども。

「ま、彼が今無事サッカーをしてることが何よりの事だ」

「……それもそうね」

「それもそうだが、彼については高校以前の情報が一切ないんだ」

「……情報が無い？」

熱心にピッチを駆ける不知火君を見つつ、勿体ぶったように話し出した彼の言葉を反復する。

「そうなんだ。不知火君がサッカー選手として活躍し始めたのは良いんだけど、これほどまでの技術を持つてるんだ。絶対小さい頃からサッカーをやっていると思ってる情報収集したんだけど、集まったのは江ノ島高校に彼が進学して以後の情報のみ。中学までの彼の事はまったくわからなかったんだ」

「へえ……貴方が情報を集められないなんてね」

「だから、僕も驚いてるよ。まるで、高校からサッカーを始めましたと言わんばかりの経歴なんだ。これが本当だったら彼はどれほどの才能を秘めてると思う？」

「ちよ、ちよつと！ さすがにそれは信じられないわよ！ ……不知火君が高校からサッカーを始めた？ 冗談にしたって笑えないわ」

試合から視線を外し、大袈裟に溜息を一つ漏らしながら彼を見やる。

当然、試合から一切視線を逸らしていない彼の横顔しか見えないわけだけど、その表情はどう見ても真剣そのもの。まさか嘘を付いているとは思えないし、冗談を言っている顔にも見えなかった。

「……本気で言ってるの？」

「ああ。本気さ。もし今度彼に直接インタビューする機会があつたら聞いてみるつもりさ。もしかして高校生になってからサッカーを始めたんですか、ってね」

「もしそれが本当だったら……大変よ？」

「ああ、それでも。僕は彼に聞いてみたい」

「……………はあ」

結局、彼がこつちに顔を向ける事は無かった。

試合が終わるまでの最中、真剣なまでにその動向を見守っていた。

一度でもこつちを見てくれてもと勝手に期待してしまった自分が馬鹿だった。彼が何かにハマってしまったら、途端他の事には気が向かなくなってしまう事は高校時代から知っていたのに。

「はああ……」

「ん？ どうかした？」

「……いいえ、なんでもありませんよ」

「え？ え、そういう時って絶対何かあるんだけど。あれ？ 僕何か変な事言つたかなあ」

「ええ、ええ。特にこれと言つて何も言つてませんとも。ええ！」

「あ、その口癖！ 変な事言つてごめん！」

「……謝るんだつたら少しはこつちを見てください」

「え？ ごめん、今なんて——」

「——何も言つてません!!」

「え？ ……あ、えっ!？」

——結局、そのまま試合を最後まで見ずに帰つてしまつた私のもとに届いた彼からのメール内容は、3対2で江ノ高が勝つたという事だけだった。

同点に追いつかれた江ノ高が、特に不知火君がどれだけ凄い活躍をしたのかが明確に記されているメール。事実盛り込まれた彼の熱意の塊が大いに文章に影響を与えており、ほとんど短編小説に近い出来になっていた。

ただ、そこに彼の人柄を垣間見ることが出来た私は、少しだけほっこりしてしまつたのは誰にも言えない秘密の一つである。

## 第74話

勝った。

俺たち江ノ高は鎌学を3対2で下した。

……下したのは下したが、鎌学の選手たちも巧くなつてて相手にするには大分骨が折れる感じがした。それもこれも、鎌学の選手が何としてでも俺にボールを持たせたくないのか、同点の時点で俺がボールを持ったときなんて3人ぐらいが一斉にかかつてくるものだからさすがに驚いてバックパスせざるを得なかった。

が、中盤にいるのは荒木先輩。

しかも攻撃も守備もオールラウンダーにこなせるマコ先輩に、ピッチ全体を見通すことが出来、カウンター攻撃の要として大きな役割を果たしている織田先輩が中盤にバランスを取っているのだから安心して任せられるつてもんだ。

唯一の問題は鎌学の攻撃に耐えられるかどうかとところだったんだが、予想以上に先輩方が頑張ってくれたおかげもあり、1点決められた以外は守備が崩壊することもなく、江ノ高が勝ち越したままで勝利を収めることが出来た。

いやあ……攻撃力が高いチームにあつたらどうするかを考えるしかないが、サツ



カーつてのはチームの総合力のぶつけ合いでもあるが、運も必要になってくる。だから、今回俺たちが勝ち上がったのは単に運がいいとしか思っていないんだが……

ま、それは今後の課題として考えていく以外に他はない。

……が、人の少なさを盾に守備力の低下を嘆くのは筋違いかもしれない。本職のDFには劣るかもしれないが、スライディングと体の小ささを生かした小回りで守備をする堀川先輩に、体の大きさ、ガタイの良さで前衛的な守備を見せてくれる海王寺先輩の事を考えるとバランスは悪い訳ではないし。

ここは今後の江ノ高に入学してくる新入学生の素質にもよるか。

兎に角、今は現状のメンバーで守備力・攻撃力を高めていかなければいけない。

……その両立が出来ればもっと簡単に全国に行くことが出来るのかもしれない。

ま、全部夢物語でしかない。

それぐらいの戦力が整うのはやはりクラブで、何と言っても世界中から才能が集まる世界のクラブは凄いのだろう。そりゃあ、日本の高校生なんかは何も言えなくなるぐらいテクニクが洗練されてるんだろうな。

「おめでとおおー！」

「おわっぶ………！ 何すんだよ母さん」

「何って……せっかく全国大会が決まったんだから、そのお祝いよお！」

「まったく、と一言呟く。」

しかし、何気に思い返してみると高校生で全国大会に出るってのは凄いいことなんだろう。変に日本代表に選ばれてるせいで感覚がおかしくなってるんだらうかと自信がなくなる。

そもそもが友人からの誘いと、人員不足からサッカーを始めたような男だ。

あまり純粋な、誠実な理由じゃないから表だって言えないってのが悩みだが、経験則として大人になって数年すればポロリと言ってしまうだろう。

これは俺が言おうが誰が言おうが変わることがないから別に良いだろう。

世間で俺の実話が作り話かどうかが議論されるだけで、生活するには関わりないのだから。

「えへへ、今日は好物の麻婆豆腐作っておいたら、早く手洗い洗って夕食の準備してね」

「お、マーボーは良いねえ！　すぐ行く！」

生まれた家は違うと言うのに、前世と今世も俺の好物が変わらず麻婆豆腐ってのはどうなつてんだか。もちろん四川風のマーボーと言いたいところだが、そこまで辛いものを御所望したわけではないので、CMで簡単に作れるようになる材料ぐらいの辛さだ。

これがまたご飯に合うのなんのって……

——ピンポン

(ん、こんな時間に誰だ？ 郵便か?)

自室で制服から部屋着に着替えつつ洗面所に向かう。

そのまま手を洗って飯でも食おうかと考えていたのだが。

「康寛！ お友達が貴方の事訪ねてきたんだけどっ！」

「あいよお！」

飯を食いたかったのに俺の友人とは(憤慨)

もしこれで男友達が目の前に出現したら一発殴ってやろうと思う。いかに善意で俺の目の前に立っていたとしても、俺の腹の虫が治まらないのだ。俺が夕飯を腹に収めるまではなあっ!!

「お前はもう……亡くなっている」

とか有名な台詞でも宣ってやろうかと一人空想しながら顔をのぞかせ——

「……はっ!?!」

「やっ☆」

——そこにいたのは何と群咲だった。

それ以外に俺の知り合いと言う知り合いの姿はなく、チートをもつてしても彼女以外に人の気配を感じない。本当に彼女一人で来たのだろう。が、何故俺の家まで来たのか

が理解できん。

……そもそも、俺の実家の住所話した記憶は無いんですがそれは（白目）

「来ちやっただ☆」

「いや、来ちやっただって……誰かに住所でも聞いたのか？」

と、口にしなから思い返してみるが一切合切記憶にない。

「駆つちにね」

「あ、なる。で、何で俺ん家に来たんだ？」

「え？ 特に何も無いけど」

「は？」

何変な事聴いてると言わんばかりの即答。思わず聞き返してしまった俺は悪くない。

「やだなあ、用事でも無いと来ちやダメなのお？」

「あ、いや、そんなこたあないけど……」

「でしょ！ じゃあ、失礼しまーす！」

「え……え、上がつてくのか！」

何たるバイタリテイ。

さすがにここまで積極的に来るとは全く考えてもなかった。そもそも群咲の事自体

忘れてたし。しかしなんでまた駆に住所を聞いてまでここに来たんだろうか？ 群咲自身、日本女子代表としての練習に参加してると思うし、それを考慮しても結構忙しい毎日の感じがするんだが。

なんてグダグダ考えている俺を知ってか知らずか、群咲は無遠慮ともとれる勢いで家に入り込んで両親に挨拶し始めた。父さんはドギマギし、母さんはかなり嬉しそうに笑顔を浮かべては俺をチラチラと見つつニヤついている。

……これを俺はフォロウと言うか、後で誤解を解こうとしても「はいはい分かってますよ」と言われてあしらわれるに違いない。なんて傍迷惑な。

——それからが大変だった。

何がと言え、我が両親が。

テンションが上がっていつも以上に酒を飲む父さんに酌をしつつ、母さんとガールズトークに花を咲かせている群咲。俺はと言えば一人静かに夕飯を食いつつ3人の様子をただただ眺めていることぐらい。

俺も父さんみたいに大っぴらに酒を飲めるんだったらそつちに逃げてもよかつたんだがなあ……

「——もう、そろそろ9時になるけど、大丈夫なのか？」

「んー……そろそろ帰ろっかな。今日は凄く楽しかったよ！ ありがとっ！」

「舞衣ちゃん！ またおいでね！ いつでも来て良いから！」

「そうそう！ 舞衣ちゃん可愛いし、なんだったらうちの康寛のお嫁さんにも」

「ば!? 変な事言ってるじゃねえよ！ そもそも彼女彼氏の関係でも何でもないんだから！ 群咲に失礼だろ！」

「あら？ そうだったの？ いやんもうごめんね舞衣ちゃん」

「いえいえ、全然気にしてないですよ」

本当に見ててひやひやするんだが。

何故ここまで俺以外の皆はアグレッシブなのか。俺氏困惑以外の何物でもない。それでも、群咲みたいなかわいい女子と一緒にいられて嬉しいと思ってるのは確かだ。嬉しくないわけがない。

で、近くだったら送っていくと言った俺に対し遠くだから大丈夫と一人で帰っていく群咲の後姿を見送っていると、どこからともなく視線を感じ取ってしまった。こんな時間、こんな人？ と思いつつ周囲を見渡してみると、何時ぞやのパパラッチらしき男性の姿が。

よくまあ、こんな時間までお疲れ様ですとしか言いようがないのだが、その手に持っているカメラと、それが向けられてる先にいるのが俺と群咲だと分かった瞬間、勢いよく後退。

音をたてずに一気に後退したことにより、カメラの撮影範囲から逃れることは出来ただろう。実際、カメラを構えようとしていた男性は、いつの間にか消え失せてしまった俺の姿を探すように周囲を見渡しているし。

……もしかしたら、もう一枚は写真を撮られてしまったのかもしれないが、別に俺にとって困ることは無い。まるで彼女のような扱いをされたら、さすがに群衆が困るだろうが。

ま、できるだけ俺が写真を取られることが無いようにすれば大丈夫だろう。

……本当に大丈夫かな。

## 第75話

さて、選手権で見事優勝に輝いた俺たち江ノ高は全国大会に駒を進めたわけだが……今度は全国の強豪校を相手に勝ち進んでいかなければならない。前回は日本代表に選ばれ、出場していたこともあってこつちに専念できなかつたという思い出がある。その悔しさをばねに、これからの試合を勝っていきたいものだ。

……なんて、誰に聞かれてもすぐ答えられるようテンプレを考えておくのは悪い事だろうか？

「それでは、全国大会に向けてのミーティングを開始します」

『はいっ!!』

いっつになく気焔の籠もった掛け声が窓を震わせた。

特に李先輩なんか、全身から気が立ち上がっているような幻覚さえ覚えさせられる。前回、選手権決勝では手首の怪我で休養せざるを得ない状況になってしまったのが悔しくてしようがないのだろう。

もし俺も、銃で撃たれた怪我の完治が遅れて試合に出れないってなったら大分悔しがっていただろう。それでもし負けでもしていたら……こう、握り締めた拳を叩き付け



たくなるような感情に囚われそうだ。

「正直、現状の皆さんでも全国の強豪たちを相手にしても通用する、どこるか勝ちを奪い取れるでしょう。しかしながら、サッカーと言うものは試合中に何が起こるかわかりません。加えて、本当の強豪校はどんな状況になっても諦めず、貪欲にゴールを狙ってくるでしょう。ですが、皆さん……忘れないでください。私たちは確かに相手に勝つためのサッカーをしますが、何よりも……誰よりもサッカーを楽しむと言う事を忘れないでください」

「……ぼ、僕は、毎試合2得点しますー!」

監督の言葉が区切れるのとほぼ同時に、駆の唐突な宣言。

その言葉に誰もがキョトンとしたような、呆けたような表情をしているが、いち早く正気に戻ったマコ先輩が駆の肩に腕を回した。

「あつはつは! 言うねえ駆う! お前には期待してるぜ!」

「てめえ……良いところ取りしやがって! 俺だつて決めてやるぜ! 何だつたらお前と不知火なんかより決めてMVPに選ばれてやる!」

「……あ、俺つすか?」

「な、何自分関係ないみたいな面してんだ! 何としてでもお前より活躍するからな!!」

「あ、はい。頑張ってください」

「クキイイイイ!?!」

無関心、からの奇声。

当然荒木先輩が発した声だが、その金切り声にも似た叫び声を皮切りに皆が笑い出し、そして皆が考えている目標を語り出した。

ある者はチームのためDFを頑張るとか、スライディングしてでもボールを奪うとか、サイドを存分に生かしたボール運びをするとか。

「俺は……代表に選出されるためにも、チームの皆のためにも……絶対に……絶対にゴールを守る。だから皆。後ろは俺に任せてほしい」

『…………おうー』

李先輩の熱い言葉に、俺たちは感無量としか表現できない。

いやあ……常々クールな見た目の実、内心はかなり熱く滾っている男だとは思っていたけども。まさかここまでとは。チームの士気向上にこれ以上ないぐらい貢献してくれる、まさに精神的要の一人である。

後は俺がFWになった時とか、駆や荒木先輩がゴールを量産すれば問題なし。

場合によってはサイドから薫の突破、高瀬の長身を活かしたヘッドをさせれば良いだろう。カウンターを期待するんだったら薫の方だが、混戦時においては頭一つ抜け出ている高瀬には期待せざるを得ない。

「さて、全国大会では日本代表を経験している選手が所属しているチームは多くあるでしょう。鎌学を相手に二度も勝利を収めた君たちに言う事ではないですが、これからも厳しい戦いは続くでしょう。ですが、先ほど言った通り……楽しんでサッカーをしましょう！　以上です！」

『はい！』

——それから久し振りの紅白戦。

スタメン組の連携を深めるための試合をしたり、途中からは戦力を分散させてみたり、兎に角身体を動かした。俺もDFだったりFWだったりで大忙しの一日を過ごすことになったし。

で、今日の練習が終わり、ストレッチを少しして解散になったのだが、俺は岩城監督に呼び出されることになった。

「失礼します」

「やあ、今日もお疲れ様。ささ、ここに座って」

「はあ……」

いつも通りの笑みを浮かべている監督の様子から、別に悪い話ではなさそうだと推測。基本的にはサッカー関連の話をしてくるとは思うが……

「今日お呼びしたのは、良いサッカーのDVDを入手したからなんです」

「お、今度は誰を見れば良いんですか？」

「はい、これなんですが……」

「えつと……クラシコ？」

監督が座っている椅子の横に置いてあった鞆の中から取り出されたDVDを手渡された俺は、すぐにそのDVDのタイトルを確認。テレビか何かをダビングでもしたのか、パッケージには何らサッカー関係だと分かるものはない。

ただ一言、マジックペンで「クラシコ」とだけ記されていた。

「クラシコって何ですか？」

「クラシコはスペイン語で『伝統の一戦』を意味しててね。スペイン・ダービーとも言われているんだけど、あのスペインの強豪、バルセロナとレアル・マドリードの試合がこのDVDの中に入ってるんだ」

「はあ……で、今度はこれを見て来れば良いんですね？」

「そうです。今の君にならこの試合が非常に大きな意味を持つことになるはずですよ。それだけ多くの事がこの一戦を通じて知ることが出来ますから」

「そうっすか……」

やたらと自信満々な様子。

ここまで推すって事は監督も一度は目を通したんだろうか。いや……海外の強豪の試合なんだから岩城監督はもう見てるに違いない。

で、日本代表として海外に試合を経験しに行った俺に見てほしいと。まあ、確かにサッカーが分からない状態でこのDVDを見てもあまり面白いとは感じなかったかもしれない。

取りあえず、今までと同じように家に持って帰ってみることにしよう。

……前みたいに寝不足になるのが目に見えてるなあ。

——で、結局夜中までDVDを見てしまった俺は、何とか寝不足にならずには済んだが、内容が面白すぎて翌日の授業の内容の方には一切集中することは出来ませんでしたとさ。

## 第76話

「ああー……眠い」

「また？ 変なの見てるんじゃないよね？」

「バツカお前、さすがにこんな大つぴらにエロイもん見てるなんて言うわけないだろう。てか、そういう事聞いてくるって事はお前が昨日変なもん見てたんじゃないのかあ？」

「ちよ!? そ、そんな事ないよー」

寝不足にはなつてないが、眠い事には変わりない（矛盾）

昨日監督から渡されたDVDを夜中まで見てしまったせい、少しだけ眠い。いや、これは感覚的なものだろう。チートを得る前は普通の体だったからその時の感覚が強く出てしまっている。

まあ……悪い事ではないんだろうが。

しつかし海外のサッカー……それも強豪クラブのぶつかり合い、それはもう凄いとしか言いようがない。お互いの意地と意地のぶつかけ合い。今まで培ってきた技術、戦略のぶつかけ合いは見ているだけでも熱くなれるものだった。

いやあ……こんな良いDVD見せてくれるとは流石監督！ カッコいい！ とか褒

めてやっても良いだろう。熱くなりすぎて夜眠れなくなったと愚痴を零すのも良いかもな。

小柄だけど持ち前のテクニクでドリブルをし、敵陣をガンガン前へ前へと切進んで行く姿に熱くなったし、逆サイドからのパスをダイレクトでシュートした姿はまさに圧巻。

あれがレフト・ショットガンと言われている理由なのかと、実況を聞きながら納得してしまった。

だがしかし、あれだけのモノを再現するとなると非常に厳しいなあ。

高校生にもなればある程度体が出来上がってくるわけだが、それでも肉体を全力行使してサッカーをするにはまだ足りない。いや、俺の肉体はチートのせいもあつてか完成しているような気はするが。

まだ成長の余地を残している皆、そして技術的にもまだまだ伸ばせる部分があるから、どんなサッカーをするにしても経験が足りてないのは紛れもない事実だった。

「あぁー……俺もあんなサッカーしてみてえなあ」

「え？ あんなサッカーって？」

ボソツと呟いた言葉だったが、駆の耳に入ってしまったらしい。

何気に、独り言ほど聞かれて恥ずかしいものはないが、何とか誤魔化すか。

「あ、いや、昨日サッカーの試合見てただけだな。それがまたすげえ面白くて」

「へえ、そんなに面白いんだったら僕も見てみたいな」

「ああ、じゃあ監督に言ってもう一日貸してもらえよう頼んでみるか」

「え!? 岩城先生から借りてるの?」

「お、おう……見ると良いって言われてな」

まさか駆がここまで食い気味に聞いてくるとは思ってたんだが。

内容よりも岩城監督の方が上なのか? いや、監督がつて部分に驚いているだけか。

何気に、自分に対してはストイックそうには見えるが、逆に生徒やそれ以外の人には優しそうな人だからなあ……相談すれば普通に貸してくれそうだけでも。

それは良いとして。

今日一日の授業が終わって放課後、練習になったらできるだけの事をしてみよう。

——あまりにつまらない授業は少し寝てしまったが、何とか一日の授業をやり切るこ  
とが出来た。さすがに高校1年生程度の問題は問題にすらならない。化学なんて簡単  
すぎて寝てしまったが……スイヘーリーベを呪文のように唱える授業で寝ないわけ  
がない。無いったらない!

一応、寝てた罰として質問はされたが、全部答えたから良しとしてくれ。



……それはそれで生意気な生徒だと思われてるかもしれないが。

教室の掃除やら日直やらの仕事をこなして、さあサッカーだ。

昨日見たDVDの内容の中ですぐにできそうな事と言えば、ボール運びだろう。さすがにシユートの精度やらロングパスの精度の向上はもう少し練習を重ねなければどうしようもない。

が、パスを受けた時のボールの出し位置……トラップの技術を高めることでファールがもらえるかどうかが変わってくるわけだ。

例えば、足元にボールを収めた状態でスライディングされたとして、相手が相当巧い選手だったらしつかりとボールに足を当ててくるわけだ。これがどういう事かと言うと、ただ攻撃の芽を潰されただけでなく、ファールを奪えないどころかそのまま相手のカウンターに繋がられてしまうと言う事。

逆に、相手の意表を突くように少し離れた所にボールを出すことでスライディングされたとしても足にひっかけ、ファールを奪う事が出来る。しかも、うまく妨害を避けた時には少し前に出したボールがちょうど良い所にあるのだから、そのままドリブルをすれば良い。

利害を一举両得したような感じの技術。

かかってくるならかかってこい。カード覚悟でファールを取りに来るなら受けて立

つと言わんばかりのドリブルには途轍もなく熱を感じたもんだ。あんな魅せるドリブルなんて中々見れないだろうし。

……いやあ、俺もあんなドリブルしてみたいもんだ。

もしや岩城監督は俺にあれぐらいのドリブルも出来るよね？ っていう無言の圧力を掛けてきてるんじゃないかな。もしそうだとしたら監督、鬼畜！ とでも叫んでいらぬ誤解を招いてやる。

「そ、そう言えばヤスって……す、好きな人っているの、かな」

「はあ？ ……え、好きな人？」

「う、うん」

——驚天動地はここに極まれり。

まさか駆から恋バナを振ってくるとは想像したことも夢に見たことも無い。奈々の相手で一杯一杯になって周りの人の事はそこまで考えられないような状況に陥ってると思っただが……少しだけ、前進したのだろうか。

しかし、好きな人ねえ……

改めて考えてみる。俺の身近にいる女子を思い返してみると、駆と親密な関係になっている奈々と、つい最近うちに襲撃しに来た群咲が一番仲が良いのか。それ以外の女子だと単なるクラスメートとか、それぐらいしか思い浮かばない。

「いや、好きって言うほどの人はいないなあ」

「そ、そっか……そうなんだ」

「おいおい、俺に好きな人がいなかったらどうだつて言うんだよお。じゃあ、駆の好きな人の事でも聞いて良いのかあ？」

「ちよ、ちよ!!? ぼ、僕の好きな人の事つて……っ!」

「いやあー……さすがにその反応は無いわあ。多分、結構な人が駆の想い人、分かつてると思うぜ?」

「ええええっ!?!」

顔を真っ赤にして驚いている駆だが、今更である。

そもそも思春期真っ盛りの高校生。恋バナには目敏いし、駆に至つてはボオツとしてると、自分でも分かつてないのか良く奈々の事を目で追っている。それを周りの連中の誰かでも見ればすぐにわかるだろう。

あ。まあ美島の事見てるよ、と。

お陰様でブラッククローヒーが甘くてしようがないという事象は多発してるんじゃないかな。誰が、とは言わないが、近くにいると胸やけしそうになる。それだけ奈々の事を愛してるつてことですか（ニッコリ）

「ほら、赤くなつてないで行くぞ。学校近くまで来たつてのに、好きな人の話をして遅

刻なんて笑い話にしかならないからな」

「あ、ちよ、ちよつと待ってよ！」

しつかし、本当に駆を弄るのは楽しくてしょうがない。

……よく荒木先輩が駆の事をからかっているのを見るが、これは確かに病みつきになっても可笑しくないと自覚してしまった朝だった。

## 第77話

さて、選手権で優勝した俺たち江ノ高サッカー部は、次の全国高校サッカー選手権大会に向けての練習に取り組み始めた。

基本のパス練習からドリブル練習、シュート練習を開始。基本的な事だけに練習しないといけないのだらうと、特に今まで違和感を覚えずに繰り返してきた練習だが……こう、起伏のない練習を繰り返しても意味はあるのだろうかと考えてしまうのは悪い事だろうか。

まあ、そうはいつでも監督の意向に逆らう事はせずひたすら練習に打ち込む。

できるだけパスの速度を上げてみたり、動いてる最中にパスを出す時は相手の動く方向と速度を考えて一番最適な所にパスを出せるように。

試合で勝つてなんぼのスポーツだ。巧いパスを出せないようじゃ味方に疎まれるし、シュートを決められないFWつてのも、決定力あつてこそその最前線FWの意味がない。

だからと言ってパスを出す事だけに集中して良いのかとそうでもない。

自分でドリブルすることができなければ、相手のエリア内でシュートを蹴ることができなければどう事になるのかと。さすがに戦力外通知を受けたくはないから全力

でやろうと思うが。

「こつちだー！」

「……………」

紅白戦、FWの俺は一度手を挙げて存在をアピール。

そのまま裏に抜ける様な動きを一度してから中に斬り込んでいく。出されたパスを受け取ってドリブル。D.V.Dで見た世界トップクラスのFWが魅せたドリブルを意識し、ボールのタッチ回数を増し前に前へ前へ突き進んでいく。

相手のDFは海王寺先輩と堀川先輩のレギュラーメンバーだが、緩急とフェイントを駆使して二人を翻弄。味方が上がってくるのを待とうかと思つたものの、後ろから味方と同じように相手も上がってきており、このままだとエリア内を固められてしまうのは目に見えていた。

「ほっー！」

「なっ、にいー！」

スライディングでボールを奪いに来た堀川先輩を躲し、前に出てきた海王寺先輩は股抜き。一瞬、ボールを見失ってしまったのか硬直してしまつた海王寺先輩の横を抜けて一気に前に。

「うおおおー！」

「……………っ！」

後は李先輩との一対一。

練習試合と言えどもこの気迫である。すべてのシュートを何としても止めて見せると言わんばかりの眼光で睨み付けてくる。と言うよりは、体全体を観察してきているような気がする。

少しでも甘いコースにシュートを蹴ったら止められるか、最低でも弾き出されてしまうだろう。優秀なGKほど厄介なものはないが、この人が仲間で本場に良かったと思う。だって、こうして切磋琢磨しあえる仲間つてのはそうそう得られるもんじゃないからな。

「おああっ！」

「……………ぐっ!？」

出来るだけ李先輩から遠いところにボールを蹴る。

蹴るときの足の振りはコンパクトに、それでいて威力と速度が出るように体全体を使つてしっかりと足を振り切る。しかし、全力で走りながらしっかりとボールを足元に収める技術つてのはどうやって身に着けたんだらうか。

グラウンダー気味のシュート。何とか反応して手を伸ばした李先輩だったが、その手はボールに触れることができない。ギリギリを狙つて蹴ったボールは大きな音を立て

てボールにぶつかり、そのままネットを揺らしたのだった。

「っしー！」

何気に以前よりも集中力が高くなった気がする。

これも俺自身のボールタッチの回数が増えたことが理由なのかどうかは不明だが、相手がドリブル突破しようとしたときに足元に集中すると、前よりもよくボールが見えるのだ。

見える、と言うよりも奪うタイミングが分かかってきたと言った方が分かりやすいだろうか。少しでも相手がボールを足元から離れた瞬間に足を出してボール奪取！ と行けばなんとカッコいいんだろうとは思うんだが……中々うまくいかない。

と言うか、そんな簡単にボールを奪わせてくれるような奴が全国大会に来るかい！ とは思うし、俺だって奪われたくないと思う。当たり前か。

「おい不知火……お前、また巧くなったんじゃないのか？」

「え？ そうっすか？」

「けっ！ 一体いつ練習してんのか気になるぜ、ったく……」

握り拳を作ってガスガスと遠慮なく小突いてくる荒木先輩。

つい先日、監督から借りたDVDを見たおかげで巧くなったのかもしれない。なんてアホみたいな事を言うわけにもいかず、はははと乾いた笑みを漏らす事しか出来ない



俺ではあるものの、それなりに効果を感じつつあった。

今のシユートだってDVDを参考にしたものだからなあ……

チラと駆を見る。

今日の駆の様子を思い出すに、いつも通りの駆であった。

……いや、どういうタイミングで駆の様子がおかしくなるのかつてのを考えたことが無かったなど改めて思ったんだが。

今までの駆の様子を見てきて分かったことと言えば、おそらく人格が変わっているのはサッカーに関する時だけ。それも、基本的に劣勢になったときか強敵を相手にしたときに性格が変わっている。

……なんと限定的な多重人格だろうかとつい思ってしまつた俺は悪くないはず。

実生活に影響が及んでないってんだから大丈夫なんだろう。そう信じた。定期的に病院に行つてゐるのは話に聞いているが、事故があつた後のリハビリか経過に関する話でも主治医の人と話をしてゐるんだろう。

俺も少し前に銃で撃たれて初めて体験したことだったが。

『——では、このDVDを見て出来そうなことを少しずつ自分のものにしていくてくだ  
さい』

なんていきなり言われたときは、何を言つてゐるんだこの人はと思つたものだが、何気

に監督が俺のチートを理解してる節がある。じゃなかったら俺にDVDを積極的に見てもらおうなんて考えないだろうし。

それとなく他の人に話を聞いたりしたが、俺以外に監督からDVDを借りたことがある奴はいないらしい。どういうことだつてばよ（迫真）

なんて事を考えたりしながらがん攻め上がっていく俺氏。

それなりに付き合いが長くなってきたからこそ分かることが多く、その隙間を縫うように遠慮なく攻め上がる俺に対し、ほぼ全員で守備に当たるレギュラー陣。

今更だが、俺はベンチ組を中心としたメンバーの中に編成されてレギュラー陣と試合をしている。戦力的にこれが一番ですとか監督が笑顔で言うから火がついてしまった人が数人。でもまあ、これが現実です（無慈悲）

前半が終わる直前に高瀬に決められたものの、1対1で進んでいく紅白戦。これから全国を相手に戦っていくことを考えると、いくらチームメイトだとしても遠慮する理由がない。

むしろいつも以上に実力を発揮して、全員の実力を上げるための動きをするのがいいのかもしれない。

と、言うことで試合中ずっとFWだった俺、頑張った。

レギュラー陣の活躍も何のその。結局負けてしまったが3対4という接戦を繰り広

? げてやったんだから良い結果だろう。……しかし、ハットトリックはやりすぎだったか

## 第78話

いやあ、紅白戦は盛り上がったものだ。

あの試合があった次の日も同じように紅白戦を行うと言われ、今度はDFとして動くことになった俺氏。DFだとさすがにFWのように縦横無尽に動き回ることができないのは残念だが、折角のチートボディを生かしてそれなりに走り回って守備に徹した。

そもそも試合が始まる前に岩城監督にそういう指示を受けていたから、と言えばそれまでののだが……FWの時は自由に、けれども止まってる時間は少なく、今回DFとしては出来る限り失点に繋がりそうな攻撃の芽を積極的に潰すようにと言われていた。

そのかいもあって、試合終了時には3対1と言う結果で終わることができた。

相手には駆、荒木先輩、それに織田先輩と、レギュラー陣の中でも攻撃の要になる人はゴツツと相手チームに振り分けられていたのだが、後半俺の守備範囲外から攻める動きからの失点を除いてほぼすべてシャットダウンできたのだった。

ちなみに3点のうち1点は俺がフリーキックで決めたものだ。

世良や荒木先輩の蹴り方を参考にしてきたんだが、監督特製DVDを見てからは巻くような蹴り方を意識して蹴るようにしている。日比野のキャノンシュートでも良いの

だが、そもそも味方同士での試合だというのにレギュラーメンバーが減ってしまうなんて恐ろしい事になりかねん。

……今の俺が本気で蹴ったとしたら、完全に凶器になるだろうなあ。もし蹴る機会があつたとしても、絶対にグラウンダーでしか蹴れないな。もし顔に当たつたとして、むち打ち程度で済めば良い。

——そんなこんなで練習を積み重ねていく俺たち。

選手権の初戦は元日の翌日。その直前である元日の早朝、俺たち江ノ高サッカー部のメンバーは全員そろって地元の神社に優勝祈願のために初詣に行くことになっていた。

で、初詣に行く早朝、何故か俺は群咲と二人で江ノ高サッカー部の集合場所に自転車で向かっていった。なんだこのシチュエーションはと内心ドキドキしつつ、まさか神社まで自転車で行くことになるとは。冬真っ盛りのこの時期、自転車で感じる風はいつも以上に寒いはずだが、それを感じるほどの余裕がない。

会話をするだけで白い息が出ていくなか、集合場所に付いた俺たちだが辺りに先輩方の姿は見えなかった。それどころか薫や高瀬の一年組もいないんだから様子がおかしい。

……おい、マジで、二人きりの時間を延ばすのだけは止めてくれ。

「あれ……確か、ここ集合場所だったよね」

「ああ、ここであつてははずだ」

「あれえ……みんなまだ来てないのかな」

なんて無邪気に周囲を見渡しして群咲だが、少し気配を探ってみればすぐ近くに多くの気配が隠れている。

早朝の時間帯。まだ日が昇つてない事もあつてか辺りは薄暗い。これだつたら人数が多くても巧く隠れられるだろうが……こんな事考えそうな人と言えば、荒木先輩かマコ先輩あたりだろう。ワンチャン火野先輩つて可能性もあるが。

「お願いだ……！ どんだけ大声だしても良いからこの空気を壊してくれ……っ！

「うう……うがあああああつ！」

「きゃあつ！」

「……えええ……何やつてんすか、海王寺先輩……」

後ろで何とも言えないような表情をしている荒木先輩以外は同じように苦笑いを浮かべている。両手で頭を掻きむしっている先輩の様子は、完全に狂つてるようにしか見えなかった。しかも何か小声でぶつぶつ呟いてるし。

何を考えてるんだろうかと耳を傾けてみれば『リア充撲滅なぜ俺に彼女が出来ないんだ畜生可愛い女子と一緒に初詣になんか来やがつてえええぬあああ……』と怨嗟の念

を口にしていた。

……別に、恋人彼女の関係じゃないんだが、声をかけられるような雰囲気じゃないのは確かだった。

どうやら、俺以外の1年生は全員先輩方に驚かされたらしい。

一番驚いていたのは駆だったらしいが、高瀬はまあ……なんとなく予想はつくものの、薫まで驚かされていたとは。いくら隠れやすい環境とはいえ容赦がない。

——まあ、一番驚いたのが駆だとしても、一番苦労したのは驚かされて不機嫌になつてしまった群咲の機嫌を取るようになった俺に違いないと、憤慨しつつ意味のない自慢をしてみるのだった。

新年を迎える深夜0時ではなく、初詣に来るために早朝に神社を訪れた俺たちだが、地元とはいえそれなりの参拝客で境内は賑わっていた。神社の中で賑わうつてのものもおかしな表現かもしれないが、今年一年の運気を占おうとした結果の御神籤の紙の多くが紐に結ばれていた。

参拝の前にくじを引きたいとごねる荒木先輩を宥めようとしたものの、ぶーたれる荒木先輩を止めることができず参拝前に御神籤を引くことに。ああ流されてしまったと何故か申し訳ない気持ちを抱きつつ、百円支払って運命のくじ引き。

にやにやしなから覗き込んでくる荒木先輩に苛立ちつつオーブン・ザ・御神籤。堂々  
の大吉。悔しそうな表情を浮かべる荒木先輩を見て、天罰でもあれば良いのにと怨嗟の  
念を送ってみる。

「どれどれ……んなあつ!？」

「なんです? ……嗚呼、大凶とはまた何とも」

愕然とした表情をする荒木先輩にいい気味だと笑うものの、試合中にケガだけはしな  
いでくれと内心冷や冷やする。逆に俺の大吉はあれだ。前に脇をやられたからその代  
わりに運が良くなるって寸法だろう。

ほんと、良くなりますよね?

それから新年早々からバナナの皮を踏んで滑って転んでしまう高瀬。「あいたつ!」  
と尻もちをつき、ギャグ漫画から出てきたのかと言わんばかり声を漏らして皆の笑いを  
誘っていたが「お、俺は何も見ていない……何も見てないんだあつ!!」と見ざる聞かざ  
ると化してしまったキャプテンと、何気に個性的な人が多すぎる。

——その後は監督たちの誘導のもと恙無く初詣は進んでいったが、さて今年の目標は  
どうしたもんか……安易ではあるものの無病息災でいきたいところだが、サッカー部と  
して来てるから選手権優勝とか、DFとしてMVPに選出されたら面白いとか考えて  
しまう。



「ねね、ヤスはどんな事お祈りしたの？」

「ん？ いや、優勝できれば良いかなって」

「え、思ったより淡泊」

「や……さすがに荒木先輩みたいに大胆なことは言わねえよ」

大会 MVP に得点王、そして優勝とすべてを詰め込んだお祈りというか宣言してたからなあ……何気にそれをなせるだけの実力が伴ってるってのが怖いところ。できるだけ後ろからパス出すんで、ドリブル突破頑張ってください。

「ヤスだったらもつと凄い事できそうだけどなあ」

「凄いつて……例えば？」

「そうだなあ……U-20の日本代表に選ばれるかも！」

「いやいや、そりやもうお祈りするとかってレベル超えてるでしょ」

「例えばって言うてるじゃん、ブーブー！」

ブーブーて……ちよつと頬を膨らませて抗議されても可愛いだけなんです。

ぼこぼこ叩いてくる群咲をあしらいつつ、考える。そういや選手権だけじゃなくて日本代表もあるかもしれないあと。何気に俺が MVP だったから、またお声をかけていただけるかもしれないし、その心構えだけしておけばいいだろう。

……しかし、さすがに16歳でU-20は無いんじゃないかなあ。

## 第79話

さて、全国サッカー選手権大会の初戦を迎えることになった日の早朝。

いつも通り早い時間に目が覚め、同時に意識が冴えわたり視界がクリアになる。この体になってから二度寝をする危険が無くなったのは良いものの、布団の中で微睡むましろ幸福感が薄れてしまった。昔感じた体が軋む感覚は無いものの、ただただ時間を無為にしていくという意識が強くなってしまったのだ。

「ふー……つふうう」

両手を組んで天に向かって突き上げ伸びを一つ。

クリアになっていた意識を塗りつぶすように、今日の試合の事が思い出される。今日の俺のポジションから初戦の相手となる静岡学園の各選手のプロフィール。相手チームの基本的な戦術から、一番注目されている選手の情報。

ああ……と意味なく声帯を震わせただけの空気が漏れる。

ほとんど時間がかからずに確認作業が終わってしまっただけに、早く起きた意味が無くなってしまった。試合が始まるまでの時間は約5時間。すぐに朝食をとったとしても余りある時間をどう消費して良いものか。

嗚呼……この時代にあのゲーム機があれば良いんだが、次世代どころの話じゃないし……そもそも次世代機が出たばかりのゲーム機だ。俺の記憶にあるあのゲームは仮想のものでしかない。残念だ。

本日の朝食は、バランスを考慮して野菜を中心としたメニュー。

……ではなく、朝6時だと言うのがつつり豚肉を使ったミルフィーユカツ丼と赤みそを使った味噌汁だった。思わず頬が引き攣ってしまった俺は悪くないだろう。

「お、重い……！」

「何言ってるの！ 大事な全国大会なんだから、これぐらい食べて元気つけておかないとー！」

「いや、さすがにこれは無いわ……！」

「父さんもさすがにどうかと思うなあ……！」

「え、ええっ!? そんな！」

日本代表として海外に行ったときは専属のスタッフがいたから、あんまり気にすることなく食事をとっていたが、まさか家で朝からがつつり重い肉を食わされることになるとは……

まあ、食べるんですけど。

正直、昔の俺だったらいくら高校生でも朝からカツ丼は食べなかった。と言うか食べ

れなかった。胃もたれで運動どころか普通の授業ですら危うくなる。

『試合に勝つためのカツ丼』と、一種の祈願から察することはできると思うが、こと運動に関して母さんの考え方が少し古い考え方なのは認めよう。

そして、それを理解しているものまさか朝からカツ丼とは……と突っ込みを入れずに食べ始めた俺を見て戦慄している父さんは後で一発ボディブローをかますことに決め、箸でご飯と肉を持ち上げた。

——それから2時間。

本日の試合会場に到着したわけだが、まだ試合開始まで時間はあるというのに会場周辺にはそれなりに車と人で賑わっていた。

「あー……さすがにまだ腹が重い」

「どうしたの、ヤス」

「いや、朝からカツ丼食わされてな」

「え!? ちよ、さすがにカツ丼は……」

「ないよなあ……でも食っちゃまった俺も俺なんだがね」

「あはは……」

試合会場についたというのにまだ腹の中で肉と米が暴れている感覚のしている俺氏。さすがに会場に着くまでには何とかなるだろうと高をくくっていたのがまずつたらし

い。ぴよんと軽く二回ほどジャンプするが、いつもより腹部がずっしりしている。

……今からトイレに行つて何とかなるか？

腕時計を一瞥。試合開始までの時間を考えると、まだ余裕がある。すぐさま監督に一言告げ、速攻でトイレへ。それからしばらく、自分の腹部に力を込め、何気に変顔をしながら格闘すること約5分。

すつきりしたお腹をさすりつつ江ノ高メンバーがいるベンチに向かうことに。

「お前は……江ノ島高校の不知火か」

「ん？ ……えっと、どちらさんで？」

「俺は今日お前らの対戦相手の静名学園の石井だ。覚えておけ」

「ああ、はい……それじゃあ」

「ぞんざいな感じで返事を返し、慌てて口元を左手で隠しつつそそくさとその場を去る。」

「あ、おいつー！」

なんか後ろの方から俺を呼び止めようとする声が聞こえてくるが無視無視。

別に俺が石井とかつて奴と話をする理由は無いし、ましてや今日の敵なんだから試合が終わるまで仲良くする義理もない。もし彼が日本代表に選ばれて一緒に試合をした仲だったら話は別だが。

それに、石井は3年だったと記憶しているが、精神年齢で言ったら俺の方が年上だし？　なんか妙に上から目線だったのが気に食わないとか？　そんな事気にしているわけじゃないけど？

しかし、あれで今大会のMFの中でも前評判の高い選手だつてんだから笑つてしまひそうになつてしまつた。親指で口角を触つてみると、少し吊り上がつてゐるのが伝わってくる。

あの石井つて奴に笑つてたの見られたかな……別にそれでも良いんだが、さすがに感じが悪い奴だと思われているかもしれない。

……まあ良いか（適當）

で、ベンチに戻つて話を聞いてみると、どうやら俺はベンチスタートらしい。

なら慌ててトイレに行かなくても良かったのか。そうすればあの坊主頭の石井にも遭遇する事は無かつたんだろう。……できれば出会いたくなかつたが。

試合開始直前。

江ノ高イレブンの紹介をしているというのに、何故か俺の方を見てくる石井3年生。そんなに睨まれてもベンチスタートはうちの監督の意向なのでどうしようもない。

がんばれーと気の抜けた言葉を連呼しつつ試合の展開を見守ることに。

最初はFWの駆がボールを持つていたものの、相手が距離を詰めたことで後ろの荒木

先輩にボールを戻してしまった。別に開幕早々から仕掛けていつてもよかったと思うんだが。

当のボールを持った荒木先輩はと言うと、軽くドリブルするだけであつさりとボールを石井に奪われてしまった。……完全に奪わせてますけどね。

『ああつと?! どうした事か荒木選手! いともあつさりとボールを奪われてしまった

! 江ノ高、これは逆にピンチになってしまったぞお!』

「いやあ、荒木先輩つたら遊んでるんですかね」

「さすが不知火君。君はわかりますか」

「……え?」

いやいや、適当に流してるようにしか見えないから呟いたんですが。何故か監督に拾われてしまった。荒木先輩がボール奪われた瞬間のどよめきで結構聞こえにくかったはずなんですけども。

まあ、荒木先輩の能力がいつもより落ちている。わけでもないし、何かしら体調を崩しているようにも見えないからボヤいたただけだったんだけどね。

「彼らは、相手選手に詰められて対応に困ったとき、どうしても荒木君という優れた選手を頼ってしまう癖があるんです。その癖を何とか修正していかなければ、今後大会を勝ち進んでいくにつれ、強敵を相手にしたときに対応しきれなくなってしまう」

「……それで、俺もベンチからだっただってことですか？」

「はい、そうです」

笑顔で宣言されてしまった。

そして、このチームの癖を修正するためだけの咬ませ犬的存在として見られている静名学園の生徒たち。これから何と声をかけていいかわからない。特に、超自信満々そうにこちらを睨んできた石井。ご愁傷様です。

今は二列目の魔術師としての名で知られている（らしい）荒木先輩からボールを奪取できて悦に浸っているかもしれないが、前半でその気持ちも折れてしまいうに違いない。

……いや、本当にかわいそうだ。



## 第80話

荒木先輩からボールを奪った石井率いる静名は、江ノ高のMFとDFのラインの間にスペースを見つけ、そこに走りこんだFWにパスを出して裏を突こうと考えたわけだが、完全に江ノ高の戦術に嵌ってしまった。

一気に前線にボールを上げてしまったため、パスの出しどころも無いままに数人からプレスをかけられボールロスト。逆に江ノ高のカウンターになってしまう状況に慌てて自陣に戻っていく静名イレブン。

そしてパスを受けた薫がサイドから上がっていき、相手が前に立ち塞がろうとしたところで中央が上がっていた荒木先輩にパスを出したものの、まるでボールを止めることができませんでしたと言わんばかりにスルー。

慌ててボールを止めたマコ先輩だったが、相手のプレスを受けて倒れてしまった。相手のファールがあつたため江ノ高のフリーキックからリスタートとなるが、いやあ……口元に笑みを浮かべている荒木先輩が何とも腹黒い。

そこからはもう江ノ高の猛攻。

フリーキックからのボールを合わせた高瀬の高い位置からの振り下ろし。何とか弾

き出したGKだったが、ボールが飛んで行ったところにいた織田先輩のミドルシュート。

何とか走りこんでいた相手MFが足を延ばしたものの、シュート精度の上がつてる織田先輩のシュートは相手の足をギリギリ掠めるようにしてゴールネットに突き刺さった。

『前半開始からわずか7分！ 江ノ高、先制しましたああっ!!』

「おおおっ!!」

滅多に聞かない織田先輩の雄叫び。

エリア内の人数が多かったところを強引に捻じ込んだ一撃だった。

不調感をだしていた荒木先輩だったが、別にそんな事をする必要はなかったんじゃないかな。このチームは、監督が思っていた以上に強かなメンバで構成されているってことだ。同じチームの仲間として心強いし、何より誇らしい。

いやあ……得点を決めた織田先輩を周りのメンバが嬉しそうに囲んでいる様子を見てみると、すぐに俺も出てシュートを決めたいという気持ちが強くなってくる。

こうしてベンチで見ていると、鎌字や葉蔭を相手にしたときにどうこうできるレベルの相手じゃない。攻撃力はそこそこだし、守りにしたってそれなり程度。バランスは良いが、正直突き抜けた選手が一人でもいれば簡単に突破されてしまいそうな感じ。

正直、江ノ高の敵ではない。

そこからはもう一方的な展開。サイドから薫がドリブルで上がればクロスで高瀬に合わせ、少しでも隙があれば織田先輩や荒木先輩がミドルからどンドンシュートを蹴っていく。

前半だけで江ノ高のシュート数は10本近く。対して静名は1本。すでに3対0まで点差が付いてしまっているんだが……後半、俺の出番なんていらんやろ（迫真）

『でたあつ！ アラーキー・ダンス！ 超絶足技で「JJ」オコチャばりのサイドステップを踏み、そしてそのままシザーズ！』

「いやあ……やっぱ荒木先輩巧いなあ……」

「……康寛だったらすぐに出来るようになるんじゃない？」

「いやいや、さすがにすぐつてわけにはいかんだろ。練習して、やってみないことには——」

「でも、私と練習したときおんなじ動きしてたじゃん」

ジト目で睨んでくる奈々に、ついと目を逸らすことしかできない。

確か、前に練習してた時に奈々がやったターンを見よう見まねでやったことがあるよな気がする。

「あー……そうだなー……そんな事もあったかなあ」

「まあ、良いけどねー」

ふう………いったん危機は過ぎ去ってくれたみたいだが、またいつ再燃するかわからんな。いや待て、あれ？ 俺が試合で同じ事するたびに睨まれるかもしれないって事か？

で、前半終わって3対0のまま。

相手さんもまさかここまで差をつけられるとは思ってもなかっただろうが……鷹匠さんや飛鳥みたいなずば抜けた選手がいるわけでもないし。これは、江ノ高イレブンの練習試合みたいになってしまっている。

これのうちメンバーは調子に乗っている荒木先輩を除いて誰も気を抜いてないのだからある種酷い試合だ。県予選を突破して全国大会に来たと思ったら初戦から実力差を感じさせられる内容になってしまってるんだから。

……え？ 俺？

もちろん全力で行くに決まってるじゃない。

『さあ、後半が開始となりますが……江ノ高は2人選手を入れ替えております。FWの高瀬選手に代わって工藤選手。そして……え!? な、なんと荒木選手に代わりまして不知火選手が入ります！ これまでDF、FWとして縦横無尽に活躍していた不知火選手ですが、MFとして選手交代するのは初めての事じゃないでしょうか!?』

「……ま、気張らず頑張ってくれたまえ」

「まあ、荒木先輩よりは活躍しますよ」

「なんだとおっ!？」

「はは、じゃあ、また試合が終わったら」

「おい、待てこのっ」

後ろから聞こえる荒木先輩の声を無視して走り出す。

こうなると後が面倒なのは目に見えてるんだが、荒木先輩みたいな人をからかうのは面白くて止められない。要は荒木先輩以上の動きをすれば良いんだから、最低限荒木先輩の動きを模倣してれば問題ないだろう。

が、それだと見た目的に面白くないだろうから俺流で動き回るけども。

前半の静名学園の動きを見てたからあれだが、そんなに気負うことなくプレイに集中しても大丈夫だろうと思いい、パスに全力を注ぐことにしよう。もちろん、相手が隙を見せたらシュートは蹴る。ま、基本的にはFW陣に全力を注いでもらうためのボール回しに専念するが。

『さあ、後半戦が今キックオフしました! 前半で3点差をつけられてしまった静名学園はどう動いてくるのか!』

そもそも前半から選手を交代しようとするしていない。

こちらの動きを見てから選手交代しようとしているのかもしれないが、その程度の考

えで江ノ高の守備は突破できないし、そもそも守りすら十全ではないだろうが。……今出てる選手が持てる戦力の全力だと考えれば、残念だったとしか言いようがない。

次回に期待！ 今回の試合相手が悪かったと思って、次からファイト。

後半開始と同時に前線からプレスをかけに行く江ノ高FW陣。

それを嫌って後ろにボールをパスしてやり過ごそうとしているようだが、そんな事はお構いなしにボールを奪おうと迫っていく江ノ高メンバー。ほぼ相手エリア内でボールを追いかけまわしている状態。

「よっつと」

「あ……!？」

精神的に追い詰められてると思うが、そこは容赦なくパスミスを狙っていくスタイル。MFはチームの中盤で全体を見渡さなきゃならんから大変だが、全力で動き回れるってのはやはりでかい。

こっから一人でドリブルしても良いし、前を走ってるFWにパスを出してもいい。時間を稼ぐために横か後ろにパスを出しても良いが……ここは強気に自分でドリブル。

最近の練習試合で何回かやった、世界トップレベル選手のドリブル擬きをここで発揮する！ ……いや、出来てたら良いなあ。

『不知火選手、単身ドリブルで静名イレブンに襲い掛かる!! それを止めようと静名学

園の選手が前に立ち塞が……あぁつと!! こ、これはアラーキーダンスだあ!!」  
「んなっ!」

パクリです。

荒木先輩の声が聞こえるけども無視。

さつきはここからシザースで相手を抜いたこともあり、それを警戒しているだろうが。荒木先輩と同じ足技に思わずと言った感じで足を止めてしまった相手を嘲笑うように股抜き。

相手の足の内側にボールを当てることで、横を抜き去ったあとちようどいい所にボールが来るように微調整したのだ。まあ、それも感覚的にやってみただけに過ぎないんだが。

一足で相手を抜き去り、絶妙な位置にボールが来たと一人満足する。

何とか俺を止めようと前に躍り出てくる静名選手だが、さつきのドリブルで満足してしまつた俺は躊躇うことなくパスを選択。左サイドを上がるキャプテンがしっかりとボールを足元に収めた。

慌てて左サイドに比重が偏る静名だが、しっかりと機を見てサイドチェンジ。右サイドを上がつていた薫にサイドチェンジをするキャプテン。さすが抜かりない。

そこから少しドリブルで切り込み、DFが近寄ってきたところで俺にボールが回って

きた。……別にそこから中央にクロス上げて工藤先輩に合わせても良いのと思いつつボールを受ける。

(あー……さつき荒木先輩、こっからフェイント交えながらトリッキーなシュート決めてたけど。別にそんな小手先に囚われる必要もないよな)

前半での荒木先輩の得点シーンがよぎったが、そこまで模倣する必要はないと判断。逆に、ここでこそ世界トップクラス選手のシュートを真似てみるべきだと思い、DFがいるギリギリのところシュート。

グラウンダー性のシュートはDFの股下を通り過ぎ、一度地面を跳ねるようにして突き進む。DFの体で一瞬ボールを見失ってしまったのだろうGKは一切動くことができず、視線だけがボールを追っていた。

『ゴオオオオオオオ!! 後半開始早々! 荒木選手と交代で出場した不知火選手が静名学園の選手の股を抜いてシュート! 相手の意表を突く見事なシュートでした!』

ゴールと同時に集まってきた味方に、ウエイイと気の抜けた声を出しつつハイタッチしていく。大差がついてしまった試合、静名学園の生徒たちはだいぶ意気消沈したような表情を見せていた。

……さて、ここから何点差まで行ってしまうだろうか(戦慄)



## 第81話

両側から迫りくる相手MFの中央に体を滑り込ませ、強引にドリブル突破していく。しっかりと足元のボールはあらぬ方向に飛んでいかないうようにボールタッチの回数は多く、それでいて柔らかいタッチを意識する。

相手に挟まれながらも足元では2回、3回とボールに触り、ボールを相手に触らせないうような注意しながら前に進んでいく。途中、サイドに展開している味方に視線を送り、パスを臭わせる行動をとりつつ。

「ぐっ……」

『抜いた抜いたあつ！ 一挙に2人の選手を抜き去り、これで4人ごぼう抜きだあ！ 不知火選手の独走を誰が止めると言うのか!!』

しつこくボールを追っていく江ノ高選手に慌ててパスミスし、それでも何とか前線にボールを出すものの素早いプレスからボールを奪われてしまう。シュートに持つていくことすらできない状況が続いている静名に対し、容赦なく責め立てる江ノ高メンバー。

そして後半終了の笛が鳴り響く。

結果、7対0。相手に何もさせなかった江ノ高は圧勝と言っているいい結果を得ることができた。まあ、試合相手である静名学園の選手たちがどう思っているかはわからないが……次、頑張ってくれとしか言いようがない。

『全国高校サッカー選手権大会江ノ島高校の初戦、なんと……7対0というスコアで江ノ高が勝利!! 昨年度ベスト8の静名学園をくだして3回戦進出っ!!』

「お疲れさまでした」

『つした!!』

「いやあ、想像以上の出来でした。……もう気付いたと思いますが、全国大会だからと言って戦う相手のすべてが必ずしも闘ったことのない強豪ばかりではありません。君たちの実力はすでに全国有数の強豪校以上のところにまで来ています」

いったん話を切ってちらと俺を見る岩城監督。

その流し目が何を意味しているか知らんけど、意味ありげに見えるのは止めてくれ。

そして、岩城監督の話はほどほどに、着替えてスタンドに向かうことになった。

次の試合の勝者が、明日の3回戦の試合相手になるからだ。連日連戦ともなるとそれなりに疲労が残るだろうし、何よりこのまま勝ち続けていったときの体力を考えると、初戦の静名みたいな楽な試合ばかりだと良いんだが……

さすがにそこまで高望みは出来ない。

トーナメント表を見たが、どうせ勝ち上がってくるのは四日市実業——あの遠野がいるチームだろう。代表の時も、ギリギリのところまでシュートを弾き出したりする様を見ていたが、あれほどのGKはそうそういない。よほど強烈なシュートか、奇想天外なシュートじゃないと全部弾かれるだろう。

——で、実際に四日市実業の試合を観戦したわけだが。

「やっぱり、遠野が一番厄介な相手か」

「そうだね……一瞬の判断力がずば抜けてるし、何よりあの長い手が……」

フエイントからのシュート。完全に抜いてそのままシュート、あわや相手の得点シーンだというのに、その長身と意味の分からない反射神経の良さで足を出し、シュートを防ぐ遠野。

この時点で意味不明な守備範囲になっているわけだが、それでも果敢に攻める作郷選手たち。すでに1点決められているため、何とかして同点に持ち込まなければならぬが……

『ああつと、名手小林！ 今度は芸術的なループで遠野の頭を越えてゆくつ！ 時間はロスタイム！ 今度こそ同点か!?!』

ゴール前から少し離れているところ、頭上を越えるループシュートでゴールを狙う作郷、小林選手だった……

「そうは、いくかってんだあつ!!」

『な……なんとこれも止めたあつ!! まさに鉄壁の守護神! U-16代表GK遠野幹也!!』

超人的な反応で後ろに下がり、ジャンプしつつ腕を伸ばして指先でボールを弾き飛ばし、シュートをブロック。渾身の一撃だと思っていただけに、作郷のFW選手は呆然と遠野のを見ていた。

「いやいや、その一言で済むんですかい」

「は、はは……どうやったら抜けるかな……」

駆が苦笑いを浮かべながら遠野の事を見ている。

他のメンバーも皆、一様に似たような表情で試合風景を見ている。確かに、あれだけの守備力の高さを見せつけられたら、どうやって四日市実業を攻略すれば良いのか考えさせられる。

まあ……いくら考えたところで明日の試合相手が変わるわけでもないし、江ノ高の戦術を変えるわけでもない。何とかしてゴールをもぎ取るしかない。いつもみたい  
に波状攻撃を仕掛けられれば、そのうち1点くらいは奪えるだろうが……

「いや、しかし……ここまで下がられちゃ攻撃するにも一苦労だな」

「そうだな。基本的にカウンター型だが、攻撃に移るまではFWまでエリア内にいやが

る。これだと、シュートまで持つてくのも難しいな」

どうやって遠野を抜くか。この一言に尽きる。

ふつうのシュートじゃダメ。ちよつとでも甘いコースだと弾かれる。なんだあいつ。俺のことは置いといて、なんてチートな野郎だ。ほんと、俺のことは考慮しない状態だな。

——その後、1対0で試合に勝利した四日市実業。

もちろん次の試合相手になるわけだが、試合観戦を終えた俺たち江ノ高メンバーは明日の日程を確認して解散したのだった。

「えっへへー」

「……なんで群咲がここに」

「なんでって、ヤスに会いたかったから来たんだよ」

「……」

「黙っちゃってー。照れたかな?」

ウリウリと言いながら脇腹を突いてくる群咲。

家に帰ったら何故か群咲がいて驚いたのは俺だけで、両親は普通に接していた。と言うか、俺抜きで両親と3人だつていう状況だったのに、よく普通にいられたなと思

えん。俺だったら本人がいらないと言われたら帰るけどなあ……まあ、母さんだったら上がっていけと言いそうだが。

「あー……群咲」

とりあえず理由だけでもと思い、名前を呼んだ瞬間だった。

それまで笑顔を浮かべていた群咲の表情が歪み、少し怒気を感じさせた。

「もおー！ いつも私のこと苗字で呼んで！ 何で名前でも呼んでくれないの！」

「え。あ、いや……特に理由はないが」

「なら私のこと舞衣って呼んで」

ジツと俺のことを見つめてくる群咲。

身長差も相まって群咲は見上げてきているが、ぶくつと小さく膨らませたほっぺが何とも可愛らしい。怒気を感じたはずなんだが……思わずちよつと笑ってしまった。

噴き出してから、ハツとなる。

目の前のお姫様のお気に召さなかったのか、眉が少しだけ吊り上がったのを見て、反射的に左手で群咲の両頬を抑えていた。群咲の口を隠す形で手を突き出し、親指で左頬を、それ以外の指で右頬をむにいつと。

「むあつ!?!」

「あ。……ははっ、なんだ、可愛いじゃないか、舞衣」

「……………つもう!!」

振り上げられた手は、彼女の名前を呼ぶことで急停止。1秒、2秒……3秒経たないところで舞衣は大きく後ずさり、俺の魔の手から離れたのだった。

指で抑えたところが少し赤くなっている。さすがに少しは悪いと思っっている。反省はしていないがな!

「ん……………つと、とりあえず、今日、初戦突破おめでとう!」

「あん? それ言うために来たのか?」

熱いのか、赤くなった頬に風を当てるようにパタパタと手で仰ぎだした舞衣。

おめでどうと言ってくれるのはありがたいが、まさかそれだけのために? なんて疑念が湧いて出る。それはそれで嬉しいが……

「ま、まあ、それもあるかな? でも、次はあの四日市……だっけ? 遠野つちがいると

ころでしょ? 大丈夫?」

「あー……………まあ、多分大丈夫……だと思う」

「うわ、すつごい不安になるんだけど」

微妙な表情を浮かべる舞衣だが、俺としても多分としか言いようがない。

俺が見た限り、江ノ高メンバーと四日市の選手じゃ、ほぼ江ノ高メンバーの方が能力的に少し上回っているのだが、どうしても遠野の守備力だけがずば抜けて高い数値を

叩き出しているからなあ……多分、と言うのはそこだけだ。

隙さえ見せなければうちが失点する事は無いだろうが、油断は出来ない。

「それ以上の攻撃力か」

「え？」

「いや、何でもない。……とりあえず飯だ飯。ほら、行くぞ」

「あ、ちよつとお！」

あの時から成長しているだろう強敵を前に滾り出す感情を押しとどめ、良い匂いのする食卓へと向かうのだった。



## 第82話

『——さあ、この試合、勝者となってベスト8に駒を進めるのは攻撃力の江ノ高か、それとも世代別日本代表のGK遠野を擁する守備力の四日市か!』

江ノ高サポーターが大きな歓声で応援してくれている中、直前のミーティングが始まった。

とは言え、岩城監督が語り出した内容は昨日とほぼ同じようなもの。昨日の四日市の試合を見ているだけあって、絶対に先取点を取られることのないようにと念を押された形だ。

となると、俺はDFになるのかFWになるのか、どちらだろうか。

……まあ、サッカーだけじゃなく、スポーツつてのは運も関わってくるからなあ。絶対に、とはいかないのが怖いところ。それでも頑張るけど。

——わああ!

「なんだあ?」

突然の歓声に荒木先輩が白い眼を向ける。

半眼になって観客席を歩く集団を見る表情には、ありありと『俺以上に目立ちやがっ

て』なんて文字が書いてあるように見えた。そんな目で見られている当人達のうち、うちの選手が見ていることに気付いたのか一人の選手がこっちに向かって手を振っていた。

「滋賀県代表の鳳凰学園ですね。午前中の第1試合で勝つたらしいです」

「しかし、記者がついて回ってるってのは……」

よく見ると

「無理もないですよ。だってあの大分西崎を6対1で破ったんですから」

「なっ!？」

「大分西崎から6点!？」

「予選では10点取った試合もあったそうです。しかも準決勝……」

すんません。

大分西崎つてところを知らないんですが……

とは言えない雰囲気だったので、雰囲気に強いチームなんだろうと当たりをつけておく。しかし、6点も取るつてことは結構な攻撃力を持ったチームなんだろう。

失点しているとはいえ、1点と言う点数に抑えていることもまたうまく連携が取れている結果なんだろう。でも10点ぐらいならこのチームでも取れそうな気はするんだが。

それからすぐに選手入場。今回俺はDFとしての出場だ。四日市の攻撃をシャツトダウンしたい気持ちと、今いる江ノ高メンバーで得点できるのかという監督の気持ちが感じられる。

先に江ノ高の選手紹介があり、それから四日市イレブンの紹介。

ほぼカウンター型と言える布陣を敷いてくるのが常だが、いざ攻撃になるとDFまでもが一気に走り込んでくるらしい。……こうして見てみると、確かに全員が全員足が速いらしく、平均すると今までのどのチームよりも足は速いんじゃないだろうか？

四日市の中で最も気にすべき選手はもちろん遠野になるわけだが、それ以外にも注意すべき選手は多くいる。FWの中でも0トップゼロの最前線にいる若宮選手。そして四日市の真ん中、MFとして全体を見渡し攻撃の起点となる位置にいる海堂選手だ。

『さあ、江ノ高からのキックオフで始まりました第3試合！……おおっと、まずは荒木選手が一人でドリブル突破だあ！』

「お手並み拝見といこう」

ボールを蹴り出した荒木先輩は、そのまま四日市選手の股下を転がしドリブルをし始めた。

正直、DFの位置から見ただけじゃそこまで脅威に感じないが、ほぼ0からトップまで攻撃のギアをあげられるってのは怖いもんだ。カウンターしてくるときはFW

だけじゃなくてMFまで走ってくるんだろ? ……手数で攻められたら結構危なくなるかもな。

で、荒木先輩はと言うと、2人目として立ちはだかった若宮選手をエラシコで突破した。そこを狙ってまたしても2人の選手が立ち塞がるものの、緩急をつけて一気に突破。斜め後ろからのスライディングも、まるで見えていたかのようにボールを浮かせてかわしたのだった。

「な、なんて野郎だ……」

「止めろっ! シュートまでいかせるな!!」

『キックオフからわずか1分! 同じ世代別代表のGK、守護神遠野の守るゴールに向けて荒木が次元の違うドリブルテクニクを見せつけてたった1人で突進していくうっ!!』

しかし、前にも後ろにも相手がいる状態でドリブルを敢行するのはただけない。

DFとして言わせてもらえば、もし今ボールを奪われたら……すぐにカウンターされてしまう形になる。加えて言えば、荒木先輩1人だけが突出してしまうと、他のFW、MFも釣られるように前に上がってしまうということだ。

向こうの選手の体力、走力を考えると……ちよつと厳しくなるぐらいか。

最初に一発かましておくのも相手にプレッシャーを与える手段の一つだからな。

相手DFに囲まれた荒木先輩だったが、前線へと上がっていく駆と高瀬にはしっかりとマークがついており、横も出すのが厳しい状況だったが、そこで荒木先輩は相手に背を向けた。

後ろから織田先輩が上がってきていた。ミドルシュートを蹴れる織田先輩の存在に気付いた四日市DFの2人は、ボールを受け取れる姿勢を見せている織田先輩に気がとられた。

その瞬間、荒木先輩は真上にボールを蹴り上げ、宙に身を投げ出した。

「おおおおー！」

『バ、バイシクルシュートだあつ!!』

ゴールに背を向けたまま飛び上がった荒木先輩は、ボールを蹴る直前に軸足とは逆の足を一気に振り下ろし、その勢いで軸足を振り上げボールを蹴ったのだった。

まさに意表をつくシュート、荒木先輩の真骨頂だ。まだ試合が開始して直後のことから遠野も想定外のことだったんじゃないや……

『と、止めた止めたああつ!!』

と、思っていた時期が俺にもありました。

いやあ……がつちり両手で掴んでシュートを止めてるよ。

さすがに先制点になったかなと思っただが、これだと逆にうちの攻撃陣が動揺して

るかもしれないな。

「いけえええっ!!」

遠野は掴んだボールをすぐさま大きく蹴り出した。ここから四日市の逆襲をと考えているわけだろう。

が、ボールの飛距離からして本来の俺のDFラインから少し前に落下するだろうと予測し、それなら大丈夫かと前進。ぐんぐんと飛んでくるボールの落下地点には海堂選手が待ち構えていたが、構わず俺が割り込んで大きくジャンプ。

「ふっー!」

「なっ……!?!」

飛び上がった際にのけ反った反動を生かし、そのままヘッドでボールを前線まで弾き飛ばす。ちなみに、ヘッドでのクリアも鋭意練習中だ。それなりにボールを飛ばす方向、距離の精度が高まってきたんじゃないかと思ってる。

これが完璧にこなせるようになれば、攻防一体の速攻カウンターが成立するんじゃないだろうかと一人息巻いているんだが、中々綺麗にこなせない。何せ、俺の守備範囲にロングパスが飛んでこないとできないんだからな。

まあ、しかしこれで一層ロングパスからのカウンターやら組み立てはし難くなったんじゃないか? 俺一人DFにいるだけで抑止力なるこの素晴らしさ。さあ、皆ここは

俺に任せて前に進むんだ！（圧倒的フラグ感）

『な、なんという事でしょう！ 荒木の活躍から一転、逆に攻められる形になりそうだったというのに、不知火の大きなクリアで一気に形成が逆転！ またしても江ノ高の攻撃だあ!!』

ふははは！

これが江ノ高の超カウンターやでえ!!（大嘘）

今日は李先輩の気力も十分高まつてる事もあり、ちよつとやそつとの事じやうちゴールも奪えないだろう。まさにGK対決。努力で実力を培ってきた李先輩が上回るのか、それとも遠野が天性の才能を生かし切つて無失点に抑え込んでしまうのか。

気炎を上げる李先輩に軍配が上がることを祈つておこう。

……まあ、俺がFWになったらどうなるかはわからないんだが。

## 第83話

前半も残り7分。

いまだ0対0のまま試合は進んでいる。

四日市の攻撃を俺と李先輩が主体となって止めているのと同じように、江ノ高の攻撃もすべて遠野がシャットダウンしてしまっていた。中にはゴールが決まってもおかしくないようなシュートが何本かあったんだが、遠野の驚異的な反射神経と運動神経の良さに<sup>とどく</sup>尽く止められ、弾き出されてしまっていた。

まあ、さすがに俺が攻撃に参加することがなかったので本当に全員のシュートを止めることができるのかと問われれば不明と答えさせてもらう。だって、実際に相手にしたことがないんだもの。

……代表の時、練習で何度か付き合ったことはあるが、その時よりもうまくなってるだろう。が、俺も技術的に進歩していると自負している。

と言うか、今の江ノ高メンバー全員の能力と四日市を比べると、全体的に江ノ高が高い。数値的には四日市の選手に全く負けてないのだが……やはり遠野一人の存在が大きい。あまりにシュートを止めるもんだから皆の気持ちが悪く落ち込み始めてるってのも



あるんだろう。

とは言つても、体力には限りはあるだろうし、何度もきわどい攻撃を止めていること  
もあつて大分精神力もすり切れて切れてはいると思うが……代表に選出されて試合を  
こなしてただけあつて精神もタフだなんて言わないだろうな？

『おおつとおお!!』 スルーだあつ! 逢沢、絶好のチャンスでパスをスルーし……荒木  
だあ!! 荒木が待つている! そのまま……ダイレクトオツ!!』

「おおおおおつ!!」

中央でボールを持っていた織田先輩がキープしたままドリブル。

そのままペナルティーエリア付近までドリブルして、そこでシュートをするとかわせ  
DFの視線を引き付けてから、後ろにいたキャプテン沢村先輩にバックパス。まるで後  
頭部に目でもあるのかつてぐらい正確なパスをしつかりと足元に収めたキャプテンは、  
少しドリブルしてからヒールパス。

滅多に見えないキャプテンのカッコいい姿に江ノ高メンバーは騒然としていた。

勿論、観戦に来ている江ノ高女子の皆のハートに響いたんじやなかうかつてぐらい  
にはカッコいい姿だ。

閑話休題。

とにかく、それぐらいキャプテンがヒールパスをするつてのが珍しいつて事を肝に銘

じてもらいたい。なんだかんだ綺麗にヒールパスを出した先には駆の姿が。しかし、キャプテンがパスを出した事にいち早く反応して駆を視界に収めている遠野も遠野で凄まじい。

このままダイレクトでシュートするのかと思いきや、直情傾向らしからぬ駆の選択。まさかのシュートモーションでのスルーパス。思いつ切りボールを空振りしたのかと思いきや、その先で待つていたのは荒木先輩だった。

まさか逆サイドまで引つ張られるとは思ってなかった。遠野は何とか食いつかんとしているが、その前に荒木先輩はシュート体勢に入っていた。遠野が何とか動きだしたところで容赦ないダイレクトシュート。

今まで見てきた荒木先輩のシュートの中でもかなり精密なシュートだった。

ポストギリギリを狙ったコースだがしつかりと回転がかけられたボール。多分、ボールに当たってもゴールの中に入っていくような回転なんだろう。ダイレクトで蹴つてるのにそんな芸当ができるなんてなあ……

『さすがの守護神遠野も荒木のシュートは止められないか！ これで江ノ高先制点——』

「させるかあつ!!」

瞬間、目を大きく見開いた遠野が目いっぱい力を込めて横にジャンプした。

その手は大きく広げられており、パンチングで弾き出そうとしていないのだけだった。が、どうやって……

「おらああっ!!」

「なっ!?!」

大きく伸ばされた手の先。中指と薬指が触れた程度、一瞬の接触でどうにかなるほどの威力の弱いシュートじゃない。

だが、遠野はそのシュートに指先が触れた瞬間にスナップを効かせるように指先を折りたたんだ。そのちよつとした動作で、シュートコースが微妙にずれた。それだけだったら回転がかかったボールはポストにぶつかって入るのかと思っただが、なんとボールはゴールの白線を超えることなく、ボールにかかっている回転量のせいで逆側のポストまで飛んでいき、今度は上に打ち上がったのだった。

「は……?」

『と、止めた止めたああ!! まさに守護神! 遠野、絶体絶命と言わんばかりのシュートを止めました!』

「あれを……止める……?」

反対側のポストに当たって跳ね上がったボールを遠野がしっかりとキャッチし、江ノ高の攻撃は終了となった。今度は四日市の攻撃となるわけだが、俺と今の李先輩がいる

限りなんともなそうなもんだが……

問題は攻撃陣か。

あれだけ策を凝らした攻撃を仕掛けたっていうのに、その最たる攻撃で決められなかったのだから精神的なダメージは大きいだろう。

取りあえず前半はお互いに無失点のまま、試合の動きはなく終了した。が、後半からと言つても、どう攻略しようかが悩みどころであることには変わりない。

「——あのスルーパスは最高だった。ただ、それを決められなかった俺がわりいんだ……っ！」

「荒木さん……」

珍しいぐらいに荒木先輩が項垂れている。

前半が終わり、無失点のまま試合を折り返せたことに少しばかり安堵感を抱いているDF陣とは違い、何度も得点チャンスがあったのに1点も決められなかった攻撃陣はかなり落ち込んでいた。

そりやまあ、自信満々で蹴ったシュートがまさか止められるんだから攻撃陣としては唾然としただろうけども。

どれだけ揺さぶつても付いてくるGKで、しかもしっかりとボールを止めてくる相手だけに、攻めるのを戸惑っているのかもしれないが……いや、もう、ガンガン攻めるし

か無いんじゃないですかね。

「……監督！ 不知火を、FWに回してください！」

「李君？ ……いや、それはできない。今はまだ選手を変える段階ではないんだ」

「……そうですか」

まさかの李先輩の挙手からの提案。

確かに今日の李先輩の動きを考えたら俺がFWに回って攻撃に加わった方が早く得点できるのかもしれない。だが、それを監督が止めた。まだ、と言う単語に引っかかりは覚えたものの、監督の言う事に従うしかなかった。

まあ、俺がDFとして限りの限り点数を決められることは早々ないだろうが。GKも李先輩だし、俺と堀川先輩と3人でゴールは守りましょう！ ぐらいの熱血系で頑張ろうと思う。

うん。取りあえずゴールを無失点のまま守ってれば攻撃陣が何とかしてくれるだろう。それぐらい適当な考えで後半に入ったのだった。

## 第84話

前半は共に無失点のまま後半へと進んでいる。

シュート数にして前半江ノ高5本。四日市が1本と言う内実になっているものの、江ノ高は1点もシュートを決められなかった。これには攻撃陣の中でも中心選手として活躍していると言っても過言じゃない荒木先輩の精神が折れかけたのだった。

『さあ、後半が始まりました！ 前半ではチャンスをものに出来なかった江ノ高ではあります、後半、その教訓を生かしてどのような攻略を見せてくれるんでしょうか！』  
皆が前向きになっている中、一人ナーバスさを醸し出している荒木先輩。いやあ、確かに前半の攻撃の中で一番決めていてもおかしくなかったシュートを止められてるんだから。

とは言え、そんなシュートを奇跡的に止めるGKなんてこの先何人も、何回も出逢うだろう。もし荒木先輩がこの先サッカーを続けるのであればの話だが。

……しかし、このまま陰気な感じをまとったまま試合を続けられても困るの一言である。

「荒木先輩」

「ん、なんだ、しらぬっでえっ!? 何しやがる!」

「あ、いや、辛気臭い顔でしてたんで」

「はあっ!」

バシンと一発背中を張り手。

チートな能力を抑えつつ、それでいて気を注入することができる程度にがつり張り手をした訳だけでも。思いのほか威力の高い音が鳴って俺自身も驚いている。

でもまあ、これで気合が入れば良いだろう。

前半の結果を引きずられて困るのは前線で動くFWと攻撃の要になるMF達だ。最終的には攻め込まれる隙になるからDFも困るっちゃ困るんだが。

……俺が気合一発張り手をしたものの、最初はぼうっとしたようにつつ立っている荒木先輩の横を若宮選手がドリブル突破。そのまま加速し始めたのを切っ掛けに、四日市の選手がどんどんと攻め上がり始めた。

四日市全員足が速い。

江ノ高メンバーもなんとか戻ろうと走っているものの、ドリブルをしている若宮選手よりも少し遅いかもしれない。

「不知火、堀川は前に入るな!」

「えっ……でも」

指示を出してきた李先輩を振り返る。

氣迫の籠もった表情で俺たちを見つめる李先輩。

正直、李先輩って敵つい顔つきをしているから結構怖い。が、何とかしてでも点をやらんと言わんばかりの表情に、俺と堀川先輩は無言で従うのであった。

その間、荒木先輩をドリブルで突破した若宮選手がパス。

横を走ってる駒崎選手がトラップするかと思いきや、これをスルーしてサイドを上がっている1年生でスタメンの当真選手がボールを受けてオーバーラップ。

駒崎選手に気が取られていた火野先輩が慌ててカバーに向かうが、ドリブルをしている事を感じさせない俊足さで真っ直ぐ上がっていく。

「意地でも止めてやらあ!!」

『火野、捨て身のタックル! しかし一瞬の差で当真のクロスが上がったあ!! ボールがやや精度を欠き、エリア内ギリギリに! そこに合わせて斉藤が飛び込む!』

李先輩が飛び出そうとしているが、そこは俺の守備範囲内。

先輩を視線で制し、一足に走り込む。

「もらった……!!?」

「させねえっ!」

『おおっと! あわや江ノ高の失点かと言うところでの男! 不知火がしっかりとク



リアしました！ かなりの距離があつたように思いますが、まさに不知火と言つたところでしょうか！』

それで済むのか実況よ。

自分でやっておいと何だが、数mは軽く飛んだような気がする。むしろ跳んだかもしれん。人間離れの身体能力で済めばそれで良いのだが……昔よく見てた動画サイトで纏めとか作られないだろうな。

「ナイスガッツ」

「あざっすー」

李先輩に褒められたのも束の間、スロージンは四日市から。

先ほどとは逆サイドからの攻撃になるが、先ほどの事もあつてか単調にクロスを上げては来ずに、ゆつたりと全体を見渡しながらボールを保持し始めた。

後半に入ったものの、まだ試合が動いていないだけにそれなりに焦って攻撃してくるかと思いきや、さすがのカウンター型四日市と言ふべきか。そこまでの焦りを感じさせない。

GKが遠野と言ふだけでかなりの自信になっているのだろう。

まさか遠野に守備の全てを任せているわけではないんだろうが、やはり遠野の存在は大きかった。

「くっ……!?!」

「上がれええ!」

『少しトラップが大きくなってしまったところを狙い、不知火が斉藤からボールを奪ったあ!! 江ノ高、逆にカウンターだ!』

中間よりも少し前、攻撃的な位置を取っていた荒木先輩にパスを出す。

ふわりと浮かせるようなクロスを足元で綺麗にトラップした荒木先輩は、持ち前の技術を生かしてそのままドリブルしていくかと思いきや、まさかの駆にパス。

しかし、何か感じるものがあつたのか、駆はすぐさま荒木先輩にボールをリターンしたのだった。

「ちよ……!?! くそっ!」

ボールを受けた荒木先輩は、またしても横にパス。

それを受けたのはマコ先輩だったが、マコ先輩もまた同じようにすぐさまワンツー……やっぱり前半最後に魅せたギリギリのシュートを止められたのが精神的にでかかったか。

まさか荒木先輩がマイナス思考に囚われるとは思わなかったが、一度サッカーを諦めてぶよんぶよんになっていた頃の先輩を思い出すと、実際、精神的に弱い所があるのだろうか。

太りやすい体質も影響し……てないか、さすがに関係ないだろう。多分。またまた駆にパスを出す先輩だったが、すぐさまリターンする駆。

これで3度目のパス拒否を喰らわされた先輩。これには3度目の私は無かった先輩は苛立ちを表情に出していたが、その直前から駆の雰囲気が変わっていた。

いやあ……さすがにあれだけ不甲斐ない姿を晒したせいか、駆の内なる人格が激オコぶんぶん丸らしい。

そんな駆の表情を見て一瞬硬直したところを狙われたものの、ボールを浮かせ、そのままタックルを躲して前進。

「上がれ上がれええ!!」

『ようやく動いた荒木っ！ 中盤でもたついたようにも見えましたが、間違えるようなドリブルでぐんぐんと敵陣に楔くさびを打ち込んでいくっ!!』

江ノ高のポゼッションが全体的に敵陣よりになっていく。

荒木先輩一人の戦意が高揚するだけで江ノ高の攻撃陣は一気に意気高揚状態に。全員がゴールを目指して敵陣を駆け上がっていく。

足の速さは四日市には負けていても、何としてでもゴールしようという気持ちは全く負けていない。シュートは数。質も大事だけど、それ以上にシュートを打たないとまず始まらないってのが江ノ高の攻撃の特徴的なところだ。

全員が全員、目に力が籠もっている。

『出たああ!! 伝家の宝刀スルーパス! 四日市DFの穴を、糸を通すような鋭さ、正確さで敵陣を貫くつ! これを受けて逢沢がゴール前に迫る! 一対一になるか!』

「来いやあ!!」

試合の展開が熱い。

これぞ荒木先輩の真骨頂からの駆の飛び出し。GKとの一騎打ち。

これで盛り上がらないわけがない。

……が、正直に言わせてもらおう。

一対一で駆が遠野に勝てる確率が低い。夜の練習でもかなりのスピードで駆の技術も上がってきているとは思うのだが、それでも今の遠野には優っていない。

『出たあ!! フライ ひとりツクだあ!!』

「そいつの弱点は……研究済み……っ!?」

『き、決まったああっ!! 難攻不落だった四日市GK遠野の壁を越えて、今、江ノ高が先制点!! 逢沢の個人技が冴え渡るうっ!!』

「な……なんだ……今のは!？」

——なんて思ってたんだが、まさかまさかの駆の勝ち。

ここにきて新技を使ってくるとは考えすらしなかつただろう。

ゆとりリックも、エボリユーションもどちらも研究してきたようだが、3つ目のトリックを出されちやいくら遠野でも対応出来なかったようだ。

いやあ……正直鳥肌もんですわ。

やるやるとは思ってたが、ここに来て一度も試合で試したことのない技を決めるとは。ストロングハートここに極まれりだな。

『さあ、先制点を決めた江ノ高！ 後半はまだ25分残っています！ これからのように組み立てていくのか！』

## 第85話

『おっと、ここで江ノ高選手交代だ！ 火野に代えて中塚が入ります！』

うーむ……確かにさつきから少し足を引きずってるような走り方をしてたから、監督が大事を取って交代させたのだろう。しかし中塚か……足の速さは俺を除いたら一番早い、正直不安だ。

中盤、サイドを掻き回したいのなら中塚は役目を大いに果たすだろうが。

『そして……高瀬に代えて海王寺が入ります！ これはまさか……!?!』

入ったばかりの海王寺先輩が真っ先に俺の方に向かって小走りで行ってくる。まさかと監督を一瞥するが、当の監督はニツコリと俺を見返すばかり。まあ、いつもの如く俺がFWになるんだろうけど。

海王寺先輩とすれ違いざまにハイタッチを一つ。

そのまま高瀬がいたポジションへと上がっていく。

「駆………どんどんボール回せ。遠野相手だ。1点じゃちよつと物足りないだろう」

「うん！」

『不知火がFWに入ります！ 満を持しての登場です！ 守護神遠野との直接対決が楽

しみです!』

さて、と遠野を一瞥。

先ほどの駆の一撃が効いたのか、少し渋い表情をしているが、今度はより激しい攻撃になることを期待してくれ。

前半で荒木先輩のシュートを止めた遠野だが、あれは代表の時の荒木先輩の実力を観察していたうえで動きだったんだろう。反射神経だけじゃなく、一瞬の状況判断もまた一流の動きをする。

確かに俺も一緒に代表に行っていたし、スタメンとして出ていただけであってそれなりに観察はしていたと思う。だが、それでも無理なものは無理なんじゃないだろうか。

特に、俺の身体能力の限界がどこにあるのかとか。

……自分で言ってるあれなんだが、俺の弾丸シュートはやばいぞ（白目）

すぐさま四日市からのリスタート。

さすがに1点を取られた四日市はのんびりとしていられない。

まして、DFだった俺がFWに動いたんだから鬼の首を取るんだったら今のうちだぞ？ 自分で鬼の首とか言うのは何気に恥ずかしいが。自重はしない。

基本的には若宮選手と海堂選手を中心にボール回しをすることが多い四日市フォーメーション。ならその隙をついてボール奪取すれば良いじゃないかと思いがちだが、この

二人だけで回しているんだっただこここまで勝ち上がってこれていなかったかもしれない。

確かに俺がいるポジションを避けるようなボール回しで試合を進めていこうとしているのが目に見える。

……向こうの監督からも俺の事は聞いていたのだろう。

この試合を勝ち進んだとしても、同じような対策を取られるかもしれないという事だ。これは、俺以外の誰かが同じぐらい脅威だと思われれば通用しなくなる戦術なんだが。

まあ、正直江ノ高のFW陣にそこまで突出した選手はいないと言わざるを得ない。

取りあえず前線からプレッシャーを与えるとしよう。

「くそ……速え！」

「おらあ！」

『不知火が前線を駆けまわる！ 凄まじいスタミナです！』

ふははは！

全速ではないが、それなりの速度で走り続けても限界が見えないと言うのが自分でも怖い。敵陣をひたすら走り回ることによって相手の意識を掻き回していく。

できるだけ相手にとって厭らしいと思われるポジション取りをしながら走り続け、相



手がミスしたときに味方が奪ってくれれば御の字。

四日市の選手は足が早い。

でも、俺の足はそれ以上に早いんだ。

「獲った！」

「なっ……」

『遂に不知火が四日市のボールを捕えたあ！』

パスミスを狙い続けた甲斐もあり、ボールを奪う事に成功。

そのまま前を向いてドリブル突破。すぐさま四日市の選手がカバーしようと近寄ってくるが、残念ながら足が速いだけで、技術的に優れている選手はあまりいない。

加えて俯瞰視点があるんだから手の付けようがない。

後ろから迫って来たとしても後ろに目があるかのように避けれるし、前からしたら来たでフェイント多めのドリブルで強行突破できる。

肉体も出来上がってきているから、直にタックルされてよろめかなくても不思議とは思われないだろう。

『不知火が単独、どんどんと前にと突き進んでいく！　そ、それにしても何というスタミナでしょうか！　後半始まってからずっと走り続けているのに、いまだ底を見せません！』

底なんて無いんだよお！

試合一杯ずっと走り続けたことがないからなんとも言えないが、それでも俺はずっと走り続けられるんじゃないかって思ってしまった。それもこの体のおかげなんだが。

存分にチート能力を発揮しつつ奪ったボールを足元に、ガンガンと前に進んで行く。ここから個人技を見せつけながらゴール前まで攻め上がったのも良いし、意表を突いてミドルからシュートを打つても良い。むしろ、どつちもやって警戒せざるを得ない状況を作ってしまったえば他の皆が動きやすい環境にできるか。

よし、そうしよう。

攻撃は最大の防御とも言うし、カウンターだけは注意しないといけないが、せっかくFWになったんだから少し位大胆に動き回っても文句は言われないだろう。むしろ、スタミナは心配されるかもしれないが、周りの皆に俺のスタミナを知ってもらおう良い機会かもしれない。

ふはは！ 別に蹂躪してしまっても良いんだらう？

『四日市エリアを一人で前進していく不知火！ すさまじいドリブルです！ 四日市の選手もなんとか前進を阻もうとしているもの、不知火選手はそれを個人技でどんどん抜いていくう！ もうすでにバイタルエリアへと侵入しようとしている！』

近くにいたDFが2人がかりで俺に仕掛けてきたが、ボールタッチの回数を増やして

2人のど真ん中を突っ切った。まさか真ん中を、という思考の隙間を縫うようにドリブル。どうか伸ばしてきただけの足は簡単に抜き去った。

最後は四日市の守護神、遠野ただ一人になるわけだが。本当にこいつと一対一で相手するのは面倒くさい。長身を生かした守りをするだけじゃなく、一般的な高校生よりも数段優れている判断能力と記憶力。

駆はここぞとばかりに繰り出した新技で意表を突くことに成功し、そのままゴールをもぎ取ったが、一度隙を見せた男がそれを警戒しないわけがない。駆の新技を理解できなかったわけじゃないだろうからすぐに対応してくることは出来ないだろうが、だからと言ってこの男が<sup>遠野</sup>駆にやられっぱなしになるとは思えない。

絶対、何かしら対応策は考え始めているだろう。

——だからこそ、俺はその隙を突く。

「くそがあつ！」

『さあ、早速四日市守護神遠野と江ノ高エース不知火の対戦がやってまいりました！』

お互いの距離は約5メートルだあ!!』

ループシュートを考慮して前進してきた遠野。

ここからシュートを打ったとしても、ギリギリゴールから外れるか、それか遠野が指先で弾き飛ばせるぐらいの位置を取っているに違いない。そんな芸当が普通にできる

んだから困ったもんだ。味方なら心強いが、今はまさに面倒な敵。

さて、行くぞ！

「おあつ！」

『さあ、不知火選手がシュート体勢に入ったあ！ どこを狙ってくるのでしょうか!?』  
「こいやあ!!」

遠野の動きに注意しながら足を大きく振り上げる。

さすがにここでシュート体勢を取ってしまえば、無理に向こうから止めに来ようとはしないだろう。だが、もしここで俺がシュートフェイントを入れれば、遠野なら反応しきってしまう恐れがある。

だからこそ、ここで俺が取る手段は――

「しやあつ！」

「なつ!!」

『な、何と言う事だ！ これはミスシュートでしょうか!? ……いい、いや、すぐ近くに逢

沢選手だあ!』

「ちつ……くしよおがあつ!!」

前にもやったことがあるような気がするが、さすがにこのミスシュートに見せかけたパスを想定しておくことは出来なかったようだ。ふはは！ ついさつき駆に暴れるぞ

と言ったばかりだからな。俺一人だけで全部こなそうなんて考えないさ！

……さすがに一回ぐらいは素直に一对一で直接やっても良いかもしれない。

『またしても逢沢選手の足元にボールが収まりました！ これは後半開始から2点目となるんでしようかあ!!』

「させてたまるかあ!!」

「……っ!」

左サイド少し後方から上がっていた駆は、いつも通り相手DFの隙を縫うように飛び出していた。遅れて駆の存在に気付き、ついていこうとしている四日市DFの姿も見える。

俯瞰視点で見ていたからこそできた芸当だな。

慌てて駆の方に跳躍してみた動きで動き出す遠野。それを見て、俺も動く。もし駆が切り返すようなパスを出してきたときの事を考え、遠野とは逆の方向のポジションを確保する。生半可なパスだと遠野に止められる恐れもあるし、どうせだつたらそのまま直接シュートを狙いに行つてほしい所だが。

「う、おおおっ!!」

「っらああっ!!」

『逢沢選手、一旦足元に収めたボールをそのままシュートオ!』

渾身の一撃とも言わんばかりの咆哮。

振り上げた左足を叩き付けられたボールは凄いい勢いでゴールに迫って飛んでいく。が、遠野もただで諦める男ではない。勢いに任せて放たれたシュートの精度は、前半で荒木先輩が見せた針の穴に糸を通すようなシュートほどではなかった。

「く……おああっ！」

『ま、まさか、遠野選手！ 逢沢選手のシュートに飛びついたあっ!! その指先が、触れた!?!』

第一関節くらいまでしか触れてないだろうが、それでも遠野は駆のシュートに食らいついた。そして、荒木先輩のシュートを止めた時のような、ギリギリの指先だけでの防御を見せようとしている。

ボールが指先に触れた瞬間、指の腹全体を使うようにしてスナップを効かせる。それだけでは少ししかボールの軌道を修正することはできないが、遠野にとってはそれだけで十分だったらしい。

軌道をずらされたボールはそのままゴールに向かって飛んでいき、しかしゴールポストに当たったボールは大きな音を立てた。そして、ボールはそのままゴールに吸い込まれることは無く、残念ながらゴールから逸れて飛んで行ってしまった。

……俺が言うのもなんだが、遠野もなんだかんだチート臭い男だよなあと改めて実感

させられるのであった。

## 第86話

コーナーキックから開始になるが、FWになった俺は当然前線のど真ん中に位置している。となると、すぐ近くに遠野の存在も目にするようになるのだが……いやあ、こうして見てみるとやっぱり遠野ってデカいんだな。身長は2メートルぐらいあるんじゃないだろうか。

しかし、前後半通してそれなりに活躍してきたとは思っているが、俺の周りに3人ぐらい固まるのはどうなんだろうか。駆とか他にも警戒すべき選手はいると思うんだが……俺だけやけに警戒し過ぎのような気がするが。

チートを持つてる俺が言える事じゃないんだが。ある意味、彼らが俺の事を必要以上に警戒しようとしていることは間違いないじゃないんだから。

『さあ、コーナーキックです！ 荒木選手は誰を狙ってボールを上げるんでしょうか！ やはり不知火選手でしょうか、それとも前半で1点挙げている逢沢選手でしょうか！』

「もつと寄れ！」

「絶対やらせんぞ……！」



何故か強い口調で俺に近寄ってくる四日市DFの皆さん。

背丈は遠野と比べるまでもないが、それなりの身長だ。まあ、俺よりも身長は低いから競り合いになった時は万に一も負ける要素はないわけだが。

——しかし、さっきの駆のシユートを紙一重とは言えギリギリで止めることが出来た遠野の能力は高すぎると思う。大会を通しての失点率の低さを考えると、前半で駆が1点を決められたのは大きい。

それけでも今大会MVPになっても良いんじゃないだろうか。身内<sup>びいき</sup>鼻<sup>びいき</sup>屑の過大評価かもしれないが。

さて、俺が取れる選択は2つ。

俺がクロスを受けてゴールを決めるか、それとも他の味方に任せて周りの選手の注意を引き付けておくか。……無理矢理シユートを撃ちに行つてファールを取られるのも癪だ。まあ、攻撃時だからそこまで酷く見られる事はないんだろうけど。

『さあ、荒木選手……蹴つたあ!!』

ふわりと、それでいて鋭さもあるクロス。

ほんの一瞬でボールはゴール前に集中している俺たちの元へと到達した。

狙いはゴール前にいる俺ではなく、少し離れたところにいるマコ先輩の所へ飛んで行った。何気に空白地帯になっていたんだが、やはり俺に対する警戒が過ぎて周りの選

手に対する警戒が疎かになっている。まあ、それでも遠野だったら何とかしてくれるんじゃないかって気になってるのかもかもしれないが、それも駆が1点決めているからなあ。

確かに、並のシュートじゃ簡単に止められるし、決まったと確信したところで大体を止めてくるのが遠野の凄いいところだ。

「うおりやあつー！」

『兵藤選手、右足でダイレクトシュートオオー！』

「くああつ!!」

ダイレクトだからそこまで精密なシュートではないが、まさかのシュートに遠野が跳んだ。俺に注意を払っていた周囲の選手が少し動揺して声を漏らしている。

四日市DFの間を縫うようなシュートは、しかししつかりと遠野が手を伸ばしてボールを弾いた。弾かれたボールは大きく飛び上り、点々とエリア内を転がっているが、セカンドボールを足元に収めたのは中塚だった。

ええ……中塚あ？

正直、練習風景を見ているとシュート能力と言うか……ボールを蹴る、シュートするという点においては信用できない男だ。足の速さはぴか一なんだが、どうしてこいつは陸上に行かないんだろうか。いや、俺も人の事を言えないから黙っておこう。

「そいやあー！」

『中塚選手、ボールを蹴ったあ！……つとお！』 このボールはどこに飛んでいくのか  
!』

狙いは無いだろう。

適当にゴール前にいる選手の誰かに合わせられたらと思つて蹴つたんだろう。いや、  
そもそも何も考えてないかもしれない。単に「攻撃！」とだけ頭の中にあつたに違いない。  
そうして適当に蹴り上げられたボールはゴール前ど真ん中にいる俺を大きく飛び越  
え、それどころか変にカーブがかかつてゴールから遠ざかるような軌道を描いて飛んで  
いた。

これには皆びつくりである。

一体全体誰を狙つて蹴つたのか。それは中塚自身分かりえないことなんだから。

『中塚選手の上げたクロスは少し大きいぞお！』 これではゴール前を大きく越えてしま  
う……ミスキック、いや、これは!』

「あれは……完全にミスですね」

「やっぱり」

遠くで監督と奈々の声が聞こえた気がする。

それが実際に聞こえてきた声なのか、空耳なのかはどっちでも良い。どっちにしろ、  
ああやっぱりと納得するだけだから。そんなボールがどこに飛んでいくのかは神のみ

ぞ知るつてな。

で、実際に飛んで行った場所には誰も走り込んでいない。

……と言うのは四日市選手の事で、さすがに誰も走り込んでいないような、それでいてゴールから離れた所を狙うとは誰も思つてなかつたんだんろう。

しかし、そんな所に駆が走り込んでいた。

何故そんな所に走りこもうと思つたのかは分からない。中塚との付き合いの長い駆の事だ。ある程度、中塚のクロスの精度を体感していたんだんろう。

あの精度には困りものだが、それを理解している選手がいれば、それなりに武器にはなる。実際に試合でこういう事態になるとは駆も思つてなかつただんろうが。中塚は中塚でドヤ顔をしてやがる……なんか、イラツとさせられる。

『逢沢選手だあ！ 逢沢選手が走り込んでいたあ！ なんとという攻撃でしょうか。四日市の選手は誰も反応できてません！』

「まぐれですね」

「まぐれでしょうね」

悲しいかな中塚君。

江ノ高選手も駆以外反応できてないんだ。まさにそこを狙つて蹴りました言わんばかりの所に駆はいたが、本当にただのまぐれに過ぎない。単に駆のボールに対する嗅覚

が優れていたことと、長年の付き合いからクロスの癖でも思い出したんだろう。駆の能力に救われたな。

『さあ、途中から入った中塚選手を起点とした攻撃だあ！ 逢沢選手、今度はどこを狙ってくるんでしようか！』

「ぐっ……い！」

遠野が焦っているのは良い事だ。

これで俺に集中している注意も少しは他に向いてくれるとやりやすくなるんだが……どうだろうか。あとは中塚の足の速さだけに翻弄されてくれるとありがたい。

「ああ!!」

『逢沢選手、シュートオオ!!』

「うらああっ!!」

『こ、これもまた遠野選手が弾いたあ!! 何と言い表せばいいでしょうか……こんなにボールを弾き飛ばす選手がいたでしょうか! それほどまでに的確にシュートを拒み、ゴールを守り続けている!!』

焦っていてもしつかりと大地を踏みしめ、ゴールを守る遠野。

いやあ……うちの李先輩は気力でゴールを守る人だとしたら、遠野は自分の身体の能力を余すことなくフルに使うだけじゃなく、しつかりと情報としてコート全体を頭の中

にインプットしておくことができる選手だ。

ほんと、これからが怖い奴だな。

他人事みたいに言ってるが、これ、今そいつと試合中なんだぜ？ 呑気な事考えてる

自分にビツクリする。

まだ江ノ高の攻撃は続いている。

まさに波状攻撃。ずっと攻撃し続けていけばいつかは1点奪えるだろう。あとはその繰り返しだ。コート全体を俺が走り回り続ければ相手もパス回しに集中できないだろう。さすがにロングパスに即座に対応することは出来ないが、それ以外のショットパスだったら何とかできる。かもしれない。

ま、俺の役目としては相手選手を惑わせる事と、俺に意識を集中させて攻撃に集中させないことだ。それだけで江ノ高の攻撃を連続させることができる。

またのコーナーキック。

ボールはゴールエリアから少し離れた所にいる織田先輩の元へ。

またしても俺の周りに選手が固まってはいるが、今度は駆にも注意が向いていた。

「おおお!!」

『織田選手、ダイレクトシュートオオオ!! 得意のミドルシュートだああ!!』

「あああつ!!」

荒木先輩、俺、駆、マコ先輩、そして織田先輩の攻撃。

連続での攻撃にさすがの遠野も集中力が続かない——

『……と、止めたああっ!! な、なんとという握力! 織田選手のシュートを弾かず、そのまま止めたあつ!! これこそが難攻不落の四日市、守護神遠野の守りだああ!!』

——と、思っていたんだが、遠野の集中力は俺の想定以上の輝きを見せたらしい。結構強烈な織田先輩のミドルシュートをジャンピングキヤッチしやがった。さすがに息が荒くなってるが、ここで波状攻撃を途絶えさせられたのは痛い。

このまま続けていたらゴールを奪えていたと思うんだが……

それにしても、最前線ゴール真ん前ど真ん中にいたのに、一切ボール接触が無かったんだが……俺の存在意義はあったんだろうか。ちよつと不安になってしまった。

## 第87話

「いけええ!!」

『一気に四日市のカウンターだあ! 江ノ高、これに対応することはできるのか?!』

ボールをキャッチで止めた遠野は、そのまま一気にボールを遠投。

俺を含めほぼ全員が攻撃に参加していたため、すぐに守備に戻らなければいけない状況に早変わりしてしまった。遠野ほど体格が良くて筋肉も付いてる奴がボールを投げるのと遠くまで投げられるもんだなあ……しかも速い。

昔の俺はまったくボールを投げられなかったから……ソフトボール投げなんざ糞喰らえと思ってたぐらいだ。ボール一回投げた程度で痛くなり始める肩だったからなあ。

ほんと、チートってほんとチート（言語能力低下）

遠野の手からボールが離れるのと同時に小さくなっていくボールを見て、俺も一気に足を力を入れた。例えば今俺のポジションがFWだとしても、有り余るスタミナを活用するため自陣に戻ろうとした。……が。

『速い速い! 四日市高校、一気に攻撃に転じていく! ボールは海堂選手に渡り、四日



市の攻撃の幅が広がった！ さあ、FWの若宮選手が上がっていくぞ！』

四日市のダイナモ、海堂選手がボールを持ってしまった。

これで四日市全体の攻撃が活性化してしまうわけだが、うちの選手も頑張つて戻っている。若宮選手なんて結構な俊足だが、中塚あたりが持ち前の俊足を生かして自陣に戻っているが、奴の技術じゃ四日市選手のパスをカットすることはできないだろう。

まあ、俺がさつきしたみたいに動き回つて四日市選手の精神的ダメージを負わせるぐらいはできるだろう。まだ選手の交代枠はあるから、思い存分走り回つてフィールドを荒らしてほしいもんだ。

さて、俺は真ん中あたりで適当に動いてようかな。

味方がボールを奪つてカウンターできるよう待機しておくのが一番か。少し離れたところにいるDFの当真選手は中々に足が速そうだけど、同じ一年ということ、そこまで経験はないだろうか……

あろうが無かろうがボールが来たらゴールに向かって走るだけなんだが。

何も難しいことはない。ボールが来たら走る。ひたすら走る。ドリブルからのシユウウウツ!! 的な勢いで行けば遠野もビビるはず。そういや駆のゆトリックやらエヴォリユーションやら、何気にスゴ技を披露したり習得したりしてるが、俺も絶対これだったら決められるっていうシユウトでも習得してみたいもんだ。

……皆の技をドンドン習得していつてる俺が言うのもなんだが、こう、ホントチー  
トって感じのどうやってもゴールに入りますってシュートをね。

……それこそチートか。

バグ技でも覚ええない限りそんな事不可能だな。

『さあ、江ノ高このピンチをどう凌ぐのか!』

俺の代わりにDFに入ってくれた海王寺先輩がなんとかしてくれるさ。

それか、必殺スライディングの使い手、堀川先輩が仕事をしてくれるに違いない。  
ゴール前でも臆せずボールを刈り取りに行けるメンタルの強さは俺も見習うべきだろ  
う。

スタミナお化けの沢村先輩が一気に自陣に戻っていき、指示を出している。その前か  
ら李先輩の澆刺とした声も聞こえている。最近、遠野と同じように李先輩だったら大体  
のシュートを何とかしてくれるという安心感がある。あまりそれに期待しすぎるとそ  
の安心感に付け込まれるかもしれないが……まあ、四日市選手相手だったら大丈夫だろ  
う。

レオナルド等を擁している東京蹴球あたりだと、選手層の厚さにうちが対応できない  
かもしれないけども。それは……監督が俺をDFとして使うか、それともFWでガンガ  
ン攻めさせるかが鍵になると思うが。駆と俺、それと荒木先輩をマークされたら大体の

攻撃が止められるかもしれん。ただまあ、それでも俺はボールを持ったらガンガンドリブルするだけなんだが。

それで止められたら相手の技を盗めるし、止められなかったらシュートしてゴールを奪うだけ。簡単なお仕事です。

『中央から若宮選手が上がっている！ 海堂選手、ここからどのように展開していくのかっ!!』

「殺すう!!」

堀川先輩が若宮選手のマークについた。

少し離れたところで守備に徹している海王寺先輩も見えるが、左サイドから四日市MFの駒崎選手が。右サイドからは同じくMFの斉藤選手が上がっている。この2人をどう対処するのか……

キャプテンが急いで戻っているが、四日市の選手の足の速さが半端ない。海堂選手と同じラインぐらいにもう2人。攻撃はこれで5人に増えた。これだと全員をしつかり対処するのは難しい。

となると、相手選手のシュートコースを制限して打たせるぐらいしかできない。それも李先輩のセーブ力を信用してないといけないが、そこは大丈夫だろう。

『海堂選手、パスだあ！ 斉藤選手、ゴール前にボールを上げるか!?!』

一気に攻勢を仕掛けてきた四日市選手の対応に追われているが、全員を完全に対処することができてない。もし俺がDFだったとしても無理だ。が、とりあえずゴール近くにおいてボールを弾き出すか、走り回ってボールを奪いに行くかクリアするか。

もうどうしようもないって時は、相手のシュートをヘッドで防ぐっていうね。反射神経と首の筋肉が問われる防ぎ方をするだけだ。実際、プロリーグでもDFとかが体を張ってシュートを止めたりしてるから俺がおかしいというわけじゃない。

『斉藤選手、上げると見せかけてのフェイント！　そこから……上げた！』

何とか戻っている堀川先輩と海王寺先輩がいるが、そこから少し離れた逆サイド。駒崎選手がボールを足元に収めた。そこからすぐにペナルティエリアの外側、中央にいた海堂選手にシュートパス。

『ダイレクトオ！　しかし、これを李選手が何とかパンチングで……!?』  
「あ……」

ダイレクトで狙いが甘くなったシュートをパンチングで弾いた李先輩だが、そのすぐ近くで四日市選手を警戒していた堀川先輩の腕にボールが当たった。わざとじゃないのは当然だ。しかし、その瞬間。

ピーッ！

『あぁっ?!　これはPKです！　江ノ高、これは痛い！　しかしこれで四日市は同点

のチャンスを得たことになります!』

「そんな、当たってない!」

「いや、確かに当たってたのを見ました。それ以上の追求は」

「いえ……わかりました」

堀川先輩と海王寺先輩が主審に詰め寄っているが、それを李先輩が止めていた。

さすがにあれ以上いくとイエローカードになるかもしれない。まさか高校の試合でそこまでいくとは考えたくないが、シビアに試合を見てくれていると考えると納得できる。

あからさまに顔色の悪い堀川先輩を尻目に、李先輩は集中力を高めている。相手の動きを見てどつちにシュートを蹴るのかを一瞬で判断し、もしくは当たりをつけて一方のゴールを守ろうとするか。

……それでも、シュートに自信のある奴だったらGKの手の届かないところにシュートを蹴ることができるだろう。まあ、1点負けているこの現状で冷静にシュートを蹴れるかどうかというメンタル面の問題もあるが。

『さあ、PKです。ここで蹴るのは四日市キャプテン若宮選手だ! 江ノ高、ここで決められてしまうと同点に迫いつかれてしまうぞっ!』

ごくくりと唾を飲む。

正直、シュートを決められてしまってもしょうがない状況だ。

ここで李先輩にどうしてゴールを守れなかったのかと追及するのは愚の骨頂。今までの、しかもこの試合でもかなりのシュートを弾いてくれていたのに、ここで味方を責めるのはバカの極みとしか言いようがない。

が、ここで決められてしまうと、あの遠野からゴールを奪わないといけない状況が作り出されてしまう。江ノ高攻撃陣は精神的な重荷を背負っているような感覚に陥るかもしれない。

……なら、頑張つてゴールを奪いに行くしかない。

これでシュートを決められて遠野が精神的に楽になつたとしても、これまでの疲労感、蓄積されているはずだ。さすがに集中力も落ちてきていることだろう。それでもダメだというのなら、遠野は人間を止めるとしか言いようがない。

奴こそ天然のチート・オブ・ザ・チート。その称号に相応しい。

『さあ、若宮選手のシュートは……!』

——観客席が沸いた。

若宮選手が蹴ったボールは真つすぐゴールネットを揺らしていた。後半20分を過ぎたところでの出来事に、江ノ高メンバーはしばし呆然とするのだった。

## 第88話

ついに追いつかれてしまった。

というのは少々おかしいかもしれない。何せ、この試合の中においてはほとんどの時間において江ノ高が攻めていたのだから。ずっと攻めていたのは江ノ高。しかし、数少ない攻撃において活路を見出し、同点に追い詰められてしまった。まだ時間はあるが、相手が遠野だということもあり、江ノ高メンバーの表情は硬くなっている。

特に、堀川先輩なんかは顔面蒼白といってもいいぐらいに真っ青だ。

「先輩、気にせずいきましょっ！」

「う、うん……でも」

「でももかかしもないっすよ。俺たちは勝負事してるんです。相手がPKを決めてきたとしても、そりやもう、仕方ないんです。俺たちだって全力ですけど、向こうも全力でやってるんですから。切り替えていきましょ！」

「……うん」

まだ不安そうな表情をしている先輩に、さもありませんと一人納得する。

同点に追いつかれてしまった今、ここで堀川先輩に崩れられてしまうのは江ノ高に

とつては非常に痛いのは目に見えている。ただでさえもう交代棒を使っているのに、ここでまた交代となるのはキツイし、何よりキレツキレのスライディングで相手選手の攻めを脅かせるような堀川先輩の替わりになるような選手はいないのだ。

「何だったら、全部俺に回しても良いですよ」

「え？」

「俺が、やり返すって言ってるんすよ！ だから、先輩は安心して俺にボールを回してください。適当にボールを上げてくれれば、そこに走っていくんで」

「は、ふふ……わかったよ。なんとか頑張ってみる」

暗い顔をしていた堀川先輩だったが、やつとのことで笑みを浮かべてくれた。それが張り付いただけの笑みだとしても、さつきまでの暗い雰囲気ではいられるよりかはまじだった。

スポーツの世界なんて、いつ何が起ころうたって不思議じゃない。そこまで実力差があるとは思えないが、マイアミの奇跡だったあるし、ロスタイムだってあるんだ。まだまだ時間はある。……だからといって慌ててないわけじゃないが。

今までの江ノ高の攻めは遠野にシャットアウトされてしまったわけだが、そのほとんど……と言うか、全部俺が直接シュートを放ってたわけではないし、まだチャンスはある。こうやって俺が言うのも変な気分になるが、まだ俺の本気を見せちゃいないんだ



(白目)

「しやあつ!! しまつて行こおぜつ!!」

『さあ! 同点弾を決められてしまつた江ノ高ですが、これからどう打開していくのか! 守護神遠野の守りを超え、得点を決めることが出来るのでしょうか!』

さて、江ノ高からのキックオフ。

流れは完全に四日市の方にあるといつても過言じやない空気だが、何とかしてその流れをこつちに持つてくるしかない。そうなると、やはりここぞにか1点取つておきたいんだが……

まずはバックパス。

ボールを受けた荒木先輩は、そのままボールを俺の足元に返してきた。さすがにここでのワンツ―は想定してなかつたんだが? と思いつつ荒木先輩を見ると、口角を吊り上げるように笑みを浮かべていた。

……つまり、このまま俺一人ドリブルで突破してみせろと?

——良いだろう。やつてやらあ……

『さあ、不知火選手にボールが渡り……なんと、そのまま前を向いてドリブルだあ!! 静名学園との試合で見せた脅威の足技をここでも魅せてくれるのかっ!』

上げる上げる。

鰻登りどころか登竜門を登り切つて竜に化身した鯉みたいな勢いで俺のことを持ち上げてくる。とりあえず問題になるのが四日市のディフェンスの壁の厚さだよなあ……0トツプなんて言われるぐらいまでFWが下がつてることだな。

つまり、俺はそれだけ多くの人数を相手にドリブルを仕掛けることになるってことだ。……無理難題すぎひん？

しかし、もしかしたら俺が一人でドリブルを仕掛ける事に対して憤慨を覚えて突撃してくる相手選手がいるんだつたら事は楽に運ぶ。まあ、それも最初の一人二人までが限度だろうけど。

あとは警戒してプレスをかけてくる相手の裏をかいてパスで攪乱して攻めるのもありだが……まず一人目。

『中央を突破していこうとする不知火選手を止めようと若宮選手が果敢に仕掛けようとするが、ここは緩急をつけたドリブルであつさり突破！ 真つすぐゴールを目指して進んでいくつ！』

「相手は不知火だ！ 一人で突つ込むんじゃない！」  
めんどくさい。

常に相手チームが連携してかかってくるようになったのはメンドクサイの一言だ。さつきFWになったときはまだここまでの警戒心を抱いてなかったのに、同点になつて

希望が出来たからこそ警戒しているんだろうか。

何にせよ、この包囲網を突破しないことには前には進めない。

……とりあえず、サイドにボールを蹴って様子を見よう。

『あつと、ここは無理をせず左サイドにボールを出しました！ 不知火選手が真ん中にいることで四日市高校の選手は若干中央に寄っているように見受けられます。左サイドを逢沢選手が悠々と上がっていく！』

俺に意識が集中していた四日市選手は慌てて駆のマークに付こうとするが、一足遅いとばかりにMFラインを突破する。中央には俺がいるものの、数人のDFがマークに付いている状態だ。しかし、逆サイドでは薫も上がっているが、そこまでマークは厳しくない。

『φトリックだあつ！ 逢沢選手、ここでDFを一気に突破つ!!』

「おあつ!!」

「何っ!?!」

ペナルティエリアに入ったばかりの駆だが、DFを躰してすぐにシュート体勢を取っていた。これにはさすがに遠野も驚いただろう。今まで何度シュートしようが弾いてきたのを目にしていたんだ。まさかなんの捻りもないド直球で来るとは思ってもなかっただろう。

『逢沢選手、ここでシュートオ!! ……が、これは大きく枠を外れて——』

直感的に走り出した。

あれだけ鉄壁の守りを見せていた遠野を相手にストレート一本勝負するのは些か熱が入りすぎている。だから俺は、ただ自分の直感だけを頼りに勢いよく飛びあがった。

「おおおっ!!」

「なっ!?!」

『な、なんと不知火選手が飛び上がったああっ!!』

中々の速度で飛んでくるボール。

駆が蹴った位置から目測で1秒にも満たない時間でここまで到達するだろうボールだが、直感に従っただけあってジャストタイミングで飛び上がっていたらしい。しかも、周りのDFが誰も対応できないぐらいの高さ。

弓なりにしな寄せた体。目の前に迫りつつあるボール目掛けて一気に頭を振り下ろした。

「おおあっ!!」

「ぐうっ!?!」

『なな、なんと不知火選手、逢沢選手のシュート性のボールをそのままヘッドで合わせ  
たあ!!』

あまりのボールの勢いに脳みそを直接揺らされたような感じがしたが、負けじと頭を振り下ろした。ただ真つすぐ頭を振り下ろすだけでは枠の右側へと逸れていきそうだったため、若干斜め左に叩きつけるような感じ。

ドゴツと大きな音を立てたボールは真つすぐゴールへ向かって飛んでいく。

遠野もすぐさま反応して腕を動かしていたが、途轍もない速度で飛んで行つたボールには指に触れる事も出来ずただ見送るしかなかった。あそこでミスシュートを蹴つたと勘違いさせるようなパスを出す五感には驚きを隠せない。

その五感も本当に感じて蹴つたものなのかどうかも後で聞かないとわからないし、いざそうだと耳にしてもホントの事だと信じられるとは思えない。こうして自分で考えをまとめておいてなんだが、ほんと、チートつて怖い。主人公補正なるものがあるんだつたら俺にも分けて欲しいくらいだが……

パス!! シュウウウ……

ネットに突き刺さつたボールはネットとの摩擦音を奏でている。まさかのヘッドに口を開けて呆けている遠野を見て、思わず左手を高く突き上げた。

『ゴ、ゴオオオオオオオオオオ!! な、なんとという衝撃的なゴールでしょうか! シュウトのように思えた逢沢選手のボールを、まさかヘッドで合わせるといふ荒業にはさすがの守護神、遠野選手も反応できなかったあつ!!』

「うおおっ！　なんだよ今のシュート！」

「さっすがっ!!　ほんと意味わかんねえ奴だなおいっ!!」

「あたっ、いで、いでっす。……あざっす」

後半も30分に差し掛かろうとしているところでのシュートは値千金と言ったところだろうか。四日市にPKでゴールを決められてからは遠野の守備力の高さに暗い雰囲気を漂わせていた江ノ高メンバーだったが、これで士気も向上したはず。

……しかし、面と向かって褒められてるかどうかが微妙な言葉が多かったが、それでも照れるものは照れる。

——さて、これから四日市はどう反撃してくるだろうか。

## 第89話

残り数分となった後半。

四日市の守護神、遠野の守備を抉じ開けてゴールを決めた江ノ高ではあるが、まだ油断することは出来ない。なんてったって、勝ち越しのゴールを決めた俺が言うのも変な話だが、シュート性のボールを直接ヘッドで合わせてシュートする奇襲じみた攻撃をしてようやく決めることが出来た1点だ。それをまたもう一度出来るかと聞かれると、正直難しい。

身体的な話ではなく、チームメイトとの連携をうまく取ることが出来るかどうかって点でだ。

正直、駆だつて賭けでしかなかつたと思う。今更ながらあの瞬間の駆の判断力、決断力は並大抵のものじゃなかつたと思う。そもそも、誰がああのボールをクロスだと思おう？  
つて話だ。

……同じような状況を作り出すことは出来たとしても、同じようにヘッドで合わせる事は出来ないと思う。さすがに今度は遠野もタイミングを合わせてきそう怖い。

『あれほど強固な守りを見せていた遠野選手であります、不知火選手の強烈なヘッド

シユートにはさすがに対応しきれなかったようです！ いやあ、あのヘッドはインパクトがありましたね……何と言うか、度肝を抜かれたと言いますか……』

さて、四日市のキックオフになるわけだが。

四日市メンバーの目にはまだ力が籠っているのを見るに、まだやる気らしい。まあ、遠野の守備力を考えれば同点に追いつければ何とかなるかもしれないなんて思っても可笑しくない。そも、ここまで勝ち上がってきたチームだ。優勝しようという気概を奮起させてもさして違和感はない。

……そうか、ロスタイムもあるし、残ってる時間で同点に追いつかれてしまったらPK戦も考えられる。正直、PK戦になってしまったら遠野の守りを超えられるかどうか微妙なところだ。

キックオフ。

それと同時に四日市メンバーの動きに変化が見られた。

いや、変化なんて言葉でまとめてしまっても良いのかが分からないが、ゼロトツプで守備重視・遠野の守備力を念頭に置いた超カウンター型だったのが、今やほぼ全員が攻めに転じている。

ゼロトツプが今や6トツプ。四日市サイドに残っている選手はCBだけという超攻撃型の布陣。攻撃こそ最大の防御とは言いが……ここでなんとかボールを奪ってしま



えば最後の攻撃の目も潰えるだろう。

全力で行くぞ！

『あーつと海棠！ いきなり前線に放り込んできた！ パワープレーでなりふり構わずチャンスをついに来たあ！ こうなると高さスピードを兼ね備えた四実イレブンは誰もが得点源になりえます。集中しないと危険だ！』

「マークを外すな！ ゴール前をフリーにするな！」

『四実の全員攻撃に対し、江ノ高も全員守備を敷いている！』

ここで同点に追いつかれるわけにはいかない。

さつきみたいなシュートは練習を重ねないと難しいだろう。

と言うことで、俺も守備に参加することに。全力でボールを追いかけていく。一応C Fだから前線に残っていた方が良いのかもしれないが、全力で走ればすぐに戻れる。これでも中塚とよりも脚は速いんだ。

「うおお！」

「えっ!？」

なんて考えていると、向こうも同じ事をしてきた。

CBとして残っていた冴島選手までもが前線に上がっていき、四実選手が上げたロブをヘッドで合わせに行こうとしていた。が、そこは海王寺先輩がなんとかクリアしたも

の中途半端なクリアになつてしまつたボールが点々とエリア内を転がっていき、そこに丁度走り込んでいた若宮選手がダイレクトでミドルシュート。

そこに足を差し込んだ堀川先輩のディフェンスがあり、江ノ高は一旦危機を退ける事が出来たものの、今度は四日市のコーナーキック。おそらく残り1、2分程度。審判も時計を気にし始めていたのを見ていた。

「遠野、お前も来いっ！」

「はいー」

『おおっと！　ここで四実、遂にGKの遠野まで前線に上げてきた！　これでまさしく全力勝負と言うことになりました！』

遂に江ノ高ゴールエリア付近に選手全員が集合してしまつた。

四実イレブンは全員が長身だが、特に遠野が一番背がでかい。加えて奴の身体能力を考えると、ここは俺が遠野のマークに付くのが一番だろう。コーナーからのヘッド、ただでさえ長身の遠野が跳んだらどれぐらいの高さになるだろうか。

……いつも思うが、俺の言う台詞じゃないんだよなあ。

コーナーキックを上げるのは若宮選手。

そう言えば江ノ高怒涛の波状攻撃の際、中塚も中々良いミドルシュートを蹴っていたが、基本的に選手の皆は狙つたところにボールを蹴り込むことは出来る。そう考えると

中塚のシュート精度は……うん、頑張ってくれとしか言えないか。  
さて、キッカーは若宮選手。

遠野はゴールネットから少し離れたところにいるが……

『決まればPK戦！ クリアすればおそらくその瞬間に長いホイッスルが鳴り響くでしょう！ ……上がったああっ！ 放たれたボールは高く上がってファーサイドへ！』

やはり、若宮は大きなクロスを上げてきた。

ボールが上がるのとほぼ同時に遠野が動き出した。遠野の身体能力なら、高いクロスだろうと何とか合わせに行くだろう。だからこそ、俺が動く。李先輩もボールの軌道をしつかりと見て対応しようとしているのを確認したが、その前に俺が動いていた。

遠野が跳び上がるよりも先に脚に力を籠める。

ジャンプするときには思い浮かべるのはバスケットの神様として有名なマイケルジョーダンのジャンプ力と、鷹匠さんの嘘みたいなジャンプを参考に跳躍。たった一步の差だが、俺の身体能力的にはその一步だけでも大きなアドバンテージになる。

「うおおっ！」

「なあっ!？」

『ああっ、不知火選手がボールを大きくクリアしたあっ!! さすがと言いますか、何と

いう身体能力でしょうか！　ほぼ同じタイミングで跳んだ遠野選手よりも少し離れた所で跳んだ不知火選手の方がより大きく跳び上がってみせました！　若宮選手も高いボールを蹴り上げましたが、不知火選手はその想定を超えて見せました！』

褒められる褒められる。

あまりに褒められすぎて顔が真っ赤になってないか心配してしまうレベルだ。そもそも褒められる事自体慣れてないのにこんな大勢の観客がいる中素直に褒められるとか、どんな苦行だ。

跳躍の力をそのまま頭でダイレクトにボールにぶつける。

少し遅れて跳び上がってきた遠野と空中で交錯するも、無駄に鍛えられたこの体では痛みを感じることもなく、むしろぶつかってきた遠野の心配でもした方がいいんじゃないかと逆に心配してしまう。

ペナルティエリアからヘッドで大きく弾き出したボールは点々とバウンドしていき、遂には無人の四実コートまで。いち早く全員守備対攻撃の群れから抜け出していった駆がボールまで追いつこうとしていたが、その寸前でホイッスルが鳴り響いた。

長いホイッスル。

『不知火選手がボールを大きく弾き、ここで長い笛が鳴り響きました！　試合終了おおっ！！　江ノ島高校、準々決勝進出ううっ！！』

遠野の守りを超えるのに苦勞したものの、何とか準々決勝に進出することが出来た。ていうか、こんな高校が準々にも進むことが出来ないつてのが信じられないんだが。

……最近の高校生サッカーのレベル上がってない？

## 第90話

『試合終了おおっ!! 2-1!! 江ノ島高校準々決勝進出ううっ!! 天才GK遠野の神懸かったセーブに苦しみゴールの遠さにもがき続けた江ノ高でしたが、チーム全員の闘志が、遠野から2点も奪うという結果をもたらしました! 守護神・李も、PKで1点を取られてしまったとはいえ、それ以外のシュートを全て防いで見せました!』

うーむ……やはりこの試合の立役者は李先輩と駆だろうか。

PKでこそ失点してしまったものの、四実の攻撃はすべてシャットアウトしていた。駆はあの遠野から待望の先制点を奪った。それこそ遠野が想定していなかった新技で得点だとしても、あの時遠野から得点したっていう事実は途轍もなくデカイ追い風になっていた。

……まあ、あれだ。決勝点を決めたのは確かに俺だが、そこまでのプロセスだけを見れば江ノ高の攻めと言うのは凄かったって事だ。

『いやあ……それにしても不知火選手が決めたヘッドシュートは凄まじいの一言に尽きます。逢沢選手のシュート性のクロスに反応してのヘッド。これに反応できるGKが果たしてこの世界にいるのでしょうか。そう思わされるようなシュートでした』

褒めるな褒めるな。

褒められると恥ずかしくなるって言ってんだろうに。

試合が終わり、緊張から解き放たれた選手たちはお互いに健闘を讃えあっていた。そこには負けて相手を恨んだりするような事を口にしてしている選手は誰一人としていなかった。

「ヤス……やつぱお前は凄いい奴だぜ。完敗だ」

「いや、あんだけうちのシユートを止める奴なんて今まで相手にしたことなかったから、うちのメンバーにや良い経験になっただろうさ」

「はは、そりやそうだ！ 李さんも凄かったし、駆の成長も驚いた。けど、一番はやつぱヤスだよ」

それから遠野は駆に声を掛けられ、その頭をガシガシと掻き回していた。その際遠野は笑顔を浮かべていたが、やはり負けたのは悔しいのだろう。去り際に寂しそうな表情を浮かべていた。

このまま俺たちが勝ち進んだら、順当にいつて蹴学と決勝で当たるだろう。鎌学よりも強い相手なのは間違いない。なんとつてあのレオがいるんだから。

さて、帰りの移動バスに揺られている俺たち江ノ高メンバーだが、そのほとんどのメンバーが疲れから眠りに落ちていた。なんてつたつて二日連続での試合だ。初戦こそ

静名学園を相手に圧勝していたが、さすがに2戦連続は疲れも溜まるだろう。

すっかりこのチートボディ、昨日に引き続いてピッチ上を駆け回ったつてのに一切疲れが残ってる感じがしない。今日もまた、ベッドに潜り込んで一日経ったら綺麗さっぱり消えてるに違いない。

「——明日は試合はありませんが、明後日には準々決勝です。移動中に入ってきた情報によれば、次の試合相手は千葉県代表の八千草高校と決まったようです。八千草高校は今大会四実と並ぶ守備力を持つチームです。しかし、その攻撃力は四実以上のものです。一回戦は3-0、そして今日の試合では4-0のスコアで勝ち上がってきています」

「……また無失点チームかよ」

八千草高校と言えば島さんがいるところじゃないか。

島さんがDFとして出てるんだったら無失点っていうのも頷ける。しかし……スコアを耳にして思ったのは、そこまで攻撃力のあるチームだったのかという事だ。

「2年生の島亮介くんは天才肌のDFで、攻撃参加も積極的になします。そして攻撃の中心は千葉県のナンバーワンMF、瀬古勇太くん。パス・ドリブルと、すべてにおいて一流の選手ですが、最大の武器はその左足が放つ変幻自在のフリーキックです」

なるほど。



島さんも攻撃に参加する上に、千葉で一番のMF選手が攻撃の中心ときたか。前のU—16に参加してなかったのは年齢的な問題だったのか。

それにしても無回転シュートをマスターしているかもしれないってのは良い情報だ。最初から無回転でくるかもしれないと思っておけば、DFとしても動きやすいし、李さんも守りやすくなるだろう。……まあ、GKにしてみれば前に弾いて落とすぐらいしかできないかもしれないが、そこはすぐ反応して対応できるような心積もりはしておこう。

準々決勝まで勝ち進んでくるチームだけあってタレント揃いのチームなんだろうが、チームの中心となって動いているのは島さんと瀬古選手の2人だろう。ま、どんな雰囲気なのかは実際に戦ってみないと分からない。

——なんて考えているうちに今日は解散になった。

体力的には問題なくても、さすがに精神的には疲れを感じているような気がするんだなこれが。それが褒められる事による恥ずかしさで気疲れしているってだけって所に違和感を感じるが、まあ、今更か。

「ヤス、一緒に帰ろ！」

「あ、私も！」

「おう」

最近になって駆が子犬のように見えてきた件。

仕事でしばらく家を空けていたご主人が帰ってきて嬉しそうに駆け寄ってくる犬、みたいな印象を駆に抱いてしまっているんだが……ほのぼのとした雰囲気を感じさせてくれることは感謝してるが、同時に一緒に帰ると言ってくれている奈々にも気を遣った方が良いんじゃないかな？

と、その時ポケットに入れていた携帯がプルルルと鳴り響いた。

画面に映っている着信相手は舞衣だった。一体何の用だろうかと疑問に思いつつも、駆と奈々に一声かけて出る事に。

「もしもし?」

『あ、ヤス? 江ノ高勝ったんだね、おめでとー!』

「お、ありがとう。蹴学は?」

『もちろん——勝ったヨ、ヤス』

「あん? レオか?」

舞衣と話をしていたと思ったら急にレオが割り込んできやがった。しかも声の感じからしてあまり悪い結果じゃなかったんだろう。しかし、何故舞衣が話しているのに急に割り込んでくるんだ?

「で、結果は?」

『7—2だヨ。前半で5—0にして後半は僕とリッキーが引つ込んだ。きつと勝ち上

がってきてくれ。決勝で戦うことを楽しみにしているヨ。もちろん、駆がどれだけ成長してるかも気になるところだけどネ」

「おう……ま、なんとか勝ち上がってみせるさ。なんせ、江ノ高には俺がいるからな」  
『ハハッ！ 自分に自信を持つのは良いことだ。それでこそヤスつてことかナ』

何やら嬉しそうに声を上げてるから、こんな返事で良かったんだろう。

正直、駆と一緒に練習（レオが付き合ってただけにも見えたが）してた時に偶然出会ったつてのが初めての出会いだし、それから何ら交流があつたわけじゃないから、俺的にはそこまで親しくない知人って認識なんだが、異様に気にかけてくれる気がする。

……そこが日本人と外国人のコミュニケーションの違いってやつなのか？

「……えっと、レオって言ってたけど」

「ああ、なんか急に代わつてな。蹴学も勝ち上がってるらしい。それも7―2、レオとリッキーって言う奴の二人は前半しか出てなかったみたいだけど、それで5―0だったらしい」

レオから聞いた事実をそのまま奈々と駆の二人に話してやる。

淡々と事実を言ったただけだったのだが、二人から息を呑む音が聞こえてきた。

「5つて……」

「まあ、俺たちだつて他のチームに5点とか6点決めたりしてるんだ。何もおかしい事

じゃないだろ?」

「いやいや!?!」　そもそもそんな攻撃力のあるチームなんてそこまで無いからね!?!」  
　奈々が慌てた感じで否定してくるが、江ノ高でサッカーを始めてこの方、対戦相手には基本的に大差をつけて勝ってきた記憶しかない。国際試合でもそうだし、練習試合だってそうだった。……いや、チートボディの御蔭と言えばそれまでなんだが。

あ、これは俺の認識が可笑しいのか。